

大邱市史

第三卷(産業・經濟)

大邱市史編纂委員會

題字：戊子新刊 嶺營藏板《詩傳》에서 集字(朝鮮 純祖 28年;1828年)

目 次

第十篇 産業・經濟

第1章 總 說	19
第1節 大邱經濟의 歷史的 時期區分	19
I. 解放以前 大邱經濟의 時期區分	21
II. 解放以後 大邱經濟의 時期區分	22
第2節 解放以前까지의 大邱經濟發展史 概觀	25
I. 開港以前까지의 大邱經濟	25
II. 開港에서 韓日合邦까지의 大邱經濟	30
III. 日帝下의 大邱經濟	34
第3節 解放直後 및 韓國戰爭期의 大邱經濟(1945~1953)	52
I. 時代的 與件	52
II. 美軍政下의 歸屬財産 處理狀況	55
III. 解放後 沈滯와 韓國戰爭으로 인한 工業發展	57
IV. 物價高와 商去來의 萎縮	63
V. 金融動向	67
第4節 戰後 復興期의 大邱經濟(1954~1961)	69
I. 時代的 與件과 大邱의 産業構造	69
II. 工業構造의 變化와 業種別 動向	71
III. 流通部門의 好況과 物價仰騰	79
IV. 金融機關의 改編과 金融活動	82
第5節 經濟開發 初期의 大邱經濟(1962~1971)	84
I. 高度成長과 大邱經濟	84
II. 工業의 絶對的 成長과 相對的 萎縮	86
III. 商業部門의 肥大化	92
IV. 消費構造와 消費者物價	95
V. 成長金融體制와 地方銀行	96

第6節 相對的 停滯期の 大邱經濟(1972~1980)	98
I. 經濟發展과 大邱의 産業構造	98
II. 工業의 停滯와 輸出伸張의 相對的 鈍化	102
III. 商業部門의 質的 變化	106
IV. 消費者物價 動向	107
V. 金融構造의 多變化	108
第7節 直轄市 昇格以後의 大邱經濟(1981~1991)	111
I. 韓國經濟의 構造的 轉換과 大邱經濟圈의 擴大	111
II. 總量規模의 擴大와 大邱經濟의 서비스化	113
III. 工業部門의 相對的 萎縮과 構造改善	116
IV. 流通構造의 急變	120
V. 第2金融圈의 急伸張과 資金의 域外流出	122
第2章 農·林·畜産業	127
第1節 概 觀	127
第2節 農 業	130
I. 解放以前의 大邱農業	130
II. 解放直後 및 韓國戰爭期の 農政基調와 地域農業(1945~1953)	134
III. 戰後 再建期の 農政基調와 地域農業(1954~1961)	136
IV. 經濟開發初期의 農政基調와 地域農業(1962~1971)	139
V. 輸出主導成長期の 農政基調와 地域農業(1972~1980)	143
VI. 直轄市昇格以後의 農政基調와 地域農業(1981~1991)	146
第3節 林 業	150
I. 解放以前의 大邱林業	150
II. 解放直後 및 韓國戰爭期の 林政基調와 地域林業(1945~1953)	151
III. 戰後再建期の 林政基調와 地域林業(1954~1961)	152
IV. 經濟開發初期의 林政基調와 地域林業(1962~1971)	153
V. 輸出主導成長期の 林政基調와 地域林業(1972~1980)	155
VI. 直轄市昇格以後의 林政基調와 地域林業(1981~1991)	156
第4節 畜産業	158
I. 解放以前의 大邱畜産業	158

II. 解放直後 및 韓國戰爭期の 畜政基調와 地域畜産業(1945~1953)	159
III. 戰後再建期の 畜政基調와 地域畜産業(1954~1961)	160
IV. 經濟開發初期의 畜政基調와 地域畜産業(1962~1971)	161
V. 輸出主導成長期の 畜政基調와 地域畜産業(1972~1980)	163
VI. 直轄市昇格以後의 畜政基調와 地域畜産業(1981~1991)	164
第5節 課題와 展望	165
第3章 鑛工業	168
第1節 概 觀	168
I. 解放前까지의 大邱鑛工業(1876~1945)	169
II. 解放以後 및 韓國戰爭期の 大邱鑛工業(1945~1953)	172
III. 戰後 再建期の 大邱鑛工業(1954~1961)	178
IV. 經濟開發 初期의 大邱鑛工業(1962~1971)	185
V. 輸出主導成長期の 大邱鑛工業(1972~1980)	190
VI. 直轄市昇格以後의 大邱鑛工業(1981~1991)	197
第2節 纖維工業	206
I. 概 觀	206
II. 紡績・製絲工業	224
III. 織物製造工業	250
IV. 染色工業	266
V. 衣類・縫製工業	276
VI. 課題와 展望	290
第3節 機械・金屬工業	310
I. 概 觀	310
II. 機械・金屬工業의 發展過程	311
III. 業種別 發展推移	319
IV. 課題와 展望	355
第4節 鑛業 및 其他 工業	356
I. 鑛 業	357
II. 特化産業	358
III. 食品工業	375

IV. 化學工業	380
V. 課題와 展望	385
第5節 工業團地	386
I. 工業團地の 造成過程	386
II. 産業環境과 工團造成 背景	391
III. 工業基盤擴充의 對策	394
IV. 工業團地 造成의 現況	396
V. 課題 및 展望	415
第4章 流通 및 서비스産業	417
第1節 流通 및 서비스 産業의 發達概況	417
I. 解放以前(～1945)	417
II. 解放～韓國戰爭期(1945～1950年代)	420
III. 1960年代	423
IV. 1970年代	427
V. 1980年代	430
VI. 1990年代	433
第2節 都·小賣業의 發達	436
I. 都·小賣業 一般	436
第3節 大邱藥令市の 發達	454
I. 大邱藥令市の 歷史	454
II. 藥令市の 現況과 運營方法	457
III. 藥令市 發展을 위한 計劃 및 展望	463
第4節 在來市場	464
I. 在來市場의 歷史	464
II. 在來市場의 施設과 運營現況	469
III. 在來市場의 活性化 方案	472
第5節 物流活動	475
I. 物流活動의 發達	475
II. 物流施設의 現況	476
III. 企業體의 物流管理 實態	480

IV. 物流 改善方向	483
第6節 飲食·宿泊業	485
I. 一般飲食業·宿泊業	485
II. 現代式 飲食業·觀光호텔	490
第7節 서비스業	497
I. 概 況	497
II. 不動產業	498
III. 事業서비스業	500
IV. 社會서비스業	505
V. 娛樂·文化藝術서비스業	506
VI. 個人 및 家事서비스業	507
第8節 大邱地域 流通産業의 課題와 展望	509
I. 1990年代 流通環境의 變化	509
II. 大邱地方 流通業界의 課題	511
第5章 對外貿易	516
第1節 概 觀	516
第2節 解放以前(1910~1945)의 大邱貿易	519
I. 對外貿易의 一般的 環境	519
II. 對外貿易의 規模 및 構造	525
第3節 經濟開發初期(1962~1971)의 大邱貿易	537
I. 對外貿易의 一般的 環境	537
II. 對外貿易의 規模와 構造	543
第4節 輸出主導成長期(1972~1980)의 大邱貿易	550
I. 對外貿易의 一般的 環境	550
II. 對外貿易의 規模 및 構造	559
第5節 直轄市昇格以後(1981~1991)의 大邱貿易	569
I. 對外貿易의 一般的 環境	569
II. 對外貿易의 規模 및 構造	583
第6節 大邱貿易의 總括的 推移와 評價	594
I. 大邱貿易의 一般的 性格과 位相變化	595

II. 大邱輸出의 國際競爭力의 變化	598
III. 大邱輸出의 構造變化	606
第7節 大邱貿易의 問題點과 課題	612
第6章 金融	615
第1節 概況	615
第2節 解放까지의 地域金融(1945年 以前)	618
I. 地域金融의 全般的 흐름	618
II. 金融機關 및 金融實態	619
第3節 解放直後 및 韓國戰爭期の 地域金融(1945~1953)	630
I. 地域金融의 全般的 흐름	630
II. 金融機關 및 金融實態	633
第4節 戰後 再建期の 地域金融(1954~1961)	640
I. 地域金融의 全般的 흐름	640
II. 金融機關 및 金融實態	642
第5節 經濟開發初期의 地域金融(1962~1971)	650
I. 地域金融의 全般的 흐름	650
II. 金融機關 및 金融實態	653
第6節 輸出主導成長期の 地域金融(1972~1980)	663
I. 地域金融의 全般的 흐름	663
II. 金融機關 및 金融實態	665
第7節 直轄市昇格以後의 地域金融(1981~)	677
I. 地域金融의 全般的 흐름	677
II. 金融機關 및 金融實態	680
第8節 課題와 展望	694
I. 金融環境의 變化가 地域金融에 미치는 影響	695
II. 地域金融의 當面課題	699
III. 地域金融 活性化施策의 基本方向과 展望	704
第7章 建設과 住宅	710
第1節 概觀	710

第2節 建設	711
I. 解放前의 大邱 建設業界	711
II. 韓國戰爭前後(1946~1961)의 大邱 建設業界	720
III. 經濟發展期(1962~1971)의 大邱 建設業界	725
IV. 經濟成長期(1972~1980)의 大邱 建設業界	730
V. 直轄市昇格後(1981~1991)의 大邱 建設業界	734
第3節 住宅	741
I. 解放前의 大邱 住宅業界	741
II. 6.25 前後(1946~1961)의 大邱 住宅業界	742
III. 經濟發展期(1962~1971)의 大邱 住宅業界	744
IV. 經濟成長期(1972~1980)의 大邱 住宅業界	746
V. 直轄市昇格前後(1981~1991)의 大邱 住宅業界	750
第4節 課題와 展望	753
第8章 交通·運輸·情報通信業	754
第1節 概 觀	754
第2節 交通·運輸	756
I. 交通手段	756
II. 運輸業	786
第3節 情報通信	800
I. 情報通信의 概念 및 意義	800
II. 通信의 起源	802
III. 우리나라 情報通信 略史	803
IV. 大邱地域의 情報通信	806
V. 大邱地域 情報通信의 展望과 課題	824
第9章 에너지産業	827
第1節 概 觀	827
第2節 燃料에너지産業	829
I. 煉 炭	829
II. 石 油	835
III. 가 스	837

IV. 都市가스	842
第3節 電力事業	844
I. 電力事業의 嚆矢	844
II. 1960年代以前 大邱의 電氣事情	845
III. 1960~1970年代 電力需給	846
IV. 1980年以後의 電力需給	848
第10章 物價 및 消費動向 推移	855
第1節 大邱地域의 物價動向 推移	855
I. 概 說	855
II. 解放 以後에서 1960年代의 期間	856
III. 1970年代에서 1993년까지의 期間	863
IV. 課題와 展望	876
第2節 大邱地域의 消費動向 推移	878
I. 概 說	878
II. 解放後 混亂期の 消費生活	879
III. 1960年代의 消費生活	883
IV. 1970年代의 消費生活	886
V. 1980年 以後의 消費生活	897
VI. 課題와 展望	902
第11章 企業, 企業人 및 企業經營	904
第1節 總 括	904
第2節 解放까지의 大邱 企業, 企業人 및 企業經營	905
I. 企業經營環境	905
II. 企 業	909
III. 主要 企業人	916
IV. 經營特徵	926
第3節 激動期 大邱의 企業, 企業人 및 企業經營	926
I. 企業經營環境	926
II. 企 業	928
III. 主要 企業人	932

IV. 經營特徵	941
第4節 戰後再建期の 大邱 企業, 企業人 및 企業經營	942
I. 企業經營環境	942
II. 企 業	943
III. 主要 企業人	950
IV. 經營特徵	953
第5節 經濟開發初期 大邱의 企業, 企業人 및 企業經營	953
I. 企業經營環境	953
II. 企 業	954
III. 主要 企業人	957
IV. 經營特徵	959
第6節 輸出主導成長期 大邱의 企業, 企業人 및 企業經營	959
I. 企業經營環境	959
II. 企 業	960
III. 主要 企業人	962
IV. 經營特徵	965
第7節 直轄市 昇格以後 大邱의 企業, 企業人 및 企業經營	965
I. 企業經營環境	965
II. 企 業	966
III. 主要 企業人	968
IV. 經營特徵	969
第8節 要約 및 맺음	970
第12章 勞動運動과 勞使關係	977
第1節 概 觀	977
I. 解放以前の 勞動運動과 勞使關係	977
II. 解放以後 勞動運動 및 勞使關係	978
第2節 解放以前の 大邱 勞動運動과 勞使關係	979
I. 舊韓末과 日帝 初期의 勞動運動과 勞使關係：胎動期(1867~1920)	979
II. 日帝中期의 勞動運動과 勞使關係：發展期(1920~1937)	983
III. 日帝末期의 勞動運動과 勞使關係：潛伏期(1937~1945)	993

第3節 解放直後 및 美軍政期の 勞動運動과 勞使關係	996
I. 勞使關係 環境과 勤勞生活 條件	996
II. 勞動政策	998
III. 朝鮮勞動組合 全國評議會와 大韓獨立促成 勞動總同盟	1000
IV. 勞動爭議와 地域事例	1002
第4節 政府樹立과 戰後 再建期の 勞動運動과 勞使關係	1007
I. 第1共和國時期	1007
II. 第2共和國時期	1030
第5節 經濟開發初期의 勞動運動과 勞使關係	1042
I. 勞使關係 環境과 勤勞生活 條件	1042
II. 勞動政策	1043
III. 勞使의 組織	1045
IV. 勞動爭議와 地域事例	1049
第6節 輸出主導成長期の 勞動運動과 勞使關係	1050
I. 勞使關係 環境과 勤勞生活 條件	1050
II. 勞動政策	1051
III. 勞使의 組織	1052
IV. 勞動爭議와 地域事例	1054
第7節 直轄市 昇格前後의 大邱勞動運動과 勞使關係	1058
I. 第5共和國期の 勞動運動과 勞使關係	1058
II. 第6共和國期の 勞動運動과 勞使關係	1073
第8節 課題와 展望	1094
第13章 觀光 및 『레저』	1097
第1節 觀光事業	1097
I. 우리나라 觀光産業의 發展推移	1097
II. 大邱地域 觀光産業의 發展方向	1102
III. 大邱地域의 觀光資源	1105
IV. 大邱地域 觀光事業體 實態	1110
V. 觀光施設의 長期開發計劃	1120
VI. 觀光市場 長期展望	1126

第2節 레저 스포츠	1144
I. 레저 스포츠 振興의 背景	1144
II. 레저 스포츠의 目標	1145
III. 레저 스포츠의 推進計劃	1145
IV. 레저 스포츠의 投資計劃	1146
V. 레저 스포츠 施設 現況	1147
第3節 地域觀光産業의 課題와 展望	1157
I. 觀光資源開發小圈의 設定과 積極的 開發	1157
II. 國民觀光客을 위한 觀光施設의 擴充	1158
III. 綜合觀光情報센터의 設置	1158
IV. 交通網의 擴充 및 整備	1158
V. 觀光行政體系의 一元化	1159
VI. 觀光弘報活動의 強化	1159
第14章 經濟團體 및 經濟關聯 研究機關	1160
第1節 大邱地域 經濟團體史 概觀	1161
I. 舊韓末까지의 經濟團體	1163
II. 日帝下의 經濟團體	1167
III. 解放後의 經濟團體	1168
第2節 大邱地域의 主要 經濟團體	1177
I. 大邱商工會議所	1177
II. 中小企業協同組合中央會 大邱支部	1192
III. 韓國貿易協會 大邱·慶北支部	1196
IV. 大邱經營者協會	1201
V. 農業協同組合中央會 大邱市支會	1210
第3節 纖維工業 關聯 經濟團體	1217
I. 纖維技術振興院	1217
II. 大邱·慶北絹織物工業協同組合	1225
III. 大邱·慶北織物工業協同組合	1228
IV. 大邱·慶北메리야스工業協同組合	1232
V. 大邱·慶北染色工業協同組合	1234

VI. 大邱飛山染色工業工團	1237
VII. 韓國纖維織物輸出組合 大邱出張所	1240
VIII. 大邱・慶北撚絲織物生產協力協會	1243
IX. 韓國纖維技術研究所 大邱事務所	1245
X. 韓國原絲織物試驗檢查所 大邱支所	1248
XI. 韓國衣類試驗檢查所 大邱支所	1251
第4節 其他 經濟關聯團體	1253
I. 韓國生產性本部 大邱・慶北支部	1253
II. 產業技術情報院(KINITI) 大邱・慶北地域센터	1256
III. 其他 商工團體	1257
第5節 經濟關聯 研究機關	1261
I. 大邱慶北開發研究院(Taegu-Kyungbuk Development Institute)	1262
II. 產學經營技術研究院(University-Industry Research Institute)	1266
III. 大邱社會研究所(Taegu Institute of Social Studies)	1269
IV. 大邱銀行 綜合企劃部 調查研究室	1271
V. 大邱直轄市 市政專門研究班과 市政研究委員會	1273
VI. 大邱商工會議所 附設 大邱經濟研究센터	1275
VII. 大邱地域 各 大學校 附設 經濟關聯 研究所	1276
第6節 小 結	1282
第15章 大邱經濟의 課題와 展望	1287
第1節 活力있는 大邱經濟의 確立을 위한 政策課題	1287
I. 大邱經濟의 새로운 基盤造成	1287
II. 纖維產業의 高度화와 새로운 成長產業의 振興	1296
III. 流通業의 現代화와 物流體系의 整備	1307
IV. 活氣찬 中小企業의 育成	1310
第2節 2000年代 大邱經濟의 未來像	1318
I. 主要經濟指標의 展望	1318
II. 實現可能性과 展望	1324

第一卷(通史)

第一篇 自然的基礎

第1章 位置와 地理의 特性

第4章 氣 候

第2章 地 質

第5章 土壤·植生

第3章 地 形

第二篇 先史 및 古代

第1章 青銅器時代 以前の 文化情況

第4章 三韓時代의 大邱

第2章 青銅器時代

第5章 三國時代의 大邱

第3章 初期鐵器時代

第6章 統一新羅時代의 大邱

第三篇 高麗時代

第1章 後三國 鼎立期の 大邱地域과
公山戰鬪

第3章 民亂과 外侵

第2章 大邑中心의 郡縣制度 整備과
大丘縣의 變遷

第4章 高麗의 文化와 大邱

第四篇 朝鮮前期

第1章 地方雄府로서의 大丘都護府의 成長

第3章 朝鮮前期 文教政策과 大邱의 文化

第2章 大丘府의 社會·經濟的 成長

第4章 倭·胡兩亂과 大邱

第五篇 朝鮮後期

第1章 支配體制의 變化와 行政都市로의
定立

第3章 文化의 새 氣運과 文化都市로의 發展

第2章 社會構成의 變動과 經濟都市로의
成長

第4章 外勢의 侵略과 地域民의 抵抗

第六篇 日帝強占期

第1章 日製 植民支配와 大邱地域의 行政

第4章 大邱地域의 教育

第2章 大邱地域의 産業과 經濟

第5章 大邱地域의 文化

第3章 大邱地域의 獨立運動

第七篇 現 代

第1章 政治狀況의 變遷과 大邱市

第2章 大邱直轄市時代

第二卷(政治・行政)

第八篇 政 治

第1章 解放直後의 政治動向

第5章 第3共和國時代

第2章 美軍政時代

第6章 第4共和國時代

第3章 第1共和國時代

第7章 第5共和國時代

第4章 第2共和國時代

第8章 第6共和國時代

第九篇 行 政

第1章 行政體制

第4章 都市計劃과 都市開發

第2章 市 議 會

第5章 財 政

第3章 市政施策

第四卷(社會)

第十一篇 社會

第1章 人 口

第6章 社會福祉

第2章 住 宅

第7章 市民意識

第3章 交通・運輸

第8章 大邱地域 村落社會의 都市化

第4章 情報・通信

第9章 大邱의 建築

第5章 環 境

第五卷(文化)

第十二篇 文 化

第1章 教 育

第5章 體育・스포츠

第2章 藝 術

第6章 宗 教

第3章 言論・出版

第7章 民俗文化

第4章 文化財

第六卷(資料)

第十三篇 資 料

第1章 三韓時代

第2章 三國時代

第3章 統一新羅時代

第4章 高麗時代

第5章 朝鮮前期

第6章 朝鮮後期

第7章 日帝強占期

第8章 政 治

第9章 行 政

第10章 產業・經濟

第11章 社 會

第12章 文 化

第十篇 產業・經濟



大邱綜合流通團地 鳥瞰圖

- 第1章 總 說
- 第2章 農・林・畜產業
- 第3章 鑛工業
- 第4章 流通 및 서비스產業
- 第5章 對外貿易
- 第6章 金 融
- 第7章 建設과 住宅
- 第8章 交通・運輸・情報通信業

- 第9章 에너지產業
- 第10章 物價 및 消費動向 推移
- 第11章 企業, 企業人 및 企業經營
- 第12章 勞動運動과 勞使關係
- 第13章 觀光 및 「레저」
- 第14章 經濟團體 및 經濟關聯 研究機關
- 第15章 大邱經濟의 課題와 展望

第1章 總 說

第1節 大邱經濟의 歷史的 時期區分

한 國家나 한 地方의 歷史를 정리하기 위해서는 우선적으로 시기구분의 문제가 논의되어야 한다. 대구경제의 역사적 분석 역시 예외는 아니다. 일반적으로 시기구분의 문제는 분석 대상과 분석목적에 따라 다양하게 제기될 수 있다. 이 글에서의 분석대상은 ‘大邱經濟’이며, 분석목적은 대구경제의 ‘近代化 혹은 資本主義化 과정’을 역사적으로 분석·정리하는 데 있다. 따라서 대구경제의 역사적 분석을 위한 시기구분 문제는 대구경제의 근대화라는 관점에 초점을 맞추고자 한다.

대구경제의 역사적 분석·정리를 위한 시기구분을 하기에 앞서 이와 관련된 기존의 연구성과를 살펴보고자 한다. 이에 대한 대표적인 것으로 1943년에 日本人 학자들에 의해 쓰여지고 大邱府가 발간한 《大邱府史》와 1973년에 大邱市에서 발간한 《大邱市史》를 들 수 있다.¹⁾ 먼저 《大邱府史》의 구성을 보면 크게 沿革編과 政府編으로 나누어져 있으며, 연혁편에서의 시기구분을 보면 王朝史的 관점에서 ① 李氏朝鮮時代 이전의 大邱, ② 李氏朝鮮時代 후기의 大邱, ③ 李氏朝鮮時代 말기의 大邱로 나누어 기술하고 있다. 대구경제와 관련된 분석은 정부편의 〈産業의 발전〉이라는 내용으로 제9장에서 일제하의 농업, 공업, 상업, 무역, 금융의 개황을 분석하고 있다. 《大邱府史》는 朝鮮總督府하에서 일본인에 의해 쓰여진 것임에도 불구하고, 日帝時代 이전의 대구 역사를 총괄적으로 정리하고 있다는 점에서 그史料로서의 가치가 매우 높다고 하겠다. 그러나 대구경제에 대한 분석은 현황의 소개수준에 머물고 있어서, 시기구분에 따른 經濟史的 분석이 제대로 이루어지고 있지 못하다는 한계를 지닌다고 하겠다.

한편 1973년에 발간된 《大邱市史》의 구성을 보면, 제1권에서는 先史시대부터 朝鮮후기까지의

1) 사실 대구경제의 역사를 총괄적으로 분석·정리한 자료로는 이 두가지 밖에 없다고 해도 과언이 아닐 것이다. 이 밖에 일제하의 대구경제를 역사적으로 시기구분한 것으로는 權寧旭 〈大邱地方における經濟的動向—日本帝國主義による植民地經濟への編成過程〉 《朝鮮學報》 43, 1967을 들 수 있다. 이 글에서는 대구지방의 一地方史的 考察을 통해 일본침략자에 대한 식민지경제로의 강제적 편입과정을 살펴보기 위해 대구경제를 ① 李朝後半期の 大邱地方, ② 韓日合併前の 大邱地方, ③ 日帝完全占領下の 大邱地方으로 시기구분하여 분석하고 있다.

역사를²⁾, 제2권에서는 日帝下의 역사를³⁾, 제3권에서는 解放 직후 美軍政期와 그 이후의 역사⁴⁾를 총괄적으로 서술하고 있다. 따라서 대구경제에 대한 분석 역시 이와 같은 시기구분에 기초하여 각권의 각편에서 보다 구체적으로 서술하고 있다. 대구경제에 대한 이와 같은 역사적 서술방식은 각 시대의 대구경제 문제를 時代史와 결합하여 서술하고 있다는 점에서 《大邱府史》에 비해 진일보된 논의라 하겠다. 그러나 韓國經濟의 근대화 혹은 자본주의화라는 經濟史的인 시각에서 독립적인 시기구분이 이루어지고 있지 못하다는 점에서 어느 정도의 한계성을 가지고 있다.

이제 20여년 만에 다시금 쓰여지는 《大邱市史》에서는 〈産業經濟編〉이 독립된 卷으로 구성되어 있기 때문에 기존의 논의와는 달리, 대구경제를 경제사적 관점에서 새롭게 시기구분할 수 있게 되었다. 이를 위해서는 다음과 같은 두가지 점에 주목하여 시기구분을 시도해 보고자 한다. 첫째, 대구지방경제는 한국경제의 일부분으로서 한국자본주의의 형성과정이라는 普遍性을 따르면서도 지방경제의 特殊性을 부각시킬 수 있는 시기구분이 필요하다. 그러므로 기본적으로는 한국 근·현대 경제사의 구분을 따를 수 밖에 없으나, 각 시대의 소시기구분은 대구경제의 특수성이 반영된 구분이 가능할 것이다. 둘째, 1943년의 《대구부사》와 1973년의 《대구시사》에 이어서 세번째로 쓰여지는 《대구시사》의 〈산업경제편〉에서의 주된 분석대상은 해방 이후의 시기라고 할 수 있으며, 그 가운데서도 지금까지 전혀 서술되지 못한 1960년대 중반 이후의 시기라 할 수 있다.

역사란 항상 동일한 사실에 대해서도 현재의 강렬한 관심 속에서 새롭게 쓰여질 수 있는 것이다. 해방 이전의 대구경제에 대한 분석도 이러한 의미에서 새롭게 쓰여질 수 있을 것이다. 그러나 해방 이전의 대구경제를 파악할 수 있는 史料가 너무 제한적이며, 그것의 대부분은 이미 기존의 연구에서 일정하게 분석·정리되고 있다. 따라서 解放以前의 시기에 대해서는

2) 이에 대한 보다 세부적인 시기구분을 보면 제1편 先史時代~三國時代, 제2편 統一新羅 및 高麗時代, 제3편 朝鮮前期, 제4편 朝鮮後期로 되어있다. 대구시, 《大邱市史》 제1권, 1973, pp. 9~12.

3) 이에 대한 小時期 구분을 보면 식민지 통치하의 제1기(1910~1919년), 식민지 통치하의 제2기(1920~1931년), 식민지 통치하의 제3기(1932~1945년)로 나누어 분석되고 있다. 그러나 일제하의 大邱工業에 대한 시기구분은 약간의 차이가 있다. 즉, 대구공업의 發生期(1910~1920년), 대구공업의 確立期(1920~1930년), 대구공업의 沈滯期(1930~1937년), 대구공업의 復興期(1937~1945년)로 소시기 구분을 하고 있다. 여기에서 1937년이 일제하 대구공업의 소시기 구분의 기준으로 된 까닭은 1937년에 大邱府의 직공 5인 이상 공장수 및 생산액이 이 시기를 전후하여 최저수준이었다는 점에 주목한 것으로 보인다. 대구시, 《대구시사》 제2권, 1973, pp. 3~9 및 pp. 234~264 참조.

4) 해방 이후의 대구 역사에 대해서는 뚜렷한 소시기 구분이 없이 1960년대까지 개괄적으로 정리하고 있다.

현재의 시점에서 대구경제의 근대화, 혹은 자본주의화의 과정과 관련된 역사적 사실에 대한 기존연구의 간략한 재구성의 차원에 머무르고자 한다. 일반적으로 한국근대사의 출발점을 1876년의 開港으로 보고 있음에도 불구하고, 이 글에서는 한국근대사의 중점이자 한국현대사의 출발점에 해당하는 1945년의 8.15 해방을 大時期구분의 분수령으로 파악하고자 하는 이유도 바로 여기에 있다.⁵⁾

이상과 같은 두가지 사실에 착목하여 이 글에서는 대구경제의 역사적 시기구분의 분수령을 해방에서 찾고자 하며, 이에 따른 해방 이전과 이후의 소시기구분은 한국경제의 근대화 과정과 대구지방 경제의 특수성을 접목시켜 볼 때 다음과 같이 구분할 수 있을 것이다.

I. 解放以前 大邱經濟의 時期區分

우리나라 역사학계에서도 근대사의 기점을 ① 1866년의 丙寅洋擾, ② 1876년의 開港, ③ 1884년의 甲申政變, ④ 1894년의 甲午改革, ⑤ 1919년의 3.1運動, ⑥ 1945년의 解放 등으로 잡아야 한다는 여러가지 학설이 다양하게 제기된 바 있다.⁶⁾ 이 가운데 경제사학계에서 한국근대사의 기점에 대한 통설은 1876년의 開港이다.

이들이 개항을 한국근대사의 출발점으로 보는 논거는 다음과 같은 몇가지로 요약될 수 있다. 첫째, 1870년대는 世界資本主義가 산업자본주의에서 독점자본주의로 이행하면서 제국주의적 대외팽창을 본격화한 시기이며, 둘째, 개항은 조선후기 이래 지속되어온 商品貨幣經濟의 발전속도를 더욱 급격하게 변화시켰으며, 셋째, 1870년대를 전후하여 국내봉건세력과 외래침략세력에 반대하는 農民運動이 한층 격화되었으며, 넷째, 1870년대를 전후하여 근대적 변혁사상으로서의 개화사상이 형성·발전되었다. 마지막으로 1870년대에 들어오면 조선조 封建政府가 더이상 봉건체제를 유지할 수 없게 되는 역사적 단계에 이르렀다는 점을 들

- 5) 이러한 시기구분은 결코 해방 이전의 시기가 대구경제의 역사적 분석대상에서 중요하지 않다든가, 이미 완전히 분석되었음을 의미하는 것은 아니다. 이것은 오히려 해방 이전의 대구경제에 대한 분석이 극히 빈약했음을 말해주는 것이다. 따라서 해방 이전의 대구경제에 대한 분석을 보다 풍부하게 하기 위해서는 구체적인 새로운 사료의 발굴과 함께, 이에 대한 구체적인 研究成果의 집적이 요구된다고 하겠다.
- 6) 이 중에서 ①은 外國資本主義의 침략을 받은 것을 중시한 것이고, ③~⑥은 市民革命的 요소를 강조하여 제시된 견해이다. 우리나라의 경우 시민혁명에 의해 자본주의가 성립되고 순조롭게 발전해온 西歐와는 달리, 외국자본주의의 침략에 의해 전통사회가 해체되고 급기야는 식민지사회의 길을 걸었다는 점에서 볼 때, ③~⑥학설은 주로 西洋史의 경험을 기초로 하여 성립된 세계사의 법칙성을 한국사에도 무리하게 도식적으로 적용하려 했다는 비판을 면하기 어렵다. 장시원·김기원, 《한국경제사》 한국방송통신대학 출판부, 1992, p. 1.

수 있다.⁷⁾

이 시기 府나 郡의 형태로 표현되는 대구지방경제 역시 韓國近代史의 역사적 변천과정의 일부분으로서의 의미 이상을 가지기는 어려웠을 것이다. 따라서 해방 이전 대구경제의 역사적 변천과정은 한국경제의 변천과정과 시기적으로 같은 맥락을 가진다고 볼 수 있다. 이와 같은 시각에서 해방 이전의 대구경제를 소시기로 구분해 보면 ① 開港 이전의 대구경제, ② 개항에서 韓日合邦까지의 대구경제, ③ 日帝下의 대구경제로 크게 나눌 수 있을 것이다.

1. 開港以前의 大邱經濟(1876年 以前)

개항 이전의 대구경제는 사실상 封建經濟의 범주에 속한다. 이 시기에 대한 분석의 초점은 대구가 어떻게 봉건경제하에서 상품화폐경제의 발전을 통해 都市經濟로 성장할 수 있었는가를 살펴보는 데 있다. 따라서 이 시대의 분석은 王朝史의 변천을 통해 인구의 성장 및 농업과 手工業의 발전과정, 지방재정을 파악하는 것이 중요하다.

2. 開港에서 韓日合邦까지의 大邱經濟(1876~1910)

이 시기는 한국사회가 不平等條約을 통해 개항을 한 이래, 외래자본주의의 침략에 의해 半殖民地化되는 과정이 그 특징이다. 특히 일본 상인자본의 침투에 따른 대구경제의 반 식민지화 과정을 파악하는 것이 중요할 것으로 생각된다.

3. 日帝下의 大邱經濟(1911~1945)

이 시기는 일본제국주의의 침략에 의한 식민지경제로의 강압적 편입과정을 하나의 지방사적인 측면에서, 대구경제가 어떻게 跛行的으로 발전하여 왔는가를 살펴보는 것이 중요하다.

일제하의 대구경제에 대해서는 식민지 통치정책의 변천에 따라 1) 韓日合邦에서 3.1運動까지의 대구경제, 2) 3.1運動에서 滿洲事變까지의 대구경제, 3) 滿洲事變에서 解放까지의 대구경제 등으로 나누어 살펴볼 수 있다.

II. 解放以後 大邱經濟의 時期區分

1945년 8.15 해방은 韓國資本主義의 展開·發達史에 있어 여러가지 의미에서 중요한 획을

7) 장시원·김기원, 앞의 책, pp. 2~3 참조.

곳은 역사적 전환점이 된 사건이었다.⁸⁾ 해방이 경제사적 측면에서 가지는 가장 중요한 의미는 36년간 일본제국주의의 잔혹한 植民統治로 부터 정치·경제적 독립의 객관적 계기를 맞게 됨으로써 민족에 의한 자주적·자립적 國民經濟 건설의 가능성이 부여되었다는 점이다.

따라서 해방 후의 한국경제는 일제하의 식민지적, 半封建的 경제구조의 철저한 청산과 함께 그것에 기초한 자립경제의 건설을 그 당면과제로 안고 있었다. 즉, 한편으로는 일본제국주의 자본과 예속자본을 흡수함으로써 자립경제 건설의 물질적 기반을 확립하고, 다른 한편으로는 반봉건적 地主的 토지소유를 청산하여 農民의 토지소유를 확립하는 것이 그 당면과제였다. 실제로 前者는 歸屬財産의 처리과정을 통해, 後者는 農地改革을 통해 실시되었다.

그러나 해방이 민족의 주체적인 反帝鬭爭을 통해 획득되지 못하고, 제국주의 열강간 모순의 전쟁을 통한 일시적 해결이 그 주요 계기였다는 점에서 帝國主義의 均正성을 완전히 탈각하지 못하였다. 이러한 사실은 해방 후 美蘇에 의한 남북분단과 그로 인한 韓國戰爭, 미군정기에 실시된 귀속재산의 처리 및 농지개혁의 불철저성에서 적나라하게 드러났다. 특히 南北分斷이라는 역사적 현실이 한국경제에 미친 영향은 예상 이상으로 큰 것이었다. 식민지하에서 일본자본주의의 전략적 산업건설에 의해 형성된 이른바 ‘南農北工’型的 산업구조는 남북 분단으로 인해 어느 쪽도 자립적인 국민경제의 성립을 어렵게 만들었다. 더구나 南韓에 남겨진 공업도 그 후의 정치적 사회적 혼란과 뒤이어 밀어닥친 미국의 원조물자 때문에 그 생산이 위축되고 말았다. 설상가상으로 1950년에 발발한 동족상쟁의 비극은 남북 모두에게 인적·물적인 막대한 손실을 가져왔으며, 공업의 침체는 더욱 심화되었다.⁹⁾ 우리는 이 시기를 한국경제에 있어서 ‘解放直後 및 韓國戰爭期’로 부르고자 한다.

한편 1953년 휴전과 함께 美國의 남한에 대한 원조는 다시금 대폭적으로 증가되었으며, 그 가운데 UNKRA 援助와 ICA 援助는 공업부문에 투자될 施設財와 原資材의 공여를 주된 내용으로 하였다. 주로 化學工業, 纖維工業, 機械工業을 중심으로 투입된 이 두 가지 원조의 실적은 1953~1957년간 약 8,500만 달러에 이르렀고, 기타 三白產業(제분, 제당, 면방)중심의 消費財공업은 대부분 중소규모로 무질서하게 난립하여 1958년에는 이미 부분적으로 시설과잉 상태에 빠지게 되었다. 우리는 이 시기를 이른바 한국경제에 있어서 ‘戰後의 經濟再建期’로 부르고자 한다.

8) 崔龍浩, 〈韓國資本主義의 展開過程〉《韓國資本主義의 政治經濟學의 研究》韓國精神文化研究院, 1988, pp. 193~254 및 변형운 편저, 《韓國經濟論》, 유풍출판사, 1989, pp. 71~101 참조.

9) 이해주, 《한국근대경제사론》, 부산대학교 출판부, 1991, p. 455.

1957년을 고비로 미국원조의 점진적인 감소와 원조의 有償借款으로의 전환에 의해 한국경제는 그 발전패턴을 달리하게 되었다. 이른바 한국경제에 있어서 借款經濟의 시대가 도래한 것이다. 1961년에 성립한 5.16 군사정권은 1962년부터 제1차 경제개발5개년계획을 정부주도하에서 수립·집행함에 따라 투자재원을 주로 상업차관에 의해 조달하고, 일시적으로 輸入代替工業化를 시도하였다. 그러나 1965년 6월 韓日國交正常化를 계기로 도입된 상당한 규모의 대일상업차관과 外資導入의 누적은 공업화 패턴을 수출편향적으로 가속화시켰고, 그 결과 공업구조 역시 지극히 대외의존적인 성격으로 심화시켰다. 우리는 이와 같은 1960년대를 한국경제에서 ‘經濟開發 初期’로 부르고자 한다.

1972년부터 시작된 제3차 경제개발5개년계획, 특히 1973년부터 실시된 중화학공업화 정책을 통한 수출지향적인 공업화는 막대한 海外資本의 유입으로 인해 국민경제의 대외의존성을 심화시켰다는 부정적 효과와 함께, 연평균 10.9%라는 고도의 경제성장을 달성하는 긍정적인 효과를 낳기도 하였다. 1977년부터 실시된 제4차 경제개발5개년계획 역시 그 기본 성격이 제3차 경제개발5개년계획과 마찬가지로 수출지향적 고도성장을 추구하였다는 점에서 우리는 1970년대의 한국경제를 ‘輸出主導 成長期’로 부르고자 한다.

해방 이후부터 1970년대까지 살펴 본 이상에서의 한국경제에 대한 소시기구분은 강력한 政府主導하에서 경제성장이 이루어졌다는 점에서 대구지방경제 역시 중앙정부의 경제정책에 따라 그 부침이 좌우될 수 밖에 없었다. 따라서 해방 이후부터 1970년대까지의 대구경제 역시 한국경제의 소시기구분에 따라, 1) 解放直後 및 韓國戰爭期の 大邱經濟, 2) 戰後 經濟再建期の 大邱經濟, 3) 經濟開發 初期의 大邱經濟, 4) 輸出主導 成長期の 大邱經濟로 나누어 살펴볼 수 있을 것이다.

1980년대의 대구경제 역시 한국경제의 발전과정과 불가분의 관계를 가지고 있음은 두말할 나위가 없다. 그러나 1980년대는 고도성장을 지속해 오던 한국경제의 구조적 전환의 시기이자, 대구경제권의 확대의 시기이기도 하다. 한국경제는 그간의 고도성장으로 인해 경제규모가 상대적으로 비대화되었으며, 그 결과 이른바 고성장시대를 마감하고 중성장시대에 접어들게 되었다. 따라서 中成長時代に 적절한 산업구조조정이 불가피하게 되었다. 또한 해방 이후부터 1970년대까지의 대구경제가 한국경제에서 차지하는 위치는 일개 普通市의 수준이었다고 한다면, 1980년대의 그것은 直轄市의 수준에서 논의되어야 한다는 점에서 양적 및 질적 차이를 나타내고 있다. 즉, 1981년에 이루어진 대구의 直轄市로의 昇格은 한국경제에서 대구지방경제의 위상을 제고시키는 직접적인 계기가 되었다. 우리는 이와 같은 사실에 주목하여

1980년대의 대구경제를 ‘直轄市 昇格以後의 大邱經濟’로 시기구분하고자 한다.

지금까지 우리는 한국경제의 근대화 혹은 자본주의화라는 관점에서 대구경제의 변천사를 살펴보기 위한 시기구분을 시도하였다. 그러나 이와 같은 시기구분은 어디까지나 韓國資本主義의 전개과정과 접목하여 대구경제를 총괄적으로 논의하고자 할 경우에만 일정한 타당성을 가질 뿐이다. 즉, 대구의 각 산업 혹은 각 부문의 발달과정을 보다 구체적으로 살펴볼 경우에는 産業 및 部門의 특성에 따라 시기구분이 다소 상이하게 이루어질 수 있음을 미리 밝혀둔다. 이러한 점을 전제로 하면서 이하에서는 지금까지의 시기구분에 의거하여 대구경제의 변천과정을 개괄적으로나마 살펴보고자 한다.

第2節 解放以前까지의 大邱經濟發展史 概觀

I. 開港以前까지의 大邱經濟

開港 이전까지의 대구지방 경제의 발달과정을 파악함에 있어서 적어도 朝鮮前期까지는 대구지방에 대한 경제사적 사료가 매우 빈약하다. 더구나 이 시기는 商品貨幣經濟의 발전이 거의 이루어지지 못한 前近代社會이기도 하다. 따라서 하는 수 없이 조선전기까지의 대구지방 경제의 발전과정에 대해서는 人口의 증가, 行政區域의 변천과정, 각 시기에 있어서 대구의 역할 등과 같은 개괄적인 측면에서만 살펴볼 것이다.

大邱地方의 옛 이름이 達句火 혹은 達句伐로 표기되었다는 것은 이미 널리 알려진 사실이며, 新羅 景德王 16년에 大丘로 표기되기 시작했다.¹⁰⁾ 삼국시대 초기에는 대구에도 다른 지방과 마찬가지로 部族國家가 형성되어 있었다. 이 당시 大丘의 위치는 琴湖江 河谷을 통하여 落東江岸에 이르는 분지로서 취락성립에 적합한 생산과 교통의 요지였으므로 新羅의 가야 또는 百濟 진출을 위한 통로가 되었다. 그러다가 6세기 초에 완전히 신라의 영토하에 들어가게 되었다. 이처럼 이미 삼국시대부터 대구가 생산과 교통의 요지였다는 사실은 이후 商業都市로서 경제적 발전의 가능성을 내포하고 있었다고 보아야 할 것이다. 그러나 신라가 삼국을 통일하여 그 판도가 확대되고, 인구가 증가함에 따라 교통 및 군사적인 측면에서 본 대구의 중요성은 상대적으로 저하되었다.

10) 末松保和, 〈大邱地名語原考〉《大邱府史》第三 特殊編, 大邱府, 1943.

韓國史에서 대구지방이 가장 주목받지 못하였던 시기는 아마도 高麗時代가 아닌가 싶다. 고려가 後三國을 통일하고, 國都를 松岳(開城)으로 옮긴 뒤부터 왕실의 관심은 주로 동북지역에 치중되었다. 따라서 대구는 신라때와는 달리 교통 및 군사상의 중요성마저 상실한 일개 地方縣의 수준에 머무르고 있었다. 더구나 고려시대 후기의 대구지방은 民亂과 蒙古 및 왜구의 침탈이라는 內憂外患때문에 농업지대 및 교통 요충지로서의 천혜의 호조건에도 불구하고, 그 발전이 저지되고 있었다.

한편 朝鮮時代에 접어들면서부터 대구는 地方官制의 변화과정을 통해 지방도시로서의 성장기틀을 마련하기 시작한 것으로 보인다. 대구는 고려시대 말기엔 尚州牧에 속해 있는 京山村(星州)의 속현 14개 중의 하나였다. 그런데 조선조가 개창되자 태조 3년 3월에 수성현과 해안현을 대구에 영속시켰다. 그리고 世宗 元年(1419年) 5월에는 대구현이 郡으로 승격하고, 수성현 등 3개현을 영속시켰다. 이러한 사실은 고려시대에 비해 적어도 대구 지방의 양적 성장을 여실히 보여주는 것이라 하겠다. 이 당시 대구가 현에서 군으로 승격하게 된 직접적인 원인에 대해 《世宗實錄》 제4권 세종 원년 5월 경오조에서는 “주민의 호수가 1,300戶이므로 승격하게 되었다”라고 적고 있다. 세종 7년(1425년)에 편찬된 《慶尚道地理志》에는 당시 대구군의 호구상태를 <表 1-1>과 같이 상세하게 나타내고 있다.

<表 1-1> 大丘郡의 戶口數(1425년)

區分	戶數	口 數			戶當口數
		男	女	合	
本 部	436	1,329	1,224	2,553	5.9
壽 城	264	644	704	1,348	5.1
河 濱	351	1,294	818	2,067	5.9
解 顔	198	1,203	1,458	2,661	13.4
計	1,249	4,425	4,204	8,629	6.9

資料：대구시, 《대구시사》 제1권, 1973, p. 151.

이와 같은 대구인구의 증가는 대구주변에 펼쳐져 있는 平野에서의 농업 등 산업의 발전과 잉여생산물을 교환하기 위한 市場이 점차 커져 나갔다는 점과, 교통편리로 인한 인구집중의 결과라 하겠다.

한편 대구가 郡이 된지 48년후인 세조 12년(1466年)에 다시 都護府로 승격되었으며,

대구도호부 즉, 大邱府(약칭)라는 호칭은 해방 이후 대구시라고 개칭하기 전까지 사용되었다. 특히 壬辰倭亂이 끝난 선조 34년(1601年) 安東府에서 대구부로 監營을 옮김으로서 영남을 대표하는 정치적·행정적·군사적·경제적·중심지로 발전하게 되었다. 조선전기까지만 해도 일개 縣으로 남아있던 대구가 오늘날 우리나라 3대도시로 발전하게되는 기초는 아마도 이

당시부터였다고 할 수 있을 것이다.

한편 조선초기 대구경제의 발전상을 농업과 상공업분야에서 개괄적으로나마 살펴보면 다음과 같다. 먼저 조선초기만 하더라도 대구경제의 중심산업은 역시 농업에 있었다. 따라서 이 당시 대구가 계속 성장·발전할 수 있었던 배경은 앞에서 언급한 府域의 확대와 戶口의 증가 뿐만 아니라, 전결수의 증가와 농업생산의 현저한 진전이라는 보다 근원적인 측면에서 찾아볼 수 있을 것이다. 즉, 대구는 인접한 3현의 귀속으로 수성평야, 금호강유역의 평야 및 하빈지역의 농경지를 확보함으로써 농업생산의 비약적인 발전을 가져올 수 있었던 것이다.

조선초기 대구경제의 실상을 농업과 상공업의 측면에서 개괄적으로 요약해 보면 다음과 같다. 먼저 《世宗實錄地理誌》에 기록된 대구군의 田結상황을 보면, “墾田數는 6,543結이며, 그 중 水田은 3/10강이라”고 나타나 있다. 그러나 앞에서 서술한 호구수의 기록과는 달리 지역별로 구분하여 기재하지 않고 있기 때문에 지역별 전결수는 어느 정도인지 알 수 없다. 다만 전체로 보아 《세종실록지리지》에 기록된 男丁數로 나누어 보면, 인구에 대한 전결비율이 대략 1.5결로서 慶尙道 전체의 평균 1.7결에 비해 다소 농경지가 협소한 것으로 추측할 수 있을 따름이다.¹¹⁾

한편 조선시대는 儒敎를 치국이념으로 하는 농업국가로서 자연경제에 입각한 상공업의 억제라는 전통적인 정책을 고수하였기 때문에, 商工業의 발달이란 처음부터 기대하기 어려웠다. 그래서 조선초기에는 王室의 생활 내지 관청의 필요에 따라 극히 제한된 범위로만 手工業의 명맥을 유지하는 정도였다. 이와 같은 상황은 대구 역시 예외일 수 없었다. 이 당시 대구부의 수공업 상황을 《經國大典》에 기록된 工匠¹²⁾의 종류와 匠人數를 보면, 12개의 工匠종류에 16명의 장인이 있었던 것으로 나타나 있다. 이처럼 이 당시 수공업이 침체할 수 밖에 없었던 까닭으로는 물론 자연경제에 입각하고 있었다는 점과, 상공업의 억제라는 전통적인 정책, 그리고 官府 및 그 지배층의 가혹한 수탈과 중국(明)으로부터의 수입품에 대한 압박 등을 들 수 있을 것이다. 이와 같이 열악한 수공업 상황하에서 대구경제에서 특기할 만한 것으로는 16명의 匠人 가운데 紙匠이 4명으로 가장 많았다는 점과, 경상도지리지에서 大丘 및 3個屬縣의 ‘土產貢物’ 가운데 紙地가 공통적으로 있는 것으로 보아 製紙業이 상대적으로 발달하였던 것으로 추측된다.

11) 대구시, 앞의 책, p. 172.

12) 농민의 가내부업 형태의 수공업 이외의 전업적인 수공업자를 匠人이라 불렀으며, 이들 가운데 중앙에서는 工曹를 비롯한各司와 지방에서는 各道 各邑에 소속된 장인을 ‘工匠’이라 부르고, 이를 다시 ‘京工匠’과 ‘外工匠’으로 구별하였다. 工匠은 양인 혹은 公賤으로 형성되어 工曹, 本司, 本道, 本邑에 등록되었다.

마지막으로 조선초기 대구경제를 개괄하면서 반드시 짚고 넘어갈 만한 것으로는 救荒賑恤(구황진휼)을 목적으로 하는 社倉이 대구군 시대에 知郡事 李甫欽의 상소와 이에 대한 세종의 특별한 배려와 후원에 의해 전국에서 최초로 시험설치되었다는 점이다.¹³⁾ 이처럼 대구에서 처음으로 사창이 시험설치된 데에는 이곳 지방사정에 능통한 李甫欽이 사창설치에 열의를 가지고 있었다는 점과 함께, 이 당시 達城平野를 중심으로 한 대구의 농산물이 타군에 비해 상대적으로 풍부하였으나 巨室의 農莊이 많아 빈민들이 그들의 대부를 받아 생활하기 때문에 생활기반을 잃어버리는 자가 많았다는 점에서 그 이유를 찾아볼 수 있을 것이다. 대구의 사창은 南宋 孝宗때 朱子가 사창을 설치 운영한 이래 우리나라에서 처음이라는 데 그 의의가 있으며, 이보흠의 개인적인 노력도 높이 평가되어야 할 것이다.

그러나 무엇보다도 중요한 것은 사창의 시험설치 候補地로서 전국에서 대구가 선정될 수 있었던 것은 그 만큼 대구가 사창을 설립운영하기에 적절한 경제적 여건이 구비되었다는 사실일 것이다. 또한 이러한 사실은 대구가 우리나라 社會福祉都市의 메카라는 역사적 의의를 부여해 주고 있으며, 대구경제사에서 이에 대한 보다 구체적인 사료의 발굴작업과 함께 미래의 대구를 복지도시로 발전시켜야 할 당위성을 부여하는 것이라 할 수 있다.

한편 朝鮮後期인 18~19세기에 대구의 경제동향을 개략적으로나마 살펴보면 다음과 같다. 먼저 1681~1876년 사이의 大丘府 戶口帳籍과 순조 31년(1831년)의 大丘府邑誌 등의 통계자료에 기초하여 18~19세기의 대구부의 호구수를 살펴보면 대략 1만 3,400戶에 6만여口 정도로 큰 차이없이 일진일퇴의 보합상을 이루고 있었던 것으로 파악되고 있다.¹⁴⁾ 이러한 양상은 비록 中世의 사회의 공통적 현상이라고도 볼 수 있으나, 확실히 인구의 측면에서 대구사회가 정체되고 있었음을 암시해 주고 있다. 그러나 이 시기 우리나라 인구의 男女 비율이 대체로 95:100을 이루고 있음에 반해, 대구부가 75.5:100의 양상을 나타내고 있다는 점과 漏戶, 漏口의 助長役을 담당했던 土豪의 세력이 영남지역에서 비교적 강하였다는 점¹⁵⁾을 고려한다면, 대구부의 인구는 매우 완만하게나마 증가하였을 것으로 추정된다.

그렇다면 18~19세기 대구사회의 產業은 어떠했을까? 먼저 농업의 경우 《대구부읍지》에 따르면 1835년도 당시의 대구부는 3,922結 98負 4束의 旱田과 4,180結 54負 6束의 水田으로서

13) 社倉의 설치배경 및 그 경과에 대해서는 대구시, 앞의 책, pp. 187~198 참조.

14) 金載珍, 《韓國의 戶口와 經濟發展》, 博英社, 1967, p. 39 참조.

15) 대구시, 《대구시사》 제1권, 1973, pp. 359~360 참조.

총 8,103結 35負 8束의 영농면적을 보유하고 있었던 것으로 나타나 있다.¹⁶⁾ 이러한 면적은 앞에서 살펴본 조선초기의 간전수인 6,543결에 비하면 약 1,500여결의 증가를 나타내고 있으며, 특히 조선후기 移秧法의 보급과 영농에 필요한 堤, 湫와 같은 수리시설의 증축에 의해 수전결수의 급속한 증가를 엿볼 수 있다. 대구부읍지(1832년)에 나타난 대구부의 수리시설을 보면, 94개의 堤와 87개의 湫가 대구부 전역에 걸쳐 산재해 있음을 알 수 있다. 이 수리시설의 대부분이 17세기 이전에 만들어졌다는 사실은 대구사회가 일찍부터 農耕社會로서의 착실한 성장을 하여 왔음을 보여주는 것이라 하겠다.

다음으로 18~19세기 대구사회의 手工業에 대해서는 구체적인 면모를 살펴볼 만한 자료가 거의 없다. 다만 이 당시 대구부 호구장적에 나타난 匠人의 종류를 살펴보면 약 46종에 달하는 匠人들이 대구부 총인구의 8~9%(약 550명 정도)를 차지하고 있었던 것으로 추정된다.

이는 비록 匠種別 인구수를 파악할 수 없음에도 불구하고, 조선초기에 비해 확실히 수공업이 성장하였음을 보여주는 중요한 자료라 하겠다. 또한 대구부 수공업의 상대적 발전은 이 당시 經國大典(工典, 外工匠條)에 규정된 경상도 外工匠의 종류가 19종에 불과하였다는 사실에서도 그 활성화 정도를 짐작할 수 있을 것이다. 그러나 이 시기 대구의 수공업 역시 생산력적인 수준에 있어서 注文生産의 단계를 벗어나지 못하고 있었음은 두말할 나위가 없다.

한편 18~19세기 대구부의 商業活動에 대한 기록 역시 매우 취약하다. 다만 대구부읍지와 19세기 초에 徐有渠에 의해 저술된 《林園十六誌》 등에 나타난 단편적인 기록을 토대로, 당시 대구사회의 상업조직을 다음과 같이 추론해 볼 수 있을 따름이다. 즉, 19세기 중엽까지도 대구사회의 중추적인 상업조직을 이루었던 것은 定期市인 각 지역의 場市이었던 것으로 보인다. 그러나 東上·西上面을 중심으로 하는 대구사회의 일각에서는 府內場 및 新場의 정기시와는 별도로 常設店舖가 점차 형성되고 있었다는 점이 주목된다.



〈사진 1-1〉 舊韓末의 大邱市場

상설점포의 생성시기는 대체로 17세기 말로 추정되는데, 그 주된 이유로는 1705년의 《동상면장적》과 1708년의 《서상면장적》에서 京商人의 職役이 기재된 5호의 가구가 나타나고 있었다는 점, 상인의 대대적인 활동을 유발시킨

16) 조선시대의 토지단위는 면적단위가 아니라 수확량으로 표시되었다. 대체로 1結은 토지의 비옥도에 따라 현재의 6,000坪~9,000坪 정도로 추정된다. 그리고 1結=20負이고, 1負=10束이다.

大同法이 1677년에 경상도에서 실시되었다는 점, 그리고 전국의 藥材商을 집산시켰던 藥令市가 1650년대에 확립되었다는 점 등을 들 수 있다. 특히 약령시는 그 자체가 大市的인 성격을 띠었던 뿐만 아니라, 그에 부수하여 상설점포의 형성 및 대외교역의 수행을 증진시켜 대구의 유통을 상징할 정도로 대구사회의 성장에 중요한 역할을 하였다. 또한 경제학적으로 볼 때 대구는 약재의 生産地가 아니었음에도 불구하고, 전국적인 약재 집산지로 등장하게 된 데에는 교통의 요충지였다는 지리적 여건과 함께 대구지방에서의 약재에 대한 수요가 컸었음을 짐작케 해준다. 아무튼 조선전기 대구사회를 상징할 만한 것이 社倉이라고 한다면, 조선후기의 그것은 藥令市라고 하여도 과언이 아닐 것이다.

II. 開港에서 韓日合邦까지의 大邱經濟

주지하듯이 1876년 開港이 되기 이전인 17~18세기 경부터 조선사회에서는 이미 어느 정도 상품화폐경제가 진전되고 있었다. 특히 농업분야에서의 經營型 富農이나 廣作형태, 광산업 분야에서 德大制, 유기공업 분야에서 工場制手工業(매뉴팩처) 형태와 같은 자본주의적萌芽가 존재하고 있었음에도 불구하고, 이 시기의 조선사회는 세계사적으로 보면 여전히 경제적으로 閉鎖經濟라는 깊은 잠에 빠져 있는 ‘조용한 아침의 나라’였다. 이 당시 서구에서는 이미 공업화를 달성하고 鐵道간선망으로 전국을 누비는 시대를 살고 있을 때, 조선에서는 여전히 八字걸음과 ‘가마’의 시대에 머물고 있었다.

1870년대가 되면 이미 서구에서는 獨占資本이 성립되었고, 제국주의 열강들은 식민지 개척에 혈안이 되어 있었다. 이들은 1842년에 阿片戰爭을 기회로 中國을 개항시켰고, 1854년에는 日本을 개항시켰다. 이러한 물결은 드디어 조선에도 밀어닥쳐 1831년과 1832년의 英國 商船의 출현 및 1845년의 통상요구, 1846년 프랑스 군함의 출몰, 1865년 러시아 함선의 내박, 1866년 프랑스 함대의 강화도 점령, 1871년 美國 함대의 강화도 점령 등, 잇달은 식민주의의 전초적 공격이 가해지기 시작했다. 이러한 상황에 직면한 朝鮮政府는 이미 한걸음 앞서 외국의 침략을 받아 고통을 겪고 있었던 청국의 실정을 잘 알고 있었기 때문에, 외국의 개항요구에 응하지 않고 오히려 鎖國政策을 한층 강화시키는 방향으로 나갔다. 그러나 이러한 정책은 일시적으로 성공했으나, 世界史의 흐름 자체를 거스를 수는 없었다.

이에 반해 日本은 미국의 강압에 의해 개국을 한 다음, 1868년에 이른바 明治維新을 단행하여 봉건적인 구 막번체제를 전복시킴으로써 천황제 明治新政府를 수립하였다. 명치

정부는 발족과 동시에 대외적으로는 적극적인 서구문물과 기술도입 정책을 구사하고, 대내적으로는 1869년에 版籍奉還과 1871년의 廢藩置縣의 조치를 통해 정치적 행정적 통일을 기하고, 사회경제적으로 秩祿處分, 地租改正, 화폐금융제도의 개혁, 殖產興業政策 등의 일련의 개혁조치를 통해 급속한 근대화 및 자본주의화를 촉진하고 있었다. 그러나 명치유신 자체가 사무라이 계층이 주체가 된 위로부터의 불철저한 혁명이었다는 점과, 당시 半周邊 국가로서의 일본을 급속하게 자본주의화시키기 위해서는 국내시장이 협소하였다는 점때문에 대내적으로는 왜곡된 근대화를 추진하면서도 대외적으로 侵略主義를 추구하였다.

1875년 일본은 계획적인 雲揚號事件을 계기로, 그 이듬해인 1876년에 군함, 수송선 등의 위협하에서 우리나라와 강화도조약을 강제로 체결하였다. 이러한 불평등조약을 통해 조선을 개방시킨 일본은 청나라나 러시아는 물론, 西歐列強의 간섭을 교묘하게 배제하면서 조선에 대한 독점적인 지배력을 확립해 나갔으며, 이후에 전개된 淸日戰爭과 러일전쟁의 승리를 통해 일본제국주의의 완전한 성립을 보았던 것이다.

세계사상 유례없이 자본주의화와 帝國主義化를 동시적으로 진행시킨 일본은 러시아와의 전쟁에서의 승리를 발판으로 삼아 1904년 2월에 韓日議定書의 강제조인, 그 해 8월에 제1차 韓日協定の 강제체결을 통해 조선에 대한, 이른바 ‘保護政治’ 내지 ‘顧問政治’를 단행하였다.

그리고 1905년 11월에는 다시 제2차 한일협정을 체결하여 統監府의 설치를 통한 소위 ‘統監政治’를 실시하였다. 또한 1907년 7월에는 舊 韓國軍隊를 해체시키는 한편, 그 해 11월에는 韓日新協約의 체결을 통해 국내 인사권 및 중요행정상의 처분권마저도 일체 통감부로 귀속시켰으며, 급기야 1910년 8월에 일제에 의해 韓日合邦이 강행되기에 이르렀다. 이러한 과정을 통해 우리나라는 개항 이후 일본제국주의로부터 반식민지 내지 식민지로 전락하는 비참상을 격게 되었다. 그렇다면 개항에서부터 한일합방에 이르기까지 한국경제가 일본제국주의에 의한 식민지경제로의 강권적인 편입과정에서 대구경제는 어떠했는가?

지정학적으로 대구지방은 內陸都市였던 관계로 이 시기 釜山 등의 개항장과는 달리 상대적으로 일본제국주의 침략자의 진출이 늦은 편이었다. 기록에 따르면 대구지방에 처음으로 日本商人들이 진출한 것은 고종 30년(1893年) 9월경이다.¹⁷⁾ 즉, 부산에 와서 상업을 하던 히자쓰끼[膝付], 무로[室] 등 두명의 일본상인이 대구에 진출하여 南門內[지금의 鐘路]에 한옥을 빌려, 의약품과 잡화상을 경영하기 시작했다. 당시만 해도 대구는 외국인에게 법적으로 개방이 허용되어 있지 않았으나, 이미 법규상 개방된 釜山, 元山, 仁川 등지에서 외국상인의

17) 權寧旭, 앞의 논문, p. 86.

활약상이 상당히 활발하게 이루어지고 있었을 뿐 아니라, 조선정부의 무능력으로 말미암아 慶尙監營에서조차 일본상인의 진출을 막지 못하고 있었다.

한편 1895년 4월부터 7월까지 조선내륙의 각 도시에 대한 상업상황을 조사하고 돌아간 岡崎唯熊은 《朝鮮内地親告書》에서 다음과 같이 대구를 소개하고 있다.

“大邱는 公州와 같이 매년 春秋에 大市가 열려 8道의 상인들이 몰려온다. 거래가 성대한 것은 타 지역에 비길 데 없다. 매년 6齊의 小市도 열리는데, 東西兩門 2개소에서 開市된다. 전체적인 사정은 비슷하거니와, 대구는 인심이 험악하다. 淸日戰爭 이전까지는 일본인을 혐오해서 가끔 폭행을 가하는 일도 있었다. 지금 일본군 兵站部가 있어서 前日의 惡俗은 다시는 없다. 현재 일본인으로 대구에 점포를 가진 자는 잡화점 2戶와 兵站部 用達 1戶, 일본인 음식점 1戶가 있다. 장차 일본인이 경영할 만한 일은 적지 않다. 따라서 일본으로부터 가까운 거리의 조선 내륙에 있는 대구는 유망한 땅이라 여겨 여기에 소개한다.”¹⁸⁾

이처럼 이 당시 일본상인을 예사로 폭행하는 대구의 排日的 감정이 있었으나, 청일전쟁이 끝난 뒤부터는 새로운 시장으로서 일본상인들이 대구를 찾아오는 경우가 많아졌다. 그 후 부산의 日本領事館에서도 대구를 중시하여 1900년 11월에는 불과 10여명밖에 되지 않는 대구의 일본인을 규합해서 ‘日本人會’를 조직하고, 장차 일본상인들의 대구진출을 위한 터전을 닦아 놓았으며, 이것이 이후 일본인 居留民團의 母胎인 것이다. 그러나 아직 부산과 대구를 잇는 京釜鐵道가 부설되기 이전이라 교통이 매우 불편했기 때문에 부산의 일본상인들도 대구에 대거 진출하지는 못하였다.

한편 경부철도 공사를 계기로 대구에 이주해 온 일본상인들의 수가 급증하면서 대구는 일본인들의 새로운 시장으로 부각되었다. 1903년에 경부철도공사가 진행되고, 또한 1904년에 러일전쟁이 일어나자 1904년 2월 말에 대구의 일본인 수가 약 200여명에 불과하던 것이 4월 말에는 700~800여명으로, 그리고 같은 해 6월 말에는 약 1,000여명 이상에 달했다.¹⁹⁾

철도공사가 한창인 때에는 대구의 일본인 수가 무려 1,500여명을 헤아렸고, 공사가 끝나 철도 종사원들이 떠나간 뒤에도 800여명의 일본상인들이 남아서 상업활동을 했다. 이들에 의해 南門(지금의 염매시장 남쪽)에서부터 達城公園에 이르기까지의 도로변은 일본인의 상점으로 메워졌다.

18) 大邱商工會議所, 《大邱商工會議所 70年史》上, p. 171. 이 인용문에서 말하는 大市는 약령시를 가리키는 것이고, 小市는 西門市場을 의미한다.

19) 大邱新聞社, 《慶北要覽》, 1910, p. 18 참조.

일본인 상점과 상품의 거래가 증가함에 따라 거래화폐 역시 우리 화폐 대신에 第一銀行 발행의 일본화폐가 유통되었다. 따라서 일본 은행들의 지점과 地方金融組合이 속속 설립되었다. 이를 통해 일본인들은 그들의 상업활동의 원활을 기하는 한편, 한국인 상대의 高利貸金業을 영위하려는 목적하에서 기존에 유통되어오던 銅錢, 白銅貨 등을 대신하여 兌換金貨를 발행하였다. 또한 대구에는 1905년 1월에 제일은행 부산지점 대구출장소가 설립되었다. 그것은 곧 제일은행 경성총지점 직할출장소로 개칭되었다가 뒤이어 곧 제일은행 대구지점으로 승격되었다. 그리고 1909년 11월 20일에 韓國銀行이 설립되었고, 이것은 다시 한일합방 후 朝鮮銀行으로 개칭되었다. 또한 1906년 6월에 大邱農工銀行이 설립되었는데, 2년 후에는 진주농공은행을 병합하여 慶尙農工銀行으로 되었다가 다시 朝鮮植産銀行으로 개칭되었다. 대구지방에서의 이와 같은 금융기관의 설립은 형식적으로는 상업상의 유통질서 확립이 그 목적이었다고 할 수 있으나, 본질적으로는 金融資本의 투자를 통한 한국의 商品市場化 또는 식민지화에 그 목적을 둔 것이었다.

한편 개항 이후 대구가 부산의 商圏으로부터 벗어나 독자적인 무역거래가 가능하게 된 것은 1907년 大邱保稅貨物取扱所가 설립되어 일본에서 직접 화물을 대구에 운송하여 보세창고업무를 수행하면서부터인 것 같다. 당시 대구에서 일본으로 주로 輸出한 상품은 쌀, 보리, 콩, 잡곡, 소가죽, 소뼈 등이며, 輸入된 상품은 주로 綿布, 金布, 석유, 紡績絲, 소금, 사탕, 술, 밀가루, 일용잡화 등이었다. 이와 같은 일본상품의 유입은 특히 농촌에 침투하여 담보의 저당에 의한 외상거래를 조장하여 한국인의 농토를 탈취하는 계기가 되었다.

다음으로 韓日合邦 당시 대구에 존재하고 있던 상업단체 및 회사의 상태를 보면 다음과 같다. 먼저 1907년에 설립된 大邱商業會議所가 있어서 일본인 상공업자의 강력한 중심기관이 되었으며, 또한 穀物輸出商組合이 그 사무소를 상업회의소에 두고 10여명의 조합원을 통해 곡물거래의 範圍開拓을 획책했다. 더구나 스탠더드石油 대구조합이 있어서 판로의 확장과 폭리를 취하였으며, 日本麥酒販賣組合, 藥業組合, 醬酒販賣組合 등도 있었다. 또한 大邱海陸物産株式會社는 농산물 및 해산물의 위탁판매를 하였으며, 大邱製粉製米株式會社도 발기되었다.²⁰⁾ 이들가운데 대부분이 일본침략자들에 의한 것임은 두말할 나위가 없다.

지금까지 우리는 개항 이후부터 한일합방까지 대구경제의 동향을 주로 일본제국주의의 침략이라는 측면에서 살펴보았다. 이 시기의 大邱 戶口나 각 산업에 대한 동향, 특히 공업부문에서 民族資本의 역할이나 매뉴팩처적 공업의 실태에 대한 사료는 거의 찾아볼 수가

20) 大邱新聞社, 《慶北要覽》, 1910, pp. 19~20 참조.

없었다. 이는 단지 대구에만 국한된 것이라기 보다는 한국경제사에 있어서 공통적인 것으로 보인다. 이러한 현상 역시 일본제국주의의 강제적 침투과정이 빚어낸 반식민지화의 산물로 보아야 할 것이다.

다만 이 시기 대구경제의 특기할만한 사항으로는 일본제국주의에 의한 한국경제의 식민지경제로의 편입에 대한 저항의 일형태로서 國債報償運動이 활발하게 전개되었다는 점이다. 이는 당시 수년동안 우리나라 정부가 일본으로부터 빌린 1,300萬圓의 빚을 갚기위해 大邱財界의 명망가였던 徐相敦·金光濟 등이 斷煙會를 조직하여 國채보상금을 모집하자, 이에 호응하여 대구의 부녀자들도 자신들의 銀脂環을 아낌없이 바쳤던 이른바 脫環運動이 전개되었다. 이처럼 대구에서부터 시작된 斷煙運動과 脫環運動은 전국적으로 퍼져나가 13만 2,900餘圓의 모금이 이루어졌으나, 日帝의 집요한 탄압에 의해 결국 실패로 끝나고 말았다.

비록 소박하고 낭만적인 애국심의 차원에서 시작된 國債報償運動이 실패로 끝났음에도 불구하고, 그것이 오늘을 살아가는 대구의 경제인과 시민들에게 의미하는 것은 도덕적이고 애국적인 기업가 정신과 자긍심을 갖게하는 정신적 유산임과 동시에, 앞으로도 이와 같은 정신으로 살아가야 할 의무감을 부여한 살아있는 역사라고 할 수 있을 것이다.

Ⅲ. 日帝下の 大邱經濟

주지하는 바와 같이 1910년 8월에 일제에 의해 강행된 韓日合邦으로 말미암아 우리민족은 暗黒期를 맞게 되었다. 일제는 한국을 완전한 식민지로 지배하기 위해 朝鮮總督府를 설치하고, 자국의 이익을 위해서만 모든 정책을 실시하였다. 즉, 대표적인 예로서 1910년대에 토지수탈을 위한 土地調査事業과 한국내의 민족자본의 축적 및 민족기업의 발생을 근원적으로 억제하기 위한 會社令의 설치가 그러하고, 1920년대에 자국의 공업화에 필요한 식량의 공출을 위해 실시하였던 產米增殖計劃이라든가, 1930년에 일제의 침략전쟁의 수행을 위한 大陸前進兵站基地의 역할 속에서 강행된 軍需工業化 정책 역시 그러한 것이었다.

세계사적으로 본다면 당시 半周邊國家에 해당하는 일본으로부터 우리나라가 식민지로 편입된 결과, 한국경제는 ‘축차적인 從屬’을 당하게 되었고, 그에 따른 식민지 수탈의 정도는 세계사상 그 유례를 찾아볼 수 없을 정도로 가혹한 것이었다. 일제하의 한국경제의 수탈에 대한 전반적 상황이 이러할진대, 대구지방경제 역시 그 예외일 수는 없었을 것이다.

이하에서는 일제의 식민지 통치정책의 변천에 따라 앞에서 살펴본 바와 같이, 1) 韓日

合邦에서 3.1運動까지, 2) 3.1運動에서 滿洲事變까지, 3) 滿洲事變에서 解放까지의 소시기로 나누어서 대구지방경제의 동향을 개괄적으로나마 살펴볼 것이다.

1. 韓日合邦에서 3.1運動前까지의 大邱經濟(1910~1919)

한일합방으로 일제의 植民地政策이 본격적으로 실시된 제1기에 해당하는 이 기간 동안 대구의 産業은 파행적인 모습으로나마 양적으로는 새롭게 변모하고 있었다. 우선 이 기간 동안 대구의 농업은 米作의 개량과 각종 경제작물의 재배가 활발하게 전개되었다는 점에서 그 특징을 찾아 볼 수 있다. 이 당시 朝鮮總督府의 농업정책은 어디까지나 본국으로의 수탈을 목적으로 하여 米作의 改良·增收과 棉作·養蠶 등 공업원료를 생산하는데 중점을 두었다. 품종개량으로 미곡의 증수가 이루어짐에 따라 大邱米穀市場의 거래가 활발해졌고, 그 결과 倉庫業과 金融業의 발달을 촉진하였다. 그러나 일제의 강제로 재배가 시작된 棉作은 농민들의 호응을 얻지 못해 경북도내 생산량은 1915년에 8萬斤이던 것이 1918년에 10萬斤에 미달되는 부진한 실적으로 나타났다. 1904년에 설립된 大邱蠶業傳習所를 근대적 잠업의 효시로 하는 대구의 잠업은 1911년에 그 생산량이 101石에 불과하였으나, 1921년에는 281石으로 약 3배의 증산을 보였다.

1910년대에 대구 經濟作物의 가장 상징적인 것으로는 역시 사과재배를 들 수 있다. 1907년 정부터 경제작물로 확대보급되기 시작한 사과재배는 1910년대 말에 이르러 ‘대구능금’이라는 명성을 얻을 정도로 본궤도에 올랐다. 1919년 말 현재 경북도내 사과 株數는 약 20만 그루였으며, 그 생산량은 연간 32萬貫~45萬貫에 이르렀고, 모두 ‘대구능금’으로 반출되었다.

한편 대구에는 釜山이나 仁川, 서울보다 일본인의 이주가 상대적으로 늦어 1906년에야 소규모의 신공업이 싹트기 시작했으며, 1910년대에는 이식된 신공업과 전통적 수공업이 혼재했던 것 같다. 《大邱府史》의 기록에 따르면 1910년 말 현재 대구공장의 실태는 다음과 같이 나타나 있다.

대구에서 처음으로 등장한 공장은 1902년 3월 인교동에서 禹文日이 자본금 1,000圓으로 설립한 禹文日釀造場이다.²¹⁾ 〈表 1-2〉에서 보는 바와 같이, 1910년 말까지 대구에 소재한 25개의 공장가운데 공장주가 한국인인 경우는 7개로 전체 공장수의 28%에 불과하고, 그 대부분이 기와공장이다. 더구나 자본금으로 보면 전공장의 총자본액 23萬 5,500圓 중 4萬

21) 1943년에 발간된 《大邱府史》에 따르면, 대구의 신공장이 처음으로 설립된 것은 1906년 3월에 일본인 宮崎유키가 대구면 신동에 자본금 3,000圓으로 만든 기와 공장으로 나타나 있다.

〈表 1-2〉 1910년 大邱의 企業

명 칭	위 치	창립년월	공장주명	자본금 (圓)	종업원수	
					한국인	일본인
石井染物工場*	村上町	1908. 5	石井朱吉	100	1	2
下條鐵工所*	綿町	1907. 3	下條榮太朗	2,000	5	2
南川鐵工所*		1909. 4	南川重太朗	3,500	3	4
鐵工場*	七星町	1907. 3	崔斗星	1,800	20	—
安松製所*	本町	1907. 5	安松勘太朗	6,500	1	1
片木酒造場*	南龍岡町	1909. 11	片木海吉	2,500	3	9
禹文日釀造場*	堅町	1902. 3	禹文日	1,000	1	—
山田醬油釀造場*	東門町	1908. 8	山田菊太朗	50,000	2	1
寶城醬油釀造場*	東雲町	1909. 5	寶城齊	30,000	4	1
井上菓子店*	本町	1909. 3	井上萬之助	1,000	2	1
田中豆腐工場*	七星町	1906. 11	田中龜一朗	17,000	8	7
精米工場*	綿町	1907. 3	田中善次朗	3,000	1	1
若松商會精米部	東門町	1908. 12	若林誠助	10,000	12	1
大野精米工場	綿町	1910. 4	大野峯太朗	5,000	2	1
前園煙草製造工場	東城町	1908. 10	前園甚五衛門	60,000	350	20
大石煙草製造工場	綿町	1910. 3	大石勘吉	20,000	325	3
기와工場	大邱面 新洞	1906. 3	宮崎유끼	3,000	5	8
기와工場	〃	1906. 5	川谷德太朗	1,500	3	7
기와工場	大邱面 新川町	1910. 3	金潤聲	3,000	34	7
기와工場	〃	1910. 4	徐炳桎	800	7	1
기와工場	〃	1910. 5	鄭鎮一	2,400	8	2
기와工場	〃	1910. 6	李章洛	3,000	3	8
土器製造工場	大邱面 新岩洞	1906. 4	木下三朗	100	2	4
煉瓦工場	大邱面 新岩洞	1908. 7	杉原新吉	4,000	3	3
實業傳習所機業工場	明治町	1908. 3	古莊幹實	3,400	22	5

註：※표는 1930年版《慶北統計年報》에 나와 있는 會社임. 나머지는 《大邱府史》(1943年)에 나와 있는 會社임.
資料：《大邱市史》第2卷, pp. 237~238.

2,000圓으로서 17.8%에 지나지 않는 열악한 상황이었다.

이처럼 업종이나 규모면에서 유치한 단계에 있었던 대구의 공업은 1910년대 후반에 들어가서야 製絲工場の 설립 등으로 일정한 발달을 보게 된다. 1910년에서 1918년까지 설립이 확인된 공장이 18개에 이르고, 업종도 제사, 染織, 電氣주식회사 등 다양화되었으나, 여전히 공장주의 대부분은 일본인이었음은 두말할 나위가 없다.

다음으로 이 시기 대구의 商業을 보면 철도망의 확장과 도로의 정비에 힘입어 대구의

상권이 뻗어나가 1917~1918년을 기점으로 독자적인 大邱商圏을 형성하는 과정에 진입하였다.



〈사진 1-2〉 1920年代 大邱驛의 풍경

특히 1918년에 대구에서 포항간의 中央輕鐵이 개통되자, 이 지방의 미곡 등은 대부분 대구에 출하되어 物動量이 크게 늘어났다. 대구의 상품은 輕鐵을 통해 대량으로 공급되기 시작했으며, 이에 따라 東海岸의 각 지방은 釜山商圏에서 대구상권으로 흡수되었다. 이러한 사실은 1912년에 大邱驛의 발착화물량이 42,490톤이었으나, 1919년에는 204,749톤으로 무려 5배나 증가하였다는 사실에서도 잘 나타나고 있다. 이와 같은

대구상권의 확립에 따라 대구를 중심으로 한 慶尙北道 각 지방의 상업활동도 1910년대 말부터 활기를 띠기 시작했다.

한편 대구의 상업이 1910년대에 와서 급격히 발전한데 비례하여, 貿易도 이 시기에 활기를 띠었다. 〈表 1-3〉에서 보는 바와 같이, 1919년의 전국 무역액은 1911년에 비해 6.9배의 증가를 보여주고 있음에 반해, 같은 기간 동안 대구의 무역 증가는 무려 12.8배나 증가하였다. 물론 1910년대 대구 무역액의 전국 비중이 2%내외에 그치고 있다는 점과 전국 수준에서 나타나고 있는 엄청난 수입초과 현상이 나타나고 있음에도 불구하고 대구의 무역액이 절대적으로, 뿐만 아니라 상대적으로도 급성장한 시기는 1910년대 말로 볼 수 있다. 특히 1917년부터는 세계적인 호경기에 힘입어 대구의 무역이 도약하기 시작했으며, 1919년에는 무역액이 1,346萬 7千圓으로 1910년대와 1920년대를 통털어 최고를 기록하였다.

마지막으로, 1910년대 대구의 金融街 역시 많은 변천이 일어났다.²²⁾ 기존의 韓國銀行 대구지점은 朝鮮銀行 대구지점으로 개칭되어 조선총독부의 중앙은행 지점으로 되었다. 1912년 5월에 조선인 중심의 大邱銀行의 창립총회가 열렸으며, 같은 해 9월에는 일본인 자본가 중심의 민간은행인 鮮南銀行이 설립되었다. 또한 1914년 5월에 조선총독부는 농공은행령을 제정하여 구 한국정부의 農工銀行條例에 의해 설립된 전국의 농공은행에 대한 감독권을 장악하였다. 나아가 조선총독부는 1918년 6월에 朝鮮殖産銀行令을 공포함으로써 6개의 농

22) 日帝下 大邱의 金融動向에 관해서는 崔龍浩, 〈日帝下의 大邱金融과 大邱地方銀行〉 《大邱銀行 5年》, 1973, pp. 67~97을 참조.

〈表 1-3〉 1910年代 全國 및 大邱의 貿易趨勢 比較 (단위: 千圓)

年度	輸 (移) 出		輸 (移) 入		合 計	
	全 國	大 邱	全 國	大 邱	全 國	大 邱
1911	18,857	—	54,087	1,050	72,944	1,050(1.44)
1912	20,986	123	67,115	1,260	88,101	1,383(1.57)
1913	31,236	218	72,047	1,533	103,283	1,751(1.70)
1914	35,035	318	63,695	1,439	98,730	1,687(1.71)
1915	50,221	391	59,689	1,651	109,915	2,042(1.86)
1916	57,817	227	75,134	2,536	132,953	2,763(2.08)
1917	84,959	401	104,092	4,757	189,051	5,158(2.73)
1918	155,903	1,119	160,425	5,450	316,328	6,569(2.08)
1919	221,948	3,064	283,077	10,403	505,025	13,467(2.67)
1920	197,020	2,784	249,287	7,775	446,307	10,559(2.37)

註: ()안의 숫자는 전국 총무역액에 대한 대구 총무역액의 비중(%)임.
 資料: 《朝鮮貿易史》 및 《大邱府史》, pp. 170~171에서 재작성

공은행을 통일하여 殖産銀行으로 흡수하고, 각지의 본점은 모두 지점으로 되었다. 이것은 곧 조선총독부가 각지의 조선인 자본가들이 운영하는 농공은행을 탈취하여 그들의 의도대로 금융정책이 실시될 수 있도록 함으로써 식민지 착취를 강화하는 데 근본목적이 있었음을 의미한다.

이러한 식민지적 한계에도 불구하고 대구의 금융분야 역시 상업활동의 증가와 함께 양적으로 상당한 성장을 하고 있었다. 즉, 1919년 말 현재 大邱府내 은행(조선은행, 식산은행, 한성은행의 3지점과 대구은행, 선남은행 등 모두 5개은행)의 대출잔고는 249만 5,999圓이고, 預金殘高는 382만 9,518圓으로 나타났다. 이것은 1911년말 현재(2개은행) 실적인 대출잔고 31만 8,545圓과 예금잔고 71만 8,913圓에 비교하면 각각 7.8배와 5.3배나 늘어난 것이다.

이러한 급속한 신장추세는 은행의 숫적 증가에도 기인하지만, 商工業의 양태가 일정하게 근대화됨에 따라 은행의 이용도가 높아진 때문이라 할 수 있을 것이다.

2. 3.1 運動이후부터 滿洲事變까지의 大邱經濟(1920~1931)

1910년대가 朝鮮總督府에 의한 식민지화의 기초작업이 진행된 시기였다고 한다면, 1920년대는 일본자본주의의 모순을 식민지 조선에 전가시키고 半封建的 지주소작관계의 강화에 의한 신민지적 수탈이 본격화된 시기라고 할 수 있을 것이다. 이러한 현상은 특히 그들이

실시한 農業政策에서 적나라하게 드러나고 있다. 주지하듯이 日帝는 1910년 한일합방이 되자 1918년까지 무려 2,040여만圓의 막대한 자금을 투여하면서 이른바 ‘土地調査事業’을 치밀하게 실시함으로써 반봉건적 토지소유체계를 확립하고 식민지 통치를 위한 재정수입원을 확보하는 동시에, 막대한 국유지를 강제적으로 창출하여 ‘東洋拓殖會社’를 통해 일본인 지주를 양성하는데 성공하였다. 이와 함께 토지조사사업은 농토를 잃은 농민들을 대거 도시로 유출시켜 임금노동자를 양산하는 주요한 계기로 되었다.

그러나 3.1운동에 직면하면서부터 보다 고도의 통치전술을 구사하였다. 그것의 일환으로 일제는 1920년에 형식적으로는 “조선내의 쌀의 수요증대에 대비하고 농가경제의 향상을 도모하며, 아울러 일본의 식량문제 해결에 이바지하기 위하여”라는 명분하에 이른바, 15년 동안의 ‘산미증식계획’을 수립하였다. 조선총독부에 의해 수립된 제1차 산미증식계획은 6,300여만圓을 재정보조하여 灌漑改善(22만 5,000정보), 畚 전환(11만 2,500정보), 개간(9만정보) 등 42만 7,500정보에 증식계획을 실시하여 목표년도인 1935년에는 쌀 899만 5천석을 증수하고, 이 가운데 8백만석을 일본으로 수출한다는 것을 주요 내용으로 하고 있었다. 그리고 산미증식계획의 추진은 크게 土地改良事業과 農事改良事業으로 나누어 실시되었는데, 전자는 관개개선, 지목변경, 개간·간척사업이 포함되어 있으며, 후자에는 施肥증대, 경종법 개선 등이 포함되어 있었다.

그러나 1차 산미증식계획은 총독부의 적극적인 보조와 장려에도 불구하고 큰 성과를 거두지 못하고 1925년에 중단되었다. 한 예로서 토지개량사업을 보면, 계획기간동안 42만 7,500정보를 목표로 하였으나, 1920~1925년까지 6개년 동안의 실적은 9만정보에 불과하였다. 그러나 조선총독부는 이처럼 산미증식계획이 부진함에도 불구하고, 쌀의 대일수출은 예정대로 1920년에 220만석에서 1925년에 435만석으로 크게 증대시켰고, 그 결과 조선내의 1인당 米穀 소비량은 같은 기간동안 0.686석에서 0.587석으로 감소하였다. 일제의 이러한 미곡착취에 따라 우리나라의 농업생산구조는 米穀單作型 농업구조로 왜곡되었으며, 농가는 지주제의 강화에 의해 대부분 소작농으로 전락하기에 이르렀고, 농촌의 빈곤화로 인한 구매력의 감소는 우리나라 상공업의 성장을 저해하는 커다란 요인이 되었다. 이와 같이 전국적인 차원에서 실시된 산미증식계획의 결과는 대구에서도 유사하게 나타났다.

우선 대구에서는 토지개량사업의 일환으로 1923년에 공포된 水利事業獎勵規定 및 灌漑排水事業補助規定에 따라 특히 수리사업이 활발히 이루어졌다. 1924년에 壽城水利組合이 설립되었고, 1928년에는 東部水利組合, 解顔水利組合, 八達水利組合 등의 설립이 대표적인

예이다. 또한 1920년대 대구 경지면적과 미곡생산고를 보면 <表 1-4>와 같다.

<表 1-4> 1920年代 大邱의 耕地面積 및 米麥 生産高 (단위: 町步, 石)

區 分	쌀			보 리		
	面 積	收 穫	反 當	面 積	收 穫	反 當
1921	204.4	3,755석	1.56	331.1	6,598석	1.99
1926	215.1	3,872석	1.80	259.4	5,187석	1.99
1931	180.5	2,978석	1.55	241.0	4,495석	1.86

資料: 《大邱商工會議所 70年史》上, p. 493.

대구부내의 쌀과 보리의 재배면적이 1921년에는 각각 240.4정보와 331.1정보였으나, 1926년에는 오히려 215.1정보와 259.4정보로 감소하였다. 이와 같은 현상은 산미증식계획에도 불구하고, 大邱府域의 일부변경과 도시개발에 따른 경지의 축소에 기인하는 것으로 보인다. 그러나 산미증식계획의 일정한 영향으로 대구의 미작 경지는 오히려 감소하였음에도 불구하고, 쌀의 생산량은 반당 수확고가 일시적으로나마 1.56석에서 1.80석으로 다소 증가하였음을 보여 준다. 한편, 1905년부터 경제작물로 재배가 시작된 대구능금이 1920년대에는 일본과 만주 등 수출시장에서 큰 인기를 모아, 대구농업의 주종을 이루었다. 1920년대 초에 대구를 중심으로 경상북도 일원의 사과나무는 약 20만주에 달했으며, 생산량은 연평균 45萬貫에



<사진 1-3> 1920年代 대구능금 輸出을 위해 貨車에 적재하는 광경

이르렀다. 도내에서 생산된 사과를 대구에 있는 慶北果物同業組合(1917년 10월 창립)을 통해 ‘대구능금’이라는 이름으로 판매되었다. 그러나 대구 자체의 사과재배 면적은 도시의 발전에 따라 1920년대 말부터 점차 감소 경향을 보였다.

1920년 朝鮮會社令의 철폐를 기점으로 대구에서도 근대공업에의 일본인 자본의 진출이 본격적으로 이루어지기 시작했으며, 미약하게나마 근대기업에 대한 민족자본의 투자도 점차 이루어지게 되었다.

앞에서 보았듯이 1902년 3월에 설립된 禹文日釀造場을 효시로 시작된 신공업이 1910년대에는 주로 煙草工業이 그 주축을 이루었다고 한다면, 1920년대에는 제사공업과 정미공업이 그 주축을 이루었다. 대구에서 1920년대에 精米工業과 製絲工業이 발달하게 된 데에는 일제의 식민지 착취정책의 반영이라고 할 수 있다. 즉, 이 당시 일제의 식민지 정책은 조선을 食糧供給의 基地化와 工業原料의 生産地化하는데 중점을 두고 있었다. 대구는 입지상 미작 농업과 양잠업이 발달되어 있었기 때문에 상대적으로 정미공업과 제사공업이 일찍부터 발달하였다.

〈表 1-5〉 1920年代 大邱의 工場 趨勢

年度	工場數 (個)	資本金 (円)	従業員數(名)	生産額 (圓)
1921	126 ¹⁾	4,185,500	3,090	5,324,421
1924	170	8,012,946	5,245	19,445,717
1925	207	8,277,985	5,762	23,011,225
1926	224	7,434,663	4,875	22,305,046

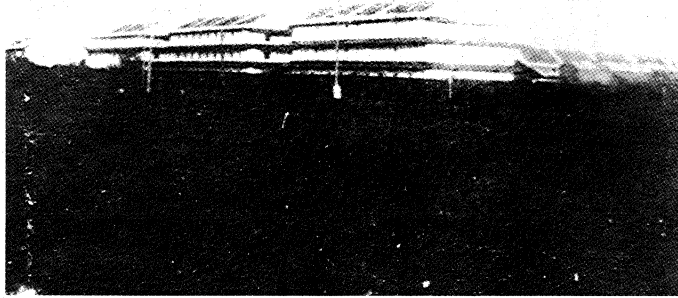
註：1) 1921년의 공장수가 《대구부사》에서는 26으로 되어 있으나, 《대구시사》에서는 1930년에 발간된 《경상북도 통계연보》의 통계를 기초로 하여 126으로 수정기록 하고 있음.

資料：大邱市, 《大邱市史》 제2권, p. 241.

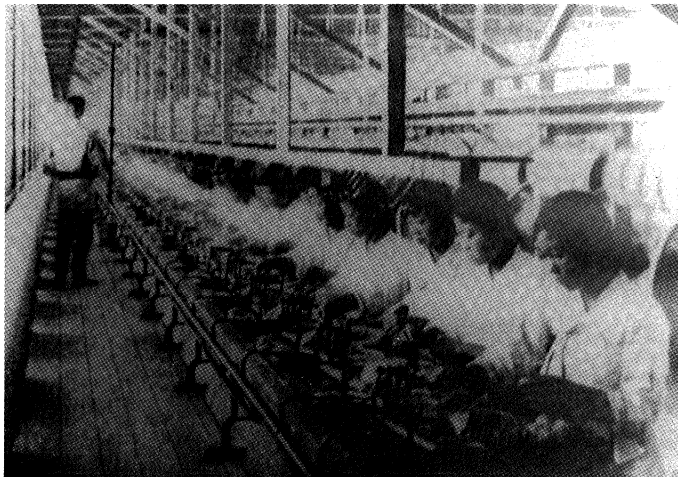
〈表 1-5〉에서 보는 바와 같이, 1921년부터 1926년까지 5년 동안 工場數에 있어서 1.8배, 従業員數에 있어서 1.6배, 生産額에 있어서 4.2배의 증가를 보여주고 있다. 또한 공장의 업종으로 보면 精米, 製絲, 煙草 등 3대공업이 전체 공산액의 81%를 차지하고 있었다. 그 가운데 精米工業은 대구 공산품 생산액의 30%를 차지하는 제1의 업종이었다. 1910년대에 대구공업의 주종을 차지하였던 煙草工業은 1920년대에도 계속해서 큰 비중을 차지하였으며, 총독부 전매국 산하의 대구 연초공장은 전국 생산량의 33%를 차지하였다.

그리고 1918~19년에 걸쳐 朝鮮生絲會社, 片倉 大邱製絲所, 山十製絲 등의 대 제사공장이 설립됨으로써 시작된 대구의 제사공업은 1920년대에 그 생산기반을 확립하여 전국 제일의 제사공업지로 부상하였다. 이 당시 제사공업이 대구공업에서 차지하는 비중은 전체 공산품 생산액의 23~30%에 이르고 있었으며, 전국 제사공업의 38%를 점하고 있었다. 이밖에도 이 당시 대구의 공업생산에서 중요한 비중을 차지하는 특수공업으로는 釀造工業, 眞鍮工業, 窯業 등을 들 수 있다.

한편 1920년대 대구의 商業部門에서 일어난 주목할 만한 변화들을 살펴보면 다음과 같다. 우선 이 시기 대구 상업계에서 일어난 가장 큰 변화로는 수백년을 두고 개장해 온 西門



〈사진 1-4〉 1918年 大邱 東仁洞에 세워진 山十製系工場

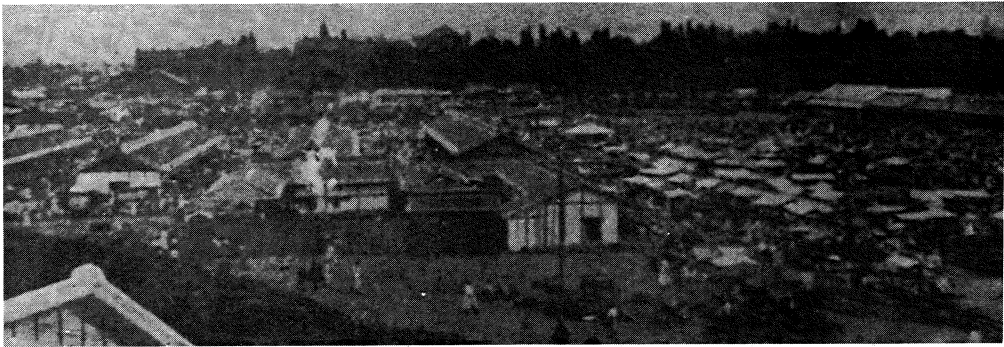


〈사진 1-5〉 1920年代 片倉製系大邱工場 조업광경

市場이 이전되어 새롭게 근대화한 시장으로 변모한 것을 들 수 있다. 서문시장은 본래 대구성곽의 서문밖 약 300m 지점의 達西川(新川の 지류) 河原 공터에서 개장되어 왔다. 京釜街道와 현풍가도의 교차점에 위치했던 서문시장은 그 면적이 4,948坪에 달하는 대시장으로 예로부터 우리나라 3대시장의 하나로 불려왔다. 그러나 1910년대에 와서 교통기관이 발달하고 상설점포가 증가함에 따라 이곳을 찾는 사람의 수가 점차 감소하는 경향을 보였다.

한일합방 후 1914년에 공포된 市場規則에 따라 서문시장은 대구부가 경영하게 되었는데, 대구부는 1923년 9월에 서남쪽에 있던 天王堂池를

매립하여 새로운 시장을 조성하여 이전하였다. 이것이 오늘날의 서문시장이다. 이를 계기로 시설의 근대화가 이루어지고 시장주변에는 常設店舖가 즐비하게 들어서게 되었고, 서문시장의 거래 역시 다시 활발하게 이루어지게 되었다. 1920년대 말엽 연간 賣上高는 일반시장의 10배에 이르는 200만圓에 이르렀다. 이러한 현상은 공업의 진전과 일용잡화의 수입증가로 인한 일반인의 소비형태가 상당히 상품시장경제에 의존하는 경향이 두드러지고 있음을 보여주는 것이다. 그리고 東門市場(현재의 염매시장) 역시 1920년대 말엽에는 거래가 활발하여 서문시장 거래액의 35%를 차지하는 연간 70만圓의 매상을 보였다. 동문시장과 관련하여 특기할만한 것으로는 과거 동문시장에서 주로 거래되었던 薪炭을 시장



〈사진 1-6〉

1920年代의 西門市場 全景

질서의 확립과 도로정리상 1929년에 분리하여 月見山 밑, 지금의 남문시장 부근으로 옮겨 신탄시장을 신설하였다는 점이다. 여기에서 대구부내 신탄수요량의 60%가 거래되었다. 또한 대구 藥令市의 거래 역시 지속적으로 증가하여 1919년에 거래액이 22만 3,700圓이던 것이 1924년에는 36만 2,000圓으로, 1926년에는 약 100만圓에 이르고 있었다.

한편 서문시장과 동문시장 같은 在來式 市場의 근대화에 의한 거래량 증가에 못지 않게 1920년대에는 상설점포의 규모도 회사형태로 대형화하여 대량판매체계를 형성하고 있었다는 점 역시 시장구조의 측면에서 주목된다. 그리고 이 시기에 상품거래관행에 커다란 변화를



〈사진 1-7〉

1920年代初 大邱東門市場(지금의 大邱염매市場)

준 것으로는 1926년에 공포된 朝鮮度量衡令에 따라 미터법이 실시되었다는 점을 들 수 있을 것이다. 다음으로 1920년대의 대구의 貿易動向을 보면 다음과 같다. 1910년대 말부터 불어닥친 세계적인 호경기를 타고 급격하게 상승하였던 수출입 경기는 1922년까지 계속되었다가 1923년부터는 세계적인 불경기로 급락하기 시작하여 1920년대 후반까지 대



〈사진 1-8〉 1920年代初의 大邱藥令市

구의 무역은 매우 부진한 실적을 보였다. 1920년대 전국 및 대구의 무역년도별 추세를 비교해 보면 〈表 1-6〉과 같다.

〈表 1-6〉에서 알 수 있듯이, 1920년대의 대구무역은 심한 逆調現狀을 보여주고 있다. 무역액은 1921년의 1,249만 9천4圓에서 1930년에는 293만 5천圓으로 1/4이하로 떨어졌다. 대구의 무역이 1923년을 고비로 급락하고 있는 것과는

달리 전국의 무역추세는 1929년까지 거의 지속적으로 증가하고 있다는 점은 주목할 필요가 있다.

〈表 1-6〉 1920年代 全國 및 大邱의 貿易年度別 趨勢 比較 (단위: 千圓)

年度	輸 (移) 出		輸 (移) 入		合 計	
	全 國	大 邱	全 國	大 邱	全 國	大 邱
1921	218,278	3,904	232,382	8,403	450,660	12,307(2.73)
1922	215,405	5,724	256,045	6,775	471,450	12,499(2.65)
1923	261,665	974	265,790	4,775	527,455	5,749(1.09)
1924	329,039	156	309,593	5,133	638,632	5,289(0.83)
1925	342,631	187	340,012	5,492	681,643	5,679(0.83)
1926	362,955	100	372,170	5,198	735,125	5,298(0.72)
1927	358,925	107	383,417	5,364	742,342	5,471(0.74)
1928	365,978	96	413,991	4,570	779,969	4,666(0.60)
1929	345,664	76	423,094	3,857	768,758	3,933(0.51)
1930	266,547	32	367,049	2,903	633,596	2,935(0.46)

註: ()안의 숫자는 전국 총무역액에 대한 대구 총무역액의 비중(%)임.

資料: 《朝鮮貿易史》 및 《大邱府史》, pp.170~171에서 재작성

이것은 곧 1920년대 대구무역의 전국비중이 1921년 2.73%에서 1930년 0.46%로 급격히 악화되어 왔다는 사실에서 더욱 잘 나타나고 있다. 이러한 현상은 식민지 조선의 무역이

80% 이상을 일본에 의존하고 있어서 貿易商의 대부분이 부산, 인천, 원산 등의 항구에 집결해 있었다는 점과 대구의 수출 대종품인 생사와 견(繭)이 1920년대초 일본의 불경기와 계속되는 세계적 불경기에 가장 큰 타격을 받았기 때문인 것으로 보인다.

마지막으로 1920년대 대구의 金融界 動向을 보면 다음과 같이 요약할 수 있다. 일제는 1920년대에 산미증식과 근대공업을 유치하기 위해 전국에 난립해 있는 은행을 합병하여 일본인 주도형으로 변질시킴으로써 자금의 정책적 투자를 용이하게 하려고 했다. 조선총독부의 이러한 금융정책에 의해 대구의 금융계 역시 1920년대 상반기에는 기존의 4개은행(朝鮮銀行 대구지점, 朝鮮殖産銀行 大邱지점, 대구은행, 전남은행)에다 漢城銀行 대구지점(1920년 2월), 慶一銀行(1920년 5월), 慶尙共立銀行(1920년 8월)의 설립 등의 활발한 움직임을 보였으나, 후반기에는 은행의 합동과 병합이 이루어졌다.

1920년도 대구부내 각 은행의 예금점유율을 보면 조선은행이 58%, 식산은행이 20%로 절대적 비중을 차지하고 있었으며, 다음이 대구은행 7.8%, 한성은행 6.4%, 전남은행 4.8%, 경상공립은행 1.6%, 경일은행 1.4%의 순으로 나타났다. 이 시기에 대구금융에 중요한 역할을 하였던 것으로는 이른바 금융조합을 들 수 있다. 대구에는 1908년에 설립된 달성금융조합과 1919년에 설립된 大邱金融組合이 있었는데, 1924년 4월과 1927년 1월에 大邱西部金融組合과 達城東部金融組合이 설립됨으로써 1920년대에는 4개의 금융조합이 대구금융의 일익을 담당하였다.

3. 滿洲事變 이후부터 解放까지의 大邱經濟(1931~1945)

식민지하 조선의 1930년대는 일반적으로 만주사변에서 中日戰爭까지의 전반기(1931~1937년)와 중일전쟁에서 해방까지의 이른바, 戰時統制經濟로 표현되는 후반기(1938~1945년)로 나누어진다. 1920년대 하반기부터 밀어닥친 세계적인 經濟恐慌은 1930년대까지 계속되어 1937년까지 심각한 경기침체현상에 빠져 있었다. 이러한 경제위기 속에서도 일본제국주의는 대륙침략을 위한 전쟁준비를 강행하였다. 특히 일제는 1931년에 만주사변을 도발하여 中國侵略 방침을 굳힘으로써 식민지하의 한국경제는 전쟁수행을 위한 軍需基地로 전락하였다. 나아가 1937년에 발발한 중일전쟁 이후가 되면 만주침략 이후 군사적으로 편성되기 시작한 우리나라 경제는 그 연장선상에서 모든 것이 일본경제에 완전히 포섭되는 전시통제경제로 재편성되었다.

이러한 군수공업화과정 속에서 식민지 통치권력과 거대한 일본 獨占資本간의 유착은 필연적인 것이었다. 식민지 통치권력은 軍需産業에 대한 독점가격을 보장해 주었고, 재정상의 각종 지원을 아끼지 않았다. 이리하여 일본의 독점자본이 대거 진출하면서 자본투자가 급증하였고, 그에 따라 군수공업화가 급속히 진행되었다. 1942년 우리나라의 산업설비에 투하된 자본은 약 30억圓 정도로 추정되는데, 그 중 일본 독점자본의 직접투자가 약 74%나 되었다. 그러나 이 시기의 공업화는 중국침략에 봉사하면서도 값싸고 풍부한 勞動力, 動力, 原料를 활용할 수 있는 공업만이 장려 육성되었으므로 극도로 파행적인 성격을 가졌다. 또한 일제말기의 노동운동과 노사관계는 노동단체 활동이 금지된 채, 지하로 잠복하여 주로 적색노동운동이 주도하면서 검거와 투옥 선풍이 불던 시대이기도 하다. 이하에서는 이와 같은 일제말기 한국경제의 전반적인 상황 속에서 대구경제의 동향은 어떠했는가를 살펴보고자 한다.

〈表 1-7〉 1934年 現在 大邱人口의 職業別 構成 (단위: %)

區 分	農林牧業	工 業	商業 및 交通	公務 및 自由業
大邱 朝鮮人	19.4	15.3	41.3	12.0
全國 朝鮮人	82.0	2.1	6.3	2.4
大邱 日本人	5.9	24.2	33.3	34.4
全國 日本人	8.3	14.8	30.2	34.0

資料: 慶北大鑑

먼저 1934년말 현재 大邱府의 총인구는 10만 7,657명이다. 이 가운데 朝鮮人は 8만 557명으로 전체인구의 74.8%를 차지하고, 日本人은 2만 6,602명으로 24.7%이며, 나머지 498명이 기타 外國人으로 구성되어 있다.²³⁾ 그리고 〈表 1-7〉은 1934년 현재 대구인구의 직업별 구성률을 나타내고 있다.

〈表 1-7〉에서 보는 바와 같이, 대구의 조선인은 전체 조선인의 직업별 구성비에 비해 農林牧業의 비중이 매우 낮음에 비해, 商工業의 비중은 절대적으로 높음을 알 수 있다. 특히 상업 및 교통부문에 종사하는 비중이 41.3%로서 대구가 商業都市임을 보여준다. 이에 비해 在邱 日本人의 직업별 구성비를 보면, 전국 일본인보다 대구 일본인이 工業에 종사하는 비중이 약 10%나 높게 나타나고 있다. 이러한 직업별 구성하에서 1930년대 대구의 산업

23) 朝鮮總督府, 《施政 二十五年史》, 부표 10항 참조.

동향은 다음과 같이 요약할 수 있다.

우선 1930년대 대구의 農業부문에서 특징적인 것은 1930년대 초까지 지속적으로 경지 면적의 축소 경향을 나타내다가, 1938년에 大邱府域의 확대에 따라 경작면적이 증대하고, 農家戶數가 오히려 증대하였다는 점이다. 1936년에 대구부내 경지 총면적이 269.1정보(논 145.8정보, 밭 123.3정보)이던 것이 1941년에는 4,556.1정보(논 2,132.1정보, 밭 2,028.9정보)로 무려 17배가까이 증가하였다. 이에 따라 대구부는 기존의 수리시설 확충 일변도의 시책으로부터 耕種法의 개선에 중점을 두는 시책으로 전환하였다. 그 결과 農業生産性의 발달을 가져왔고, 1941년 현재 대구부내 미작의 반당 수확량은 2.24석으로 당시의 최고수준에 근접하고 있었다.

그러나 이와 같은 생산성의 증대에도 불구하고, 대구의 농업은 한국농업의 일반적 현상이었던 半農奴的 영세경작이었고, 터무니 없는 高率 地代가 전면적으로 지배하고 있었으므로 全剩餘勞動量은 물론이고, 필요노동량마저 수탈당하는 반농노적 소작관계에서 벗어나지 못하고 있었다.

한편 대구의 工業은 1930년대 전반(1931~1937年)의 침체기와 후반(1938~1945年)의 상대적 회복기로 나누어 볼 수 있다. 1930년부터 중일전쟁이 일어나기까지 우리나라에 설립된 공업의 실태를 보면, 工場數는 4,249개 공장에서 5,126개 공장으로 877개의 공장이 증설되었고, 공장 勞動者數는 8만 1,790명에서 11만 3,338명으로 3만 1,548명이 증가하였으며, 공업 生産額은 2억 4,700만圓에서 4억 3,600만圓으로 1억 8,900만圓의 증가를 나타내고 있었다. 그러나 이러한 공장건설 붐(boom)은 공업임지가 좋은 북한에 치중하여 이루어짐으로써 농산물의 집산지로서 가공공업이 번성했던 대구는 상대적으로 소외되고 말았다. 따라서 <表 1-8>에서 보는 바와 같이, 이 시기 대구의 공업은 불황속에서 침체되어, 호황이 계속되었던

<表 1-8> 1930年代 전반 大邱의 職工 5人以上 工場 現況

年度	工場數(個)	從業員(名)	生産額(圓)
1926	224	4,875	22,305,046
1935	140	4,158	12,546,542
1936	173	3,788	8,227,618
1937	146	4,327	6,310,088

資料：大邱府,《大邱府勢 一斑》, 1939, p. 66. 《大邱市史》제2권, p. 245에서 재인용.

1926년경에 비하면 공장수나 종업원 수, 생산액이 크게 감소한 현상을 나타냈다. 이와 같이 대구의 공업은 1930년대 중엽까지 전국의 공업성장에도 불구하고 절대적으로는 물론 상대적으로도 침체의 늪을 벗어나지 못하고 있었다.

1937년에 일단 최악의 침체를 보였던 대구의 공업은 1939년 이래로 급격한 경기회복현상을 보이게 되었다. 이러한 현상은 이미 앞에서 살펴보았듯이 1937년에 중일전쟁이 일어나면서 일본 자본주의가 準戰時經濟體制로부터 戰時經濟體制로 이행함에 따라 한국은 군수조달을 위한 兵站基地로 발전하였기 때문이며, 대구도 이에 따른 일정한 영향을 받았던 것으로 보인다.

〈表 1-9〉 1940年頃の 大邱府内 工場 狀況 (단위: 個, 名, 圓)

工場 種 類	工場 數			從 業 員 數			生 産 額		
	1939	1940	1941	1939	1940	1941	1939	1940	1941
생 사	40	37	7	2,842	2,666	1,798	5,889,781	7,761,991	7,072,640
직 물	30	53	68	515	703	1,336	1,250,016	4,851,283	4,542,199
철 공	43	41	68	1,222	1,290	1,307	1,911,669	2,123,816	2,770,797
정 미	33	13	61	531	285	399	9,561,278	3,165,700	7,470,540
내 의 제 조	20	17	16	244	441	245	425,500	508,900	380,854
식 료 품	18	1	135	478	266	939	1,564,757	230,000	6,700,845
요 업	12	8	27	192	146	322	70,000	134,445	476,316
인 쇄 제 본	11	10	18	294	385	204	1,256,896	967,502	536,759
제 재 목 재	5	6	120	56	68	597	140,000	108,560	1,762,483
고 무 제 품	3	3	8	90	99	414	181,703	192,202	921,275
화 학	3	—	27	33	—	165	87,000	—	688,694
자 동 차	1	—	—	27	—	—	52,000	—	—
기 타	35	66	372	569	1,733	2,468	2,535,900	5,402,478	5,395,796
합 계	254	255	927	7,091	8,082	10,194	24,926,503	25,447,877	38,719,198

資料: 大邱府, 《大邱府史》, 1943, p. 160.

〈表 1-9〉는 中日戰爭 후 대구에서 근대적 공업이 각 분야에서 얼마나 급속하게 성장하였는가를 보여주고 있다. 〈表 1-8〉에서 보았듯이, 1937년과 1941년의 대구공장 현황을 비교해 보면 工場數에 있어서는 146개에서 927개로 6.3배, 從業員數에 있어서는 4,327명에서 10,194명으로 2.4배, 生産額에 있어서는 631만圓에서 3,871만圓으로 6.1배의 증가를 보이고 있다. 공장별로 보면 특히 織物工業, 食料品製造業, 製材 및 木材工業 등과 같은 소비재 중심의 공업이 비약적으로 성장했음을 보여주고 있다.

또한 〈表 1-9〉는 대구에서 근대공업의 발전이 工場制 手工業에서 機械制 공업으로 옮겨가는 고전적 발전과정에서 자생한 것이 아니라, 전시장경제체제의 확립을 서두른 일본 독점자본에 의하여 폭력적으로 강행되었음을 시사해 주고 있다. 이러한 일본으로부터의 過剩資本의

이식은 土着民族資本에 의하여 경영되어온 가내수공업이 공장제수공업으로 轉化되는 것을 제약하였을 뿐만 아니라, 이미 공장제수공업까지 발달하게 된 토착자본이 근대공업으로 발전하는 길을 막아 그 발전의 맹아까지 말살하는 결과를 가져오고 말았다. 그러므로 이 시기 대구공업의 비약적인 성장은 균형적인 한국경제의 발전을 위한 기초를 형성하는 데 이바지 했다고 보다는, 도리어 대구공업이 성장할수록 그만큼 일본경제에 대한 從屬深化를 초래하는 것이었다. 그 결과 일제시대에는 사용자나 자본가는 대부분 일본인이었으므로 대구의 노동자들 역시 열악한 노동조건하에서 노사관계의 참된 위상을 찾지 못하였다. 이와 같이 일제가 남긴 소비재중심의 특화현상과 그릇된 노사관계는 오늘날까지도 대구공업의 自主的인 발전을 저해하는 커다란 요인으로 작용하고 있다고 보아야 할 것이다.²⁴⁾

다음으로 1930년대의 大邱商業의 개황을 요약하면 다음과 같다. 1930년대에 慶尙北道內에는 170여개의 在來市場이 있었고, 대구를 중심으로 36km의 반경안에는 36개의 시장이 있어서 상대적으로 밀집한 상태를 보였다. 이미 <表 1-7>의 대구인구의 직업별 구성율에서도 보았듯이, 상업이 발달함에 따라 대구의 한국인들 중에는 상업에 종사하는 사람이 날로 늘어 그 비율이 40%가 넘는 절대적 위치를 차지하고 있었다. 이처럼 1930년의 대구는 근대적 商業都市로서의 구조를 갖추고 있었음에도 불구하고, 百貨店이나 상설점포의 거래는 일본인 중심으로 이루어졌고, 한국인은 대부분 서문시장, 동문시장, 남문시장 등의 재래시장을 중심으로 상거래를 하였다.



〈사진 1-9〉

日帝時代 中央通 일대 시가지 전경

24) 大邱市, 《大邱市史》 제2권, 1973, pp. 262~264 참조.

한편 1930년대 이들 각 시장의 거래고의 추세를 보면, <表 1-10>에서 알 수 있듯이 대구의 각종 시장 중에서 일제의 정책적 수탈품목인 미곡을 취급하는 대구미곡거래소의 거래가 월등함을 알 수 있다. 즉, 1934년의 대구미곡거래소의 거래액은 서문시장의 연간 거래액에 비해 무려 135배에 달하는 기이한 현상을 보여주고 있다. 일제의 미곡수탈정책에 일익을 담당한 기관이었던 대구미곡거래소의 거래가 활기를 띠기 시작한 것은 “第1次 世界大戰 후에 따르는 일 반경제계의 격동, 빈번하고 심각하게 내습하는 不況, 미곡업자의 왕성한 투기열, 몰락의 길을 치닫는 한국인 부호 및 부호들의 家産을 만회하고자 하는 몸부림 등”²⁵⁾의 사정들이 복합적으로 나타난 결과라고 할 수 있을 것이다.

한편 미곡시장을 제외하면 서문시장의 거래가 다른 시장에 비해 단연 으뜸을 차지하고 있다. 서문시장은 오늘날과 달리 이 당시에는 매월 음력 2일과 7일에 열리는 定期市로서 연간 개시일 수는 60여일이다. 이렇게 보면 每市 거래액이 30만圓이 넘는 셈이다.

<表 1-10> 1930年代 大邱 各 市場의 去來高 趨勢 (단위: 圓)

年度	西 門	東 門	南 門	藥 令	公 設	水産物	米 穀
1934	2,151,035	768,459	—	—	—	183,496	290,429,061
1935	1,842,240	662,818	—	—	—	247,041	210,518,895
1936	1,934,471	755,466	—	—	—	273,133	—
1937	2,239,049	162,111	1,126,846	575,533	155,386	333,325	—
1938	2,239,049	—	1,351,531	720,000	182,795	320,653	—
1939	—	—	—	646,574	—	—	—
1940	—	—	—	1,611,547	—	—	—

資料: 大邱商工會議所, 《大邱商工會議所 70年史》상, p. 548.

다음으로 1930년대의 전국 및 대구무역의 동향을 비교해 보면 다음과 같다.

<表 1-11>에 나타나 있듯이, 1930년대 초까지 우리나라의 무역은 大恐慌으로 말미암아 일본경제가 심각한 불황에 빠짐에 따라 침체에서 벗어나지 못했다. 1928년 이후 감소현상을 보였던 무역은 1931년에는 30%가 줄어든 53만 2,265천圓으로 떨어져 최악의 상태를 나타내었다. 또한 1930년에서 1939년까지 우리나라 入超貿易額은 무려 12억 6,121만 2천圓에 이르러 그 간의 착취적 무역이 얼마나 성행했는지를 극명하게 보여주고 있다. 그러나 1935년부터 무역액은 다시 급속한 증가를 하기 시작했고 그 규모는 10억圓이 넘었으며,

25) 앞의 책, p. 286.

〈表 1-11〉 1930年代 全國 및 大邱의 貿易 推移 (단위: 千圓)

	輸 出		輸 入		合 計	
	全 國	大 邱	全 國	大 邱	全 國	大 邱
1919	221,948	3,064	283,077	10,403	505,025	13,467(2.67)
1929	345,664	76	423,094	3,857	768,758	3,933(0.51)
1930	266,547	32	387,049	2,903	633,596	2,935(0.46)
1931	261,799	29	270,466	2,046	532,265	2,075(0.39)
1932	311,354	107	320,356	2,470	631,710	2,577(0.41)
1933	368,628	218	404,185	3,093	772,813	3,317(0.43)
1934	465,367	519	519,149	3,765	984,517	4,284(0.44)
1935	550,796	625	659,403	4,005	1,210,199	4,630(0.38)
1936	593,313	689	762,417	4,364	1,355,730	5,053(0.37)
1937	685,543	1,108	863,553	4,506	1,549,096	5,614(0.36)
1938	879,607	2,096	1,055,929	6,512	1,933,536	8,608(0.44)
1939	1,006,794	4,934	1,388,448	8,113	2,395,242	13,047(0.54)

註: ()는 전국 무역액에 대한 대구 무역액의 비중을 의미(%)함.

資料: 《朝鮮貿易史》와 《大邱府史》에 의거 재작성함.

1939년에는 무역규모가 20억圓대로 증가하였다. 이와 같은 무역증가는 恐慌에 빠져있던 세계경제의 회복에서 온 것이 아니라, 앞에서 살펴 본 바와 같이, 일본제국주의의 대륙침략정책에 따른 軍需景氣의 영향때문이었다. 따라서 군수공업기지로서 상대적으로 소외되어 있었던 대구는 무역에 있어서도 전국의 무역증가 추이를 따르지 못하고 있다. 즉, 1930년대 대구의 무역추세는 1933년부터 매우 완만한 회복세를 보이고 있음에도 불구하고, 1939년의 실적이 1,304만 7천圓으로 1919년의 실적인 1,346만 7천圓에도 미치지 못하고 있음을 알 수 있다.

마지막으로 1930년대 대구의 金融動向을 보면 다음과 같다. 1920년대 후반부터 시작된 조선총독부의 금융기관정비작업이 1930년대에 와서 銀行合併으로 본격화되었다. 이러한 가운데 대구금융계 역시 민족계은행들이 합병이라는 미명하에 하나씩 사라져 갔고, 급기야는 전국은행에 흡수당해 지점으로 전락하는 비운을 맞게 되었다. 즉 1928년에 조선총독부는 大邱銀行과 慶南銀行을 강제로 합병시켜 慶尙合同銀行을 발족하였고, 1931년에는 일본계의 朝鮮銀行에 의해 민족계의 第一銀行을 합병하여 大邱商工銀行으로 개칭하여 버렸다. 그리고 1941년에는 다시금 총독부의 은행정리시책에 따라 대구은행의 후신인 慶尙合同銀行은 漢城銀行에 흡수되고, 대구상공은행 본점 역시 朝鮮商業銀行의 대구지점으로 흡수되었다. 따라서

금융계에서 보면 1920년대가 대구 은행계의 전성기였다고 한다면, 1930년대는 그야말로 지방은행의 滅亡期였다고 해도 과언이 아닐 것이다.

한편 이 당시 은행과 쌍벽을 이룬 금융기관인 金融組合은 1930년대에도 꾸준한 성장을 보였다. 이 당시 대구부에는 大邱金融組合, 大邱西部金融組合, 達城金融組合, 그리고 大邱東部金融組合 등 4개의 도시금융조합이 있었으며, 이들 금융조합의 예금액은 7개 은행 예금액의 약 30% 정도였으나, 대출은 7%로 약한 편이었다. 그럼에도 불구하고 금융조합은 이 당시 庶民金融의 몫을 담당해 왔다는 점에서 그 의의가 자못 크다고 할 수 있을 것이다.

지금까지 한일합방에서 해방에 이르기까지 일본제국주의의 식민지경제로의 강압적인 편입과정을 대구지역 경제의 동향을 통해 개략적으로 살펴 보았다. 그 결과 큰 흐름에 있어서는 韓國經濟의 植民地經濟로의 編入과정과 맥을 같이 하고 있으면서도 식민지 후기로 올수록 그 종속의 심화정도가 전국의 평균치를 넘어서고 있음을 알 수 있었다.

일제에 의해 철저한 착취를 받아온 대구경제의 왜곡은 해방 직후 뿐만 아니라 오늘날에 이르기까지 경제구조의 질곡으로 남아 있다. 따라서 일제하에서의 대구경제는 왜곡된 近代化와 資本主義化였으며, 자주적인 근대화와 자본주의화는 해방 이후의 課題로 넘겨질 수밖에 없었다.

第3節 解放直後 및 韓國戰爭期の 大邱經濟(1945~1953)

I. 時代的 興件

1945년 8월 15일에 日本이 제2차 세계대전에서 패배, 聯合國에 항복함으로써 우리나라는 36년간의 植民統治의 굴레에서 벗어나게 되었다. 그러나 정치적 해방이 그대로 경제적 주권의 확립 내지 自立經濟의 확립을 뜻하는 것은 결코 아니었다. 光復을 타율적으로 맞은 탓으로 해방의 감격과 환희는 일순간에 그쳤고, 곧 이어 美蘇冷戰이라는 국제정세의 난기류에 휩싸여 南北分斷의 아픔을 맛보게 되었다. 뿐만 아니라 해방 이후 한국전쟁까지 美軍政(1945. 9. 11), 過度政府 수립(1947. 6. 24), 南韓만의 單獨政府 수립, 그리고 韓國戰爭으로 이어지는 험난한 정치 사회적 과정을 거치면서 자립경제의 기반구축은 고사하고 국민경제 자체가 흔들리는 위기적 상황까지 맞았다.

해방 당시 한국경제는 그 출발선상부터 일제 식민정책의 유산인 經濟基盤의 취약성과 產業構造의 불균형을 그대로 이어받게 되었으며, 국토분단이라는 비운 속에 자원과 공업시설 면에서 유리한 입장에 있었던 북쪽(북한)을 상실하게 됨으로써 그 파행적인 성격이 더욱 심화되기에 이르렀다.

해방직후의 한국경제는 ① 일본인이 경영하던 歸屬事業體와, ② 영세한 民間企業體, 그리고 ③ 美國의 經濟援助 등으로 형성된, 이른바 「三重構造」를 그 특징으로 하고 있었다.²⁶⁾ 이러한 남한의 산업구조적 취약성은 해방 후의 사회적 정치적 혼란에 더하여 심각한 물자부족상까지 빚어내어 經濟不安을 가중시켰다. 또한 수백만명에 이르는 귀환인구의 압력과 통화남발에 기인한 악성인플레이션은 물가고, 실질임금의 저하, 失業者의 만연, 그리고 기업수지의 악화를 초래해 국민경제를 파탄의 수렁으로 몰아 넣는 변혁적 위기를 자아내었다. 이러한 국민경제의 기초적 흐름은 대구경제에도 그대로 반영되어, 해방에서 1948년 8월 대한민국 정부수립까지 다음과 같은 경제사회적인 문제를 대구에 안겨 주었다.

첫째, 人口의 급격한 증가문제로, 즉 해방 전인 1944년의 대구인구는 20만 7천명이었던 것이 1946년 8월에는 26만 9천명, 1947년 11월에는 29만 3천명으로 늘어나, 해방 2년만에 약 10만명의 인구가 증가한 셈이다. 이러한 인구의 급격한 증가는 취업기회가 거의 없었던 당시에 심각한 실업문제를 일으켜 사회불안을 조성했으며, 특히 일본과 滿洲 등지에서 돌아온 同胞들의 구호문제 해결은 행정당국의 벅찬 과제가 되었다.

둘째, 食糧을 비롯한 물자부족과 高物價이다. 일제는 우리나라에서 많은 식량을 수탈해 갔는데, 특히 해방직전인 태평양전쟁 기간 동안에는 軍糧米의 확보를 위해 한국쌀의 거의 대부분을 약탈해 갔다. 해방이 되자 한국내에 적재해 두었던 일부 군량미가 시중에 풀리기는 했으나, 격증하는 식량수요에는 태부족이었다. 이러한 식량난은 전국적인 현상이었으며, 연일 식량데모가 발생했다. 해방 1년만에 대구부내 생필품의 소매물가는 평균 4배 이상 뛰었으며, 쌀값은 4.5배, 밀값은 5.2배, 대두값은 11.1배나 치솟아 민생고를 더욱 가중시키는 요인이 되었다.²⁷⁾

미군정당국은 폭등하는 물가를 안정시키는 방법으로 1946년 7월 15일부터 생필품에 대한 最高價格制를 실시하였으나, ① 최소한의 국민생활을 보장할 수 있는 물자의 확보, ② 완전한

26) 해방 후의 한국경제는 특히 미군정의 군사전략적인 대한정책에 따라 전개되지 않을 수 없었기 때문에 식민지체제 유산의 「連續性」과 「斷絶性」이라는 양면성을 띠게 되었으며, 미군정하의 한국경제의 농업, 공업, 무역 등에 관한 구체적인 내용은 다음을 참고 바람. 이명규, 《한국경제론》, 동성사, 1985, pp. 99~105.

27) 대구상공회의소, 《大邱經濟總監》, 1986, p. 52.

〈表 1-12〉 大邱市の 人口 推移(1944~1953)

年 月 日	面 積 (km ²)	家 口 數 (세대)	人 口 (人)	人口 密度 (人/km ²)
1944. 5. 1	115.64	41,840	206,638	1,786.9
1946. 8. 25	115.64	50,151	269,113	2,327.2
1947. 11.	115.64		293,835	2,540.9
1949. 5. 1	115.64		313,705	2,712.8
1950. 12. 31	115.64	51,728	269,406	2,329.7
1951. 12. 31	115.64	71,431	368,796	3,189.2
1952. 12. 31	115.64	74,807	406,966	3,519.2
1953. 12. 31	115.64	69,173	383,852	3,405.8

資料：대구시, 《대구시 상주인구조사보고서》, 1973. 및 경상북도, 《경북통계연보》, 1980.

配給網의 정비, ③ 최고가격 산출의 정확성, ④ 규격품질의 규정화, ⑤ 상인이 가지고 있는 재고량의 조사 등 그 전제조건이 따르지 못해 실패하기에 이른다. 따라서 이해 9월 19일부터 물가당국은 미국의 자유반입과 자유판매를 강력히 단속했으나, 米穀의 단경기인데다 콜레라가 만연, 단속은 오히려 식량난을 더욱 악화시키는 결과를 초래했었다.

셋째로, 左翼分者들의 파괴와 민중폭동 등에 따른 사회불안과 이로 인한 유통질서의 파괴이다. 이 기간 동안 공산주의자들은 식량위기로 불만에 가득찬 민중을 교묘히 선동하여 도처에서 난동을 일으키기도 했다.²⁸⁾ 해방 직후의 대구는 이와 같이 폭발하는 인구와 범람하는 실업자와 犯罪의 격증, 극심한 식량난과 물가고, 콜레라의 만연, 사회불안 등 이루 헤아릴 수 없는 혼란과 불안 속에 허덕임으로써 정상적인 경제활동은 거의 기대를 할 수 없는 상황이었다.

이러한 소용돌이 속에서 1948년 8월 大韓民國 정부가 수립되고, ① 國權의 완전 회복과, ② 시급한 산업건설을 양대 지주로 하는 建國 國策을 통하여 경제질서의 확립과 안정기반의 구축에 최선의 노력을 하였다. 그리고 1949년 7월 4일에 地方自治法の 실시에 따라 大邱府가 大邱市로 이름을 바뀌었으며, 이 시기 정부의 강력한 안정화 의지는 1948년 12월 10일에 체결된 「韓美經濟協定」이후의 제반조치 및 1950년 3월 4일에 발표된 「經濟安定 15原則」 등에 잘 나타나 있다.

28) 1946년 10월 1일에 일어난 '10.1폭동' 사건이 대표적이며, 이로 인해 대구부내 40여개 주요 공장의 종업원이 파업에 들어가 생산활동이 마비되고, 53명의 경찰관이 피살됨으로써 경상북도 일원의 행정·경제 등 모든 기능이 마비되었다.

이와 같이 모든 경제정세는 정부수립을 계기로 상대적인 中間安定을 나타내어, 바야흐로 이를 토대로 한 경제건설이 기대되었으나, 1950년 6월 25일의 돌발적인 한국전쟁은 이러한 기대를 물거품으로 만들어 버렸다. 그러나 대구는 30억달러의 財産被害를 낸 한국전쟁에서 타지역에 비해 상대적으로 피해가 적었으며, 전쟁으로 인한 소비재의 特殊景氣 때문에 공업도시로 크게 성장할 수 있는 계기를 맞게 되었다.

II. 美軍政下の 歸屬財産 處理狀況

미군정은 1945년 9월 25일 軍政法令 제2호를 공포하면서 전후 적산처리의 기본원칙하에서 귀속재산의 접수에 들어갔다. 이어 12월 12일에는 군정법령 제33호 「在韓國 日本人財産의 權利歸屬에 관한 件」의 공포와 함께 1946년부터 일본인 재산의 관리를 개시하였고, 1948년 7월 12일 군정법령 제210호에 따라 불하를 시작하였다. 그러나 미군정이 歸屬財産拂下 업무를 한국정부에 이관한 1948년 10월까지의 그 기간이 얼마되지 않는다고, 불하된 양도 미미한 실정이었다.

그러나 미군정기에 이미 귀속재산불하의 기본원칙이 수립되었고, 이것이 한국정부 수립 후에도 그대로 이어졌기 때문에 미군정기 귀속재산의 접수, 관리, 불하를 살펴봄으로써 일제 식민지시대 유산으로서의 파행적 工業構造와 함께 귀속재산처리가 이후 한국의 공업화과정에 끼친 영향을 보다 용이하게 이해할 수 있을 것이다.

앞에서 언급한 바와 같이 해방후 南韓의 공업은 일제 식민지의 유제로 인해 산업부문간의 관련이 단절된 기형적 구조였을 뿐만 아니라, 남북분단으로 그 기형적 측면이 더욱 악화되어 있었다. 여기에 해방이라는 정치적, 사회적 대변동이 더해져서 공업은 극도의 생산침체에 있었으며, <表 1-13>을 통하여 당시의 생산침체의 정도와 사회적 혼란을 가증시켰던 실업의 심각함을 알 수 있을 것이다.

따라서 이러한 상황 속에서 일본이 남기고 간 각종 재산중 製造業분야의 약 94%가 일본인 소유였는데, 이의 접수, 관리 및 불하는 우선 생산의 재개라는 관점에서 선결적 과제였으며, 나아가 새로운 국민경제를 건설함에 있어서 그 기본방향을 설정하는 결정적인 계기였던 것이다.

특히 미군정청은 반공체제를 구축하기 위한 自由經濟의 확립, 즉 한국의 자본주의경제의

〈表 1-13〉 解放後의 産業衰退(1944年 6月과 1946年 11月의 比較)

區 分	企 業 體 數 (개)				從 業 員 數 (명)			
	解放前	解放後	減少數	減少率	解放前	解放後	減少數	減少率
工 業	9,323	5,249	4,074	43.7%	300,520	122,159	178,361	59.4%
鑛 業	1,239	55	1,184	95.6	179,826	4,660	175,166	97.4
運輸業	1,427	259	259	97.9	80,128	10,183	69,945	87.3

註: 1) 해방전의 수는 조선총독부, 《노동기술통계 조사결과 보고》에 의한.

2) 해방후의 수는 미군정청, 《남조선산업 노무자금조사》, 《노동기술보고》에 의한.

資料: 고준석, 《한국경제사》, 동녘, 1989, p. 96.

담당자를 만들어내기 위한 조치로써 귀속재산의 불하를 추진하였던 것이다.²⁹⁾

한편 미군정기에 불하된 귀속재산의 실적은 전체 귀속재산에 비하면 아주 미미한 부분이었는데,

그 내용은 〈表 1-14〉와 같다.

〈表 1-14〉 美軍政期 歸屬財産拂下 實績 (단위: 원)

區 分	件 數	契 約 金 額
企 業 體	513	1,847,685,900
不 動 產	839	521,467,900
其 他	916	282,326,700
計	2,268	2,651,480,500

資料: 대한상공회의소, 《한국자본주의의 현상과 과제》, 1990, p.167에서 재인용

따라서 첫째, 생산의 재개라는 당면과제의 관점에서 볼 때, 미군정의 귀속재산 불하에도 불구하고 여전히 공업생산의 침체를 벗어날 수 없었던 것은 어쩌면 당연한 결과였는지도 모른다. 왜냐하면 앞서서도 살펴봤듯이, 실제로 불하된 양도 얼마되지 않았을 뿐만 아니라, 일제 식민지 유제

로서의 파행적 공업구조를 갖고 있었으며, 그러한 파행구조마저 남북으로 분단된 상황이었고, 공장을 가동시키는데 있어서도 專門技術者는 거의가 일본인들이었는데, 이들은 대부분 일본으로 귀국했기 때문이다. 그러나, 둘째, 한국이 해방 후 하나의 새로운 국민경제를 건설한다는 명제하에서 볼 때, 미군정기 귀속재산불하는 그 규모는 보잘것 없었지만, 이는 정부수립

29) 이는 소위 ‘사상이 건전하고 운영능력이 있는 선량한 연고자, 종업원’ 등에게 우선권을 부여하고 있는 불하대상자의 선정방식에서도 알 수 있으며, 결과적으로 귀속재산의 처리는 이른바 緣故主義에 입각하여 불하를 하게 되었다. 또한 매각가격이라는 것도 사실은 1945년 6월 현재의 장부가격 수준이며, 실제로 불하가격은 정부사정가격의 약 50~60% 수준 밖에 되지 않았다. 더구나 결정된 매각가격을 최고 15년까지 분할 상환하는 조건이어서 당시의 인플레이를 생각한다면 이는 대단히 낮은 가격이었다. 또한 이는 농지개혁에서 연평균 생산량의 20%를 현물로 15년간 상환한다는 농민에 대한 조건과 비교한다면 엄청난 특혜라 할 수 있다. 이종훈, 《한국경제론》, 법문사, 1980, p. 149.

후 귀속재산 불하의 원칙을 제공하였고, 그에 따라 연고자와 미군정이 고용한 관리인에게 우선권을 부여하는 불하방침을 세움으로써 일제의 식민지청산을 하지 못한 상황에서 그대로 일제하 親日勢力과 權力寄生的 인물들이 국가자본주의의 담당자로 역사의 전면에 등장케 하는 커다란 계기를 마련해 주었다.

그리고 이후 이러한 귀속재산의 가동은 불하를 받은 이들의 성격을 반영하듯 1950년대에는 원조에 의존함으로써 자립적 국내 생산의 복구능력을 억누르는 역기능으로 작용하였다는 점을 지적하지 않을 수 없다.

1948년 8월 15일 남한만의 단독정부 수립후 정부당국은 農地改革과 함께 주요정책 중의 하나로 귀속재산을 불하하였다. 미군정이 접수한 귀속재산은 남한 總資產의 8할에 이르렀는데, 미군정기에는 아주 미미한 부분만이 불하되었다. 따라서 1948년 9월 11일 한국 정부는 「韓·美 政府間의 財政 및 財産에 관한 協定」을 미국 정부와 체결하면서 미군정이 관리하던 귀속재산을 이관받았다. 다시 1949년 12월에는 「歸屬財産處理法」이 제정되고, 다음 해인 1950년 3월 귀속재산처리법 시행령이 공포되면서 불하가 본격적으로 시작되었다.

그러나 이 법령 시행 후 얼마되지 않아 한국전쟁이 일어남으로써 휴전이 된 후인 1954년에야 본격적인 불하사업이 재개되었다고 볼 수 있다. 한편 대구지역에서의 귀속재산 불하 과정에 대해서는 자료가 미비하여 구체적인 상황은 알 길이 없다.

III. 解放後 沈滯와 韓國戰爭으로 인한 工業發展

해방당시 대구의 공업상황을 보면, 일제 때부터 주력업종이었던 製絲業, 製織業, 精米業, 鐵工所 등이 운영되고 있었다. 그러나 해방으로 인해 일제시대의 비정상적인 노사관계는 해소되었음에도 불구하고 일본자본의 철수와 남북분단에 따른 간접적 피해, 기술자의 부족, 원료확보난, 전력부족(1948년 5월 14일 북한에서 斷電) 등의 여러 요인이 겹쳐져 전체 공장의 35%정도만이 가동되는 부진상을 보였다. 1946년 11월 말 현재 대구 시내의 工場數는 〈表 1-15〉에서 보듯이, 총 288개로 1941년의 927개에 비해 무려 70%나 줄어들었으며, 從業員數도 7천여명으로 30%나 감소했다. 이것은 직물업을 제외한 모든 업종의 공장수와 종업원수가 크게 감소한 것이다.

이렇게 부진하던 대구의 공업은 1948년에 原料難이 다소 해소되면서 직물업계를 중심으로 다시 활기를 띠기 시작했으며, 三護紡織을 비롯한 신규참입도 늘어나 1950년에는 공장수가

〈表 1-15〉 業種別 業體數 및 從業員數 (1946. 11) (단위: 個, 名)

地 域 業 種	南 韓		慶 北		大 邱	
	業體數	從業員數	業體數	從業員數	業體數	從業員數
금속공업	499	8,966	90	921	37	382
기계기구공업	878	17,394	112	1,811	65	1,136
화학공업	574	19,171	66	1,274	19	694
공익사업	78	2,711	5	39	3	25
용업 및 토석업	726	9,693	113	1,065	2	151
방직공업	615	36,269	149	4,440	95	3,782
제재 및 목제품공업	584	6,502	91	990	23	194
식품공업	696	8,383	85	661	18	241
인쇄공업	233	4,540	30	415	15	338
토목건축업	175	5,598	29	571	4	40
기타공업	156	2,932	13	127	7	88
합 계	5,296	122,159	773	12,314	288	7,071

資料: 대구상공회의소, 《대구경제총감》, 1985, p. 56.에서 재인용.

1,447개, 종업원이 1만 4천여명으로 비약적인 성장상을 보였다. 이에 따라 織物工業에의 편향이 더욱 촉진되었음은 물론, 機械·金屬工業도 조금씩 발달하여 경공업 일변도였던 대구의 공업구조에 약간의 변화를 가져오게 되었다.

불행히도, 대구공업이 해방 전 수준을 회복하여 본격적인 발전을 기하려는 시점에서 韓國戰爭이 일어난 것이다. 그러나 한국전쟁은 대구를 국방상의 병참기지로 만들었으며, 京仁地域의 방직 공장들이 크게 파괴됨으로서 대구의 직물공업이 크게 뻗어나는 전기가 되었음은 특기할 만한 일이다.

물론 전쟁 초기에는 工場建物이 군부대에 징발 사용되는 등의 간접피해로 직물공장이나 제사공장 등 대공장들은 시설의 약 60여%가 조업이 불가능한 상태에 있기도 했다. 그러나 종전 직후인 1953년말의 공장수와 생산량, 종업원수를 보면, 戰前에 비해 비약적인 신장을 보여 한국전쟁이 대구공업발전의 중요한 계기가 되었음을 알 수 있다.

해방 후 및 한국전쟁기의 대구 공업에 관한 자료가 매우 빈약함에도 불구하고, 몇가지 자료를 토대로 하여 주요 업종별로 간략히 살펴 보고자 한다.

1. 纖維工業

해방 당시 대구의 주종공업은 역시 製絲工業이었다. 그러나 일본인들의 철수와 전력부족 및 원료확보난 등은 가동률을 크게 떨어뜨렸다. 片倉, 朝鮮, 新興(舊山十) 등 3대 제사공장의 1946년 9월 말 현재의 생산실적이 1,223관으로 전체 생산능력의 46% 정도에 그쳤으니, 군소공장의 조업상황은 이로 미루어 쉽게 짐작할 수 있을 것이다.

이러한 상황은 상당기간 지속되었다. 1948년 상반기 현재 大邱府內 7개 제사공장의 설비시설 중 가동된 것은 약 43%에 지나지 않았으며, 이 때 생산된 生絲는 대부분 국내 직조용으로 소비되었고, 1948년에는 일부가 試驗輸出되는 단계에 머물렀다.

大邱市內 綿紡績設備 狀況 (단위: 鍾)

〈表 1-16〉

區 分 年 度	國 內 總設備 (A)	大 邱 市				B/A (%)
		朝紡 大邱	三護紡織	内外紡織	計(B)	
1947	274,390	3,200	—	3,200	3,200	1.2
1948	288,256	10,000	—	10,000	10,000	3.5
1949	304,522	12,000	—	12,000	12,000	3.9
1950	94,592	14,800	4,800	19,600	19,600	20.7
1951	79,794	15,600	4,282	19,882	19,882	24.9
1952	137,797	21,661	12,976	34,637	34,637	25.1
1953	117,432	20,768	12,976	43,744	43,744	37.3

資料: 〈表 1-15〉와 같음. p. 59.

한편 綿紡工業을 보면 1940년에 세워진 일본 郡是紡績 대구공장(설립당시 1만 9,928鍾)이 해방 당시 대구의 유일한 방직공장이었다. 해방 후 이 공장 조업원들은 관리위원회를 만들어 1947년 5월 2억圓의 예산으로 일본군의 방화로 소실된 이 공장의 복구공사를 개시하여 1949년 11월 2일 朝鮮紡織 대구공장으로 이름을 바꾸었다. 1947년도의 면방적시설이 약 3,200여추에 지나지 않았으나, 꾸준한 시설확장으로 1953년에는 2만여추로 전국 2위의 공장으로 급부상했다.

또한 지역자본에 의한 최초의 방직공장은 삼호방직공장이라 할 수 있는데, 1949년에 鄭在護씨가 불하받아 이 공장을 세우고, 1950년에 4,800여추의 면방시설을 갖추었으며, 1953년 말 현재 1만 3,000여추를 보유하기에 이르렀다.

그러나 〈表 1-17〉과 같이, 한국전쟁으로 전국 면방시설 중 방적기의 약 69%인 21만 7,580추,

직기의 63%인 5,687대가 피해를 입었음에도 불구하고, 釜山의 朝鮮紡績과 대구의 삼호방직, 그리고 朝鮮紡績 대구공장만이 그 전화를 모면하였다. 당시의 군복지와 민간생활에 필요한 면사의 공급은 이들 공장이 주로 담당했다.

〈表 1-17〉 韓國戰爭 前後의 全國 纖維工業施設 比較

施 設 別		韓國戰爭 直前	韓國戰爭 直後	1953年 末
綿 紡 織	紡 績 機	316,572 鍾	98,992 鍾	157,809 鍾
	織 機	9,075 臺	3,388 臺	3,715 臺
毛 紡 織	紡 績 機	4,909	3,363	6,347
	織 機	82	62	106
綿 織	紡 績 機	23,672	16,999	27,390
	織 機	—	—	15,920
製 絲		4,328 釜	2,386	3,167

資料：〈表 1-15〉와 같음. p. 59.

한편 메리야스공장수는 1948년 10월 현재 98개이며, 불과 1년 동안에 47개 업체나 신설되었다. 이 시기에는 급증하는 衣類需要에 힘입어 被服工業이 활기를 띠었다는 점이 주목된다. 특히 한국전쟁을 계기로 메리야스공업도 일대 비약을 하게 되었다. 전란으로 기반을 잃게 된 京仁地域의 메리야스업자들은 시설의 일부를 부산이나 대구 등지로 옮기게 되었는데, 이 때가 대구 메리야스업계로서는 일대 전성기라 할 수 있다. 한국전쟁 당시 메리야스공업은 원료의 대부분을 救護綿絲에 의존하였고, 극심한 인플레이와 通貨改革 등으로 기업활동이 크게 위축되어 있었다. 그런데 1950년부터 시작된 메리야스제품 軍納은 이 지역 메리야스업계의 발전을 촉진시키는 계기가 되었다. 이 때 경상남·북도에 산재한 메리야스생산공장 중 96개 업체가 군수품생산공장으로 지정되었으며, 대구지역이 부산지역보다 훨씬 많은 납품실적을 올렸다. 그것은 대구의 賃金水準이 부산의 1/3에 지나지 않아 임찰에 유리한 고지를 차지할 수 있었기 때문인 것으로 보인다.

한편, 1954년에 발간된 《纖維年報》에 의하면 1952년 말 현재 대구지역에는 역직기 6천여 대와 手·足織機 3,932대를 보유하고 있었는데, 이는 한국전쟁전에 비해 2배난 늘어난 시설 규모이다. 그리고 1953년에 다시 역직기는 8,200대, 수·족직기는 7,019대로 크게 증가하였음을 볼 수 있다.

〈表 1-18〉

메리야스製品 軍納 實績

年 度	品 目	釜 山 地 域	大 邱 地 域	合 計
1950	綿 冬內衣	129,125 着	189,187	315,312
	綿 양 말	747,050 足	1,120,575	1,867,625
1951	綿 冬內衣	212,374 着	637,122	849,496
	綿 런 닝	269,986 枚	810,000	1,079,986
	綿 양 말	547,077 足	820,616	1,367,693
	毛 양 말	203,775 足	305,663	509,438
1952	毛 冬內衣	815,674 着	2,447,022	3,262,696
	綿 런 닝	652,552 枚	1,957,656	2,610,208
	綿 양 말	3,038,733 足	4,558,100	7,596,832
	毛 양 말	504,994 足	757,491	1,262,485

資料: 〈表 1-15〉와 같음. p. 63.

2. 機械・金屬工業

대구의 기계공업은 일제 말기에 전쟁수행을 위한 軍需品下請工場의 성격을 띠면서 어느 정도 발전하기 시작했다. 鑄物의 원료인 先鐵은 해방 전에는 주로 만주와 북한에서 반입 되었으나, 남북분단 이후에는 반입이 전면 중단되면서 원료난이 극심하였다.

1947년 말 현재 대구부내 철공업관계 공장으로는 農器具 등 기계공장이 58개, 製車(우마차 및 짐수레)工場이 7개, 유기공장이 12개가 있었다. 그런데 이들의 생산실적을 보면 식기류나 양풍, 세면기, 화로 등 각종 가정용기구의 생산비중이 높았고, 유기공장의 규모가 비교적 컸음을 알 수 있다. 이 유기공장들이 대구 輕金屬業界의 모체가 되었다.

機械業界에서는 대구의 배후지역인 농촌을 대상으로 한 가마솥, 정미기, 발동기, 가마니기계, 탈곡기, 분무기, 새끼기계 등 農機械類를 원시상태로 공급하고 있었으며, 섬유공업을 뒷받침하는 메리야스기계, 직기, 태환기 등도 생산되고 있었다. 따라서 이때에는 철공소의 이름을 가진 영세공장이 많았으며, 기계기구의 생산보다는 기계를 수리 또는 보수하는 修理工場의 성격이 오히려 더 강했다.

한국전쟁으로 한국의 공업지대였던 경인지구의 주요 기계시설이 거의 파괴되었고, 전쟁 피해가 거의 없었던 대구가 비약적인 발전을 할 수 있는 기회를 맞게 된 것이다. 그러나 시설미비, 농촌경제의 빈곤 등이 초래한 구매력 감퇴, 원료부족, 그리고 자금난 등이 겹쳐서 그 좋은 기회를 제대로 살리지 못한 것이 이 당시의 실정이었다. 이러한 현상은 비단 대구

지역에만 국한되는 것이 아니고, 당시 한국경제의 입장에서는 기계공업이 발전할 수 있는 토대가 미약했다고 볼 수 있다.

그러나 1953년에는 해방 이후 8년만에 印刷機생산이 제 궤도에 올라 연간 200여대에 달한 것과 發動機생산이 연간 20여대에 달한 것은 발전적 현상이라고 할 수 있을 것이다. 1953년 현재 대구지역에는 85개의 기계공장에 1,333명의 종업원이 일하고 있었으며, 경금속업계에는 26개 업체에 451명의 종업원이 월 40만점의 알루미늄제품을 생산하고 있었다.

3. 其他 工業

섬유, 기계·금속공업을 제외한 기타공업은 당시 化學工業으로 분류되었는데, 인쇄, 성냥, 비누, 제분, 고무, 양조 등이 모두 여기에 속했다. 대구에 최초로 인쇄소가 등장한 것은 1907년경 남산동에 김광제가 광문당을 세운 것이 효시이며, 현재 대구 시내에서 가장 큰 慶北印刷所는 1910년에 일본인이 세운 것으로 해방 후 종업원들이 자치적으로 운영하다가 1948년에 啓聖教育財團에서 인수한 것이다.

1945년 대구 시내에 64개의 出版社와 96개의 印刷所가 있었으며, 1947년 월간 인쇄능력은 24,170連으로 약 70%의 가동율을 보였다. 한국전쟁으로 서울의 인쇄소들이 대구로 옮겨오면서 인쇄시설이 현대화되기 시작했으며, 1952년에 경북인쇄소가 읍셋인쇄시설을 갖추으로써 대구를 영남 출판문화의 중심지로 부상시키는 밑거름이 되었다.

한편 食品工業을 보면, 간장 및 된장공장은 1911년부터 일본인들이 경영해 왔으나, 해방 후에는 농가, 비농가를 막론하고 대부분 집에서 제조하였으므로 큰 발전은 없었다. 1945년 말 현재 대구 시내에 된장공장은 하나도 없었고, 간장공장이 3개소, 두부공장이 67개소, 식용유공장이 16개소, 빵공장이 87개소, 제과업이 103개소, 빙과류 공장이 96개소 있었다.

정미업은 일제시대에 비해 활기를 잃어갔으며, 공장수도 일제 때부터 줄어들어 1953년 말 현재 정부지정 도정공장 18개소를 포함하여 21개 공장밖에 없었다. 이들의 1일 도정능력은 10시간을 작업기준으로 할 때 2천석 정도였다.

製粉業에 있어서는 해방 직후 慶尚製粉 대구공장이 月平均 2천여포씩 생산하는 데 그쳤으며, 한국전쟁 이후에는 191개소의 군소공장이 난립하여 활기를 보였다. 양조장은 이병철씨가 경영하던 朝鮮釀造場을 비롯하여 여러개 공장이 성업중이었다. 사이다공장은 1개소가 있었는데, 연간 23만 4,000병정도를 생산했다는 기록이 남아있다. 비누공업은 해방직후에는 시장과 가두에 외국제가 범람하였기 때문에 크게 발전하지 못했으나, 1953년 말 현재 9개

업체가 243만개를 생산하고 있었다. 이에 비해 성냥공장은 원료부족에 허덕이면서 28개 업체가 난립하여 生産過剩現象을 빚었다.

〈表 1-19〉 大邱地域の 其他工業 現況(1953年)

區 分 業 種	事業體 (個)	生 産 品 目	生 産 量	從 業 員 數 (名)		
				男	女	計
고 무	16	訓 練 靴 고 무 靴	165,000 足 (40,000)	86	303	389
皮 革	11	製 靴	8,000 枚	157	—	157
비 누	9	비 누	2,427,000 個	129	49	178
窯 業	13	硝 子	16,000 貫			534
		陶 磁 器	68,000 個			
		金 剛 로 루	500			
		그 라 인 더	20,000			
製 紙	2	片 面 印 刷 紙 仙 華 紙	4,100 連	117	16	133
성 냥	28	성 냥	425,000 갑	299	166	465
亞 鉛 華	2	亞 鉛 華	8,000 Kg	31	8	39
刷 子	2	치 술	180,000 個	37	14	51
合 計	83					1,946

資料：〈表 1-15〉와 같음. p. 67.

한편 고무공업에서는 다른 업종에 비해 원료확보가 용이하여 생산이 활기를 띠었으며, 초기에는 고무신 생산을 주로 하다가, 한국전쟁을 전후하여 혼련화를 많이 생산하였다. 1953년 말 현재 대구 시내에 있는 기타 공업의 현황은 〈表 1-19〉과 같다.

Ⅳ. 物價高와 商去來의 萎縮

해방 후와 한국전쟁기 동안의 商業活動을 되돌아 보면, 공업부문과 마찬가지로 해방 초기에는 무정부상태에 가까운 사회적 혼란과 물가앙등에 따른 일반구매력의 감퇴 등으로 상거래활동이 매우 위축되었다가 한국전쟁을 계기로 활황을 보이게 된다. 해방과 더불어 갑자기 달라진 정치·경제·사회적 제환경은 대구의 상업에도 지대한 영향을 미쳤으며, 이때의 危機的

經濟狀況은 앞에서 잠시 언급한 바 있거니와 생산감퇴에 따른 물자난, 통화남발에 기인한 살인적인 인플레이, 사회의 혼란에 따른 유통질서의 파괴 등 갖가지 형태로 나타났다.

해방과 더불어 일본인들이 패주함에 따라 일시적으로는 군수용 일용품과 군수미가 대량적으로 쏟아져 나왔으며, 여기에 일반 소비자들의 낭비풍조로 곡물을 무작정 내다 파는 경우도 생겨나 유통물량이 크게 늘어나기도 했다. 이와 때를 같이 하여 流通經路 또한 식민지하의 강력한 통제를 벗어나게 됨으로써 곳곳에 자유시장이 난립하였다.

그러나 일본인들이 경영하던 대부분의 생산공장은 혼란기에 조업을 중단했고, 한국인이 경영하던 공장들도 원료를 구하지 못하여 문을 닫는 곳이 많이 발생했으며, 생산을 계속한 일부 공장들마저도 임금 및 원료가의 급상승으로 인한 자금난과 원료확보난 등 중첩된 애로요인으로 말미암아 가동율이 거의 30~40%선에 머물렀다. 따라서 工產品의 생산량은 급속히 감소하였고, 재고물량은 곧 바닥을 드러내었다.

시장에서는 생필품을 비롯한 일반상품들이 점차 고갈되었고, 한때 곡물류의 과다출시로 소비자들의 구매력이 감퇴됨으로써 商景氣는 전반적으로 한산하였다. 이때문에 통제품(수집물자)을 제외한 얼마되지 않는 군수물자가 경상북도 물자운영조합을 통하여 배급되었다.³⁰⁾

한편 供給物資의 격감과 더불어 일본 및 만주 등지로 부터 동포들이 대거 귀국함에 따라 대구시의 인구는 급증하였고, 물자부족현상은 더욱 가중되었다. 일자리를 구하기가 매우 어려웠던 당시에는 생존을 위한 日用勞動者, 손수레꾼, 노점상, 엿장수, 고물상 등이 대구 시내에 득실거렸다. 이들은 대개 시장에서 생계의 터전을 구했기 때문에 기존 시장들은 급속히 확장되었다.

한편 조선총독부는 해방 직후 美軍의 진주가 늦어지자, 한반도에서의 撤收資金을 마련하기 위해 엄청난 通貨濫發을 하였다. 이 때문에 1945년 7월 말 47억원이었던 통화량이 동년 8월 말에는 80억원으로, 1개월만에 무려 70%나 늘어났다. 여기에다 財政인플레이, 물자수급의 불균형이 가세되어 물가는 천정부지로 치솟았다. 여기에 덧붙여 미군정청은 1948년 1월 전기사용료를 한꺼번에 6배나 인상했고, 2월에는 鐵道요금을 50% 인상하는 등 공공요금의 현실화를 피하여 사실상의 인플레이정책을 택하였다. 이러한 상황속에서 1948년 대한민국 정부가 수립되어 물가안정화정책을 강력히 추진하게 되자 1949년에는 어느 정도 中間安定期를 맞았으며, 1950년의 한국전쟁으로 인한 전시인플레이는 해방 직후의 물가양동기를 훨씬 앞질렀다.

30) 1947년 6월 1일부터 동년 11월 15일까지 이 조합에서 취급된 물량은 大邱商工會議所, 《大邱經濟總鑑》, 1985, p. 69의 <表 3-14>를 참고 바람.

대구의 소매물가지수는 1947년을 100으로 볼 때, 휴전이 성립된 1953년에는 8,248로 약 82배의 물가상승률을 보였는데, 이는 기간 중 악성인플레이가 얼마나 격심했는가를 단적으로 보여주고 있다.

〈表 1-20〉 大邱市内 小賣物價指數 變動 推移

區 分	總 指 數	飲 食 品	衣 料 品	燃 料	雜 品
1946	59.1	71.8	35.5	37.3	31.3
1947	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1948	157.6	149.0	166.4	199.0	132.2
1949	199.6	189.6	217.8	272.0	147.3
1950	453.4	436.3	355.3	249.1	248.0
1951	2,220.5	2,290.9	1,712.5	2,987.8	1,045.2
1952	5,644.3	6,531.6	2,599.2	6,494.5	1,920.7
1953	8,248.1	8,358.6	4,462.4	12,712.2	3,133.6

資料：〈表 1-15〉와 같음. p. 70.

이러한 高物價 상황 속에서 당시의 시장상황을 보면, 해방 이듬해인 1946년 10월 칠성동에 北門市場(지금의 칠성시장)이 개설되었고, 1947년에 원대시장과 삼덕시장이 개설되어 해방 전부터 상거래의 중심지였던 서문시장과 남문시장의 기능을 보강하였다. 이들 시장은 정기시장의 틀에서 벗어나 常設市場化하였고, 일용생필품을 주로 취급하였다. 그리고 종합시장의 성격을 띠고 있던 서문시장으로 부터 牛市場기능이 분리됨으로써 그 기능이 1952년 9월 내당동으로 옮겨져 家畜市場이 되었다.

한편 일제말엽에 대구부의 대행기관역할을 하던 대구 수산물통제주식회사는 해방과 더불어 그 재산이 동결되자 그 구성원은 분산되어 위탁판매업을 하다가 大邱水産運營組合, 水産商會 등 3개 업체를 구성하여 치열한 경쟁을 벌였다. 이들 3개 업체를 통합토록 하여 1950년 1월 23일 대구시 水産市場株式會社를 발족시켰다. 1951년 6월 27일 중앙도매시장법이 제정·공포됨에 따라 이 회사는 1952년 5월 1일 중앙도매시장 수산부로 되었다. 그리고 1951년 12월 27일에 태평로에 개시되었던 靑果市場도 1952년 5월 1일부로 중앙도매시장 청과부로 명칭이 바뀌었으며, 농협중앙회가 현재 이 업무를 대행하고 있다.

그리고 전쟁중인 1952년 12월에는 國際市場(교동시장 또는 자유시장이라고도 하며, 일명 양키시장임)이 무허가로 개설되었다. 이 시장은 1950년 5월 10일 시장개설이 추진되던 중 한국전쟁이 일어나 연기되다가, 南下 避難民들이 입주하여 장사를 본격적으로 시작한 것이다.

이 시기의 北門市場은 피난민과 빈민들의 유일한 생계유지시장 내지 생활근거지로 등장하여 주로 채소, 과일 등을 취급하는 특성을 지녔고, 南門市場은 시민들의 주종 연료였던 장작, 숯 등을 취급하였다.

아무튼 한국전쟁은 대구의 商業史에서 대단히 중요한 의미를 지니고 있다. 피난민의 급증으로 인한 소비인구의 급팽창과 전쟁으로 인한 물자거래의 활발, 직물공업의 발달, 그리고 생존을 위한 상업인구의 증대로 대구의 상업은 都小賣 양기능면에서 황금기를 맞았다고 볼 수 있다.

〈表 1-21〉 大邱市内 市場現況(1953年)

業 態 別	市 場	所 在 地	設 立 日 字	規 模 (坪)
日 用 品 市 場	西 門 市 場	대 신 동	1922. 9. 28	11,957
	南 門 市 場	남 산 동	1933. 3. 21	6,438
	北 門 市 場	칠 성 동	1946. 10. 29	2,183
	國 際 市 場	동 문 동	1952. 12. 29	397
	院 垡 市 場	태 평 로	1947. 12. 20	3,145
	三 德 市 場	삼 덕 동	1947. 10. 11	766
家 畜 市 場	家 畜 市 場	내 당 동	1952. 9. 15	4,094
特 殊 市 場	水 產 市 場	대 신 동	1950. 1. 23	250
	青 果 市 場	태 평 로	1951. 12. 27	367

資料：대구시, 《市勢一覽》, 1955, pp. 143~145.

참고적으로, 이 시기의 약령시에 관하여 언급하면, 1940년 이후 일제의 강압에 의해 폐시 되었던 약령시를 되찾기 위한 부활운동이 1945년 12월에 일어나 명목적으로 개시되었으나, 사회적 混亂, 철도사정의 악화 등으로 거래는 극히 저조하였다. 해방 후 재건의 깃발을 높이 들고 열리기 시작했던 대구 약령시는 1948년의 추령시를 끝으로 다시 막을 내리고 만다.

약령시 폐쇄의 원인에 대해서는 《大邱藥令市》라는 책자를 보면, ① 미군정이 들어오면서 의료행정을 西洋醫學 일변도로 다루었다는 점, ② 남북분단으로 북부지역 약재의 두절은 물론, 실수요자인 한의사, 한약사 등의 내왕조차 끊기게 되었다는 점, ③ 대구 약령시 수요의 3할을 차지하고 있던 在日同胞들이 약재를 구입해 가지 못했다는 점, ④ 교통의 불편, ⑤ 대구의 10. 1暴動사건, 여순반란사건 등으로 인한 치안상태의 불안, ⑥ 심한 물자부족과 악성 인플레로 인한 자금난 등을 그 요인으로 들고 있다.

V. 金融動向

해방에서 休戰까지의 대구지역 금융동향을 살펴 보면, 먼저 1945년 말에 「解放記念貯蓄運動」이 대대적으로 전개되고, 사회질서가 회복됨에 따라 대구지역의 예금은 꾸준히 증가하기 시작했다. 그리고 농촌지역에서는 대지주계급이 영농을 청산하고 점차 기업방면으로 전환하려는 움직임이 농후하였으며, 토지거래에 따른 유동자금이 예금화현상으로 나타나기도 해, 해방 이후 휴전까지 대구를 비롯한 경북도내 금융의 두드러진 특징은 사상 유례없는 전국 비중을 기록하면서 명실상부한 우리나라 ‘金融의 中心地’ 역할을 담당했다는 점이다.

즉, 貨幣發行高의 증가와 높은 인플레이를 바탕으로 한 대구의 예금추세를 보면, 1946년에 전년대비 6배, 1947년에 2.5배씩이나 증가하다가, 중간안정기로 들어선 1948년부터 다소 둔화되는 경향을 나타내었다. 그러나 한국전쟁의 발발로 대구지역의 預金高는 다시 급증하여 1951년 말과 1952년말에는 각각 전국대비 9.2%, 10%의 비중을 점하게 되었다.³¹⁾ 이처럼 대구금융의 비중이 급격히 상승한 것은 아마도 다수의 금융기관이 전쟁을 피하여 대구로 피난온 영향도 있겠지만, 보다 근본적인 이유는 대구지역의 기업들이 타 지역에 비해 전쟁피해를 적게 입은 데서 찾아야 할 것이다.

〈表 1-22〉 大邱地域의 預·貸出金 推移(1945~1953) (단위: 백만원, %)

區 分	預 金		貸 出		預 貸 率	
	大邱地域	全國比重	大邱地域	全國比重	全 國	大 邱
1945	0.1	3.3	0.1	1.4	233.3	100.0
1947	1.4	5.4	4.2	11.3	142.3	300.0
1949	3.0	5.0	3.9	5.0	130.0	130.0
1951	23.0	9.2	14.6	6.5	90.7	63.5
1953	82.1	7.8	84.9	5.9	146.1	103.4

註: 1) 연도별 비교를 위해 금액단위를 圓으로 통일하였음.

資料: 조선은행, 《조선은행 조사월보》, 각 호 및 대구은행, 《대구은행 10년사》.

내무부 통계국, 《대한민국 통계연감》, 1960에 의거 작성함.

또한 대출면을 보면, 산업진흥을 위한 생산자금의 방출, 하곡자금과 춘·추자금의 방출로

31) 한국전쟁의 발발은 실물면에서 대구의 상공업활동을 크게 자극함과 동시에, 금융면에서도 대구의 비중을 크게 높여 주었다. 전시 인플레이의 영향으로 예·대출금, 어음교환고가 1940년대 말에 엄청나게 늘어났으며, 대구가 전시 병참기지의 역할을 수행하게 됨으로써 금융면의 대전국 비중도 크게 높아졌다.

1947년까지 대폭적인 증가세를 보이다가, 1948년에는 강력한 회수조치로 대출금이 줄어 들어 자금난이 가중되었다. 그러나 역시 전쟁의 발발로 절대규모액면에서 크게 증가하였으며, 전국적인 비중도 약 6%대에 이르렀다.

한편 預貸率は 대구만이 아니라, 전국적으로 「오버론」현상을 나타내, 해방 이후 한국전쟁기에 자금사정이 좋지 않았음을 나타내 주고 있다. 대구지역의 경우는 한국전쟁의 여파로 1950년에서 1952년까지는 수많은 피난민들의 예금에 힘입어 낮은 예대율을 나타냈으나, 그 외에는 역시 오버론현상을 나타내었다.

〈表 1-23〉 大邱의 어음交換高 推移 및 全國比重(1945~1953) (단위: 백만圓)

區 分	全 國		大 邱		全國 比重(%)	
	張 數	金 額	張 數	金 額	張 數	金 額
1945	35,525	14	929	1	2.6	7.1
1947	921,671	1,113	38,429	75	4.2	6.7
1949	1,603,764	4,784	80,413	265	5.0	5.5
1951	586,031	28,779	97,431	3,448	16.6	12.0
1953	1,713,166	256,429	238,785	24,460	13.9	9.5

註: 1) 연도별 비교를 위해 금액단위를 圓으로 통일하였음.

2) 1945년은 9~12월까지의 수치임.

資料: 〈表 1-15〉와 같음. p. 74.

商去來規模를 반영해 주는 어음교환액도 해방 이후 1950년까지는 금액, 장수 양면에서 일 제하의 침체기였던 1930년대 초 수준에도 크게 못미쳤다. 그 만큼 대구지역의 경제활동이 위축되어 있었다는 것을 말해 주는 것으로 볼 수 있다. 그러나 한국전쟁의 여파로 1951년 대구의 어음교환고는 전국의 12%를 차지할 만큼 급증했으며, 이러한 증가세는 전쟁후까지 계속되었다.

이로써 전쟁기간 중 纖維産業을 주축으로 한 대구지역의 상거래가 해방 후의 부진을 씻고, 다소 활발하였음을 알 수 있다.

한편, 전쟁 중인 1950년 9월 15일부터 1951년 4월 말까지 4차례에 걸친 朝鮮銀行券의 韓國銀行券으로의 교환과, 1953년 2월 15일에는 通貨改革의 단행으로 100:1로 명목절하됨과 동시에 화폐단위도 종전의 원에서 환으로 바뀌는 등의 금융적 변화를 겪었다. 이 당시 대구 시내에 있었던 은행점포(1953년 현재)를 보면, 중앙은행인 한국은행의 대구지점과 5개의 市中銀行 지점, 그리고 3개 預金取扱所가 있었던 것으로 나타나고 있다.

第4節 戰後 復興期の 大邱經濟(1954~1961)

I. 時代的 與件과 大邱 産業構造

韓國戰爭으로 시작된 1950년대의 한국경제는 휴전이 성립되면서 부터 본격적인 再建 復興段階에 접어들게 된다. 즉 엄청난 사회적 혼란과 경제적 피해를 유발했던 한국전쟁이 1953년 7월에 막을 내린 후 모든 경제정책의 초점은 戰後復舊事業 및 악성 인플레이의 수습이라는 2대 과제에 집중되었다.

특히 이 시기에는 우방 여러나라, 미국의 經濟援助(1954년에서 1961년까지 약 21억달러)에 힘입어 한국전쟁 중에 파괴되었던 생산시설을 복구함과 아울러, 전후복구를 통한 경제재건 사업이 활발하게 전개되었다.³²⁾ 그리하여 휴전 후 1958년까지 전쟁 전의 경제수준을 회복하는 과정에서 이른바 1950년대의 好景氣를 경험하기도 했다.

이 시기 경제정책면에서는 자유경제체제를 표방했음에도 불구하고, 低換率, 低金利, 低公共料金政策 등의 소위 ‘三低政策’을 추진한 결과, 자원배분면에서 비효율을 초래하기도 했다.

기업인은 창의력과 技術革新 등으로 정상적인 생산활동에는 힘쓰지 않은 채, 원조비 배정 과정에만 관심을 두었고, 또한 이승만정권은 이를 정권안보용으로 활용하게 됨으로써 특정재벌의 형성과 정치의 부패를 만연시킨 것으로 평가되고 있다. 또한 物價政策의 운영에 있어서도 1955년 단일환율제의 채택을 계기로 가격규제를 강화함으로써 가격의 이중구조를 낳기도 하였다.

한편 1958년을 전후하여 우리경제는 전후의 복구단계를 매듭짓고 표면적으로는 안정적 성장기에 들어가 인플레이를 크게 수속할 수 있게 되었다. 그러나 1959년부터 다시 景氣下降局面을 맞게 되어 경제성장은 둔화되고, 인플레이는 재연되기 시작했다. 이에 덧붙여 미국의 원조는 지속적으로 감축현상을 보이기 시작했고, 원조정책마저 종전까지의 無償에서 有償으로 전환되기에 이르러, 우리경제는 국내외적으로 큰 어려움을 겪게 되었다. 또한 1960년대 초에는 두 차례에 걸친 政治的 變革³³⁾과 그에 따른 사회적 불안, 그리고 대외적으로는 국제정세의 새로운

32) 그러나 20억달러가 넘는 미국의 경제원조는 경제자립기반의 구축에 그다지 기여하지 못하고, 다급한 소비수요를 충족켜주는 데 그침으로써 ① 외국 의존적 재정구조, ② 만성적인 국제수지의 역조, ③ 소비재 경공업위주의 산업구조를 낳게 하였다. 즉, 전후 복구에는 크게 기여하였으나, 한국경제의 기본적인 자립을 위해서는 그다지 기여하지 못했던 것으로 평가되는 측면이 있다.

33) 1960년 자유당정권의 독재정치와 영구 집권욕에 반기를 든 대구의 「2.28학생의거」에 이은 「4.19학생혁명」으로 이승만정권의 제1공화국 붕괴와, 그리고 1961년의 「5.16군사쿠데타」에 의한 민주당의 장면정권 붕괴.

조정 등으로 한국경제는 새로운 고통을 경험하는 요인이 되었다.

그러면 이 시기에 있어서 大邱經濟는 어떠하였는가? 대구는 앞에서 언급한 바와 같이, 전쟁의 피해를 상대적으로 적게 입은 지역에 속했다. 물론 인적·물적 피해가 다른 지역에 비해서는 적었으나, 이 보다는 전국 각지에서 몰려온 避難民때문에 인구의 사회적 증가가 현저하였고, 전후의 생필품 생산기지 내지 유통중심지로서의 그 기능이 더 강화되게 되었다.

물론 한국전쟁기간 중에도 인구가 많이 늘었지만, 전후 복구과정에 農村人口의 대구유입, 達城郡內 5개면의 市로의 편입(1957년 11월) 등이 복합되어 대구 인구는 <表 1-24>에서 보듯이 급팽창하였다. 즉 1953년 말 현재 39만명의 대구인구가 1956년에 50만명을 돌파하더니, 1961년에는 70만명에 육박하게 되었다. 이로써 광복 15년만에 대구인구는 3.5배로 늘어난 셈이다.

<表 1-24> 戰後 復舊期の 大邱市 人口 推移

調査基準日	面積 (km ²)	家口數(世帯)	人 口(人)	人口密度(人/km ²)
1953. 12. 31	115.64	69,173	393,852	3,405.8
1955. 12. 31	115.64	80,695	457,331	3,954.8
1957. 12. 31	463.19	101,026	609,316	1,315.4
1959. 12. 31	463.19	110,092	646,832	1,396.5
1961. 12. 31	463.19	125,240	693,127	1,496.4

資料: 대구시, 《상주인구조사보고서》, 1973. pp. 68~69.

이러한 도시화의 급진전은 값싼 노동력을 풍부하게 제공함으로써 대구의 생산여건에는 큰 플러스요인이 되기도 했지만, 就業機會가 극히 제한되어 있었던 당시로서는 높은 실업율과 板子村의 홍수, 범죄의 격증 등으로 심각한 사회문제가 되기도 했다.

<表 1-25> 大邱市の 産業別 就業構造

年 度 產 業	1954		1957		1961	
	名	%	名	%	名	%
1 次 產 業	11,375	12.2	31,056	19.7	29,888	16.0
2 次 產 業	18,033	19.3	21,042	13.4	24,470	13.2
3 次 產 業	18,640	68.5	105,242	66.9	131,946	70.8
合 計	93,324	100.0	157,340	100.0	186,304	100.0

資料: 대구상공회의소, 《대구경제총감》, 1985. p. 79에서 재인용.

이 시기의 대구의 산업구조는 통계자료의 미비 등으로 정확한 모습은 파악할 수 없으나,

다만 <表 1-25>를 통해 알 수 있는 경향으로는, ① 商業·서비스부문의 취업비중이 압도적으로 높고,³⁴⁾ ② 제조업의 취업인구는 꾸준히 늘어나고 있으나, 전체 산업에서 차지하는 비중은 공업화초기단계의 현상을 벗어나지 못하고 있으며, ③ 농림부문은 아직도 연평균 10% 이상의 비중을 나타내고 있다는 점 등이다.

II. 工業構造의 變化와 業種別 動向

한국전쟁으로 전쟁지역의 工業施設이 대구지역으로 반입됨에 따라 휴전 후 대구공업이 전국공업에서 차지하는 위치는 동란 전에 비해 상대적으로 강화되었다. 또한 경상남·북도 지역이 군수물자와 국민생활품 공급을 전담하게 되었고, 외국원조에 의한 공업시설의 건설이 늘어남에 따라 섬유공업이 급격히 발전하여, 대구는 纖維工業都市로서 확고한 기반을 굳히게 되었다. 대구가 일제하의 제사공업을 제외하면 입지상 특별히 유리한 조건이 없음에도 불구하고 왜 섬유특화도시로 발전했느냐에 대해서는 여러가지 의견이 있으나, 한국전쟁 때문이라는 것이 일반적인 견해이다.

전후복구기에 있어서 대구공업의 사정을 종합적으로 정확히 밝혀줄 자료는 너무 없는 것 같다. 1957년 3월부터 3개월간 商工部와 慶尙北道 商工課가 합동으로 5인이상 고용업체를 대상으로 조사해서 작성한 工場名簿를 토대로 계산한 것이 <表 1-26>이다. 1956년 말 현재의 공장수 및 종업원수로서는 비교적 정확한 자료라 사료된다.

이 표에 따르면, 시내에 소재하는 1,666개 공장 중 82%에 해당하는 1,368개업체가 섬유공장으로서 공장노동자 3만 3천명 중 78%인 2만 6천명이 섬유공장에서 일하고 있다. 이로 미루어 대구공업은 곧 섬유공업임을 실감할 수 있다. 그 후 공업화과정에서 섬유공업의 비중은 다소 낮아지는 추세를 보이고 있으나,³⁵⁾ 이러한 경향은 지금도 마찬가지다. 섬유공업의 내부구조를 보면, 직물공장이 673개 업체, 메리야스가 562개 업체로서 이 두개 업종이 주종을 이루고 있다.

34) 상업·서비스부문의 취업인구가 많다는 것은 도시산업구조의 고도화가 가져온 필연적 결과가 아니라, 潛在失業者群이 이 부문에 위장된 취업자로서 대량 존재하고 있었다는 점을 말해 주는 것으로 볼 수 있다.

35) 이와 같이 지역 섬유공업의 격감현상이 초래된 것은 ① 1957년 부터 원조총액의 감소와 ICA원조의 기간산업에 대한 투자전환으로 원조형 원료(면사)의 격감 및 원료조달의 애로를 가져온 점과, ② 경인지역의 시설근대화로 제품경쟁력을 상실하였던 것이며, 더우기 ③ 화섬산업 제품인 나일론이 신제품으로 등장함으로써 대중품이었던 광목·옥양목 소창지 등의 수요감퇴에 있었다. 이 외에도 ④ 생사수급통제의 실시로 양잠이 국가통제를 받게 되자 우후죽순처럼 일어났던 가내 공업형 견직공업이 몰락한 점을 들 수 있다.

第1節 總 說

섬유 다음으로는 一般機械, 金屬製品工業이 어느 정도 입지해 있으나 섬유공업에는 비교할 바가 아니다. 전후의 수요가 왕성했음에도 불구하고 섬유류를 제외한 다른 공산품의 생산이 저조했던 까닭은 생산기반의 취약과 기술부족으로 인한 생산성의 저하, 원자재의 부족, 그리고 자금난 등이 직접적인 원인이 되었다고 하겠다. 그리고 사회적으로 값싼 원조물자와 密輸品이 시장에 범람했는데다가, ICA 원조물의 공매로 수입품이 증가함에 따라, 공산품가격이 폭락하여 생산의욕이 크게 저하된 것도 중요한 요인의 하나가 된 것으로 보인다.

그러면 지역 공업의 주요 業種別 動向을 살펴 보기로 하자.

〈表 1-26〉 大邱市内 工場數 및 從業員數(1956年) (단위: 個, 名)

業 種 別	業 體 數	從 業 員 數	業體當從業員數	備 考
織 維	1,168	26,059	19.0	
織 物	384	8,370	21.8	경북직물협동조합
織 物	289	3,572	12.4	경북중소섬유공업조합
메 리 야 스	254	5,307	20.9	경북메리야스공업협회
메 리 야 스	227	2,503	11.1	경북편직공업조합
메 리 야 스	81	1,121	13.8	경북횡모직공업조합
染 色	65	1,005	15.5	
撚 絲	28	425	15.2	
製 棉	36	271	7.5	
紡 織	4	3,485	871.3	삼호, 내외, 대한, 제일
機 械	66	1,345	20.4	
輕 金 屬	30	828	27.6	
金 屬	32	549	17.2	
化 學	21	797	38.0	
비 누 냥	22	247	11.2	
성 냥	9	263	29.2	
窯 業	6	384	64.0	
工 藝	26	643	24.7	
고 무	9	900	100.0	
皮 革	8	75	9.4	
韓 紙	24	158	39.5	
製 材	21	205	9.8	
印 刷	17	258	15.2	
製 菓	25	710	28.4	
其 他	2	35	17.5	
合 計	1,666	33,456	20.1	

資料: 〈表 1-25〉와 같음. p. 80.

1. 纖維工業

1950년대는 대구섬유공업사의 관점에서 보면, 본격적인 輸入代替期로서 綿紡, 毛紡 등 「업 스트림(up-stream)」부문이 강화되는 시기이며, 素材面에서 보면 면직물(소창지, 뉴똥) 시대로 특징지을 수 있다. 반면 제사공업의 지역산업에서의 위치는 상대적으로 약화되었다. 지역 섬유공업의 주요 업종별 동향을 살펴 보기로 한다.

1) 織物工業

한국전쟁은 大邱織物業界의 양적 팽창을 촉진하는 일대 전기가 되었다. 즉, 전시와 전후에 폭발적으로 증가한 의류수요와 호경기는 직물업체에로의 신규진입을 촉진하였는데, 이 시기에는 서문시장의 布木商人들과 공장의 技術者들이 앞다투어 직물업으로 진출하였다. 다 시말해서 대구의 商業資本이 工業資本으로 전화한 시기였다고 볼 수 있다. <表 1-26>에서 보았듯이, 1956년 말 현재 대구시내에는 경북직물공업협동조합 회원이 384개 업체, 경북중소섬유공업조합 회원이 289개 업체로 모두 673개 업체가 있었다(대구시내 전공장수의 40%가 직물공장이었다). 이 밖에 경북도내에는 영주군, 상주군을 비롯한 지방 중소도시에서 1,038개의 직물공장이 있었으니, 한국전쟁 후에 직물공장이 얼마나 雨後竹筍처럼 늘어났는가를 알 수 있다. 업체평균 종업원수를 보면 직물협동조합 가입업체는 21.8명, 중소섬유공업조합 가입업체는 12.4명으로 전자와 후자 사이에는 약 2배의 격차가 있었다.

한편 이 시기의 직기는 즉답기시대에서 벗어나 일제하의 비자동직기 중 불하된 것과 국산직기가 많이 사용되었으며, 제품면에서는 소창지, 뉴똥 등이 주종을 이루다가 면방시설의 증설에 따라 주로 100% 綿織物이 생산되었다. 1954년 3월에는 일제 때부터 시행되어 오던 직물류세를 대구지역업자들이 적극적인 로비활동을 전개하여 철폐하는데 성공, 대구업체는 또 한번의 큰 호황을 맞이하였다.

아래에서는 ① 면방직의 확고한 기반 강화, ② 모방직의 화려한 등장, ③ 나일론직물을 통한 합섬시대의 개막 등으로 요약될 수 있는 대구 직물공업계의 각 부문별 동향을 요약해 보기로 한다.

(1) 綿紡織工業

휴전이 성립된 1953년 말 3대 綿紡工場의 설비는 정방기 4만4천추로서 전국 시설의 37%를 차지하여 사상최고로 높은 비중을 나타냈다. 그러나 전후 복구과정에서 타지역의 시설이 외국원조에 힘입어 급격히 늘어남에 따라 전국비중이 1955년에 18%로 떨어졌고, 1961년에는

17%로 낮아졌다. 그러나 대구의 면방공업은 이 시기에 비로소 그 뿌리를 확고히 내렸다고 볼 수 있다.

〈表 1-27〉 大邱市内 三大 紡織工場의 生産實績 (단위: 千파운드, 千碼)

年 度	綿 絲	廣 木
1953	4,400	8,480
1955	8,400	9,960
1957	11,855	13,025
1959	13,988	15,505
1961	9,367	15,508

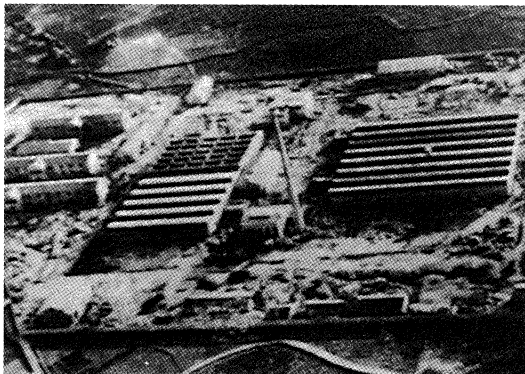
資料: 〈表 1-25〉와 같음. p. 84.

이리하여 1960년 말 현재 대구 시내 면방공장의 설비는 紡績이 86,736추, 직포가 1,418대였고, 전국시설에의 비중은 18%, 14%를 각각 차지하였다. 그런데 동년의 전국 16개 방직공장의 평균설비는 2만 9,675추에

지나지 않아 대구의 大韓紡織과 三護紡織은 전국 평균규모를 상회하고 있었다. 이 시기 대구 시내 3대 면방직공장(대한, 삼호, 내외)의 생산실적을 보면 〈表 1-27〉과 같다.

(2) 毛紡織工業

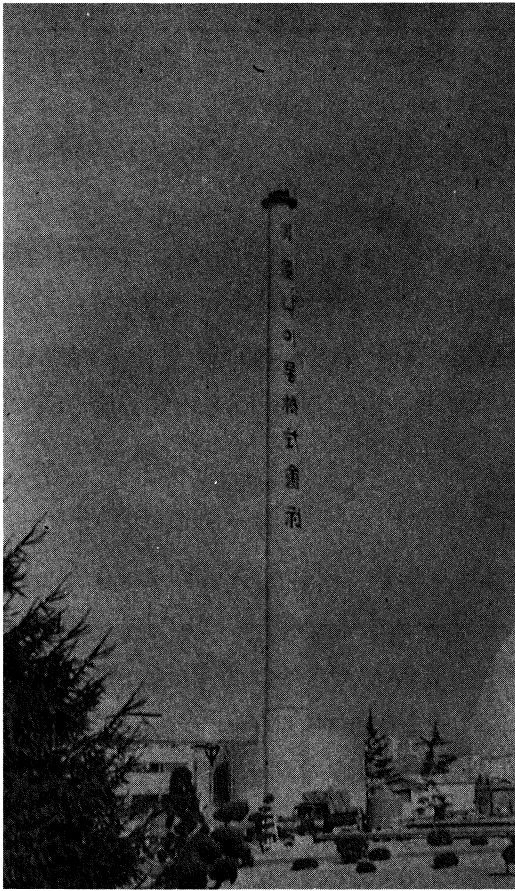
우리나라에는 1937년에 朝鮮毛織이 일본인에 의해 설립됨으로써 비로소 모방직이 시작되었으며, 한국전쟁 직전에 이미 毛紡績機 4,909추, 毛織機 82대가 있었다. 그러나 당시의 모방직공장은 모두 중고시설을 개조한 것으로서 라샤, 후란넬 등의 방모지를 제직하고 있었다. 그 당시 품질은 조악하여 모직물이라 부르기에는 부끄러울 정도였다. 한때 학생복지로



〈사진 1-10〉 1955年 第一毛織 大邱工場

유행했던 샤지나 우스체드 등의 복지를 생산하는 소모방은 전무상태였고, 외제양복지가 판을 치던 1950년대 중반에 비로소 제일모직³⁶⁾이 소모방공업에 진출하였다. 1956년 5월 2일 시운전을 거쳐 우리나라 최초의 소모사가 생산되었으며, 나아가서는 렌즈(lents)織機가 조업을 개시하여 「골덴 텍스(Golden Tex)」라는 상표명으로 소모복지가 출하됨으로써 복지의 수입대체기에 접어들었다.

36) 제일모직은 1954년 9월15일 자본금 1천만원으로 여상원을 회장, 이병철을 사장으로 하여 설립되었는데 1955년 3월에 공장건설에 착수, 1956년 3월에 직기설치를 완료하였다. 설비로는 소모방적 5천추, 방모방적 360추, 직기 50대, 염색가공시설 등이었으며, 이 당시 국내 최고 수준이었다. 제일모직, 《모직 20년사》.



〈사진 1-11〉 한국나이론 大邱工場(1957년)

이 공장은 1956년 9월에 소모방적 5천추를, 다시 1958년 12월에는 방모방 360추를 그리고 1959년에는 1월에 직기 10대를 각각 추가·증설하였다. 또한 1960년 6월에는 다시 소모방적 5천추를 증설 완료함으로써 당시 국제적정규모인 1만 5천추의 시설을 갖추게 되었다.

초기 제품의 품질은 외국제에 비해 다소 질적인 면에서 떨어졌으나, 시생산 2년만에 영국제 양복지와 대결할 수 있는 수준에 이르러, 1961년 2월에는 복지 3천 마를 UN군에 군납하고, 동년 7월에는 장미표 소모사 3천 파운드를 홍콩에 처녀수출하여 대구의 중요한 수출기업으로 등장하였다.

그러나 同社는 4.19혁명 직후인 1960년 6월 13일 극심한 勞使紛糾로 조업을 중단하는 사태를 빚었고, 5.16후에는 換率의 불안정과 원료가격의 앙등때문에 자금난 마저 겹치는데다가, 부정축재환수액을 납부하느라 큰 시련을 겪었으며, 생산실적 또한 극히 저조하였다.

(3) 나일론織物工業

1938년 美國의 듀폰社에 의해 개발된 후 나일론은 세계 섬유업체에 일대 선풍을 일으켰는데, 우리나라에서도 나일론직물이 처음 생산된 것은 1954년에 서울의 태창직물이 시제품을 내놓고부터이다. 대구에서는 1956년경부터 나일론 직물이 나타났으나 나일론 부문에서는 다소 뒤쳐진 셈이다. 1950년대에 나일론 직물이 국내에 첫선을 보이고 나서는 색다르거나 좋은 것은 모두 나일론으로 통했다. 이때문에 나일론 직물에 대한 소비자의 구매의욕은 대단했었고, 마진은 다른 직물의 3배정도에 이르렀다.

이러한 시기에 韓國나일론(코오롱의 前身)이 대구에 출현하여 合纖時代의 개막을 준비하게 된다. 우리나라에 나일론 絲가 처음으로 상륙한 것은 1953년에 일본의 三慶物産(사장 이원만)에

의해서였으며, 이때부터 나일론 직물과 나일론 양말을 짜기 시작하였다. 이때 삼경물산이 한국에 공급하고 있던 스트레치 나일론사는 카프로락탐을 원료로 하여 만든 필라멘트 나일론사를 다시 가공처리한 것이다. 따라서 필라멘트 나일론 원사를 직접 수입하여 국내에서 가공처리하는 것이 훨씬 유리하다는데 착안하여 1957년 4월 12일 대구 신천동 자본금 2억환의 韓國나일론(株)³⁷⁾이 설립된 것이다.

한국나일론은 이 단계에서 머물지 않고, 나일론 원사공장을 건설하기 위해 1958년 2월 13일 DLF(해외개발차관기금) 차관을 신청했는데, 자유당정권의 붕괴와 민주당정권으로 이어지는 정치적 혼란으로 1961년 2월에야 借款協定을 정식 조인을 할 수 있었다. 1961년 2월20일에는 미국의 켐텍스(Chemtex)사와 기술계약을 체결하고, 1962년 8월18일 日產 2.5톤의 나일론 原絲製造工場의 기공식을 가졌다.

2) 메리야스工業

1950년대에 대구의 메리야스 공업은 전국 생산량의 70%를 차지할 정도로 대호황을 누렸다. 軍納에 있어서는 물론 내수용 내의와 양말, 장갑 등의 수요가 폭발적으로 늘어났기 때문이다. 당시 직물공장은 慶北일원에 광범위하게 분포되어 있었으나, 메리야스 공장만은 대구시내에 거의 집중되어 있었다는 것이 하나의 큰 특징으로 볼 수 있다.

즉, 1956년 말 현재 대구시내에는 562개 공장이 있었는데, 대구시외의 경북지역에는 안동의 6개 공장 이외에 김천군, 영일군, 경주군에 각각 1개 공장이 있었을 뿐이다. 따라서 경상북도의 생산실적은 곧 대구의 실적과 같은 것으로 보아도 무방할 것 같다.

1953년부터 1961년까지 역내 메리야스 공장의 생산실적을 보면 <表 1-28>과 같은데, 양말의 생산은 꾸준한 성장세를 보이고 있으나, 나머지 품목은 연도별로 심한 기복현상을 나타내고 있다.

공장수는 1955년 말 444개에서 1956년에는 571개, 1957년에는 575개, 1959년에는 629개로 꾸준히 늘어났으나, 규모는 전반적으로 영세하였다. 특히 1959년도 메리야스 공업의 생산액은 모두 87억 5천만환이었는데, 이는 第一毛織 1개공장의 74억 2천만환, 3개 綿紡織工場의 80억 9천만환 수준을 겨우 웃도는 것으로 규모의 영세성을 단적으로 말해주는 것이라 하겠다.³⁸⁾

37) 이 회사는 1957년 11월 18일 스트레치 나일론 사공장의 기공식을 가졌고, 1958년 10월 18일 총건평 1,500평의 공장을 준공하였으며, ① 200추짜리 「이태리」식 연사기 55대 (11,000추), ② 권반기, ③ 합연기, ④ 인장기, ⑤ 스팀 셋트기 등 5종의 설비를 갖추고서 1959년 1월 5일 드디어 스트레치 나일론사를 생산하였다. 스트레치 나일론사는 양말용 원사로 주로 사용되었으며, 당시 생산능력은 日產 970파운드였다.

38) 대구상공회의소, 《대구경제총감》, 1985, pp. 89~90.

〈表 1-28〉 大邱地域の 메리야스工業의 生産實績

年 度	內衣 (천매)	양말 (천족)	장갑 (천쌍)	모기장 (천매)
1953	627	331	—	20
1955	1,284	420	2,653	39
1957	11,325	16,252	2,653	18
1959	9,799	15,258	3,540	—
1961	3,623	27,772	2,505	—

資料：〈表 1-25〉와 같음. p. 90.

2. 機械·金屬工業

섬유공업 다음으로 중요한 일반기계 및 금속제품공업은 한국전쟁 중에는 가동상황이 극히 저조하다가 휴전 직후부터 정상가동을 하는 업체가 늘어났다. 그러나 전후복구기를 통하여 수입이나 ICA 원조에 의한 최신식 시설의 도입은 거의 없었고, 구식 老朽施設로 운영되는 실정이었다. 따라서 1958~1961년에 이르는 1950년대 후반기에는 신규시설을 설치한 수 북지역 기계공업에 비하여 경쟁력이 월등히 떨어졌고, 이것이 지금까지도 대구 기계공업의 발전에 하나의 제약요인이 되고 있다.

1953년과 1957년 사이의 업종별 업체수의 변화를 보면, 재래식 農機械生産業體 및 輕金屬製品業體가 크게 늘어난 반면, 輸送機械과 産業機械, 그리고 金屬製品業體는 상당히 줄어들었다. 경금속제품업체가 크게 늘어난 것은 전쟁을 통해 알루미늄 신제품이 선을 보이고, 알루미늄 古鐵을 입수하기가 쉬워졌기 때문이며, 특히 조광산업, 선학알루미늄공업, 남선경 금속 등의 생산이 활발하여, 이들 3개업체가 전국시장을 거의 석권하다시피 하였다.

이처럼 대구의 非鐵金屬業은 당시 전국 원자재생산량의 1/3과 제품생산량의 2/3를 차지하여 대구를 전국 제일의 비철금속 도시로 만들었다. 이에 비하여 金屬工業은 원료사정이 오히려 악화되어 폐업한 업체가 늘어, 이 기간 중 10개업체가 줄어들었다.

一般機械工業에 있어서는 1953년 산업용 기계업체가 많았으나, 1953년에는 이들 기업이 農業用機械生産으로 전환하고 이 부문에 신규진입업체도 늘어나 4년동안에 105개 업체가 더 늘었다. 이러한 농업용기계 생산부문으로의 過剩集中이 1959년이후에는 기업도산을 초래하는 중요한 원인이 되었다. 이 시기에 가동되던 농기계공장 중, 전국철공소 (박래봉, 귀속업체), 삼남공업사(유명관, 1938년 설립), 아세아산업(김추호, 1946년 7월 설립) 등이 큰 기업에 속했는데, 아세아산업은 지금도 국내굴지의 농기계 메이커로 활약하고 있다.

〈表 1-29〉 大邱市内 機械·金屬業의 事業體 現況

區分 年度	金 屬 製 品			一 般 機 械			運 送	電 氣	計
	鑄 物	金 屬	輕金屬	農 機	織 維	產 業			
1953	8	36	30	9	5	23	17		128
1957	—	26	51	114	14	—	8	8	221

資料：대구시, 《대구기계금속공업의 실태분석과 발전방향조사보고서》, p. 32.

한편 纖維織機部門에서는 삼성제침, 명성금속공업 등 제침업이 일찍부터 발달하였고, 승리기계(1951년 3월)가 담직포기를 생산하고 있는 정도였다. 그리고 지금도 대구 기계업계의 주력업종의 하나인 輸送用部品業界는 이미 1950년대 중에 상당한 기반을 가지고 있었다. 즉 1951년에 흥아자전거공업사가 설립되어 국내시장의 60%이상을 석권함에 따라 자전거부속품생산업체가 크게 늘어났으며, 자전거부품 메이커인 삼립산업도 1954년 4월 1일에 설립되었다. 또한 대구철공소(1936년 10월설립), 대본제작소(1932년 4월설립), 평화산업사(1950년 10월설립)등이 가동되고 있었다.

그러나 전반적으로 대구의 기계공업은 규모의 영세성, 기술의 낙후성, 시설의 老朽化, 최신 도입시설 및 정밀기계의 부족, 자본부족 등으로 경인지역의 그것에 비하여 크게 낙후되어 있었다. 그리고 당시 대구 기계·금속공업의 입지상의 특징은 수창동, 대신동, 인교동, 동인동 등 중구지역에 밀집되어 있었다는 점이다.

3. 其他 工業

다음으로 化學工業으로 분류되는 기타공업을 보면, 성냥, 비누, 양초공장이 대부분이었고, 연료가 장작에서 연탄으로 대체됨에 따라 연탄공장의 수가 크게 늘어났다. 大成煉炭(사장 김수근)은 1950년대 말에 서울로 진출하여, 현재 국내 굴지의 에너지 산업체로 성장하였다.

한편 안경테공업이 이 시기에 일어나, 지금은 대구가 전국 안경테산업의 중심지가 되어 있다. 그리고 기와공장, 벽돌공장이 도시외곽에 생겨나, 전후 建築붐에 한 몫을 담당했으며, 연필공장도 몇개 있으나, 전반적으로 도시형 잡화공업의 발전은 매우 미약했던 것으로 평가된다.

III. 流通部門의 好況과 物價 仰騰

1. 市場 및 都·小賣商의 增加

1950년대 대구 商業의 특징은 섬유공업의 발달과 더불어 그 黃金期를 맞았다는 것이다. 消費人口의 격증과 더불어 전후의 소비증가는 대구의 상업을 크게 발전시키는 요인이 되었으며, 직물공업의 발달은 대구의 都賣機能을 강화시켜주는 결정적 계기가 되었다.

1961년 말 현재 시장상황을 보면, 中央都賣市場 2개, 常設市場 9개, 定期市場 2개 등 모두 13개가 있었다. 한국전쟁 후 새로 생겨난 시장을 보면, 봉덕시장(1958년 6월 30일), 영선시장(1961년 9월 29일) 등이며, 교동시장은 1956년 3월 15일에 정식허가를 받아 개시되었다. 북문시장의 장작상은 1950년대 후반부터 본격화된 19공 연탄의 보급과 山林保護政策에 따른 벌목남벌의 강력한 단속으로 차츰 쇠퇴하기 시작하여 1960년대 초기에는 완전히 자취를 감추었다.

이들 시장 중 대구상권의 중심이 되었던 시장은 말할 나위도 없이 오랜 역사를 지닌 西門市場이었다. 이 시기에 서문시장은 직물의 주산지를 배경으로 한 포목판매시장으로 전국 최대규모를 자랑하고 있었는데, 1957년도의 경우 하루 거래액만 2억원으로 추산되었다.

이는 당시 대구 시내 13개 시장의 1일 총거래고가 5억원이었으므로 무려 40%를 점하고 있는 것이다(대구일보간 경북년감 1958년). 서문시장상인은 이때 4천여명에 이르렀고, 연간거래고는 700억원을 넘었다.

또한 교동시장(국제시장, 속칭 양키 시장)의 등장도 1950년 대구 시장사에 오래도록 기록될 것이다. 이 일대는 敵産건물이 많은 지역으로 한국전쟁 당시에는 피난민수용소로 활용되었던 지역이다. 이들 피난민이 주축이 된 교동시장에서는 軍用物資의 유통품과 密輸品이 주로 거래되었다. 교동시장은 대구역전의 변화가와 접해있는데다, 당시 역앞에 있던 商工獎勵館이 미군 PX로 징발, 사용되었기 때문에 미군용 물자의 유통이 많아 풍성한 외제품시장의 중심이 되었던 것이다.

한편 한국전쟁 이후 도심상가의 변화도 빠른 속도로 진전되었다. 재래시장 9개가 모두 상설시장의 기능을 했을 뿐만 아니라, 都心部에도 상설점포가 크게 늘어났다. 1961년 말 현재 대구 시내에는 都賣商이 1,469개(종업원 5,305명), 小賣商이 9,091개(종업원 1만 3,207명)가 존재하여, 총점포수가 무려 1만 560개에 종업원이 1만 8,512명에 이르렀다.

〈表 1-30〉 大邱市内 業種別 店鋪數 (단위: 개, %)

區 分	都 賣 商		小 賣 商		合 計	
	店鋪數	構成比	店鋪數	構成比	店鋪數	構成比
1960	1,510	—	4,217	—	5,727	—
1961	1,469	100.0	9,091	100.0	10,560	100.0
식 료 품	157	10.7	1,231	13.5	1,388	13.1
음 료 품	78	5.3	678	7.5	756	7.2
섬 유 원 품	41	2.8	85	0.9	126	7.2
섬 유 제 품	478	32.5	803	8.8	1,281	12.1
농 립 수 산 물	35	2.4	565	6.2	600	5.7
의 복	206	14.0	866	9.5	1,073	10.2
장 신 구	20	1.4	108	1.2	128	1.2
화 장 품	26	1.8	466	5.1	492	4.7
의 약 품	23	1.6	299	3.3	322	3.0
화 학 제 품	79	5.4	54	0.6	133	1.3
기 계 기 구	122	8.3	331	3.6	453	4.3
가 구 건 구	30	2.0	231	2.5	261	2.4
건 자 재	31	2.1	83	0.9	114	1.1
서 적	10	0.7	124	1.4	134	1.3
문 방 구	54	3.7	279	3.1	333	3.2
자 전 거	16	1.1	202	2.2	218	2.1
연 료	55	3.7	533	5.9	588	5.6
紙 類	3	0.2	114	1.3	117	1.1
각 종 상 품	4	0.3	1,394	15.3	1,398	13.2
기 타	1	0.1	645	7.1	646	6.1

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 1962.

도매상을 보면, 총 1,469개 점포 중 섬유관련 도매상 (섬유원품, 섬유제품 및 의복)이 725개로 전점포 중 49%를 차지하고 있다. 이것은 대구의 織物都賣機能이 매우 강하였음을 말해 주는 것이다. 이에 비해 소매업의 경우에는 소비도시의 성격을 반영하여 食·飲料品 및 雜貨類의 비중이 높게 나타나고 있다.

2. 都賣物價 動向

다음으로 1950년대 대구시내의 물가동향을 보면 物價指數에 의한 통계는 없고, 品目別 도매물가 추이만 남아 있는데, 이것이 〈表 1-31〉이다. 특히 1950년 6월에서 1957년 7월까지

7년간 품목별 도매물가추이를 보면, 쌀 82배, 쇠고기 72배, 설탕 32배, 광목 37배, 시멘트 75배, 판유리 30배, 세탁비누 47배, 성냥 70배, 갱지 31배라는 엄청난 폭등을 나타내고 있다. 이것들은 전쟁, 전후복구기의 물자부족으로 인한 일플레 시대를 상징하는 숫자들이다.

〈表 1-31〉 1950年代 大邱市内의 主要品目別 都賣物價 推移 (단위: 환)

品 目	單 位	1950. 6	1956. 1. 1	1957. 7. 1
쌀	斗	46	1,600	3,750
보 리 쌀	斗	26	1,590	2,100
콩	斗	28	1,320	2,100
쇠 고 기	10근	80	3,900	5,780
달 갈	100개	45	2,000	2,800
설탕	100근	650	11,800	21,000
맥 주	상자	95	5,760	8,180
광 목	필	160	6,300	6,000
옥 양 목	필	180	6,600	12,000
각 목	才	90	70	85
팜 목	평	1,000	920	1,150
시 멘 트	포	22	1,400	1,650
판 유 리	50m ²	220	6,600	6,500
무 연 탄	통	77	9,050	11,580
장 작	평	114	10,500	12,500
휘 발 유	드럼	334	10,700	12,000
세 탁 비 누	100개	150	10,000	7,000
갱 지	연	180	3,900	5,700
성 냥	상자	120	7,200	8,200

資料: 대한상공회의소, 《대구상공회의소 70년사》, 1977. p.107.

여기서 주목해야 할 사항은 판유리, 세탁비누, 갱지, 광목 등의 工產品보다도 쌀, 쇠고기 등 食料品の 등귀율이 월등히 높다는 것이다. 이것은 1960년대 이후의 物價引上構造와 현저한 대조가 된다. 이러한 현상은 식량의 자급을 기할 수 없는 농업생산구조의 취약성에 기인한 것으로, 당시 정부는 막대한 양의 外國農產物(곡물)을 도입하였으면서도 식량난을 해결하지 못해, 해마다 절량농가가 속출하였으며 ‘보릿고개’가 반복되었다. 한해 농사만 흉작이 들어도 쌀값이 폭등하고, 도시와 농촌에서는 飢餓者가 속출하는 사회여건이었던 만큼, 당시의 물가구조는 불안하기 짝이 없었던 것으로 판단된다.

IV. 金融機關의 改編과 金融活動

은행점포 정리책과 一般銀行의 민영화, 그리고 市中銀行의 자산재평가 및 韓國産業銀行, 中小企業銀行과 農業協同組合의 창립 등으로 인해 우리나라의 금융제도는 1954년에 시행된 新銀行法하에서 질서를 잡아가고 있었다. 이 시기 대구시내 금융기관은 일대 改編期를 맞는다. 은행의 점포수도 늘었지만, 은행이름이 전반적으로 개칭되고, 特殊銀行法에 따른 은행업무와 기능의 분화도 시작되었다.

먼저 신설점포를 보면, 한국흥업은행(現 한일은행)의 대구서지점(1954. 8. 1)과 朝興銀行의 대구동지점(1956. 11. 20)이 신설되었고, 貯蓄銀行(現 제일은행)의 대신동 예금취급소와 남부 예금취급소가 없어진 대신, 대구지소와 동촌지소 등이 문을 열었다. 이에 따라 1961년 말 현재 대구시내에는 14개의 은행점포가 있었다. 다음으로 은행명칭 및 기능변화를 보면, 먼저 韓國殖産銀行 대구지점이 1953년 12월에 제정된 韓國産業銀行法에 따라 1954년 4월1일에 한국산업은행 대구지점으로 되어 장기산업자금을 주로 공급하게 되었다.

한편 일제때 부터 있어왔던 大邱金融組合이 몇차례 변신을 거듭하게 된다. 즉, 1956년 5월 1일에 금융조합제도가 폐지되고 農業銀行法에 의거하여 (株)農業銀行 대구지점으로 개편되었다가, 1958년 4월 1일에는 특수농업은행법에 따라 농업은행 대구지점으로 되었다. 다시 1961년 8월1일에는 중소기업은행법에 의거하여 중소기업은행 대구지점으로 되는 등 우여곡절을 겪었다.

그리고 朝鮮信託 대구지점은 1954년 10월 1일에 한국흥업은행 대구지점이 되었다가, 1960년 1월1일에 한일은행 대구지점으로 명칭을 바꾸었다. 이 지점은 대구시 금고업무를 맡고 있었다. 또한 조선저축은행 대구지점은 1958년 12월 1일에 제일은행 대구지점으로 개칭되었다.

〈表 1-32〉 戰後 復舊期の 預金 및 貸出金 (단위: 10억원, %)

年 度	預 金			貸 出			預 貸 率		총 화폐 발행고
	全 國	大 邱	全國比	全 國	大 邱	全國比	全 國	大 邱	
1954	2.6	0.179	6.9	2.3	0.105	4.6	92.0	58.7	4.2
1955	4.6	0.304	6.6	3.8	0.197	5.2	84.4	64.8	6.2
1956	7.5	0.450	6.0	7.2	0.367	5.1	100.0	81.6	7.9
1957	8.1	0.485	6.0	10.9	0.405	3.7	134.6	83.5	9.0
1958	11.5	0.783	6.8	15.9	0.611	3.8	134.6	83.5	9.0
1959	13.7	0.798	5.8	18.3	0.839	4.6	135.6	105.1	13.2
1960	17.1	0.881	5.2	24.3	0.950	3.9	141.5	107.8	14.6
1961	24.9	1.199	4.8	32.7	2.312	7.1	129.6	192.8	18.1

註: 환화를 원화로 수정한 수치임.

資料: 경제기획원 통계조사국, 《한국통계연감》, 1968.

이상이 금융기관의 변화상이거나, 이 시기의 地域金融動向을 보면, 예·대출 공히 급격한 신장세를 나타내고 있다. 즉 대구시내 預金高는 1954년 말의 1억 7,900만원에서 1961년 말에 11억 9,900만원으로 약 7배의 증가를 나타냈으며, 貸出金 역시 1억 5백만원에서 23억 1,200만원으로, 같은 기간 중 22배라는 엄청난 신장세를 보였다. 그리고 예·대출금을 비교하면 1958년까지는 예금이 대출을 웃돌다가, 1959년부터 대출이 예금을 훨씬 상회하는 오버론현상이 빚어지고 있다. 그러나 이 시기에는 1961년을 제외하면 大邱預金의 전국비중이 대구대출금의 전국비중을 항상 앞질렀다는 점이 금융면의 한 특징이 된다.

〈表 1-33〉 戰後 復興期の 어음 交換

年 度	어 음 交 換 高 (억원)		
	全 國	大 邱	全國 比重 (%)
1954	520	54.8	10.5
1955	1,074	106.7	9.9
1956	1,879	184.0	9.7
1957	2,013	177.2	8.8
1958	2,266	190.3	8.4
1959	2,934	235.7	8.0
1960	3,967	231.5	5.8
1961	4,291	243.0	5.7

資料：한국은행, 《조사월보》, 1962.

이러한 현상은 대구시의 어음교환고면에서도 잘 반영되어 있다. 商去來活動을 반영해 주는 어음교환고의 전국비중이 1954년의 10.5%에서 1961년에는 5.7%로 무려 4.8% 포인트나 낮아졌다. 물론 이것은 한국전쟁 중에 嶺南地方으로 옮겨왔던 경제중심활동이 서울로 옮겨간 데에 주 원인이 있다.

휴전과 더불어 타지역에 産業施設이 복구되고, 외국원조에 의한 공장건설이 많이 늘어났으며, 경제활동의 중심지도 首都圈으로 옮겨감에 따라 대구의 경제적 위상은 상대적으로 약화되었다고 생각된다.

第5節 經濟開發 初期의 大邱經濟(1962~1971)

I. 高度成長과 大邱經濟

1960년대는 우리나라 경제가 만성적인 침체와 빈곤에서 탈피, 自立經濟의 기반을 다지는 전환기적 시대였으며, 또한 대외지향적 開發戰略 등과 같은 각종 제도의 개선을 통하여 지속적인 高度成長의 기틀을 마련한 개발의 연대이기도 하였다. 즉, 두 차례의 經濟開發計劃을 의욕적으로 추진함으로써 後進農業國의 탈을 벗고, 新生工業國으로 발돋움할 수 있는 기반을 닦은 뜻 깊은 연대인 것이다.

1962년부터 시작된 우리 나라의 경제개발계획은 ① 成長第一主義(선성장·후분배), ② 對外指向的 開發, ③ 不均衡成長, ④ 外延的 成長과 外債依存, ⑤ 政府主導型 등을 개발전략으로 하여 추진되면서 <表 1-34>에서 보듯이 짧은 기간 동안에 놀라운 성과를 거두었다. 즉, 제1, 2차 경제개발 5개년계획기간을 통하여 우리경제는 종전까지 4~5%의 저속성장에서 고속성장으로 궤도를 수정하게 되었고, 1962~71년까지 10년간 연평균 경제성장률 9.9%(1965년 불변 가격기준)라는 놀라운 발전을 보이면서 같은 기간 중 세계 성장률 5%를 훨씬 앞질렀다. 이에

<表 1-34> 1960年代 韓國의 經濟成長과 構造變化

區 分		單位	1962 (A)	1971 (B)	B/A (倍)
人 口		천명	26,513	32,883	1.2
國民總生產(GNP)		10억원	3,071.1	6,962.5	2.3
1人當 GNP(經常)		달러	87	278	3.2
貿易	輸 出 (通關)	백만달러	54.8	1,067.6	19.5
	輸 入 (通關)	백만달러	421.8	2,394.3	5.7
總固定資本形成		10억원	324.3	1,727.5	5.3
產 業 構 造	農林漁業	10억원	1,329.6	2,005.4	1.5
		(%)	(43.3)	(28.8)	
	鑛 工 業	10억원	340.6	1,455.3	4.3
		(%)	(11.1)	(20.9)	
構 造	SOC 및 其他	10억원	1,401.0	3,501.8	2.5
		(%)	(45.6)	(50.3)	

註: 1) 국민총생산 및 고정자본형성은 1975년 불변가격 기준임.

2) () 내는 GNP 중 구성비임.

資料: 경제기획원, 《1982년도 주요경제지표》에 의해 작성함.

따라 1인당 GNP(경상가격기준)도 1962년의 87달러에서 1966년 125달러, 그리고 1971년 287달러로 증가하였다. 이와 같은 빠른 성장에 따라 전통적인 농업위주의 産業構造가 점차 공업부문의 획기적인 성장과 함께 그 落後性을 탈피하고 고도화의 길을 더듬게 되었다.

그리고 이 기간 중의 物價上昇率을 보면, 1960년대 초반 개발비 지출의 확대에 따라 제1차 경제개발계획기간 중에는 연평균 16.3%라는 높은 都賣物價 상승률을 기록하였으나, 제2차 경제개발계획기간 중에는 이른바 한 자리 수의 상승을 나타내 연평균 7.8%라는 비교적 안정세를 보였다.

이 시기의 대구경제는 工業化의 진전과 함께 산업구조가 다소 개선되긴 했으나, 발전속도나 성장수준면에서는 전국 평균수준을 밑도는 상대적인 낙후상을 보였다.³⁹⁾ 이러한 공업화정책의 당연한 결과로 대구의 經濟力은 서울, 釜山에 비해 현격히 뒤떨어지게 되었다. 다만, 대구의 人口는 이 기간 중에도 전국의 연평균 인구증가율 2.1%를 2배나 웃도는 5%의 증가율로, 1961년 말 69만명에서 1971년에는 113만명으로, 약 40만명이나 늘어났다.

이러한, 급속한 인구증가를 배경으로 한 대구의 산업구조(취업인구면)를 보면, ‘産業構造의 高度化’ 경향이 분명히 드러난다. 즉, 農林業부문의 취업인구비율은 1962년 9.8%에서 1971년에는 4.9%로 반감된 한편, 鑛工業의 비중은 17.6%에서 약 30%로 높아졌으며, 3次産業의 비중은 72.6%(분류불능 20.8%포함)에서 68.2%로 낮아졌다. 이것으로 미루어 보아, 대구지역의

〈表 1-35〉 大邱市 産業別 就業人口(1962~1971) (단위: 名, %)

區 分	1962		1964		1967		1969		1971	
計	193,102	100.0	178,276	100.0	270,261	100.0	323,424	100.0	326,195	100.0
農 林 漁 業	18,965	9.8	12,732	7.1	14,995	5.5	16,515	5.1	15,999	4.9
鑛 工 業	33,957	17.6	38,243	21.5	94,027	34.8	106,853	33.0	87,788	29.9
3 次 産 業	140,180	72.6	127,301	71.4	161,239	59.7	200,056	61.9	222,408	68.2
建 設 業	5,021	2.6	4,086	2.3	14,094	5.2	20,875	6.5	21,205	6.5
電 氣 · 가 스	4,793	2.5	4,479	2.5	5,777	2.1	6,592	2.0	4,162	1.3
商 業	50,380	26.1	43,166	24.2	55,300	20.5	72,906	22.5	88,570	27.2
通 信 業	3,779	2.0	4,408	2.5	9,345	3.5	11,510	3.6	14,357	4.4
서 비 스 業	36,089	18.7	65,960	37.0	76,515	28.3	88,173	27.3	86,552	26.5
金 融 保 險	—	—	—	—	—	—	—	—	7,561	2.3
分 類 不 能	40,118	20.8	5,202	2.0	208	0.1	—	—	—	—

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

39) 이는 1960년대의 공업화 정책이 주로 서울과 釜山을 거점으로 한 그 주변지역과 蔚山, 馬山, 여수 등 臨海地域을 중심으로 추진됨으로써, 대구는 內陸都市라는 불리한 입지여건 때문에 상대적으로 성장이 둔화되었기 때문이다.

공업화의 진전은 확실한 것이며, 3차산업내에서는 서비스업, 建設業, 運送·通信業의 비중이 높아진 것이 하나의 특징이다(과거의 산업분류속에 나와 있던 자유공무업은 서비스업속에 포함된 것으로 보임).

〈表 1-36〉 大邱市の 産業構造(1962~1971年) (단위: 백만원)

區 分	1962		1967		1970		1971	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
1 차 산 업	418	3.6	1,495	3.2	3,039	3.3	3,091	3.1
2 차 산 업	4,961	43.2	20,956	44.8	29,138	26.5	26,881	26.9
3 차 산 업	6,118	53.2	24,278	52.0	77,345	70.2	69,866	70.0

資料: 대구상공회의소, 《대구경제총감》, 1985. p.104에서 재인용함.

또한 産業別 地域總生産(GRP)⁴⁰⁾을 살펴 보면, 1962년에 약 115억원으로 추계되었는데, 이 중 3차산업이 53.2%, 2차산업이 43.2%, 1차산업이 3.6%를 차지하여 표면적으로는 상당히 선진화된 산업구조를 보였다. 참고로 1962년도 대구시의 1인당 주민소득은 1만 6,044원으로 추계됐는데, 이는 같은 해 서울시의 1인당소득 2만 2,605원의 71%에 해당하는 것이며, 전국 1인당 소득 1만 942원의 166.6%에 해당되는 것이다. 그리고 1971년에는 1차산업이 3.1%, 2차산업이 26.9%, 3차산업이 70.0%로 추계되어 3차산업의 비중이 현격히 높아지고 있다.

다음에서는 경제개발 초기의 대구경제의 성장상을 각 부문별로 나누어 살펴보기로 한다.

II. 工業의 絶對的 成長과 相對的 萎縮

1. 大邱工業의 動向

1960년대의 대구공업의 동향을 보면, 절대적 기준으로 質·量面에서 상당한 발전을 보였 으면서도, 상대적 기준으로 전국공업에서 차지하는 위치가 크게 하락된 것을 그 특징으로 볼 수 있다. 먼저 절대적 기준에서 대구공업의 성장상을 보면, 工場數는 1962년의 1,206개에서 1971년에 1,933개로 60%가 증가했으며,⁴¹⁾ 공장근로자수도 같은 기간 중 2만 8천명에서

40) 대구의 GRP추계가 처음 시작된 것은 1966년 內務部內의 지방행정연구위원회가 표본조사로 1962년도분을 추계한 것이며, 대구시 자체에서 추계·발표한 것은 1967년도분이 처음이다.

41) 공장수의 비중만이 높아진 것은 기존의 산업기반이 있는 織物, 機械분야에 영세규모의 신설업체가 크게 늘어났기 때문이다. 내륙도시에 중소영세기업이 많은 것을 하나의 숙명이라고 볼 수 있다면, 업체수의 많고 적음은 그다지 큰 문제가 아니다. 다만 이들 영세기업이 기술이나 시설보다도 저임의 노동에 주로 의존하고 있었기 때문에 시설의 老朽化 및 前近代性, 그리고 低生産性, 品質조악, 販賣不振 등 고질적인 경영부실요인을 안고 있었다는 데 문제의 심각성이 있다.

5만 4천명으로 90%나 증가했다. 工業生産額도 상당한 증가세를 보였으며, 정부의 강력한 輸出드라이브政策에 힘입어 公産품의 수출도 획기적으로 늘어났다.

〈表 1-37〉 1960年代 大邱地域의 工業概況 (단위: 개, 명, 백만원)

年 度	工 場 數	從業員數	生 産 額	附加價值
1962(A)	1,206	27,860	—	—
1964	1,255	43,138	12,727	—
1966	1,288	46,380	—	—
1968	1,914	67,742	36,797	18,173
1970	2,187	66,896	42,368	34,623
191(B)	1,933	53,525	53,525	23,309
B / A (倍)	1.6	1.9		

資料: 〈表 1-36〉과 같음. p. 108.

그러나 〈表 1-38〉에서 보듯이, 전국공업에서 차지하는 大邱工業의 비중은 국민경제의 고도성장기간동안에 급격히 낮아졌다. 즉, 업체수의 비중은 1963년 6.6%에서 1971년에는 7.3%로 높아진 반면, 종업원수의 비중은 같은 기간 중 10.8%에서 5.9%로 낮아졌으며, 附加價値의 비중감소는 더욱 현저하였다.

〈表 1-38〉 大邱工業의 全國比重

區 分	單 位	1963		1970		1971	
		全 國	大 邱	全 國	大 邱	全 國	大 邱
事業體數	個 (%)	18,310	1,208 (6.6)	24,114	2,086 (8.7)	23,412	1,706 (7.3)
從業員數	名 (%)	401,981	43,508 (10.8)	861,041	63,782 (7.4)	848,194	50,361 (5.9)
生 産 額	백만원 (%)	166,857	12,727 (7.6)	1,334,514	74,559 (5.6)	1,672,740	66,935 (4.0)
附加價值	백만원 (%)	—	—	549,793	28,478 (5.2)	609,535	23,049 (3.3)

資料: 〈表 1-36〉과 같음. p. 109.

그리고 1960년대의 대구공업을 이야기하면서 빼놓을 수 없는 것이 ‘工業團地의 造成’이 시작되었다는 점이다. 1950년대 이후 대구공업이 양적인 면에서 팽창됨에 따라 日帝時代(1941년)에 침산동 일대에 조성된 제1공업단지(18만평규모)만으로는 공장수용이 어렵게 되자,

도심부의 중심상가나 주택가에 많은 공장들이 무질서하게 들어서게 되었다. 이에 따라 발생하는 여러 가지 公害要因을 제거하는 동시에 중소기업의 계열화 및 전문화를 촉진하고자 토지구획정리법과 建設部の 特別工業團地造成令에 의거하여 1968년에 제3공업단지가 조성되었다. 대구시는 1967년 4월에 중소기업 공업단지조성계획을 마련하여 이 단지 조성을 추진하였으며, 지금의 공식 명칭은 大邱地方工業團地이다.⁴²⁾

제3공업단지의 건설과 거의 때를 같이하여 1967년 10월에는 인접지역인 포항에 포항제철이 역사적인 기공식을 가졌고, 1969년 7월에는 구미공업단지의 기공식이 거행됨으로써 전형적인 농업지역인 大邱·慶北圈에 공업화에로의 힘찬 시동이 시작되었다. 이 시기에 있어 대구시내 섬유공업과 기계·금속공업부문의 변화상을 살펴보면 다음과 같다.

2. 纖維工業

1) 纖維工業의 動向

이 시기의 지역 섬유업계의 동향을 보면, 구조적인 일대 變革期를 맞게 된다. 즉, 1950년대에 핵심을 이루던 綿紡織工業이 化學纖維의 출현에 의해 그 자리를 비켜주게 되고, 섬유산업이 부분적이지만, 수출개시단계까지 접어 들었다.

먼저 업 스트림 부문에서는 韓國나일론(株)이 나일론 원사생산에 돌입함으로써 合纖維物時代의 開幕을 선도하였으며,⁴³⁾ 第一毛織에서도 소모방 시설의 추수를 증설하는 한편, 경산공장을 설치하여 화섬방 부문에 진출하였다.⁴⁴⁾ 그리고 면방적부문에서는 3대 공장이 그대로 가동되고

42) 이 단지는 당초에 ① 기계, 자전거부품 등 기계, 금속공업의 계열화 조성, ② 섬유공업의 집산화 조성, ③ 성장산업의 신규유치(내화물, 특수강공작기계, 섬유기계, 「가솔린엔진」 등의 공장) 등을 목표로 1966년 3월 31일에 착공하여 1968년 12월 31일에 완공을 보았다. 노원동, 비산동, 침산동, 일애데 104만평규모의 제3공업단지는 사유지와 민유지로 구분되어 있는 일종의 복합공업단지의 성격을 띠고 있는 것이 다른 지역의 공업단지와는 다른 점이다.

43) 나일론 원사생산을 위해 한국나일론은 1963년 8월에 日産 3.2M/T 제조공장을 준공한 뒤, 1968년 5월에 일산 7.5M/T, 다시 1969년 12월에 8M/T, 그리고 1970년 10월에 2.5M/T을 각각 증설함으로써 1970년 말에는 일산 21.2M/T의 시설을 갖추게 되었다. 그리고 1969년에는 이 회사의 계열회사인 한국 폴리에스터(주)가 구미에 설립되어, 1971년 3월에 일산 20M/T의 폴리에스터 원사공장을 준공하였으며, 1956년에 창립된 고려 나일론(주)이 1971년 일산 1.3M/T규모로 나일론사 생산에 참여하였다.

44) 소모방적업계의 톱 메이커인 제일모직은 1967년과 1969년에 소모방적시설은 늘려 2만 2,472추의 시설을 갖추는 한편, 1969년 9월에 폴리에스터/레이온 혼방 1만추수를 경산공장에 건설하여 합섬부문에 진출하였다. 여기에서 나온 최종제품은 학생복지인 ‘에리트’, 신사복지인 ‘에스론’, 숙녀복지 ‘라리’ 등이었다. 이어서 1970년 8월에는 2만추의 증설을 완료하여 모두 3만추의 설비를 갖추과 동시에, 1971년 9월에는 폴리에스터 가공계 면직물 설비공사를 착공하였으며, 이 경산공장은 1972년 7월에 제일합섬(주)으로 독립하였다.

있었고, 1968년에는 총시설이 10만추를 돌파하였으나, 업체당 평균시설규모는 전국 평균 수준을 밑돌게 되었다. 그리고 1960년대 말의 극심한 불경기는 삼호, 내외방직의 폐업(1967년)과 大農으로의 이관을 촉진하는 계기가 되었다.

한편 미들 스트림부문에서는 織物工場이 꾸준히 늘어난 반면, 메리야스공업은 상대적으로 위축기에 접어들게 된다. 기계의 성능면에 있어서는 폭넓히기에 의해 廣幅織物의 제직을 지향하였으며, 국산직기는 북이 큰 쪽으로 개량되어 나갔다. 그리고 주종생산물도 1960년 초반까지는 광목, 옥양목 등 100% 면직물이 차지하였으나, 한국 나일론의 나일론사 생산을 전후하여 나일론 타프타의 제직이 급격히 증가하고, P/C혼방직물도 출현하였다. 이에 따라 면직물과 인견직물의 생산비중이 크게 줄어든 한편, 나일론 타프타를 선두주자로 하는 합섬직물의 시대가 개막되었다. 즉, 면직물은 수출보다는 내수지향적이 되고, 나일론 등 합섬직물은 수출지향화함으로써 업종간에 현격한 성장격차가 발생하게 되었다.

〈表 1-39〉 大邱(慶北 포함) 纖維工業의 全國比重 推移

區 分	單 位	1963		1967		1971	
		全 國	大 邱	全 國	大 邱	全 國	大 邱
事業體數	個 (%)	3,821	782 (20.5)	6,149	1,276 (20.8)	6,287	1,297 (20.6)
従業員數	名 (%)	128,470	28,156 (21.9)	214,492	49,060 (22.9)	274,734	43,145 (15.40)
生 産 額	백만원 (%)	37,608	5,836 (15.6)	129,962	32,597 (25.1)	333,831	57,080 (17.1)
附加價值	백만원 (%)	12,308	2,661 (21.6)	47,922	10,801 (22.5)	120,804	17,678 (14.6)

註：()안을 전국에 대한 대구의 비중임.

資料：경제기획원, 《광공업통계조사보고서》에 의거 작성함.

개괄적으로 살펴 본 1960년대 대구지역 섬유공업의 큰 특징은 직물부문의 양적 팽창으로 지역공업구조에서의 위치가 더 확고히 된 반면, 전국 섬유산업에서 차지하는 비중은 상대적으로 떨어졌다는 점이다. 이것은 경제개발계획의 추진과정에서 섬유의 素材生産工場들이 다른 지역에 집중적으로 건설되고, 서울과 부산지역에는 부가가치가 높은 봉제공업이 일어난 대신, 대구에는 중소규모의 織造業만 크게 늘어난 데서 비롯된 것으로 풀이된다. 특히 1970년의 京釜고속도로의 개통은 西門市場의 직물도매기능을 서울의 東大門市場 등으로 옮겨가게

만들었으며, 서울에는 봉제공장들이 우후죽순처럼 생겨난 데 비해, 대구에 있던 영세한 피복공장들은 폐업에의 길로 치닫게 되었다.

2) 纖維輸出의 本格化

대구에서 貿易活動이 본격화된 것은 수출주도의 성장전략을 표방하게 된 1960년대 이후부터라 하겠다. 수출이 국민경제의 고도성장을 위한 전략부문으로 선정됨으로써 1960년대에는 갖가지 輸出振興策이 마련되었을 뿐만 아니라, 수출의 양적 확대와 더불어 수출상품구조도 공산품의 비중이 높아지는 등 고도화의 길을 걸었다. 즉, 제1차 경제개발계획이 시작된 1962년에 불과 125만 7천달러에 지나지 않던 대구의 수출실적은 제2차 경제개발계획이 끝난 1971년에는 8,762만 5천달러의 실적을 나타내, 기간중 70.3배라는 급증세를 기록했다. 이 10년간의 年평균 輸出伸長率은 63.4%로서 전국의 40%선을 훨씬 웃돌았기에 전국수출에서 차지하는 대구의 비중은 2.2%에서 6.5%로 높아졌다. 더구나 수출참여업체수는 1962년에 불과 10여개에 지나지 않던 것이, 1971년에 195개로 늘어나, 內需産業에서 수출산업으로의 전환이 가속화되었음을 알 수 있다.

한편 대구시의 수출실적을 品目別로 보면, 섬유공업제품이 90%내외를 차지하고 있으며, 그외에 機械製品, 농산물을 비롯한 기타제품이 나머지 10%선을 차지하여 수출에서도 섬유일변도의 편중구조가 뚜렷이 나타나고 있다. 섬유제품의 수출비중은 1964년 78%에 지나지 않았으나, 해마다 높아져서 1966년에 90%선을 넘어선 이래 그 비중이 좀처럼 줄어들지 않고 있다.

〈表 1-40〉 大邱市 輸出의 年度別 業種別 實績 (단위: 천달러)

區 分	合 計	纖 維 工 業		機 械 工 業		化 學 工 業		其 他	
		金 額	%	金 額	%	金 額	%	金 額	%
1964	4,361	3,389	77.7	491	11.3	.195	2.4	376	8.6
1966	15,440	14,146	91.6	416	2.7	280	1.8	597	3.9
1968	38,553	35,719	92.6	618	1.6	395	1.0	1,821	4.7
1970	70,454	63,558	90.2	1,966	2.8	794	1.1	4,136	5.9

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

섬유제품 중에는 對日 홀치기수출이 압도적으로 많았으며, 그 다음은 나일론 직물, 견직물, 트리코트지, 모복지, 견직물의 수출비중이 높았다. 機械類에서는 알루미늄 기물, 볼트·넛트, 납시바늘, 제침 등이 소량 수출되었으며, 기타류의 과일, 수세미, 벽지, 완구 등은 극히 미미했다.

다음으로 대구제품의 수출지역은 1970년 22개국에서 1971년 25개국으로 늘어나고 있으나, <表 1-41>에서 보듯이 日本과 美國에 지나치게 편중되어 있어 이들 양국에 대한 수출의존도는 항상 60%선을 웃돌고 있다.

<表 1-41> 大邱의 主要 輸出市場 (단위: 천달러, %)

區 分	1970		1971	
	實 績	構 成 比	實 績	構 成 比
美 國	22,905	32.5	20,519	23.4
日 本	27,621	39.2	33,142	37.8
홍 콩	5,136	7.3	4,837	5.5
싱 가 폴	2,629	3.7	2,834	3.2
캐 나 다	1,609	2.3	3,185	3.6
總 輸出實績	70,454	100.0	87,625	100.0

資料: <表 1-36>과 같음. p. 132.

3. 機械·金屬工業

경제개발계획이 본격적으로 추진되기 시작한 1960년대는 한국경제의 일대 躍進期였는데 특히, 기계·금속공업계의 성장의 기운이 왕성하게 일어난 기간이었다. 제1차 경제개발계획기간 중에 한국기계, 연합철강, 인천제철 등이 설립되었고, 제2차 경제개발계획기간 중에 「기계공업진흥법」(1967년), 「전자공업진흥법」(1969년), 「철강공업육성법」(1970년) 등이 제정되면서 기계·금속공업은 비약적인 발전의 기틀을 마련하였다. 이 기간 중 이들 분야의 공장수는 전국적으로 배이상 늘어났으며, 생산액이 크게 증가하였음은 물론, 생산제품도 많이 다양화 되었다.

<表 1-42> 大邱市 機械·金屬工業 業體數 推移(1962~1971年) (단위: 個)

區 分	1962	1964	1966	1968	1970	1971
一 般 機 械	216	180	260	379	415	402
一 次 金 屬	—	38	26	24	35	26
小 計 (A)	216	218	286	403	450	428
製造業 (B)	1,206	1,255	1,288	1,914	2,187	1,933
A / B (%)	17.9	17.8	22.2	21.1	20.6	22.1

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 1973.

한편 이 시기의 대구시내 기계·금속공업의 業體數를 보면, 1962년의 216개에서 1971년에는 428개 업체로 늘어나 지역공업에서 차지하는 비중은 17.9%에서 22.1%로 크게 높아졌다.

업체수의 증가면에서는 전국 기계공업계의 그것과 크게 다를 바 없다. 그러나 新設業體의 시설이나 규모, 생산품목을 보면, 타지역에 비해 상당한 낙후상을 보이고 있다. 그리고 1969년의 487개 업체를 피크로 하여 1970년과 1971년에 업체수가 계속 줄어든 것은 지역 주종공업인 섬유업계의 불황과 纖維工業臨時措置法의 제정으로 인한 섬유기계업계의 타격, 그리고 농기계의 동력화에 따른 수제인력 농기계공업의 도산에 기인한 것이다.

1960년대 한국기계 금속공업의 발전과정에서 나타난 대구업계의 변천과 동향을 요약하면 다음과 같다.⁴⁵⁾

1) 대구기계공업은 附加價値의 총량면에서는 증가가 나타났지만, 대구의 산업구조, 즉 경공업편중구조를 중공업으로 전환시키는 데는 크게 기여하지 못하였다.

2) 대구 기계·금속공업은 부가가치의 증가율이 전국 동업계의 부가가치 증가율보다 현저히 떨어졌기 때문에, 전국 동업계에서 차지하는 비중이 1960년의 10.9%에서 1970년에는 3.8%로 급격히 하락하였다.

3) 企業規模面에서 기간 중 타경제권의 기계공업은 증가가 많으나 대구권의 경우는 적었으며, 施設改替가 이루어지지 못하였고, 技術水準이 낮아 제품의 경쟁력기반 역시 상실되어 갔다.

이상에서 본 바와 같이 1960년대 대구의 기계금속공업은 절대적으로는 성장을 했다고 볼 수 있으나, 자동차, 자동차부품공업을 제외하면 거의 대부분 업종의 기반이 약화되었다고 볼 수 있다.

III. 商業部門의 肥大化

1960년대 대구의 상업부문은 都市化와 工業化의 진전으로 상당한 성장을 하였다. 都小賣業이 총취업인구에서 차지하는 비중도 꾸준히 20%를 뺏아, 1971년에는 27.2%에 이르렀으며, 대구시의 地域總生産(GRP)에서 차지하는 비중도 1971년에는 30.1%나 되었다. 이것은 도시화의 급진전에 따라 농촌에서 유입된 人口의 상당수가 공업부문으로 흡수되지 못하고, 손쉽게 시작할 수 있는 상업분야로 대거 취업함에 따라 빚어진 현상이라 하겠다.

45) 대구시, 《대구 기계·금속공업의 실태분석과 개발방향》, 1973.

〈表 1-43〉 大邱市 都·小賣業 推移(1962~1971)

年 度	事 業 體 數 (個)			從 業 員 數 (名)		人口千名當 店鋪數
	計 (A)	都賣	小賣	數 (B)	B/A (名)	
1962	8,220	818	7,402	10,272	0.8	11.5
1964	9,346	1,062	8,284	15,444	1.7	11.9
1968	18,696	1,310	17,386	34,529	1.8	19.4
1971	22,085	2,104	19,981	41,206	1.9	19.5
'71/'62	2.7	2.6	2.7	4.0	—	—

資料：대구시, 《대구통계연보》, 1967~1973.

1968 및 1971년도는 경제기획원, 《도소매업센서스 보고서》, 1968, 1971.

이에 따라 대구 시내 도소매업체수는 1962년에서 1971년에 이르는 10년동안에 2.7배나 늘어났으며, 이 분야의 종사자수도 4배로 확대되었다. 즉 都賣業體數는 기간 중 818개에서 2,104개로 1,286개 업체가 증가되었으며, 소매업체는 7,402개에서 1만 9,981개로 무려 1만 2,579개의 업체가 늘어났다. 결국 해마다 1,400여개의 店鋪가 새로 문을 연 셈이다. 또한 같은 기간 중 종업원수는 1만명에서 4만명으로 늘어났으며, 이에 따라 점포당 종업원수는 1962년의 0.8명에서 1971년에는 1.9명으로 늘어났고, 인구 1천명당 점포수도 11.5점에서 19.5점으로 많아졌다.

한편 이 기간 중 市場의 변천상을 보면, 1961년 8월에 공포된 市場法에 따라 대부분의 공설시장이 시장변형회로 불하되어 민영화되고, 1960년 후반에는 인구가 100만을 넘어서면서 私設市場이 대거 신설되었으며, 무허가시장도 변두리 주택가에 난립되었다. 결국 이 기간 중에는 공설시장의 민영화, 사설시장의 급증, 정기시장의 소멸, 在來市場의 현대식 건물화, 백화점, 아케이드를 비롯한 새로운 유통기관의 출현이 상업면의 한 특징적 현상이라 하겠다.

이러한 대구의 시장들은 공설이든 사설이든 대부분 일용잡화 및 채소류를 취급하는 소매시장의 역할을 주로 담당했는데, 예외적으로 비교적 전문화된 시장이 몇 군데 있었다. 즉 서문시장 제1지구의 직물부와 포목부가 도매기능을 주로 맡고 있었으며, 서문가축시장과 동국철물시장, 원대청과시장, 팔달시장(채소), 교동시장(피복류) 등은 전문시장의 성격을 띠고 있었다.

1960년대 대구의 도매지구를 보면, 서문시장을 중심으로 대신동, 동산동, 시장북로, 서문로1가 등에 도매상이 집중되어 경북일원에 넓은 상권을 가지고 있었다. 특히 동산동의 동산과 출소에서 대신동 십자로에 이르는 지대는 전국에서 손꼽히는 原絲去來所로서 서문시장과

더불어 원사거래액의 70~80%를 담당하고 있었다. 즉, 대구시내 섬유도매상의 전국비중을 보면, 업체수는 1968년의 24.2%에서 1971년에는 33.7%로 크게 높아졌으며, 연간매출액의 비중도 같은 기간 중 21.2%에서 52.6%로 엄청나게 높아, 아마도 이 시기가 대구의 직물 도매기능이 가장 왕성했던 시기로 기록될 것이다(〈表 1-44〉 참고).

〈表 1-44〉 纖維都賣業의 地域別 比重(1968, 1971年) (단위: 개, 백만원)

區 分	事 業 體 數		年 間 販 賣 額	
	1968	1971	1968	1971
全 國	1,051(100.0)	1,360(100.0)	14,793(100.0)	49,898(100.0)
서 울	345(32.8)	564(41.5)	6,904(46.1)	15,856(31.8)
釜 山	147(14.0)	88(6.5)	983(6.6)	1,234(2.5)
慶 北	282(25.8)	487(35.8)	3,334(22.3)	26,925(54.0)
大 邱	256(24.4)	458(33.7)	3,173(21.2)	26,232(52.6)

註: ()내는 구성비임.
資料: 〈表 1-36〉과 같음.

〈表 1-45〉 大邱市の 代表的 小賣商業地區(1960年代)

商 業 地 區	特 徵
동 성 로	○ 중류층을 대상으로 한 잡화상가 — 양품류, 전기제품, 화장품, 각종 장식제품 등
북 성 로	○ 철물·기계상가 — 농기구, 철물 등
중 앙 로	○ 잡화상가 — 문방구, 서점, 양복, 금·은, 시계, 잡화 등
서 성 로	○ 고철가공판매상가 — 깡통가공, 자전거, 고철 등
동 산 동	○ 原絲상가 — 각종 원사 및 수입원사
중 로	○ 가구전문상가 — 가구
향 촌 동	○ 유흥가 — 대중식사, 빠, 카바레, 주점, 당구장, 여관, 다방 등

한편 1960년대 대구의 小賣商業地區를 보면, 일반재래시장을 제외하고는 중앙로, 그와 인접한 태평로 2가, 북성로 1가, 향촌동, 포정동 등이 중심이 되었다. 그리고 동편으로는 동성로, 태평로1가, 용덕동, 교동, 완전동, 화전동 등이 있었다. <表 1-45>와 같이, 이들 지역들은 각자 조금씩 特徵的인 業種을 취급하는 상가를 형성하고 있었다.

IV. 消費構造와 消費者物價

1960년대 중반의 대구시내 월평균 가계소비지출규모를 보면 <表 1-46>에서 보는 바와 같이, 시민소득의 증대와 물가상승을 반영하여 해마다 빠른 속도로 확대되었다. 內譯도 식료품비의 비중이 점차 하락세를 보여 소비구조의 고도화현상을 반영해주고 있다.

즉, 소비지출에서 식료품이 차지하는 비율을 나타내는 엔겔係數는 1963년의 51.7%에서 1968년에는 40.9%로 크게 낮아졌다. 이에 비하여 住居費의 비중은 13.5%에서 18.8%로, 雜費는 21.0%에서 24.3%로 높아졌다. 이는 소비구조의 고도화를 반영하는 지표임은 틀림 없지만, 다른 각도에서 보면 단순히 상대가격의 변화를 반영해주는 지표로도 해석될 수 있다. 이를 전국의 경우와 비교해 보면 엔겔계수가 월등히 낮은 대신에, 주거비, 광열비, 피복비 및 잡비의 비중은 모두 높게 나타나고 있다.

<表 1-46> 月平均 家計消費支出 構成比의 變化 (단위: %, 원)

區 分	1963		1965		1968	
	全 國	大 邱	全 國	大 邱	全 國	大 邱
飲食物費	57.3	51.7	59.3	5.1	56.1	40.9
住 居 費	8.0	7.8	7.4	9.5	8.1	18.8
光 熱 費	4.9	4.6	4.2	5.4	4.0	4.6
被 服 費	12.0	10.3	10.9	8.9	10.0	11.5
雜 費	17.8	17.5	18.2	15.3	21.8	24.3
支出總額	—	6,860	—	8,090	—	20,770

資料: 한국은행 대구지점, 《금융경제 통계월보》, 각 호.

한편 全都市 消費者物價指數가 작성되기 시작한 1965년 이후부터 1971년까지의 대구의 소비자물가 동향을 보면, 7년 동안에 무려 214%나 상승하여 시민생활을 크게 압박하는 요인이 되었다. 특히 식료품비는 233%나 올랐으며, 피복비는 107%로 상대적으로 상승율이 낮았다.

〈表 1-47〉 大邱의 消費者物價指數 推移(1965~1971) (1970=100)

區 分	總 指 數	食料品費	住 居 費	光 熱 費	被 服 費	雜 費
加重值	1,000.0	467.5	111.6	54.1	98.0	268.8
1965	54.5	52.9	53.8	55.6	60.8	56.0
1967	68.3	62.8	83.0	85.4	81.2	67.1
1969	85.3	80.9	95.4	83.6	94.4	89.3
1971	116.4	123.0	106.4	112.0	105.1	114.1

資料：경제기획원 조사통계국, 《1972년 물가연보》, pp. 70~75.

V. 成長金融體制와 地方銀行

1960년대 우리나라의 금융은 경제개발계획의 실시에 따른 내자동원체제의 강화를 위해서 많은 개편을 통하여 성장금융체제를 형성하여 왔다. 즉, 1962년 6월 10일에는 이른바 貨幣改革으로 일컬어지는 제2차 「緊急通貨 및 金融措置」가 단행되었다. 그리고 5.16 이후 不正蓄財處理의 일환책으로 제정된 「金融機關臨時措置法」에 따라 부정축재자가 소유하고 있던 일반 은행주식이 모두 정부에 귀속됨으로써 일반은행은 정부의 직접통제를 받게 되었다. 또한 「韓國銀行法」과 「銀行法」의 제정으로 정부주도형 성장금융체제가 형성되어서 이른바 ‘官治金融’이 본격화되었다.

한편 1965년 9월 30일에 단행된 金利現實化措置로 고도성장을 뒷받침하기 위한 내자동원체제의 기반이 어느 정도 마련되었으며, 나아가 수출증대와 外資依存型의 고도성장이 진척됨에 따라 1960년대 후반기에는 각종 특수은행기관과 지방은행이 신설되기에 이르렀다. 즉, 1967년에는 韓國外換銀行과 韓國住宅金庫(주택은행의 전신), 그리고 2개 지방은행이 설립되었으며, 1968년에는 신탁은행과 한국투자개발공사(現 대한투자신탁의 전신)가 발족하였다. 또한 1967년부터는 외국은행 국내지점들이 속속 진출하기 시작했고, 一般銀行도 감류외국환 업무를 취급하게 되었다.

이러한 금융제도의 개편에 따라 대구시의 금융기관도 1960년대에 비약적인 양적 팽창을 보였다. 즉, 1961년까지만 해도 대구시내에 산재해 있던 은행점포수는 불과 14개에 지나지 않던 것이 1971년에는 51개소로 늘어나, 10년동안에 37개 점포가 불어나게 된 것이다. 이러한 양적인 성장 이외에도, 1960년대 최초의 지방은행으로 大邱銀行이 1967년 10월 7일에 창립된 것은 대구금융사에 있어서 매우 뜻깊은 일이라 하겠다. 대구은행의 설립으로 일제말기에

朝鮮總督府의 강권과 압력에 의해 막을 내린 지방은행시대가 부활하게 되었다. 대구은행이 개점되자 지역금융풍토에는 일대 쇄신의 바람이 일어났으며, 금융의 대중화가 크게 촉진되었다.

한편 이 기간 중 대구시의 金融動向을 보면, 경제규모의 확대와 물가의 양등으로 인한 화폐가치의 상대적인 저하와, 시민소득수준의 향상, 그리고 금융기관의 양적 확대 등으로 예·대출금 모두 비약적인 신장을 보였다. 즉, 預金高는 1962년의 16억원에서 1971년에는 465억원으로 10년동안에 28.6배나 증가했으며, 貸出金도 38억원에서 415억원으로 약 11배가 늘어났다.

〈表 1-48〉 大邱市 金融機關의 年度別 預·貸出金 推移

年 度	預 金 (백만원)		貸 出 金 (백만원)	
	金 額	增加率(%)	金 額	增加率(%)
1962	1,626	15.2	3,775	29.1
1963	1,779	9.4	4,803	27.2
1964	1,993	12.0	5,129	6.8
1965	4,349	118.2	5,930	15.6
1966	6,597	51.7	8,031	35.4
1967	10,810	63.9	11,647	45.0
1968	17,265	59.7	18,260	56.8
1969	28,329	64.1	30,884	69.1
1970	36,201	27.8	34,862	12.9
1971	46,581	28.7	41,496	19.0

資料: 한국은행 대구지점

〈表 1-49〉 大邱地域의 어음交換高 및 不渡率(1962~1971)

年 度	어 음 交 換 額 (억원)			不 渡 率 (%)	
	全 國	大 邱	比 重 (%)	全 國	大 邱
1962	5,498	334	6.1	0.44	0.57
1964	11,160	688	6.2	0.41	0.47
1966	17,161	1,353	7.9	0.55	0.41
1968	45,992	3,182	6.9	0.38	0.67
1970	84,085	4,208	5.0	0.53	0.74
1971	99,980	5,179	5.2	0.44	0.41

資料: 한국은행, 《경제통계연보》, 《조사월보》, 《통계월보》에 의거 작성함.

특히 대구시내 金融機關의 예금증가율을 보면, 1963년과 1964년에는 9.4%, 12.0%씩이었으나, 1965년에는 118.2%나 되었다. 이것은 물론 금리현실화조치의 직접적인 효과라 볼 수 있다.

그 이후에도 1960년대 말까지는 꾸준히 60%선의 증가율을 유지하다가, 1970년대에 들어와서는 28%선으로 신장률이 둔화되었다. 또한 대출금의 전년비 증가율추세를 보면, 예금의 경우와 비슷하다. 즉, 1960년대 전반보다 후반에 증가율이 높다가 1970년대에 들어와 급격히 둔화되었다. 그리고 貸出金의 전국비중 역시 1964년의 8.2%를 피크로 하여, 그 이후 계속 낮아져 1971년에는 3.8%로 급격히 낮아졌다.

한편 大邱 어음交換所의 어음교환실적을 살펴보면, 1962년에는 334억원으로 전국 교환고의 6.1%를 기록한 이래 제1차 경제개발계획이 끝나는 1966년까지는 꾸준히 높아져, 1966년에는 1,353억원으로 7.9%라는 높은 비중을 차지했다. 그러나 2차 계획기간 중에 계속 낮아져 1971년에는 5,179억원으로 5.2%를 기록했다.

1960년대 전반에 어음교환고의 비중이 높아진 것은 제조업의 위치가 비록 악화되었지만, 직물류를 비롯한 상거래가 활기를 띠었음을 말해 주는 것이며, 제2차 경제개발계획기간 중에 그 비중이 크게 낮아진 것은 서울의 비대화 내지 서울집중체제가 강화되고, 타 지역의 경제개발로 상권이 분산되었기 때문인 것으로 보인다.

또한 대구지역의 자금사정을 나타내는 어음부도율을 보면, 1962년에 0.57%에서 1971년에는 0.41%로 약간은 호전되기는 했으나, 전반적으로 1960년대에 걸쳐 다소 높은 不渡率을 나타내어, 전국의 부도율수준을 다소 상회했음을 볼 수 있다.

第6節 相對的 停滯期의 大邱經濟(1972~1980)

I. 經濟發展과 大邱의 産業構造

한국경제는 1960년대에 대외지향적 공업화와 社會間接資本의 확충 등에 개발계획의 중점을 둠으로써 높은 경제성장을 달성하였고, 이에 따라 경제규모도 크게 확대되었으며, 農業위주의 산업구조는 점차 2·3차산업 중심으로 바뀌기 시작했다.

그러나 두 차례에 걸친 經濟開發計劃의 수행은 우리에게 새로운 과제를 안겨주었는데, ① 균형적인 産業開發, ② 기술 및 熟練勞動集約的인 산업의 육성, ③ 自力成長構造의 실현과

확대균형, ④ 社會開發의 추진 (개발이익의 형평한 배분문제) 등이었다. 이러한 과제들을 해결하기 위해 제3차 경제개발계획기간(1972~1976年)의 중점목표로 새마을운동을 주축으로 한 ① 農·漁村經濟의 혁신적 개발, ② 輸出의 획기적 증대, ③ 重化學工業의 건설 등이 제시되었으며, 제4차 경제개발계획기간(1976~1981年)에는 ① 자력성장구조의 실현, ② 사회개발의 추진, ③ 技術革新과 能率向上에 그 중점목표가 주어졌다.

그러나 1970년대에는 1973년의 제1차 石油波動, 1979년의 제2차 석유파동이라는 불리한 세계경제 여건 속에서 자본, 인력, 기술, 시장의 제약을 무시한 중화학공업의 무리한 추진, 10月維新 이후의 정치권력의 경직화와 관치금융, 1979년의 10.26사태에 따른 유진체제의 붕괴, 그리고 세계적인 경기침체 등으로 우리 경제는 정말 힘든 한 연대를 보냈다고 생각된다.

특히 제3차 경제개발계획까지는 비교적 견실한 개발실적을 올렸으나, 제4차 경제개발계획기간 중에는 1977~1978년의 過熱景氣를 겪으면서 1979년부터 대내외 여건이 급격히 악화되어 총 4차에 걸친 경제개발계획 중 가장 나쁜 실적을 남겼다. 즉, 제3차 계획기간 중에는 제1차 석유파동을 겪으면서도 연평균 經濟成長率(1980년 불변시장가격기준)이 9.7%라는 고성장을 기록하였으나, 제4차 계획기간 중에는 6.0%로 성장률이 크게 둔화되었고, 1980년도에는 급기야 마이너스 5.2%라는 負의 성장까지 기록하였다.

〈表 1-50〉 韓國經濟의 主要 指標(1972~1981)

區 分	單 位	1972~76年間 平均	1977~81年間 平均
經 濟 成 長 率	1980年 不變(%)	9.7	6.0
都 賣 物 價	上昇率 (%)	20.3	19.8
消 費 者 物 價	上昇率 (%)	16.0	18.6
經 常 收 支	백만달러	△ 980.8	△ 3,038.2
貿 易 收 支	백만달러	△ 1,067.8	△ 2,933.2

資料: 한국은행 조사제2부, 《주요경제지표》

더구나 物價上昇率은 1973년과 1977년을 제외하면 줄곧 두자리 수의 높은 인플레이를 나타내, 경제체질이 극도로 악화되었으며, 또한 높은 輸出伸長率을 자랑하면서도 무역수지는 적자상태를 벗어난 일이 한번도 없어, 經常收支는 1977년의 1,200만 달러의 흑자를 제외하고는 만성적인 赤字狀態를 지속하였다.

한편 1970년대의 大邱經濟는 위에서 본 국민경제의 동향에 보조를 같이하면서도, 인구의 급속한 증가, 공업화의 진전에 따른 市民所得의 향상과 產業構造의 개선, 섬유수출의 획기적인

第1節 總 說

증대와 流通産業의 근대화 등 많은 질적인 변화를 보였다. 그러나 工業構造가 경기에 아주 민감한 섬유산업에 특화되어 있음으로써 1972년, 1974년과 1979년 등 세차례의 극심한 不景氣를 겪었고, 그때마다 지역경제는 심한 진통을 겪었다. 더구나 인구증가율에 비하여 경제성장률이 상대적으로 저조하였고, 섬유일변도의 公業구조가 더욱 심화됨으로써, 대구의 경제력은 상대적으로 더 약화되었다.

대구경제력의 총량적 척도가 될 수 있는 대구의 地域總生産(Gross Regional Product, GRP)의 추세를 보면, 통계이용이 가능한 1975년에서 1980년 사이에 연평균 7.0%의 성장률을 나타냄으로써 전국수준과 큰 차이를 보이지 않고 있다.

〈表 1-51〉 主要産業別 GRP 比較 (1975~1980年) (단위 : 억원, %)

區分	1975		1977		1979		1980		增加率
G R P	4,167.2	100.0	4,903.3	100.0	5,734.9	100.0	5,668.8	100.0	7.0
農·林·漁業	50.9	1.2	38.7	0.8	44.9	0.8	30.6	0.5	△ 7.8
鑛 · 工 業	1,675.7	40.2	2,088.2	42.6	2,354.3	41.0	2,479.6	43.7	9.2
SOC 및 其他	2,440.6	58.6	2,776.4	56.6	3,335.7	58.2	3,158.6	55.8	6.0

註 : 1975년 불변가격기준임.

資料 : 대구직할시, 《대구도시 기본계획》, 1984에서 재인용함.

이 기간 중의 연평균 산업별 성장률을 보면, 鑛工業이 9.2%로 지역경제성장을 주도하였으며, 社會間接資本 및 기타 서어비스 등은 6.0%의 성장세를, 농림수산업은 7.8%의 負의 성장을 나타내고 있다. 1차산업의 지속적인 마이너스 성장은 도시화와 公業화의 진전에 따른 경지의 工場用地化 및 住宅用地化에 주로 기인하는 것으로 보인다. 이와 같이 산업간의 성장격차가 현저하게 나타남으로써, 산업구조면에서는 농림업이 1975년의 1.2%에서 1980년에는 0.5%로 낮아졌으며, 사회간접자본 및 기타 서어비스업도 58.6%에서 55.8%로 다소 낮아진 대신, 광공업의 비중이 40.2%에서 43.7%로 높아졌다. 그러나 1981년의 直轄市 승격에 따라 주변농촌지역이 시에 편입됨으로써 1차 산업의 비중은 다소 높아졌다. 참고로, 대구 시민의 生産效率性을 나타내는 1인당 GRP를 보면, 1976년부터 전국수준을 밑돌기 시작하였으며, 1인당 GRP의 연평균 증가율도 전국수준 5.5%의 절반에도 못미치는 2.1%에 머물러 상대적으로 낙후성을 보이고 있다.

한편 1971년에서 1981년에 이르는 11년간의 總雇傭構造의 변화를 보면, 전국 전산업의 총고용 성장률은 170.2%였으나, 대구는 75.8%로 전국 증가율의 반에도 미치지 못하고 있다.

〈表 1-52〉 主要都市別 1人當 GRP 比較(1975~1981) (단위: 달러)

區 分	1975	1977	1979	1981
全 國	573	966	1,546	1,607
大 邱	657	955	1,522	1,494
서 울	—	1,290	2,031	2,113
釜 山	656	1,115	1,739	1,678
仁 川	435	795	2,225	2,299

資料: 대구직할시, 《시정통계》, 1984.

이에 따라 산업별 就業構造面에서도 커다란 변화가 일어났다. 즉, 1971년도의 산업별 종업원수의 구성비 중 제조업이 40.7%로 가장 높고, 都小賣業이 26.2%를 차지하고 있던 것이, 1981년에는 이것이 역전되어 도소매업이 35.6%, 제조업이 34.3%로 나타난 동시에, 기타 3차산업의 비중도 높아져 경제의 서비스화 경향을 확연히 드러내 주고 있다.

〈表 1-53〉 大邱市 産業別 總雇傭 變化

區 分	1971		1981		成長率 (%)
	雇傭者數(人)	%	雇傭者數(人)	%	1971~1981
合 計	156,671	100.0	277,199	100.0	75.8
農 · 林 · 漁 業	—	—	15	0.0	
鑛 業	431	0.3	53	0.1	— 96.5
製 造 業	63,782	40.7	95,187	34.4	49.2
電氣·가스·水道	794	0.5	723	0.3	— 8.9
建 設 業	586	0.4	5,927	2.1	911.4
都 · 小 賣 業	41,020	26.2	98,741	35.6	140.7
運 輸 · 通 信 業	15,001	9.6	15,589	5.6	3.9
金 融 · 保 險 業	2,106	1.3	17,399	6.3	726.2
其 他 서 비 스 業	32,951	21.0	43,565	15.7	32.2

資料: 내무부, 《한국도시연감》, 1972, 1982.

3차 産業의 비중이 높아지는 것은 都市經濟로서는 필연적인 현상이라 하겠으나, 대구의 경우는 생산기능을 보완해주고 대구경제권의 中樞管理機能을 확충하는 측면의 産業支援型 서비스 기능보다는 단순향락위주의 기능만 비대해지고 있는 데에 그 문제의 심각성이 있는 것이다.

〈表 1-54〉 大邱市 産業別 事業體數 및 從業員數(1981年)

區 分		事 業 體		從 業 員		業體當 平均 從業員數 (人/個所)
		個 所	%	人	%	
合 計		76,049	100.0	277,199	100.0	3.7
農 · 林 · 漁 業		2	0.0	15	0.0	7.5
鑛 · 工 業	小 計	13,404	17.9	95,240	34.4	7.1
	鑛 業	6	0.1	53	0.1	8.8
	製 造 業	13,398	17.9	95,187	34.3	7.1
S O C 및 서 비 스 業	小 計	61,643	82.1	181,944	65.06	3.0
	電 氣 · 水 道	7	0.1	723	0.3	103.3
	建 設 業	639	0.8	5,927	2.1	9.3
	都 · 小 賣 業	46,779	62.3	98,741	35.6	2.1
	運 輸 · 通 信	497	0.7	15,589	5.6	31.4
	金 融 · 保 險	2,653	3.5	17,399	6.3	6.6
	其 他	11,068	14.7	43,565	15.7	4.0

資料 : 내무부, 《한국도시연감》, 1982.

1981년 말 현재 대구시내 산업별 事業體數를 보면, 총 7만 6,049개소 중에서 도소매업소가 62.3%, 제조업체가 17.8%, 기타 서비스업소가 14.7%로서, 먹고 마시는 소비위주의 업소가 77%나 된다. 업체당 평균 從業員數도 전산업 평균이 3.7명이고, 전기·가스·수도업이 103.3명으로 가장 많으며, 운수·창고·통신업이 31.4명, 제조업이 7.1명이며, 도소매업은 2.1명으로서 가장 영세한 것으로 나타났다. 전체적으로 업체수는 많으나, 소규모의 영세업체가 대부분을 차지하고 있는 것이 대구산업의 가장 큰 특징으로 전형적인 中小企業都市의 색채를 띠고 있다.

II. 工業의 停滯와 輸出伸張의 相對的 鈍化

1960년대의 고도성장기간에 首都圈과 釜山圈의 눈부신 성장에 눌려 상대적인 낙후를 면치 못했던 대구의 공업은 1970년에 들어와서도 이러한 추세가 그대로 지속되었다. 물론 대구주변 지역에는 포항종합제철과 구미전자공업단지가 본격적인 가동에 들어감으로써 활기를 띠었으나, 대구 자체의 공업은 상대적인 정체상태가 그대로 이어졌다. 즉 〈表 1-55〉에서 보듯이, 1972년에 대구공업이 전국공업에서 차지하던 비중은 사업체수가 9.6%, 종업원수 6.6%, 부가가치 4.1%이던 것이, 10년 뒤인 1981년에는 각각 9.4%, 7.0%, 4.8%를 나타내어 그다지 개선된 모습을

나타내지 않고 있다.

〈表 1-55〉 大邱 工業의 全國比重 推移(1972~1981) (단위: %)

區 分	1972	1975	1979	1981
事業體數	9.6	10.4	9.5	9.4
從業員數	6.6	5.8	7.0	7.0
附加價值	4.1	5.0	5.9	4.8

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

그러나 1970년대 이후 大邱工業의 절대적인 성장상을 보면, 工場數는 1972년의 2,277개에서 1981년에는 3,126개로 늘어나, 10년동안에 약 1.37배의 증가를 나타냈다. 공장 從業員數도 1972년의 6만 4천명에서 1981년에는 14만 4천명으로 늘어나, 기간 중 약 2.25배의 고용증대가 있었다. 또한 공업 附加價值(경상시장가격)도 1972년의 366억원에서, 1981년에는 7,348억원으로 증가해, 기간 중 약 20배의 신장세를 보였다.

〈表 1-56〉 大邱 工業의 概況(1972~1981)

區 分	1972	1975	1979	1981
事業體數(個)	2,277	2,359	3,028	3,126
從業員數(人)	64,029	82,659	148,461	144,044
附加價值(백만원)	36,600	140,700	541,747	734,813

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

한편 工業構造를 보다 세부적 업종으로 나누어 보면, 특히 대구시의 주종공업인 섬유工業의 경우는 업체수, 종업원수, 부가가치면에서 그 비중이 오히려 상승되었거나, 보합세를 유지하고 있었다.⁴⁶⁾ 섬유공업 다음으로 중요한 機械·金屬工業은 1970년대에 들어와 纖維機械와 工作機械

46) 이 시기 대구 섬유공업의 두드러진 特徵으로는 ① 1970년에 들어 정부의 강력한 수출 드라이브정책에 의해 대부분의 기업이 수출품의 생산에 참여하게 되고, 製織施設이 비약적으로 늘어남에 따라 輸出依存度가 극도로 높아졌으며, ② 이와 같이 수출의 급격한 증대에 따라 판매와 생산자사이에 分業關係가 뚜렷해지고, 대구의 中小 織物業者들은 원사 메이커나 대형수출업체 및 綜合貿易商社의 하청 임직업체로 전락되었다. ③ 또한 직물업계의 주종제품도 나일론 타프타는 폴리에스터 조젯트(갈갈이 쿨론)에 그 왕좌를 물려주게 되고, 같은 合纖織物이면서도 폴리에스터사를 원료로 하는 제품이 압도적 우위를 점했다. ④ 그리고 1970년대에는 직기의 성능면에서도 비약적인 발전으로, 즉, 종전까지의 수·족담기시대에서 완전히 벗어나, 원 텃치직기나 자동화시설이 대량도입되었다. 뿐만 아니라 이 기간 중 원사를 생산하는 업스트림부문이 강화되었다는 것 등이다.

등을 중심으로 품질향상 및 해외시장개척이 이루어지고, 국내 자동차공업의 발달과 함께 自動車部品工業의 급속한 신장 등 제품생산면에서는 다양화되는 추세를 보였다. 그러나 전반적인 업종구성은 여전히 종래의 패턴을 벗어나지 못한 가운데, 성장업종의 유치나 成長主導의 대기업의 설립 등, 이 업계의 획기적 발전을 기할 수 있는 계기를 마련하지는 못했다.

다음으로 1970년대를 통해 업체수, 종업원수 및 부가가치면에서 가장 현저한 신장을 보인 업종은 제1차 금속(주물)이며, 食料品工業은 수도권의 대기업이 중소기업분야에 진출해옴으로써 크게 도태되었다.

〈表 1-57〉 大邱市 工業構造의 推移(1972~1981)

區 分	事 業 體 (個所)		從 業 員 (人)		附加價值 (백만원)	
	1972	1981	1972	1981	1972	1981
合 計	2,277	3,126	64,029	144,004	366	7,348
輕 工 業	1,583	2,096	46,106	110,758	295	5,716
食 料 品	223	153	5,731	5,744	80	1,477
纖 維 · 衣 服	1,018	1,555	33,995	94,336	183	3,824
製 材 · 家 具	130	120	1,020	1,802	7	80
紙 類 · 印 刷	126	150	3,436	3,646	20	193
其 他	86	118	1,924	5,230	5	142
重 化 學 工 業	694	1,030	17,923	33,216	71	1,632
非 鐵 金 屬	112	90	890	2,154	4	152
化 學 · 石 炭	100	191	2,835	4,436	9	290
1 次 金 屬	38	89	1,408	4,505	7	340
機 械 · 金 屬	444	660	12,790	22,151	51	850

資料: 〈表 1-53〉과 같음.

한편 1970년대 이후 대구의 공업화는 종전까지의 自由立地에서 벗어나, 의도적으로 工業團地를 조성하여 추진한 데에 그 특징이 있다. 1960년대에 조성된 제3공업단지는 1972~1973년 사이에 본격적으로 가동이 이루어졌고, 1970년대에는 서대구공단, 검단공단, 비산염색공단이 조성되어, 대구의 공업발전과 시설의 근대화에 큰 밑거름이 되었다. 그러나 공단입주업체의 대부분이 섬유공업이고, 이들은 대부분 최신시설의 도입과 증설을 도모함으로써 섬유 일변도의 공업구조를 더욱 심화시켰다고 생각된다.

한편 1960년대에 연평균 60%이상의 신장률을 나타냈던 대구의 輸出은 1970년대에 접어들어

신장세가 크게 둔화되었다. 1972년에 1억달러를 넘어섰던 대구의 수출실적은 1981년에 10억달러를 육박하여, 10년동안에 7.6배의 양적 팽창을 보이긴 했다.

〈表 1-58〉 大邱市 工業團地 現況(1984.5)

區 分 工團地	總 面積 (千坪)	事 業 體 (個所)	業 種 別 入 住 業 體 數 (個)			
			纖維類	金屬·機械	1次金屬	其 他
合 計	1,504	532	326	89	41	76
大 邱 工 業 團 地	331	13	75	28	16	14
西大邱 工業團地	713	308	162	61	25	60
飛 山 染 色 工 團	221	82	82	—	—	—
檢 丹 工 業 團 地	239	9	7	—	—	2

資料：중소기업협동조합중앙회 대구경북지부

그러나, 연평균 증가율이 28.4%에 지나지 않음으로써 전국의 연평균 증가율 36.8%를 크게 밑돌았고, 이에 따라 대구 수출의 전국비중도 이 기간 중 7.8%에서 4.6%로 현저히 떨어졌다.

이러한 대구수출의 신장률 둔화와 전국비중 약화현상은 대구의 공업구조 내지 수출구조와 밀접한 관련성을 갖고 있다. 즉, 대구의 공업화가 1960~1970년대를 통해 타지역에 비해 상대적으로 부진하였고, 공업구조와 수출구조가 섬유일변도에서 벗어나지 못함으로써, 石油波動의 충격을 가장 크게 받았기 때문인 것으로 보인다. 결국 景氣變動에 아주 민감한 섬유제품위주의 수출구조를 온존시킴으로써 대구의 수출은 상대적으로 둔화될 수 밖에 없었으며, 불황이 닥칠 때마다 지역경제전체가 심한 진통을 겪게 되었다.

〈表 1-59〉 大邱市 輸出의 全國比重(1972~1981)

表 1-55

區 分 年度	輸 出 實 績 (백만달러)				大邱의 比重 (%)
	全 國		大 邱		
	金 額	前年對比(%)	金 額	前年對比(%)	
1972	1,624.1	52.1	127.2	45.2	7.8
1975	5,081.0	13.9	283.5	19.0	5.6
1978	12,710.6	26.5	575.0	23.7	4.5
1981	21,253.8	21.4	970.8	42.3	4.6

資料：대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

뿐만 아니라, 섬유류 수출의 내부구조에서도 홀치기와 絹織物제품의 비중이 크게 낮아진

대신, 합섬직물의 비중이 급격히 증대되었다. 합섬직물의 수출이 두드러진 신장세를 보인 데에는 1970년에 들어 中東地域에 대한 수출시장의 문이 점차 넓어지고, 나일론 타프타·조젯트 등이 홍콩을 통한 제3국 수출 및 대미 수출이 크게 늘어난데 기인하는 것으로 보인다. 이 당시 대구의 最大輸出商品은 폴리에스터 조젯트이다. 이밖에도 섬유류 중에는 양말, 설탕, 타올, 메리야스 등과 같은 견직물을 비롯하여 자수직물 등도 수출실적면에서 다소의 기복은 있었으나, 대구지역 수출에 일익을 담당했다.

한편 기계·금속제품은 연도별로 다소의 기복은 있었으나, 완만한 증가세를 지속하고 있었으며, 여기에는 자동차부속품, 섬유기계부품 등 일부 技術集約的 產品이 있는 반면, 핀, 못, 낚시바늘, 알루미늄제품 등 金屬製品도 포함되어 있었다. 섬유제품의 수출은 전국적으로 비교우위를 가지고 있는데 비하여, 기계·금속제품의 수출의 비중은 매우 미미하였다.

III. 商業部門의 質的 變化

1970년대는 대구의 商業史에 있어서 流通機構의 양적 성장은 물론, 근대화의 물결이 세차게 일어 질적인 면에서도 커다란 발전을 이룩한 시기였다. 私設市場의 급격한 증가와 더불어 도소매업체도 크게 늘어났고, 百貨店과, 슈퍼마켓, 슈퍼체인 등 大型小賣店時代가 본격화됨으로써 유통구조에 일대변혁이 일어났다. 그리고 동인지하상가의 조성을 계기로 지하상가 시대가 개막된 때이기도 하다.

〈表 1-60〉 大邱市 都·小賣業部門의 伸張 推移(1971~1982)

區	分	1972	1976	1979	1982
事業體數 (個)	小 計	22,085	22,068	24,961	32,072
	都 賣	2,104	1,309	1,490	2,090
	小 賣	19,981	20,759	23,471	29,982
從業員數 (人)	小 計	41,206	39,577	51,552	60,727
	都 賣	5,764	4,515	7,417	8,338
	小 賣	35,442	35,062	44,135	52,389
販 賣 額 (백만원)	小 計	129,719	253,808	760,812	1,023,751
	都 賣	75,948	103,006	266,539	349,115
	小 賣	53,771	150,802	494,273	674,636

資料: 경제기획원, 《도소매업센서스》, 각 연도.

하지만 1970년 7월 京釜고속도로의 개통과 계속되는 경제력의 서울集中現狀은 전통적인 대구의 都賣機能을 상대적으로 크게 위축시켰다. 즉, 1970~1976년 사이에 전국의 都小賣業體數는 22.9%가 늘어난 데 비해, 대구의 그것은 오히려 줄어들어 대구유통산업의 위축상을 단적으로 말해주고 있다. 대구는 이제 전국적인 도매기능은 거의 찾아 볼 수 없고, 大量消費都市 내지 주변지역에의 소규모 중개기능만 담당하고 있다. 특히 전국을 대상으로 하던 대구의 직물도매기능은 1970년대에 완전히 퇴색해 버리고, 대구에서 만들어진 직물제품조차 서울의 綜合都賣市場(동대문시장, 방산시장, 광장시장)을 통해 구입하는 실정이 되어버렸다.

한편 섬유도매기능이 약화된 대신, 建築材料, 醫藥品, 機械 등의 도매업체는 수적으로도 늘어났고, 전국비중도 다소 높아졌는데, 이것은 역외 대 메이커의 대구시장 관리를 위한 直販店이나 출장소의 성격을 띠고 있음을 앞에서 설명한 바와 같다.

다음으로 1970년대의 대구지역 流通構造를 도소매업의 구성관계를 중심으로 살펴보면, 1971년 중 전체 상업에서 도매업이 차지하는 비중은 업체수가 9.5%, 연간매출액이 58.5%로 나타나 전국의 동비율 4.9%, 40.7%보다 다소 높은 수준을 유지하고 있었다. 이는 大邱의 도매기능이 1970년대 초까지만 하더라도 嶺南商圈의 중추적 기능을 수행하고 있었음을 나타내는 것이라 하겠다. 그러나 1970년대의 중반을 넘기면서 발전이 지체되어, 1982년 말 현재 대구의 도매업이 전도소매업에서 차지하는 비중은 사업체수가 6.5%, 판매액은 34.1%로 떨어졌다. 특히 사업체수에서는 전국의 도매상이 2.8%로 늘어난 데 반해 제자리걸음에 멈추었다.

IV. 消費者物價 動向

1970년대 대구의 소비자물가동향을 보면, 1973년을 제외하면 항상 두자리 숫자의 높은 상승률을 보였다. 이것은 물론 두 차례의 석유파동으로 인한 에너지 자원가격의 상승, 農水産物價格의 상승, 주택 및 부동산 가격의 상승 등이 주된 요인이라고 볼 수 있는데, 1972년에서 1981년에 이르는 10년 동안에 연평균 상승율은 17.3%였다.

이는 전도시 소비자물가상승률과 같은 것인데, 연도별로는 다소의 차이가 있다. 특히 이 기간 중 가장 높은 물가상승이 있었던 연도는 석유파동 이후의 2년간이었다. 즉, 제1차 파동이후인 1974년과 1975년, 제2차 파동이후인 1980년과 1981년은 모두 20%이상의 消費者物價上昇이 있었다.

한편 1972년에서 1981년에 이르는 10년 동안에 소비자물가지수의 類別 변동상황을 보면,

〈表 1-61〉에서 보듯이 食料品費가 약 5배나 올라 가장 높은 상승률을 보였으며, 그 다음이 被服費(4.4배), 雜費(4배), 住居費(3배)의 순이었으며, 光熱費(2.5배)의 상승이 가장 낮았다.

〈表 1-61〉 大邱市 消費者物價 類別指數(1972~1981) (1980=100)

區 分	總指數	食料品費	住居費	光熱費	被服費	雜 費
加 重 值	1,000.0	408.1	152.2	52.2	103.9	273.6
1972(A)	27.6	25.6	37.7	24.7	26.4	30.0
1975	44.0	44.5	46.1	38.1	41.3	44.4
1978	64.6	68.7	61.0	59.6	58.3	63.1
1981(B)	121.6	127.2	112.4	129.3	116.3	118.6
B/A(배)	4.40	4.97	2.98	2.48	4.41	3.95

資料: 경제기획원 물가조사국, 《물가연보》, 각 연도.

V. 金融構造의 多變化

실물경제를 뒷받침하는 금융산업의 동향을 보면, 1970년대에 많은 변화가 있었다. 즉, 1972년의 8·3 緊急經濟措置 등에 따라 대구에서도 短資會社와 수많은 相互信用金庫가 신설되었으며, 證券會社와 投資信託會社, 그리고 보험회사의 지점 내지 지사가 대거 대구에 진출해 옴으로써, 이른바 第2 金融圈이 활황을 보여 지역금융시장이 크게 다변화되었다.

또한 제 1 금융권인 銀行의 점포도 1972년에는 53개이던 것이 1981년에는 119개로 10년동안에 66개가 늘어났으며, 이 기간 중 은행점포의 증가추이는 〈表 1-62〉와 같다. 특히 地方銀行인 대구은행의 소형점포가 가장 많이 늘어났으며, 1970년대 후반에는 특수은행의 점포증가도 많았다.

이러한 점포수의 증가와 소득수준의 향상 및 通貨量의 증가, 그리고 인플레이 추세에 따라 대구 시내 금융규모도 크게 확대되었으나, 제2금융권의 비약적인 성장에 따라 은행의 기여도는 크게 위축된 것이 1970년대의 지역금융에 있어서 가장 두드러진 특징의 하나가 되고 있다.

그리고 제 2 금융권이 발전하면 할수록, 특히 투자신탁·보험회사·증권회사의 신탁고나 여신고가 늘어나서 지역의 金融貯蓄實績이 늘어나면 늘어날수록, 지역자금의 역외유출이 촉진된다는 데에 대구경제의 큰 약점이 있다. 이것은 대구지역의 문제뿐만 아니라, 전체 지방경제의 공통된 문제로서 영세한 지역자금의 서울로의 유출을 방지하고, 오히려 역외자본을 지방에 도입하는 것이 지방경제를 활성화시키는 근본적인 방법의 하나가 될 것이다.

〈表 1-62〉 大邱市内 銀行店鋪 推移(1972~1981) (단위: 個)

區 分		1972	1976	1981
韓 國 銀 行		1	1	1
市 中 銀 行	조 흥	3	4	6
	상 업	3	4	5
	제 일	3	4	6
	한 일	3	3	5
	서울신탁*	4	7	7
	대 구	15	35	48
	小 計	31	57	77
特 殊 銀 行	외 환	1	2	3
	기 업	3	4	6
	국 민	4	4	7
	주 택	2	3	4
	농 협	9	11	17
	수 협	—	—	2
	산 업**	3	4	6
	장 기**	—	—	1
小 計		20	25	41
合 計		53	83	119

註: * 1976년 8월 5일 서울은행과 신탁은행이 합병하여 서울신탁은행이 되었음.

** 두 은행은 비통화금융기관임.

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

또한 1970년대에는 공업과 상업 등 實物經濟部門에서 나타난 대구경제의 상대적 위축현상이 金融部門에도 그대로 나타나, 대구금융의 전국비중은 저하 내지 저수준에서의 보합세가 유지되었다. 즉, 1972년에서 1981년에 이르는 제3,4차 계획기간 동안 대구의 예금은 10.9배로 증가하여 괄목할만한 성장을 보였다고는 볼 수 있으나, 전국의 12.9배 성장에는 미치지 못했다.

이에 따라 大邱預金의 전국비중은 이 기간 중 4.6%에서 3.9%로 낮아졌다. 한편 貸出金의 성장속도는 전국수준을 다소 앞섰는데, 이에 따라 대출금의 전국비중은 3.9%에서 4.4%로 높아졌다. 그러나 이러한 수치는 대구의 실물경제부문이 국민경제에서 차지하는 비중에 비해서는 훨씬 낮은 것이다.

그리고 1970년대 초 대구시내의 어음交換高는 전국실적의 5% 이상을 차지하고 있었으나,

〈表 1-63〉 大邱市内 預·貸出金 推移 및 全國比重(1972~1981)

區 分	預 金 (억원)			貸 出 金 (억원)		
	全 國	大 邱	%	全 國	大 邱	%
1972 (A)	13,239	613	4.6	11,980	468	3.9
1975	27,792	1,190	4.3	29,055	1,344	4.7
1978	77,651	3,380	4.4	66,090	2,798	4.2
1981 (B)	170,508	6,660	3.9	164,817	7,324	4.4
B/A (배)	12.9	10.9	—	13.8	15.6	—

資料 : 한국은행, 《통계월보》, 1977 및 《조사통계월보》, 1982.

〈表 1-64〉 大邱市内 어음交換高 및 不渡率 推移(1972~1980)

區 分	어 음 交 換 額 (억원)			不 渡 率 (%)	
	全 國	大 邱	%	全 國	大 邱
1972	110,782	5,878	5.3	0.31	0.40
1975	342,854	16,260	4.7	0.14	0.24
1978	1,581,002	46,750	3.0	0.08	0.17
1980	3,258,117	80,589	2.5	0.17	0.50

資料 : 〈表 1-62〉와 같음.

그 후 해마다 비중이 떨어져 1980년대에 들어와서는 2% 수준에 미치고 있어, 대구경제의 商去來活動과 유통기능이 저위에 머물고 있음을 나타내 주고 있다. 이에 반해 대구의 어음不渡率は 상대적으로 높아져 만성적인 運轉資金의 부족과 결제자금의 꺾박상을 드러내고 있다. 즉, 1972년에 부도율이 0.40%이던 것이 1980년에는 0.50%로 상승하여, 전국수준의 0.17%와는 상당한 차이를 보이고 있다.

이처럼 대구의 부도율은 만성적으로 높게 나타나는 것은, 영세한 지역자금의 역외유출, 他人資本에 의한 무리한 시설확장, 景氣對應力이 약한 섬유일변도의 공업구조와 下請·賃加工業體의 과다에서 비롯되는 것으로 보인다.

第7節 直轄市 昇格以後의 大邱經濟(1981~1991)

I. 韓國經濟의 構造的 轉換과 大邱經濟圈의 擴大

한국경제는 지난 20여년 동안 양적 확대와 질적 개선을 병행적으로 이룩하여 왔으나, 1970년대 후반의 제2차 석유파동과 1980년 미증유의 흉작이 겹쳐 마이너스의 성장을 경험하였다.

이렇게 경제가 어려워진 이유는 2차 석유파동, 사회적 불안정, 추곡의 작황부진과 같은 경제운용 외적인 요인에 있는 것만은 아니었으며, 보다 근본적인 원인은 한국의 경제·사회 여건이 변모하여 개발초기에 성공을 가져왔던 경제운용방식을 전환해야 하는 단계에 이르렀으나 이에 적절하게 대응하지 못한 데 있었다. 이에 따라 몇가지의 부작용이 파생되었는데, ① 인플레이의 누적, ② 경제 사회에 비능률적인 요인의 잠재, ③ 소득계층간·지역간 불균형의 확대 등이 그것이다.

이에 제5차 경제개발5개년계획(1982~1986년)에서는 이를 시정하고자 안정·능률·균형을 기본이념으로 삼아 ① 경제안정기반을 정착하여 국민생활을 안정시키고 경쟁력 강화와 국제수지 개선을 이룩하고, ② 지속적인 성장기반을 다져 고용기회를 확대해 소득을 증대시키며, ③ 소득계층간·지역간의 균형발전으로 국민의 복지를 증진시킨다는 등의 목표를 설정하여 적극 추진하였다. 즉, 한국경제의 발전단계에 맞추어 제5차 계획에서는 1980년대 대내외적 여건변화와 한국경제가 당면하고 있는 과제를 명확히 하여 이에 효율적으로 대처할 수 있도록 그 방향을 제시하는 데 중점이 주어진 것이었다.

또한 1980년대 후반에는 안정성장 기반을 더욱 공고히 하여 선진사회의 기반을 구축하고, 증대된 경제력에 기초한 국민복지증진에 역점을 두어 제6차 경제개발5개년계획(1987~1991년)에서는 ① 경제·사회의 제도발전과 질서의 선진화, ② 산업구조의 개편과 기술입국의 실현, ③ 지역간·소득계층간의 균형발전과 국민생활의 질적 향상을 기할 수 있는 제반 정책을 효율적으로 추진하도록 계획되었다. 그러나 이와같은 경제개발계획에도 불구하고 한국경제발전의 필연적 결과로서 노동자세력의 증대와 저임금·장시간 노동에 기초한 자본축적의 한계가 복합적으로 작용하여 1987년 7·8월 대규모의 노사분규가 발생하기도 했다.

한편 대구는 1981년 7월 1일 직할시로 승격되어 청사에서 뜻깊은 현판식을 가졌다. 이와 함께 <表 1-65>에서 보듯이, 주변지역의 편입에 따라 행정구역, 인구 등 도시규모가 크게 확대되면서 행정·재정·경제적으로 그 기능이 강화되고 경제권이 확대된 것도 사실이다. 특히 대구시의 법적 지위가 종전의 보통시에서 직할시로 승격됨으로써 시역의 팽창이라는 측면보다는,

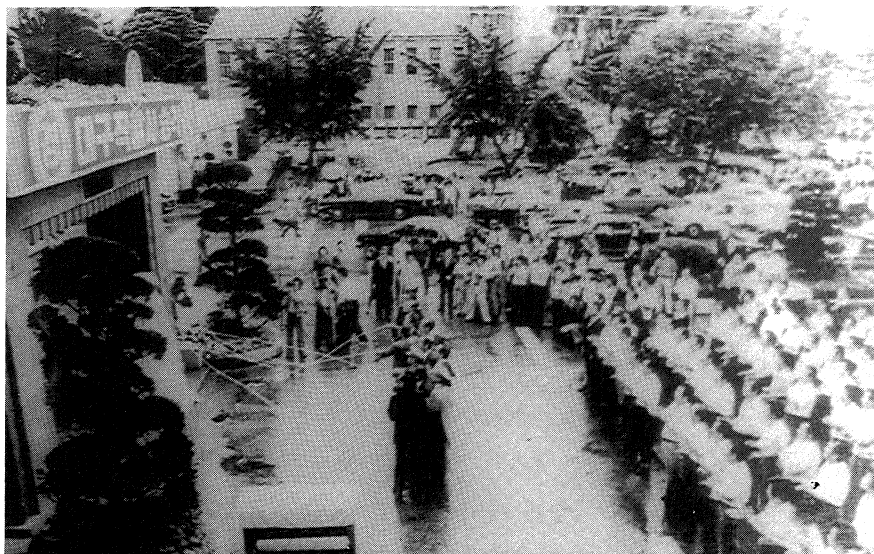
大邱市の 直轄市 昇格에 따른 編入地域 現況

區 分	單 位	公 山	城 西	月 背	漆 谷	安 心	孤 山	計
人 口	名	10,709	32,595	41,240	32,595	38,090	18,704	170,529
面 積	km ²	92.48	24.64	32.0	47.92	41.99	37.93	276.96
製 造 業 體 數	個	5	212	254	96	106	71	746
輸 出 額	달러	4,241	24,160	51,929	11,089	—	—	91,419
地 方 稅	백만원	40	487	508	183	374	194	1,786
歲 入 決 算 額	백만원	30	232	235	123	373	155	1,148
歲 出 決 算 額	백만원	73	78	96	73	131	78	503

資料：대구시, 대구은행, 《大邱地域 經濟分析》, 1981. 5~5월호, p. 58.

오히려 인구가 160만명이 넘는 대도시이면서도 불합리한 법적인 지위때문에 시민들의 경제활동에 비능률과 낭비가 따르고 도시발전이 상대적으로 정체될 수 밖에 없었던 제도적 굴레에서 벗어나 산업경제·사회 등 모든 분야에서 자생적인 발전의 기틀을 확보했다는 점에서 매우 중요하다.

그러나 한국경제의 구조적 전환노력과 함께, 대구경제 역시 1980년대에 접어들면서 대내외적인 시련을 겪지 않을 수 없었다. 우선 밖으로는 지역의/주종공업인 섬유류에 대한 선진국의 지나친 수입규제로 해외수요가 감소하는 등 해외요인이 지역업계에 불황의 충격을 주었으며, 안으로는 안정추구에 따른 금융긴축의 강화로 내수경기가 얼어붙고 대형금융사고가 터지는 등 어려움이



〈사진 1-12〉

대구직할시 승격 현판식 광경(1981. 7. 1)

많았다. 게다가 1960년대 이후의 성장 과정에서 빚어진 구조적 문제점들을 대구경제라고 외면할 수 없었으며, 특히 서비스 산업의 이상 비대화 현상은 사회문제

로까지 번지게 되었다.

II. 總量規模의 擴大와 大邱經濟의 서비스化

大邱는 1981年 7月 1日 直轄市 昇格과 더불어 <表 1-66>에서 보듯이, 약 10여년만에 行政·財政·經濟的으로 그 機能이 크게 강화되었으며, 도시 기반시설이 많이 확충된 것이 사실이다. 즉, 총량규모면에서는 크게 확대된 것으로 볼 수 있다.

<表 1-66> 指標로 본 大邱市勢의 成長

區 分	單 位	1981	1992	增 加	%
人 口	千名	1,778	2,286	508	21
家 口	千家口	399	662	263	66
財 政	億원	1,161	17,437	16,276	1,402
公 務 員	名	5,594	10,150	4,556	81
住 宅(普及率)	千戶(%)	178(52.8)	371(66.8)	152(14.0)	85
上 水 道(普及率)	千톤(%)	400(91)	1,220(98)	820(7)	205
1人 1日給水量(普及率)	ℓ(%)	209	415	206	99
下 水 道(普及率)	km(%)	1,117(43)	2,953(78.7)	1,836(35.7)	164
道 路(建設率)	千m ² (%)	12,480(57.7)	17,849(59.9)	5,369(2.2)	43
道 路 率	%	13.4	15.9	2.5	
道 路(鋪裝率)	千m ² (%)	3,982(44)	15,473(86.7)	11,491(42.7)	289
自 動 車	千臺	39	315	276	708
製 造 業 體	個	3,151	4,826	1,675	53
輸 出	百萬弗	665	2,607	1,942	292
公 園 開 發	km ²	5.3	17.1	11.8	223
學 校(學生數)	個(千名)	312(553)	481(611)	169(58)	54
電 話	千臺	175	818	643	367

資料：大邱市報, 1993年 7月 1日字 2面.

그러나 이러한 外形의 成長에도 불구하고 脫製造業化 傾向의 深化와 中樞管理機能의 不備로, 실질적인 經濟力은 매우 취약한 상태에 있어, 명색이 전국 3대도시의 하나인 大邱의 전국경제에서의 位相은 <表 1-67>에서 보듯이, 인구는 5%, GRP는 4%에 지나지 않는다. GRP의 비중이 인구의 비중을 항상 밑돌고 있다는 사실은 대도시의 경제력이 너무나 취약하다는 것을 단적으로 말해주는 것이다. 이러한 사실은 1인당 GRP면에서도 그대로 나타나고 있다. 1970년대 이후 大邱의 1인당 GRP는 全國 主要都市에 비해 줄곧 낮았을 뿐 아니라, 전국 平均水準에도 못미치며, 1991년의 경우 3,815천원으로 全國 15개 市·道중 1인당 GRP 順

〈表 1-67〉 大邱市 總生産關聯 主要指標의 推移

구 분	單位	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	平均
市内 總生産(經常) (全國對比 構成化)	10億원 %	3,156.6 (4.0)	3,729.4 (4.1)	4,407.5 (4.2)	5,345.4 (4.3)	5,930.4 (4.2)	7,007.5 (4.0)	8,490.4 (4.1)	
經濟成長率(不變)			15.6	12.5	9.8	3.6	11.9	4.7	9.6
농·림·어업			19.8	11.5	-26.7	4.3	-2.3	-11.3	-2.0
광 공 업			21.6	14.6	6.8	-1.6	5.7	-1.5	7.3
(제 조 업)	%		(21.8)	(14.6)	(6.8)	(-1.7)	(-1.6)	7.3	
건설 및 전기 ¹⁾			6.2	13.8	17.2	15.8	42.7	2.7	15.7
서 비 스 업 및 기 타 ²⁾			15.7	12.5	10.3	4.1	11.4	5.9	9.9
生 産 構 造(經常)									
농·림·어업		1.2	1.1	1.1	0.9	0.9	0.9	0.6	
광 공 업		35.5	36.3	37.7	39.4	37.9	33.2	33.2	
(제 조 업)	%	(35.5)	(36.3)	(37.7)	(39.4)	(37.8)	(33.2)	(33.2)	
건설 및 전기		8.9	8.6	8.4	8.9	10.4	14.7	14.9	
서 비 스 업 및 기 타		54.4	54.0	52.8	50.8	50.8	51.2	51.3	
1 인 당 市 内 總 生 産 ³⁾	千원 달러	1,541 1,771	1,793 2,035	2,088 2,539	2,496 3,417	2,731 4,068	3,183 4,498	3,815 5,201	
人 口 (全國對比 構成比)	千名 %	2,048 5.0	2,080 5.1	2,111 5.1	2,141 5.1	2,172 5.1	2,201 5.1	2,225 5.1	

註：1) 이 밖에 가스·수도업이 여기에 포함됨.

2) 도소매·음식숙박업, 운수·창고·통신업, 금융·보험·부동산 및 사업서비스업, 사회및 개인서비스업, 정부 및 민간 비영리서비스생산자

3) 1인당 시내총생산 = 시내 총생산 / 시내 총인구

資料：統計廳, 《1985~1991年度 道内總生産 推計結果》, 1993, p. 37.

位面에서 14位圈에 머물고 있다.

한편 地域總生産(經常價格)을 기준으로 본 大邱의 생산구조는 위 표에서 보듯이, 1991년에 대구시내의 총생산액 8조 4,904억원 중 建設·電氣·가스·水道業을 제외한 서비스업 등 3차 산업이 51.3%로 가장 큰 비중을 차지하고 있으며, 그밖에 製造業이 33.2%, 건설업 등이 14.9%, 農林漁業이 0.6%를 각각 차지하고 있다. 이같은 구성비는 1985년에 비해 건설활동의 증대에 힘입어 건설업의 비중이 6.0%포인트나 증가한 반면, 광공업이 주종업종의 성장부진으로 2.3%포인트 감소했고, 서비스업도 3.1%포인트 감소한 것이다. 그러나 비중면에 있어 지역경제

생산의 절반이상을 都小賣·飲食·宿泊業 등 서비스업이 차지하고 있어, 大邱經濟는 서비스中心의 經濟라는 것을 단적으로 보여주고 있다.

한편 經濟成長率(不變)을 보면, 1985~91년 중 제조업의 경우 지역 주종산업인 纖維業의 부진으로 성장이 둔화된 반면, 建設業이 큰 폭으로 성장하였고, 금융보험업 등 서비스업도 비교적 높은 성장을 시현하여 연평균 9.6%의 신장세를 보였다. 그러나 1991년에는 纖維, 一般機械 등 주종업종의 불황으로 제조업은 「마이너스」의 成長을 나타내었으며, 住居用 建築의 감소로 인한 건설업 부진, 도소매업의 성장둔화 등으로 전체 성장률은 4.7%로 크게 둔화되었다.⁴⁷⁾

〈表 1-68〉 大邱地域의 産業別 就業構造 (단위: 천명)

구 분	1989		1990		1991		1992	
		%		%		%		%
全 産 業	796	100.0	871	100.0	909	100.0	937	100.0
農林漁業	27	3.4	18	2.0	17	1.9	17	1.8
鑛 工 業	268	33.7	307	35.2	307	33.8	291	31.1
製 造 業	267	33.5	306	35.2	307	33.8	291	31.1
SOC 및 其他	501	62.9	546	62.7	585	64.4	629	67.1

資料: 大邱直轄市, 《大邱統計月報》, 1993. 9.

또한 大邱의 産業別 就業構造를 보면, 1992년 말 현재 總就業者 93만7천여명 중 農林業이 1만 7천여명으로 1.8%, 鑛工業이 29만 1천여명으로 31.1%, 社會間接資本 및 기타 「서비스」業이 62만 9천여명으로 67.1%를 차지하고 있는 것으로 집계되고 있다. 이렇게 보면 生産構造와 就業構造간에는 큰 차이가 없다.

결국 附加價值 뿐만 아니라 就業構造面에서도 대구는 都市化의 진전과 더불어 3次産業의 비중이 압도적으로 높아, 先進國의 대도시가 지니고 있는 産業構造 형태를 그대로 나타내고 있는 것처럼 보인다. 그러나 그 內容과 質을 보면, 대구지역 제조업의 경우, 지나친 纖維一邊倒의 공업구조에다가, 높은 下請生産依存度와 低生産性, 그리고 낮은 技術水準이 큰 문제가 되고 있으며, 3차 産業의 경우에도 금융·보험·정보·무역서비스 등 産業支援서비스업이 취약하여 배후지역에 대한 중추관리기능을 제대로 수행하지 못하고 있는 問題點을 안고 있는 것이다.

47) 統計廳, 《1985~1991年度 道內總生産 推計結果》, 1993, pp. 35~36.

III. 工業部門의 相對的 萎縮과 構造改善

1980년에 들어서는 수출시장에서 타 국가와의 경쟁은 더욱 격화되는 한편, 국내적으로도 단순노동력의 점진적인 고갈과 그에 따른 노임상승 압력이 가중되고 있는 가운데 때로는 원화절상까지 겹쳐서 지역공업의 절대적인 성장속도가 둔화되고 있는 실정이다.

그러나 대구시는 1980년대 후반부터 섬유편중의 단선적인 지역산업구조를 발전적으로 개편하고 국제화시대에 대비한 첨단산업도시로 탈바꿈하기 위해 尖端產業團地를 조성, 지역산업의 대내외 경쟁력 제고 및 지역잠재력을 최대로 활용하여 활기찬 도시로의 발전을 기대하고 있다. 지역 주종공업의 실태를 살펴보면 다음과 같다.

1. 纖維工業

대구지역의 섬유산업도 그리 순탄한 성장만을 지속한 것은 결코 아니며, 오히려 수많은 시련과 도전 속에서 번영과 쇠퇴를 거듭하여 왔다. 1980년대 초에 일어난 일련의 私債과동과 금융긴축정책은 지역 섬유업계에 심각한 타격을 주었으며, 1980년대 말과 1990년대 초의 빈번한 노사분규와 그에 따른 임금상승은 지역업체 전반에 강력한 구조개선을 요구하였다.

이러한 어려운 여건을 반영, 지역의 섬유산업이 전국 섬유산업에서 차지하는 비중도 점차 낮아져 <表 1-69>에서 보듯이, 1989년 현재 업체수는 16.9%, 종업원수도 20.5%, 생산액과 부가가치는 각각 19.8%, 21.9%를 기록하고 있다. 이처럼 지역섬유산업의 전국 비중이 점차 낮아지고 있는 것은 원사 및 봉제부문이 취약한 데다가, 여타지역의 섬유업체 증설로 지역업체 비중이 상대적으로 떨어졌기 때문으로 풀이된다.

이들 섬유업체들의 지역별·규모별 분포를 보면 1989년 현재 대구에 2,054개, 경북에 717개 업체가 있는데 여기서 한가지 특기할 만한 사항은 대구에는 중소영세업체가 많은데 반해, 경

북에는 신설업체의 증가로 중견 내지 대기업이 많다는 사실이다. 이러한 사실은 지역 섬유업체의 종업원 규모를 보면 더욱 잘 나타난다. 즉 대구에 있는 2,054개 섬유업체 중에서는 20인 미만의 영세업체가 45.8%,

<表 1-69> 地域 纖維産業의 對全國比重 推移(1980~1989) (단위: %)

區 分	1980	1986	1989
事 業 體 數	23.1	18.9	16.9
從 業 員 數	17.0	20.4	20.5
生 產 額	17.7	20.1	19.8
附 加 價 值	20.0	22.4	21.9

資料: 統計廳, 《鎭工業統計調查報告書》, 各年度

50인 미만의 업체는 무려 79.4%나 차지한 반면, 300인 이상의 대기업은 16%에 불과하다. 경북의 경우는 20인 미만의 업체는 38.6%, 50인 미만의 업체는 70.3%, 300인 이상의 대기업이 4.5%인 점과 비교해 보면 대구의 섬유공업이 얼마나 영세한가를 알 수 있다. 지역 섬유산업의 이와 같은 영세성은 그 성질상 과당경쟁을 불가피하게 하고, 그 결과 생산·유통과정에서 공정한 부가가치의 배분을 곤란하게 할 뿐만 아니라, 기업수익의 저하를 초래함으로써 동업계의 성장발전을 제약하는 요인으로 작용하고 있다.

한편 대구·경북지역의 섬유산업을 업종별로 보면, 직물업종이 1990년 말 현재 1,966개(전국의 65.8%)로 가장 많고, 그 중에서도 조제트와 나일론 타프타를 생산하는 화섬직물업체가 중심을 이루고 있다. 그리고 직물 다음으로는 메리야스업체 446개(전국의 30.8%)이며, 90%가 종업원 50인 이하의 소기업으로 대기업의 시장침투에 밀려 큰 어려움을 겪고 있다. 또한 염색공업은 대구·경북지역에 총 350여개 업체가 있는데, 최근 들어 폐수처리시설의 미비와 染色加工能力의 不足 및 技術落後 등으로 많은 문제점을 안고 있다.

그리고 품목별 수출구조 추이를 보면 1971년에 전체 섬유수출액 중 46.3%로 가장 높은 비중을 차지했던 홀치기수출은 1979년을 고비로 절대금액 자체가 줄어들기 시작하더니, 1991년에 이르러서는 地域 纖維輸出總額에서 차지하는 비중이 1.9%로 급격히 낮아졌으며, 中國産 등에 밀려 사양화 경향이 가속화되고 있다.

이에 반해 1971년에 900만달러의 수출로 전체 섬유수출의 약 22.0%에 그쳤던 직물류는 1991년에 와서는 수출실적이 28억달러에 달해 지역 섬유수출총액의 약 87.3%를 차지하고 있다. 이같은 직물수출은 대구지역의 섬유를 대표할 수 있을 정도로 그 비중이 높은데, 여기에는 폴리에스테르직물이 약 50.5%, 나일론직물이 약 20%를 차지하고 있으며, 이 밖에도 자수직물, 벨벳, 장갑 등의 수출이 많은 편이다.

그런데 직물류의 수출은 직수출보다는 수출상사의 하청을 받아 생산 수출하는 간접수출이 대부분일 뿐만 아니라, 고부가가치의 수출품인 의류 및 홀치기 등의 수출비중이 줄어 들고 있어 지역섬유제품의 수출구조상 큰 문제점으로 지적되고 있다.

〈表 1-70〉 纖維製品의 輸出構造 推移(1980~1991) (단위: %)

區 分	홀 치 기	織 物	衣 類	絲 類	양 말
1980	9.1	82.9	2.0	4.5	1.5
1986	0.7	91.2	2.2	4.9	1.0
1991	1.9	87.3	4.0	3.7	3.1

資料: 섬유산업연합회, 《섬유연보》, 각 연도.

2. 機械·金屬工業

기계·금속공업은 용지, 용수, 공해발생 등의 입지제약은 크지 않은 반면, 광범위한 부품 공급망과 販路體系를 전제로 하는 고도의 技術·知識集約的 産業이다. 따라서 기계공업은 모든 산업의 생산설비를 공급하는 산업관련 제조상의 입지로 인하여 산업기술의 발전과 보급의 핵으로서의 기능을 수행하게 되며, 주변 또는 배후의 공업지역과의 연계성을 구축할 수 있어 내륙에 위치한 대구가 그 입지의 最敵地라고 할 수 있을 것이다.

1980년대 이후의 대구의 기계·금속공업은 <表 1-71>에서 보는 바와 같이, 업체수는 1981년 730개 업체에서 1989년 현재 1,623개 업체로 2.2배 증가하였으며, 지역 전체 제조업의 34.8%를 차지하여 섬유공업에 이어 두번째의 위치를 차지하고 있다. 또한 1989년 현재 종업원수도 5만 2,220명으로 지역 전체 제조업의 29.5%를 차지하고 있다. 생산액은 1981년 1,907억원에서 1989년에 2조 7,428억원으로 지역제조업 생산액의 54%이며, 對전국 비중은 4.1%이다.

그런데 지역 전체 제조업에서 차지하는 기계·금속공업의 사업체수, 종업원수의 비중이 각각 34.8%, 29.5%인 반면, 생산액 비중은 24.4%로 나타나, 이 산업에는 아직 영세중소기업이 많아 생산성도 타업종에 비해 낮음을 보여주고 있는 것으로 판단된다.

<表 1-71> 機械·金屬工業의 成長推移

年 度	事業體數(個)	従業員數(名)	生産額(백만원)	附加價值(백만원)
1981	730	26,305	190,776	85,006
1982	730	26,305	217,430	97,669
1983	968	28,781	268,561	116,785
1984	840	25,126	314,457	133,510
1985	1,011	34,122	528,293	214,656
1986	1,127	42,035	759,168	289,003
1987	1,331	47,915	1,031,288	410,451
1989	1,623	52,220	2,742,823	619,772

資料: 대구직할시 공업과

3. 尖端産業을 통한 構造改善 誘導

산업구조의 고도화를 위해서는 여러가지 전략과 정책수단이 있겠으나, 大都市 첨단기술산업의 육성을 최우선적으로 고려하는 것이 보통이다. 이러한 사정은 대구의 경우도 예외가 아니어서,

섬유공업에 편중된 지역의 산업구조를 발전적으로 개편하고, 도시경제에 활력을 불어 넣기위한 일환으로 대구지역 첨단산업단지의 조성계획이 1989년 초부터 본격화되었다.

첨단종합단지의 예정지로 성서공단일대를 지정, 1993년 현재 본격적인 개발이 진행중이다. 이 성서공업단지는 대구도심에서 약 8km지점에 위치해 있으며, 총 332만평 규모로서 1차단지 88만평은 1993년 현재 조성이 완료되어 418개 업체가 가동중에 있다. 1988년부터는 2차단지 132만평에 대한 개발계획이 착수되어 현재 기반시설공사가 완공단계에 있다. 특히 대구시 정부가 1995년까지 조성하고자 하는 3차단지는 104만평 규모로 그 조성목표를 첨단산업의 유치를 통한 산업구조의 고도화, 섬유공업에 편중된 지역의 산업구조를 발전적으로 개편, 그리고 국토 동남권의 중추관리기능 강화 등에 두고 있다.

따라서 대구시 정부가 이 단지에 유치를 구상하고 있는 산업은 ① 섬유산업의 사양화를 극복할 수 있는 업종, ② 고부가가치 창출로 인해 고용효과 및 타 산업에 미치는 파급효과가 큰 업종, ③ 기술혁신, 자원절약, 그리고 지식집약적인 첨단산업, ④ 첨단산업과 첨단기술이 접목된 유망산업 등인데, 구체적인 유치희망업종은 <表 1-72>와 같다.

<表 1-72>

大邱 尖端産業團地의 誘致希望業種

-
- 정부 첨단산업발전 7개년계획상 선정업종
 - 신소재산업: 신금속, 고분자 신소재, 파인 세라믹스 등
 - 의료용 기기: 방사선진단 및 치료기, 초음파진단기 등
 - 자동차 부품: 엔진총괄제어 시스템 등
 - 전자 및 기계부품 등
 - 테크노폴리스입지평가 선정 업종
 - 대구 지방대학 특성화 분야: 전자, 유전공학 등
 - 기타 배후공단 관련분야: 기계, 반도체, 통신기기 등
 - 기타 발전유망분야: 로봇트, 정밀기계 등
-

資料: 대구직할시 지역경제국

이처럼 연구단지가 조성되고, 첨단산업연구단지가 본격적으로 가동단계에 들어가면 대구의 공업구조에도 큰 변화가 일어날 것으로 예견된다. 그러나 大邱科學産業研究團地로 조성될 예정이던 성서3차단지에 三星商用車 공장이 입주할 예정이어서, 당초의 추진의도와는 다소 빗나가고 있는 실정이다.

IV. 流通構造의 急變

1980년대의 대구의 유통시장에는 몇가지의 중요한 변화가 있었다. 즉 도매업에서는 절대적으로는 성장했으나, 교통과 정보통신의 발달로 인한 도소매업의 상대적인 쇠퇴와 섬유도매업의 계속적인 부진현상이다. 소매업에서는 재래시장은 쇠퇴하였으나, 백화점 등 현대식 소매기구는 크게 발달하고 대규모의 농산물도매시장의 개설에 따른 비합법적인 농산물유통의 양성화 등이다.

〈表 1-73〉 大邱市 都·小賣業 推移(1982~1992)

年 度	事 業 體 數(個)			從 業 員 數(人)			年 間 販 賣 額(10億 韓 元)		
	計	都 賣	小 賣	計	都 賣	小 賣	計	都 賣	小 賣
1982	32,072	2,090	29,982	60,727	8,338	52,389	1,024	349	675
1986	38,891	4,219	34,672	92,167	23,530	68,637	3,106	1,871	1,235
1988	42,238	5,347	36,891	98,865	26,685	72,180	4,563	3,003	1,560
1990	44,722	5,723	38,999	107,630	31,243	76,387	6,619	4,386	2,224
1991	46,413	6,960	39,453	113,432	34,733	78,699	7,448	4,485	2,963
1992	48,792	7,351	41,441	122,192	39,539	82,653	7,415	4,451	2,964
'92/'82	1.5	3.5	1.4	2.0	4.7	1.6	7.2	12.8	4.3

資料：대한통계협회, 《한국통계연감》, 각 연도,
통계청, 《도소매업 통계조사보고서》, 1991.

먼저, 도·소매업의 변화 중 도매업을 보면 일반적인 경제발전과 더불어 대구지방의 도매업도 상당히 발전하였다. 즉 〈表 1-73〉에서 보듯이, 도매업체수는 1982년 2,090개소에서 1992년에는 7,351개로 약 3.5배, 연간판매액은 약 3,490억원에서 약 4조 4,510억원으로 약 12.8배, 종업원수는 8,338명에서 3만 9,539명으로 약 4.7배 증가하였다.

1980년대 대구의 소매업도 도매업에 비해서 커다란 침체상을 보였다. 업체수에 있어서는 1982년에 비해 1992년에 1.4배, 종업원수에 있어서는 1.6배, 연간판매액에 있어서는 4.3배라는 소폭의 성장을 보였다. 이는 무엇보다도 재래시장의 쇠퇴와 깊은 연관이 있는 것으로 판단되며, 재래시장이 쇠퇴한 이유를 보다 구체적으로 지적해 보면, ① 소비자의 소득수준이 향상되고 식생활패턴이 변화됨에 따라서 재래시장의 시설, 업종, 상품구성 및 판매방식이 변화하는 소비자의 구매방식을 따르지 못했고, ② 시내 중심가의 인구가 시외곽지역에 있는 아파트밀집지대로 이전함에 따라서 시내 중심가의 상주인구가 상대적으로 감소되고, 또 자가용차를 이용한 구매자가 늘어감에도 불구하고 재래시장이 이러한 새로운 구매패턴에 적합하지 못했다는 점, 그리고 ③

이러한 이유로 도심지역에는 대형 백화점이나 쇼핑센터가 발달하여 백화점 지하실이 과거의 재래식시장을 대신해 가고, 외곽의 아파트단지 부근에는 새로운 형태의 슈퍼마켓이나 체인 스토어가 발달하여 소비자의 욕구를 충족시켜 주고 있다는 점 등이다.

한편 1990년대 초 대구 소매업계의 두드러진 특징의 하나로 대형백화점의 경쟁적 개점을 들 수 있다. 기존의 대구, 동아 양대 백화점 이외에, 1990년 들어서 대형백화점이 경쟁적으로 개점하기에 이르렀다. 즉 1993년 9월에 대봉동에 大白프라자가 개점되었는데, 연면적 25만평, 매장면적 1만평으로 단일건물로는 한강 이남에서 제일 크다고 인정되고 있으며, 연면적은 기존의 양대 百貨店을 합한 것보다 크다. 연간 매출액은 약 6천억원 정도로 예상되고 있다.

東亞百貨店도 수성구 지산동에 연면적 1만 6천평, 매장면적 6천 5백평의 池山店을 1995년에 개점할 예정이며, (주) 롯데는 철도청과의 합의에 따라서 대구역에 1천억원 예산으로 연면적 4만평의 민자역사점 백화점을 1993년 11월에 착공하여 1996년말에 완공할 예정이다. 民資驛舍가 준공되면 태평로, 중앙로의 경기가 되살아날 것으로 기대를 모으고 있다. 한편 (주) 대우는 문화동의 舊 國稅廳자리에 호텔점 대형쇼핑센터를 구상중에 있어, 대형백화점의 판매 신장율이 10%전후로 둔화되고 있는 현 추세에 대형백화점의 경쟁적 출점은 地域流通業界에 많은 영향을 미칠 것으로 예상된다.

또한 1990년대에 전국적으로 새로운 편의품 소매점형태인 24시간 운영의 편의점이 급속도로 증가하여 1993년 현재 지역내에 약 100여개 점포가 개점되었는데, 그 중에 로손이 26개소로 가장 많고, LG25시가 6개소, 그리고 자생적 편의점이 상당수 있다. 일반적으로 편의점은 국민소득 6천불 수준에서 생기기 시작하고, 1만불 수준에서는 급팽창하며, 2만불 수준에서는 거의 포화상태에 이른다는 국제적인 추세를 볼 때 대구지역에도 편의점은 계속적으로 증가할 전망이다. 그리고 生必需品을 주로 하는 체인점들도 규모의 이익을 위하여 체인본부들이 연합체를 구성하여 공동상표를 개발하고 공동으로 가맹점을 모집하고 있다. 이러한 新業態의 경쟁적 출점현상은 앞으로 계속될 것으로 보이며, 1993년 8월에 실시된 금융실명제는 재래식 상거래를 유지할 수 없도록 만들기 때문에 재래시장의 쇠퇴를 가속화시킬 것으로 보인다.

한편 1980년대의 또 하나 유통업계의 커다란 변화는 大邱北部農水産物都賣市場이 대구시 매천동에 건설되어 1988년에 개장됨에 따라 유사 도매시장을 포함, 대부분의 도매시장이 새로운 시장으로 이전한 점이다. 대구시 매천동의 20여만평 대지위에 새로운 도매시장을 건설하여 대구청과(주), 농협 및 유사상인들이 법인체(영남청과(주))를 구성하여 1988년 10월에 입주하여, 이것을 계기로 청과물의 유사도매시장이 크게 위축되기 시작하였고, 많은

유사도매상들이 제도권안으로 들어오게 되었다.

또한 物流기능의 효율화를 위하여 유통업계 전체에 큰 영향을 미칠 大邱綜合流通團地가 대구시 북구 검단동에 건설되게 되었다. 都賣, 物流, 貿易센터기능을 겸하게 되어 있는 25만평규모의 종합물류단지의 제1차계획으로 12만평의 대지위에 섬유, 의류, 패션의상, 산업용품, 가전제품, 전기재료, 인쇄업물류, 철강 등 약 2,100개 업체를 입주시킬 예정이다. 이 1차계획에 따라서 1995년도에는 유통단지 기능이 부분적으로나마 시작될 것이고, 2000년까지는 25만평, 3,300억원 규모의 사업이 완성될 계획이다. 그러나 綜合流通團地의 조성과 관련해 예상되는 문제점은 物流團地임에도 불구하고 물류 특히 집배송체계의 효율화를 위한 기능이 미약하고, 오히려 새로운 거대한 시장화할 우려가 있다. 이런 점에 있어서 물류의 효율화를 위한 물류단지 원래의 취지가 희석되지 않을까 생각된다.

V. 第2金融圈의 急伸張과 資金의 域外流出

1980년에 들어서는 우리나라 경제의 규모확대에 따른 자신감과 세계적인 開放化와 自律化의 물결에 자극받아 정부에 의한 金融自律化와 國際化의 청사진이 마련되면서 이러한 노력의 일환으로 시중은행의 민영화를 시작으로 은행을 비롯한 단자회사, 상호신용금고 등 금융기관의 설립기준이 다소 완화되었다.

금융기관의 신설이 대폭 허용됨에 따라 신한·한미은행 등 외국자본 참여에 의한 신설은행의 점포가 지역에 입지하게 되었고, 제2금융권의 금융기관 수도 크게 늘어났다. 이러한 분위기에 자극되어 대구지역에도 금융기관 점포증설이 두드러졌으나, 수도권지역의 신설점포수가 지역신설점포수를 능가함으로써 전체 금융기관점포망의 수도권비중은 높아지는 추세를 보였다.

즉, 대구지역의 예금은행의 점포수를 보면, 1980년에 108개이던 것이 1992년에는 277개로 늘어나 외형적·절대적으로는 크게 성장했음을 알 수 있다. 그러나 이것은 1980년의 전국예금은행점포수 1,863개 중에서 5.8%의 비중을 차지했던 것에 비하면, 1992년에는 전국예금은행점포 4,982개 중에서 5.56%의 비중을 나타냄으로써 오히려 상대적으로는 위축되었음을 알 수 있다.

한편 대구지역에서는 1981년에 장기신용은행이 大邱支店을 개설한 데 이어 신한은행이 1982년 7월에 대구지점을 설치하고, 축협이 1985년에 慶北道支部를 설치하였으며, 한미은행이 1986년에 대구지점을 설치하는 등 차례로 진출하였지만 1987년 대도시내 은행점포 신설

〈表 1-74〉 大邱·慶北地域의 銀行別 店鋪網 推移

은 행	1971			1980			1992		
	大邱	慶北	全國	大邱	慶北	全國	大邱	慶北	全國
조상제	3	5	74	5	5	113	14	18	309
한서	3	—	63	5	1	101	8	3	279
한신	3	1	69	5	2	105	12	7	291
한신	3	1	62	5	3	102	9	8	283
한신	4	1	82	7	1	135	12	6	299
한신	1	—	15	3	2	54	8	4	239
한신	—	—	—	—	—	—	4	2	126
한신	—	—	—	—	—	—	2	—	61
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	59
한신	—	—	—	—	—	—	—	1	58
한신	—	—	—	—	—	—	27	11	67
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	34
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	14
한신	14	2	16	44	11	56	99	31	137
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	130
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	97
한신	3	2	68	6	4	120	14	10	296
한신	4	8	112	7	9	170	13	18	417
한신	2	—	38	4	3	101	13	12	315
한신	11	35	593	15	40	370	24	55	618
한신	1	4	36	1	8	106	4	8	133
한신	—	—	—	—	—	—	5	1	64
한신	1	0	9	1	0	12	2	2	47
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	4
한신	—	—	—	—	—	—	1	—	29
계	53	59	1,333	108	89	1,863	277	197	4,982

註: 全國의 계는 대구지역에 진출하지 않은 모든 은행을 포함한 수치임.

資料: 은행감독원, 《금융기관점포총람》, 1992에 의거 작성함.

억제방침이 발표되면서 전국은행의 지방진출이 다소 진정되는 듯 하였다. 그러나 地方自治制 實施論議가 본격화된 1989년 11월에는 대구에 본점을 두고 이 지역 중소기업의 육성을 위한 중소기업금융 전담은행인 大東銀行이 자본금 1,000억원으로 설립되었다. 다른 일반 시중은행의 대구지역 진출도 활발하여 1990년에는 동화은행과 경남은행이, 1991년에는 평화은행이, 1992년에는 부산은행이 대구지점을 개설함으로써 地域金融活性化에 크게 기여하였다. 또한 대구은행 역시 규모의 확대로 부산(1990년 6월에 범일동 지점을, 1992년 7월에 부산지점을 개설함)과 울산(1990년 5월에 울산지점 개설), 그리고 마산(1991년 9월에 마산지점 개설)에 각각 지점을 개설하였다.

위와 같은 금융기관의 확충과 점포수의 증가, 그리고 지방금융 육성정책에 힘입어 대구 지역금융은 소폭의 성장을 이룩하게 되었다. 즉, <表 1-75>에서 보듯이 1981년부터 1991년까지의 예금은행의 대구지역 수신고는 1981년에 6,590억원을 기록하여 3.87%의 전국비중을 차지했으나, 1991년 말에는 5조 1,370억원을 기록하면서 5.21%의 전국비중을 차지하여 다소 개선되었다. 또한 대구지역의 預金銀行 貸出金は 1981년에 7,340억원으로 4.60%의 전국비중을 보였으나, 1991년에는 4조 6,390억원으로 5.19%의 전국비중을 기록함으로써 다소 개선되었다.

<表 1-75> 1981~1991年 期間中 預金銀行 預金·貸出金 推移 (단위: 10억원, %)

區分	점 포 수	預 受 金			貸 出 金			預 貸 率	
		全國	大邱	全國比	全國	大邱	全國比	全國	大邱
1981	115	17,034	659	3.87	15,955	734	4.60	87.6	111.4
1983	132	23,908	956	4.00	24,150	1,085	4.49	94.9	113.5
1985	139	31,023	1,302	4.20	33,811	1,397	4.13	106.6	107.3
1987	155	45,720	2,100	4.59	43,096	1,746	4.05	89.1	83.1
1989	195	66,918	3,308	4.94	62,548	2,994	4.79	91.4	90.5
1991	249	98,508	5,137	5.21	89,416	4,639	5.19	90.7	90.3

資料: 한국은행, 《제통계연보》, 각호

한국은행대구지점, 《대구경북주요경제지표》, 《대구경북지역경제연보》,

대구직할시, 《대구경제백서》, 1991, p. 97.

한편 직할시승격 이후 10여년간 대구지역에서는 예금이 대출금에 비해 규모면에서 더욱 높은 성장을 하여 1986년부터는 오버론현상이 사라지게 되었다. 그러나 이러한 금융산업의 성장에도 불구하고 지역금융은 서울을 중심으로 한 수도권의 金融 및 實物經濟 集中化現狀에 따른 자금의 域外流出 등으로 만성적인 자금부족현상을 나타내었으며, 부도율도 전국의 4배수 준에 이르는 등 금융기능의 역할 수행에 있어 미흡한 점이 많이 노출하였다.

<表 1-76> 大邱地域의 어음交換額 및 不渡率(1981~1991) (단위: 10억원, %)

區 分	어 음 交 換 額			不 渡 金 額		不 渡 率	
	전 국	대 구	전국비중	전 국	대 구	전 국	대 구
1981	455,650	10,851	2.38	630.9	50.3	0.14	0.48
1983	947,751	19,253	2.03	1,013.4	101.6	0.11	0.53
1985	1,304,373	20,457	1.57	935.1	56.0	0.07	0.27
1987	1,542,107	26,347	1.71	1,314.2	68.2	0.09	0.26
1989	3,201,781	45,270	1.41	1,140.8	62.1	0.04	0.14
1991	6,056,273	89,643	1.48	3,740.5	233.4	0.06	0.26

資料: 한국은행, 《경제통계연보》, 각 연도

한국은행 대구지점, 《대구경북주요경제지표》

한편 1970년대 이후에 비통화금융기관이 크게 활성화된 이래 金融貯蓄実績을 저축내역별 비중으로 보면, 直接金融 관련저축(국·공·금융채잔액 및 회사채발행 누계액) 및 비통화금융기관저축의 비중이 꾸준히 늘어나는 반면, 은행저축은 지속적으로 저하되고 있는 것으로 나타났다.

이러한 제2금융권의 급속한 성장과 직접금융의 확대는 금융기관 및 금융상품의 다양화를 통해 고객에 대한 서비스의 질을 개선하고 經濟開發에 필요한 저축동원의 극대화에 기여한 점은 높이 평가될 만하다. 그러나 제2금융권의 신장과 그로 인한 은행의 金融仲介機能 약화는 금융구조의 건전성이나 통화관리의 실효성을 약화시키고, 나아가서는 금융의 지역간 불균형을 더욱 심화시키는 결과를 낳기도 했다.

이러한 현상은 대구지역에서도 마찬가지여서, 지역금융산업의 육성과 지역기업의 금융지원을 위해 1973년 嶺南투자금융의 설립에 이어 大邱투자금융, 慶一투자금융이 차례로 설립되고, 1988년에는 大邱생명보험회사(지금의 朝鮮生命)가 설립되었으며, 1989년에는 지역 최초의 투자신탁회사인 東洋투자신탁이 자본금 300억원으로 설립되었다. 이에 따라 대구시내 제2금융권의 점포수는 1983년에 536개이던 것이 1991년 말 현재 981개로 크게 늘어났다.

〈表 1-77〉 大邱地域の 第2金融圈 與・受信 推移(1982~1991) / (단위: 억원, %)

년말	점포수	총 수 신			총 대 출 금		
		전 국	대 구	전국비중	전 국	대 구	전국비중
1982	—	95,571	4,683	4.9	113,486	3,972	3.5
1983	536	129,913	5,976	4.6	128,487	4,497	3.5
1984	561	174,222	7,840	4.5	167,147	5,683	3.4
1985	562	223,549	11,401	5.1	198,243	7,335	3.7
1986	587	287,658	15,535	5.4	254,771	8,917	3.5
1987	647	374,784	19,114	5.1	327,353	11,130	3.4
1988	715	520,087	23,924	4.6	380,083	13,683	3.6
1989	766	647,080	32,354	5.0	542,611	19,534	3.6
1990	858	915,840	45,792	5.0	679,923	26,517	3.9
1991	958	1,129,864	57,864	5.1	830,836	34,564	4.2

資料: 한국은행 대구지점, 《대구경북지역경제연보》, 1992.

대구직할시, 《시정백서》, 1992. p. 332.

이들 대구지역 非通貨金融機關은 기존 은행점포를 능가하는 급성장추세를 지속하여 〈表 1-77〉에서 보듯이, 1991년말 현재 총수신고가 5조 7,864억원, 총대출금이 3조 4,564억원으로

1982년 이후 8년동안 각각 9.8배, 6.7배로 팽창하였다. 이로써 1981년까지만 하더라도 은행저축이 전체 금융저축실적의 50.0%, 비통화금융기관이 42.3%를 차지하던 것이 1982년을 기준으로 은행저축과 비통화금융저축의 市場占有率이 역전된 이래 양자간의 갭이 더욱 확대되어 1991년 말에는 은행권의 비중이 27.2%로 떨어졌다. 그러나 1980년대 초 은행권에 허용된 非通貨金融機關 업무인 金錢信託을 은행실적에 포함시킬 경우에는 1991년말 은행권의 비중은 37.4%로 시장점유율의 하락세가 다소 둔화된 것으로 나타난다.

그러나 제2금융권 여수신 변화추이를 보면, 제2금융권의 貸出金이 預受金의 절반수준에 불과하여 비통화금융기관의 발전이 한편으로는 자금의 域外流出을 심화시키는 요인이 되고 있음을 알 수 있다.

第2章 農·林·畜産業

第1節 概 觀

解放以前까지 농업이 산업의 중심이었던 대구는 전형적인 盆地地形으로서 대륙성 기후와 어울려 심한 年較差가 나타나므로 이러한 지형적인 특징은 일제시대 이후 대구를 사과의 집산지와 함께 旱魃에 대비하여 저수지의 밀도가 가장 높은 지역으로 만들었다.

대구의 農耕地面積은 광복 후 세번의 행정구역 개편으로 크게 바뀌게 되었다. 먼저, 1957년 11월 법률 제452호로 달성군의 공산면, 동촌면, 가창면, 성서면, 월배면 등 5개면의 농경지 6,559ha가 편입되어 대구의 경지면적은 1만 104ha로 크게 확대되었다(〈表 2-1〉).

그러나 대구를 근대적인 文化都市로 발전시키기 위해 區制를 실시함에 따라 1962년 11월 공포된 법률 제1174호에 의거 동촌을 제외한 4개면의 농경지 5,112ha가 달성군에 환원되어 대구의 농경지면적이 4,805ha로 감소되었다. 한편 1981년 7월 대구가 直轄市로 승격함에 따라 칠곡군의 칠곡읍, 경산군의 안심읍, 고산면, 달성군의 월배읍, 공산면, 성서읍 등 6,689ha의 농경지를 새로이 편입하여 대구시의 農耕地面積은 8,180ha가 되었다.

〈表 2-1〉에서와 같이 대구시 농업은 1960년대 이후 급속한 경제발전으로 인한 도시화·산업화로 행정구역 확장에 의한 증가(1981년 대구가 직할시로 승격됨에 따라 대구시의 경지면적과 농가 인구는 1980년에 비해 1991년 말 현재 농경지는 4.3배, 농가인구는 1.5배, 가구당 경지면적의 경우 1980년도의 39a에 비해 1991년말 86a로서 2.2배 증가)를 제외하면 경지면적이나 농가인구 모두가 감소하는 추세에 있다.

1991년 말 현재 대구시의 耕地面積은 6,426ha로서 대구시 전체 면적의 14.1%를 차지하고 있으며, 농가인구는 3만 2,290명으로 전체 인구의 1.4%를 차지하고 있다. 그러므로 인구의 절대적인 측면에서나 경지규모면에서 농업 역시 산업의 한 분야로서 큰 의의를 지니고 있다.

대구시 농업의 區別 現況을 보면 동구의 경지면적이 가장 넓은 지역으로 나타나고 있다. 동구의 논·밭을 합한 경지면적은 3,265ha이며, 그 다음 순위는 북구의 1,834ha로서 두 지역을 합한 경지면적은 대구시 전체 경지면적의 50%를 넘고 있다.

〈表 2-1〉 大邱市 耕地面積 및 農家人口의 變遷

연도	답면적 (ha)	전면적 (ha)	합 계 (ha)	호당경지 면적(a)	농가인구 (명)	농가호수 (호)	호당농가 인구(명)
1941	2,506	2,012	4,518	—	—	—	—
1952	3,132	1,821	5,053	68	38,811	7,490	5.2
1955	2,202	1,849	4,051	—	—	—	—
1957	5,870	4,234	10,104	70	85,931	14,334	5.9
1962	2,579	2,226	4,805	56	51,261	8,153	6.2
1965	2,502	2,352	4,854	62	51,128	7,776	6.5
1970	1,591	1,663	3,254	53	38,984	6,161	6.4
1975	1,300	1,152	2,452	44	32,653	5,579	5.8
1981	4,727	3,453	8,180	61	77,488	13,337	5.8
1986	4,260	3,244	7,504	97	37,117	7,704	4.8
1991	3,030	3,396	6,426	86	32,290	7,470	4.3

資料 : 대구부, 《대구부사》, 1943.

농림부, 《농림통계연보》, 1953.

한국은행 대구지점 《경상북도 산업변천사》, 1957.

경상북도, 《도세일람》, 1958~60.

대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

한편 대구 농업은 대구라는 큰 소비도시를 배경으로 하여, 경제성장과 함께 1950년대 米·麥作中心의 作付體系가 점차적으로 〈表 2-2〉와 같이 채소나 과수중심의 상업농 내지는 近郊農業 형태로 변모하고 있다.

〈表 2-2〉 大邱市 主要 作物類別 耕地利用面積 및 作付體系 推移 (단위 : ha, %)

연 도	경지면적	미 곡	맥 류	잡 곡	서 류	두 류	채소류	과실류	특용작물
1955~61 ¹⁾	8,275 (100)	4,120 (49.8)	4,757 (57.5)	593 (7.2)	303 (3.7)	1,425 (17.2)	968 (11.7)	888 (10.7)	102 (1.2)
1962~71 ²⁾	4,373 (100)	2,072 (47.4)	2,615 (59.8)	68 (1.6)	100 (2.3)	398 (9.1)	1,020 (23.3)	754 (17.2)	25 (0.6)
1972~80 ³⁾	2,320 (100)	1,001 (43.1)	907 (39.1)	4 (0.2)	44 (1.9)	110 (4.7)	1,101 (47.5)	494 (21.3)	35 (1.5)
1981~91 ⁴⁾	7,616 (100)	3,618 (47.5)	734 (9.6)	19 (0.3)	25 (0.3)	269 (3.5)	2,393 (31.4)	1,481 (19.5)	133 (1.7)

註 : 1), 2), 3), 4) : 분석기간별 작물류의 대구시 평균 재배면적이며, ()는 작목별 비중치임.

資料 : 한국은행 대구지점, 《경상북도 산업변천사》, 1957.

경상북도 《도세일람》, 1958~1960.

대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

앞으로도 대구시 농업은 기초 식량인 미곡을 제외한 맥류, 잡곡류, 서류, 두류 등의 재배비중이 크게 감소할 것으로 예상되며, 반면에 도시형 상업농인 채소류와 과실류의 재배면적은 상대적으로 크게 증가할 것으로 전망된다.

해방 당시 대구의 소유별 林野面積은 私有林 694ha, 國有林 574ha로서 합계 1,268ha에 불과하였으나 해방 후 세번에 걸친 행정구역 개편으로 대구시 임야면적은 <表 2-3>과 같이 크게 확대되었다. 1991년말 현재 대구시 총임야면적은 23,743ha로서 해방년도와 비교해 볼 때 18.7배나 크게 확대되었으며, 소유별로는 국유림과 사유림이 1,133ha로 전체의 4.8%에 불과하며 사유림이 2만 2,610ha로서 전체의 95.2%를 나타내고 있다.

임야의 구별 분포상황을 보면, 경지면적과 마찬가지로 동구가 대구시 전체 임야면적의 48.4%인 1만 1,484ha를 차지하고 있으며, 그 다음으로 북구가 전체의 20.5%인 4,859ha를 차지하고 있다.

연 도	총 계	국 유 림	시(공)유 림	사 유 림	사 찰 림
1945	1,268	574	—	694	—
1960	28,758	429	1,401	25,934	994
1965	7,955	35	357	7,563	—
1970	7,525	57	366	7,102	—
1975	7,383	57	363	6,963	—
1981	24,023	381	672	22,970	—
1986	23,922	378	657	22,887	—
1991	23,743	486	647	22,610	—

資料: 영남일보사, 《경북연감》, 1946.

대구직할시, 《대구통계연보》, 각 연도.

한편 1991년 말 현재 대구시 총임야면적 2만 3,743ha 중 무임목지는 전체 임야면적의 0.2%인 486ha에 불과한 실정이다. 또한 임상별 임목축적량은 총 69만 87m³ 중 혼효림이 33만 1,397m³로서 전체 임목축적량의 48.02%를 나타내고 있다. 침엽수 및 활엽수는 임목축적량이 각각 24만 7,199m³와 11만 1,491m³로 전체의 35.80%, 16.16%를 나타내고 있다.

대구시의 家畜飼育 現況을 살펴보면, 경제성장과 더불어 소득수준이 향상됨에 따라 <表 2-4>에 나타난 바와 같이 말과 토끼를 제외한 거의 모든 가축의 飼育頭數가 가히 폭발적으로 늘어났다.

〈表 2-4〉 大邱市 家畜 및 家禽 飼育現況 (단위: 마리, 통수(꿀벌))

가축명 연도	축 우	유 우	말	돼 지	산 양	닭	토 끼	꿀 벌	개년도
1954	1,453	8	582	2,085	253	41,271	820	253	3,163
1957	5,023	23	596	5,599	639	86,689	1,145	717	2,912
1962	1,775	105	573	5,955	1,061	121,039	1,508	726	5,409
1965	1,981	265	506	7,017	1,160	—	3,040	—	—
1970	1,655	407	—	2,812	—	—	—	—	—
1975	2,325	924	206	8,890	449	—	7,952	—	—
1981	5,272	2,098	25	22,590	121	1,042,266	8,803	1,627	15,588
1986	8,341	2,260	19	27,453	401	501,090	3,369	2,569	11,006
1991	8,313	2,562	35	23,197	538	303,137	538	780	18,148

資料: 경북대관편찬위원회, 《경북대관》 신생문화사, 1958.

경상북도, 《도세일람》, 1958~1960.

대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

축우(한우)의 경우 1954년 대구시의 사육두수가 1,453마리에 불과하였으나, 1991년도에는 8,313마리로서 무려 5.7배나 늘어났다. 그러나 급속한 경제성장과 함께 축우는 역축으로서의 기능보다는 食用消費를 위하여 사육되고 있다.

특히 소 뿐만 아니라 유우, 돼지, 닭 등 거의 모든 가축의 사육두수는 채소, 원예 등과 함께 근교농업의 한 部門으로서 앞으로도 지속적인 발달이 이루어질 것으로 예상된다.

第2節 農 業

I. 解放以前の 大邱農業

1910년 領土擴張으로 넓은 지역을 행정구역으로 하고 있었으나, 해방 전까지 세차례의 行政區域 改編으로 1938년에 가서야 비로서 본 모습을 갖추게 된 대구는 盆地에 위치하여 寒暑의 차가 심한 반면 두개의 강이 흘러서 수리가 편리하고 토질이 비옥해 고래로 農業의 最適地였다. 옛부터 慶北農業의 중심지로서 米·麥作이 농업 생산의 중심이었던 대구는 일제 침략과 함께 면화, 사과, 잡곡, 연초 등 特種作物의 생산에 있어서 그 이름이 전국에 널리 알려지게 되었다. 특히 사과는 일제시대 우리나라는 물론 일본이나 만주에도 널리 알려질 만큼 大邱農業의

象徴이 되었다.

그러나 이러한 대구농업은 그 발달과 쇠퇴가 일제의 植民地政策에 의해 일본 자본주의의 성장을 뒷받침해 주는 農業政策이 樹立·施行된 관계로 시행과정 도처에 矛盾과 施行錯誤가 연속되었다. 그 결과 일제시대 대구농업은 품목별로 생산량 증감에 있어서 큰 변화를 겪게 되었다. 즉 농민생활의 향상이나 農業振興과는 거리가 먼 근시안적인 정책으로 인해 일제시대 대구농업은 쇠퇴의 길을 걷게 되었으며, 그 결과 농민들의 생활상은 더욱 궁핍하게 되었다.

〈表 2-5〉 解放前 大邱市の 耕地面積 (單位:町)

연 도	畓			田	총 계
	1 모작	2 모작	계		
1921	65.9	174.5	240.4	246.7	487.1
1926	65.7	144.3	210.0	188.8	398.8
1931	5.0	190.4	195.4	145.2	340.6
1936	3.5	142.2	145.8	123.3	269.1
1941	395.1	2132.1	2,527.2	2,028.9	4,556.1

資料: 대구부, 《대구부사》, 1943, pp. 141~142.

농업쇠퇴의 한 예로서 경지면적의 경우 1938년 府의 大擴張 이전까지는 〈表 2-5〉에서 알 수 있는 바와 같이 그 면적이 감소하는 것으로 나타나고 있다. 이와 같은 농업의 상대적 쇠퇴는 농민들의 생활을 더욱 궁핍하게 만들었으며, 농민들은 빈곤한 생활의 타개책으로 〈表 2-5〉와 같이 畓의 경우 2모작 경작이 증가되었다.

일제의 농업정책은 農業增產 4大計劃으로 요약되는 바, 대구도 이러한 4대계획에 의거 농업정책이 시행되었으나 府의 擴張이나, 大東亞戰爭 및 대구 거주 일인들의 요구에 의하여 약간의 변화를 경험하게 되었다. 그러나 이러한 정책 변화는 모두 일제의 경제적 침탈을 강화하기 위한 방법 전환에 불과한 것이었다. 그러므로 해방 이전의 대구농업을 일제의 식민지 농업정책과 관련하여 품목별로 그 생산량의 변화를 살펴보는 것이 해방 이전의 대구농업을 이해하는 지름길이라 여겨진다.

먼저 米作은 產米増殖計劃에 입각한 수리시설 확충의 정책으로 나타나는 바 1924년부터 1931년까지 대구시 및 근교에 수성구수리조합(달성군 수성면), 동부수리조합(달성군 수성면), 해안수리조합(달성군 해안면), 팔달수리조합(달성군 달서면) 등 4개의 수리조합을 설치하는

〈表 2-6〉 大邱市の 解放前 反當 米穀收穫高

연 도	식부면적(反)	수확고(反)	반당수확고(反)
1921	240.4	3,755	1.56
1926	215.1	3,872	1.80
1931	180.5	2,978	1.55
1936	152.0	3,010	1.98
1941	1,972.6	44,142	2.24

資料：대구부, 《대구부사》, 1943, p. 143.

서 농민의 피해가 막대하였으며, 산출량 증가 역시 본토의 미곡 부족분 보충을 위한 것이어서 농민의 생활고는 더욱 어렵게 되었다.

1938년 府의 확장에 따라 경종법의 개선으로 농업정책의 변화가 이루어짐에 따라 품종개량, 묘포개량, 벼 건조조정의 개량, 현미조정 등의 시책을 추진하여 미곡의 생산량이 크게 증가되었으나 일제의 가혹한 수탈로 농민들의 생활은 더욱 궁핍하게 되었다.

맥작은 생존을 위한 몸부림으로 증산이 계속 이루어진 품목이었다. 이렇게 증산이 이루어진 근본적인 이유는 토지개량사업과 경종법으로 미곡의 생산량이 계속 증가되었으나 일제의 가혹한 착취로 말미암아 그 유일한 탈출구로 등장한 품목이 맥작이었기 때문이다.

〈表 2-7〉 解放前 大邱市の 麥作收穫高

연 도	식부면적(反)	수확고(反)	반당수확량(反)
1921	331.2	6,598	1.99
1931	답 165.0	3,317	2.01
	전 76.0	1,178	1.55
1936	답 165.0	3,500	2.16
	전 76.0	822	1.65
1941	답 165.0	31,962	1.57
	전 76.0	26,301	1.55

資料：대구부, 《대구부사》, 1943, p. 144.

일본인 불량배들의 이주 및 그들에 의한 근대 농업의 발달은 대구 농민을 파탄의 구렁텅이에 빠지게 만들었다.

한편 보의 增·改築에 온 힘을 기울이게 되었다.¹⁾

그 결과 〈表 2-6〉에서 보는 바와 같이 대구부의 반당 미곡수확고는 1926년 1.80석에서 1941년 2.24석으로 수확량이 증대되었다. 그러나 이러한 수리조합의 설치는 한국인 토지소유자들의 권익에 크게 위반되는 것이어서

〈表 2-7〉에 따르면 1938년 府의 확장에 의한 자연증가를 감안하더라도 1941년 맥작 수확고는 1931년 4,495 석에 비해 거의 13배나 늘어난 5만 8,263석에 달하였다.

원예나 특수작 경영품목인 사과, 엽연초, 면화 등이 대구농업의 상징으로 등장한 것은 불행히도 일본인에 의해 이루어졌다. 즉 일제의 식민지 경제정책과 어울려 동양척식회사를 통한

1) 경상북도, 《경북대감》, 1936, p. 15.

먼저 일본인에 의해 도입된 면화(육지면)는 일제의 4대 증산계획의 하나인 綿作獎勵計劃에 의거 대구도 예외없이 일제의 식민지적인 탄압, 지시 및 명령으로 재배되었다. 그러나 이러한 시책은 농민의 이익이나 의사와는 무관하게 일본의 자본주의의 성장을 위한 보조시책으로 시행되었던 관계로 지역 중심도시인 대구는 도시의 성장과 함께 면화가 도시 농업으로 부적당함이 판명되어 경작면적이 크게 감소하게 되었다. 한편 棉花生産이 감소하는 대신 최대 생산지의 하나인 경북을 배경으로 대구는 면화집산지로 이름을 얻게 되었으며, 1916년에는 일본인에 의해 대구조면공장이 설립되어 면화 가공지로 성장하였다.

蠶業이 가장 발달한 경북을 배후에 가진 대구는 잠업 기술 뿐만 아니라 잠종 제조 및 제사부문에 전국에서 으뜸으로 일제시대 한국제사계에서 독보적인 위치에 놓이게 되었다.

대구가 이렇게 잠업이 번성하게 된 이유는 일본정부가 1906년을 전후하여 양잠지로 천혜의 조건을 구비한 대구에 양잠을 장려한 결과 他道와는 비교가 될 수 없을 정도로 발전을 거듭했기 때문이다. 또한 대구에는 이와 때를 맞추어 잠업전습소(1904)도 설립되어 우리나라 蠶業 발전에 크게 이바지하였을 뿐만 아니라 1918~1919년 양년에 걸쳐 3개의 큰 제사공장도 설립되어 대구의 잠업은 큰 발전을 이루게 되었다. 그러나 수출생사를 증산하기 위한 산전증수계획 역시 농민 의사와는 무관하게 일제의 식민지 경제정책의 일환으로 실시되었다는 점에서 농민들의 생활고는 극도로 악화되었다.

1905년 러일전쟁 전후로 재배되기 시작한 일본종 연초는 우리나라 재래종의 자가 경작과 함께 과잉생산을 낳게 되자 일제는 우리나라 농민에 대한 차별 대우를 서슴치 않았다. 즉 일본인 연초 경작자에게는 정면으로 보호를 하는 동시에 한국인에게는 갖은 압박과 술책으로 압박을 가하여 농민은 연초재배에 큰 어려움을 겪게 되었다. 아울러 자가 생산으로 즐길 수 있었던 연초를 1920년대 초 煙草專賣制度 실시와 함께 재배할 수 없게 됨으로서 대구의 연초 재배는

크게 위축되었다. 그러나 생 산부문과는 달리 製造部門에서는 급격한 발달이 있게 되었다.

사과가 재배되기에 가장 적합한 지형 및 기후를 가졌을 뿐만 아니라 그 맛이 좋은 관계로 일본이나 만주로까지 수출되었던 사과는 1892년 영국

〈表 2-8〉 解放前 大邱市の 사과 栽培面積 및 收穫高

년 도	재배면적 혹은 과수수	수 확 고	가 격
1921년	257정	69,835판	83,802원
1926년	7,128본	67,712	88,025
1931년	7,048본	88,683	—
1936년	6,891본	83,839	—
	사과 243정	396,578	364,762
1941년	기타 184정	212,922	227,042

資料: 대구부, 《대구부사》, 1943, p. 147.

인 선교사 프렛차가 스미사에 의해 소개된 이후 대구농업의 상징이 되었다. 이렇게 대구의 명품이었던 사과는 다른 품목과는 달리 대동아전쟁 이전까지 생산면적과 수확량이 크게 증가된 유일한 품목이었다.

〈表 2-8〉과 같이 재배면적 및 수확고가 급증하였던 사과는 일제의 대동아전쟁 수행과 맞물린 미·맥생산중점주의에 의해 극도의 위기를 맞게 되었다. 일제는 전쟁수행과 함께 한국인에 대한 果樹栽培 抑制, 幼年苗木의 強制伐採 등의 시책으로 인해 큰 어려움을 겪던 대구사과는 인력이나 농약 등 원료면에서 크게 부족하게 되어 일제말기 거의 枯死 危機에 처하고 말았다.

II. 解放直後 및 韓國戰爭期の 農政基調와 地域農業 (1945~1953)

8.15해방은 식민지수탈을 근간으로 하는 식민지농업정책에서 탈피하여 새로운 농업정책의 출발을 요구하였다. 그러나 남북분단, 월남 및 귀환인구의 유입 등 경제외적 요인과 함께 경제 전반에 걸쳐서 나타나는 인플레이의 양진, 국제수지의 적자, 적자 재정의 만성화 등으로 군정·과도정부는 적극적인 농업정책을 시행할 수가 없었다. 그러므로 본격적인 農業政策은 1948년 8월 정부수립과 함께 비로소 시작되었다.

정부는 치안확보와 민심안정을 근간으로 하는 군정·과정과는 달리 활발한 농정을 수립·시행하였으며 農政目標의 根幹을 社會的 安定과 食糧需給에 두었다. 또한 정부는 이를 달성하기 위한 주요 정책수단으로 농지개혁, 양곡매상제도의 실시, 농업증산5개년계획 등을 실시하였으며 이들 시책을 면밀히 살펴보면 다음과 같다.

먼저 대표적 농업정책 중의 하나인 農地改革法은 지주의 횡포와 소작농비율의 증가에 대항하여 자작농 창설과 농가경제의 자립을 통한 농업생산력을 증대시켜 농민생활의 향상 및 국민경제의 균형발전을 도모할 목적으로 1949년 6월 제정되었다. 동법의 제정으로 농민은 고율의 소작료에서 해방되었고 성실한 영농과 농토관리가 실현되었다. 또한 동법은 농민의 토지소유욕을 충족시켜 사회안정에 기여하였을 뿐만 아니라 6.25 동란시에는 정부관리양곡의 다량확보에 기여했음을 부인할 수 없다.

해방 후 급격한 인구증가와 농업생산의 부진으로 인한 만성적인 식량부족을 겪으면서 糧穀需給 및 價格安定이 농정의 최대 과제로 대두되었다. 이에 정부는 1945년 10월 군정의 미곡자유

시장정책을 시발로 1950년 2월 양곡관리법의 제정에 이르기까지 네번에 걸쳐 정부통제의 폐지와 복귀라는 시행착오를 거듭하였다. 이러한 시행착오를 거듭한 끝에 정부는 양곡에 대해서는 지금까지도 자유시장기능에 맡기는 대신 정부의 관리에 맡겨진 양정제도를 존속시키고 있다.

또한 정부는 식량 및 의료의 자급자족을 달성하기 위하여 農業増産 5個年計劃(1945~51)을 실시하였다. 그러나 한국전쟁의 발발과 자연재해 등으로 그 성과가 미미함이 크게 아쉬움으로 남는다. 위의 세가지 주요 농업정책과 더불어 정부는 민주적 교도방식에 입각한 농업기술원의 설치, 수입금비를 증산제일주의로 내세운 비료행정에 온 힘을 기울여 어느정도 기반을 구축하기 시작하였다.

한편 농업생산력의 증진과 농민의 경제적, 사회적 지위향상을 목적으로 하는 農業協同組合法案이 국회에 회부되었으나 한국전쟁의 발발과 함께 그 실효를 보지 못하게 됨은 안타까운 일로 남는다. 그러나 전반적으로 신시책의 시행과 함께 농업생산이 증가되어 해방 후 처음으로 1950년 봄에 62만 6천석의 미곡을 일본에 수출하기도 하였다.

미국의 원조는 경제적으로나 정치적으로 어려운 혼란기에 한국경제에 중요한 역할을 수행하였다. 정부수립 이전의 GARIOA원조 및 그 이후의 ECA원조와 함께 한·미간 합의에 따라 「財政安定15原則」을 통해서 한국경제는 어느정도 안정기반을 구축할 수 있는 환경을 맞이할 기회를 갖게 되었다. 그러나 한국전쟁의 발발과 함께 한국경제는 큰 어려움에 직면하였다.

전쟁 수행과 함께 한국경제는 큰 위기를 맞게되어 통화량 팽창과 산업시설파괴에 대한 긴급한 대책이 필요하게 되었다. 통화량 팽창의 원인은 전비조달과 전재복구에 따른 재정수요 팽창에 따른 것이었다. 농업도 예외는 아니어서 전쟁으로 인한 수리시설의 파괴, 1951~1952년의 계속적인 한해, 풍해, 수해 등으로 농업 생산이 크게 줄어들게 되어 미곡을 수입하는 지경에 까지 이르렀다. 마찬가지로 농업정책 역시 정부수립과 더불어 올바른 농정이 수립·시행되어 왔으나 한국전쟁의 발발과 함께 연속성이 결여된 채 중단되게 되었다.

이와 같이 농업 뿐만 아니라 국민경제 전반이 어려운 상황에서 정부는 전쟁수행과 더불어 군량미를 확보하고 미곡수급자금 방출에 따른 통화팽창을 억제하기 위하여 새로운 시책을 필요로 하게 되었다. 이에 정부는 軍糧米를 확보하고 미곡수급자금방출에 따른 통화팽창을 억제하기 위해 1951년 9월 「臨時土地取得稅法」을 시행하였다. 동법은 토지수익에 대한 조세를 물납의 토지소득세로 단일화시키는 것으로서 농민에게는 과중한 부담이 되었다. 그러나 전쟁기간 중 정부 세입예산의 매우 큰 비중을 차지하는 토지소득세는 1951~1952년 정부의 재정균형

달성과 군량미 확보 및 양곡수급조절 등의 측면에서 커다란 기여를 하였다.

결국 해방 후 군정·정부수립을 거치면서 농업정책은 시대상황에 맞추어 변화를 추구하여 농업생산의 증가를 이룩하고 발전의 기틀을 다졌으나, 한국전쟁의 발발과 함께 농업 자체의 성장보다는 戰時 국민경제의 안정에 지렛대 역할을 수행하였다.

한편 경상북도의 정치적·경제적 중심지인 대구는 8.15해방 후 미군정당국의 米價最高價格制 실시로 인하여 대식량위기에 돌입하게 되었다. 이에 군정당국은 1946년 1월 미곡수집령을 발표하여 식량위기의 타개책을 모색하였으나 정세는 더더욱 악화되어 7월 초 식량폭동으로까지 확대되었다.

대구에서 食糧問題가 심각한 사회문제가 되어 폭동으로 확대되기까지는 생산량 감소, 소비극심 및 당국의 정책모순과 무계획성이 그 요인이지만 보다 근본적인 원인은 當局의 誤算과 農村의 非協助였다.

8.15해방 후 식량위기와 폭우 등 자연재해로 인한 생산량 감소를 경험한 대구농업은 1951~1952년의 연속적인 흉년으로 위기를 맞기도 하였으나 終戰과 함께 새로운 출발을 준비하게 되었다.

III. 戰後 再建期の 農政基調와 地域農業(1954~1961)

후전성립과 더불어 한국경제는 누적된 악성인플레이션의 억제를 통한 經濟安定과 함께 經濟復興이라는 時代的 課題를 안게 되었으며, 이러한 과제는 농업정책에 있어서 독립성을 제약하는 가장 큰 요인으로 등장하였다. 즉 경제안정 및 戰前 생산수준의 회복을 위한 시책은 재정안정정책과 함께 농업의 성장을 가로막는 低穀價 政策의 성립을 맞보게 되었기 때문이다.

일제치하 비록 식민지수출의 형태로나마 수입량보다 식량수출량이 더 많아서 식량수출국에 있었던 우리나라는 전쟁으로 인한 피해와 勞動力不足 및 旱害 등으로 인하여 1951~1952년 양년에 걸쳐 外穀을 수입하게 되어 식량수출국의 지위를 잃게 되었다. 아울러 이 시기부터 식량수급에 대한 도입양곡의 의존도가 더욱 커지게 되어 식량자급률이 크게 하락함에 따라 정부는 전후 재건기의 농정기조를 수급불균형 해소에 두어 2차에 걸친 증산계획을 추진하게 되었다.

먼저 제1차 農業增產計劃(1953~1957)을 통하여 기술지도에 의한 종자개량, 경종법 개선, 경지개량에 의한 경지면적의 확장을 통한 미·맥증산에 힘쓰게 되었다. 그러나 기술 및 투자

부족으로 별다른 성과를 거두지 못하게 되자 정부는 제2차 농업증산 5개년계획(1958~1962)을 수립하였다. 2차계획기간 중에는 1차년도와는 달리 미작 뿐만 아니라 채소나 과실과 같은 特用作物部門에도 여러가지 増産施策이 수립되어 좋은 성과를 거두었다.

정부는 이러한 증산 시책과는 별도로 1951년 이래 꾸준히 外穀을 도입하였다. 특히 1953년에는 710만석에 이르는 방대한 양곡을 도입한 관계로 新穀出荷期인 동년 10월 미가가 폭락하는 사태가 일어났다. 해방 후 지금까지 곡가 폭등에만 부심해 오던 정부는 추수기의 적정 가격유지 내지 보장에도 관심을 기울이지 않을 수 없게 됨에 따라 1954년 미곡의 「一般買上制」를 부활시켰다.

1956년도부터는 미공법 제480호에 의한 잉여농산물과 미국상호안전보장법 제40조 양곡이 도입됨에 따라 국내 식량부족분은 해결의 실마리를 찾게 되었으나 추수기 미곡의 홍수 출하에 따른 가격폭락과 춘궁기 내지는 단정기의 가격폭등이 반복되었다. 따라서 정부는 미가의 연중 평준화를 기하고 매상자금의 집중방출에 따른 인플레이션을 막기 위해 1957년 11월 「米穀擔保融資制度」를 실시하게 되었다. 이러한 미국담보용자제도는 1957년 이후 농작물풍작과 외국도입에 따른 곡가 하락과 쉼레의 심화에 따른 대응책이라 할 수 있다.

정부는 蠶業増産5開年計劃(1958~1962)과 농업자재공급5개년계획(1957~1962)을 실시하여 증산을 위한 노력을 기울였다. 아울러 1957년에는 農事敎導法에 의해 농사원이 발족하여 농업기술시험연구를 일원화하는 제도적 계기를 마련하였으며, 과학적인 영농을 목표로 하고 해마다 늘어나는 농약사용에 대한 효과와 안전을 기하기 위해 농약관리법이 제정되었다. 또한 과도한 수세 뿐만 아니라 언제나 地區와 事業費關係로 말썽이 많은 수리조합의 정비조치와 아울러 농업금융전담기구인 농업은행이 1958년 4월 특수은행으로 발족하고 동년 11월에 경제사업을 전담할 농협중앙회가 업무를 개시하였다.

이러한 위의 여러 농정들은 再建期의 어려운 국내 상황에도 불구하고 動亂前의 생산수준을 회복하고 나아가 안정과 발전을 바탕으로 하는 1960년대 경제 도약기로의 기초를 튼튼히 닦는 초석이 되었다. 그러나 여기서 짚고 넘어가야 할 중요한 관심사는 외곡의 도입이 증대됨에 따라 외곡의존도는 점점 커지게 되었고, 식량자급률이 급락하게 되었을 뿐만 아니라, 농민 입장에서는 농업증산을 방해하고 저곡가 정책에 의한 희생양의 역할을 부여받게 되었다는 점이다.

한편 전란을 지난 시점의 大邱農業은 <表 2-9>에서 알 수 있는 바와 같이 각 작물류별로 栽培面積이 크게 증가하게 되었다. 미·맥류를 비롯한 주요 작물의 재배면적이 크게 증가한 이유는 1957년 행정구역 개편을 통하여 대구시 농경지면적이 크게 확대되었기 때문이다.

제1차 농업증산계획과 같이 戰亂後 중앙정부의 농정기조는 米·麥增産計劃이었으며 대구 역시 아래 <表 2-9>에 나타난 바와 같이 행정구역 개편전과 비교해 볼 때 米·麥作의 상대적인 재배면적 증가가 두드러지게 나타나고 있다.

<表 2-9> 戰亂後 大邱市 主要 作物의 栽培面積 變化推移 (단위: ha)

연 도	경지면적	미 곡	맥 류	잡 곡	서 류	두 류	채소류	과실류	특용작물
1955	4,051	1,864	2,611	305	185	1,038	858	—	74
1956	3,545	1,864	2,698	306	1,058	1,058	831	—	77
1957	10,104	5,026	2,821	306	181	1,058	—	894	100
1958	10,050	5,026	6,162	2,061	167	2,212	1,013	856	128
1959	10,078	5,026	6,263	431	194	2,258	1,118	1,103	143
1960	10,186	5,023	6,336	431	178	1,141	1,086	1,088	122
1961	9,917	5,023	6,411	309	155	1,208	904	497	71

資料: 한국은행 대구지점, 《경상북도 산업변천사》, 1957.

경상북도, 《도세일람》, 1958~1960.

대구시, 《대구통계연보》, 1962.

정부는 1, 2차 農業增産計劃을 통해 미·맥의 증산에 힘쓰고 특히 2차증산기간에는 채소류의 증산에도 노력을 기울였다. 그러나 <表 2-10>에서 알 수 있는 바와 같이 대구지역의 쌀, 보리 및 채소류의 경우 種子更新, 單位面積當 生産性 提高 등에 의한 증산보다는 경지면적에 의한 증가가 더 큰 요인으로 나타나고 있다.

<表 2-10> 戰後再建期 大邱의 쌀, 보리 및 채소류 收穫高 (단위: ha, kg)

연 도	미 곡 식부면적	10a당 수량	수확고	보 리 식부면적	10a당 수량	수확고	채소류 식부면적	10a당 수량	수확고
1955	1,864	180	3,555	2,254	165	3,355	858	1,468	12,595
1956	1,864	154	2,870	2,214	132	2,922	831	1,442	11,983
1957	5,026	178	8,946	2,515	226	5,684	—	—	—
1958	5,026	224	11,258	5,078	85	4,316	1,013	1,350	13,678
1959	5,026	191	9,600	5,171	111	5,740	1,118	1,084	12,114
1960	5,023	137	6,880	5,237	117	6,127	1,086	750	8,146
1961	5,023	256	12,858	—	—	—	904	1,590	14,377

資料: 한국은행 대구지점, 《경상북도 산업변천사》, 1957.

경상북도, 《도세일람》, 1958~1960.

대구시, 《대구통계연보》, 1962.

특히 농업증산2차계획기간 중에는 미·맥작뿐만 아니라 채소나 과실과 같은 특용작물부문에
증산시책이 수립되었는 바, 전후재건기 대구지역의 대표적인 특용작물인 과실류의 식부면적 및
10a당 수확고는 아래 <表 2-11>에 제시되어 있다.

<表 2-11>에는 農業增産2次計劃期間(1958~1962)동안 대구지역 과실류의 10a당 수확고는
년도마다 변화의 폭이 심하여 특별한 공통점이 없는 반면에 식부면적의 경우는 품목마다 1960
년대에 접어들면서 계속 감소하는 것으로 나타나고 있다.

<表 2-11> 戰後再建期 大邱의 果實類 收穫高 (단위: ha, kg)

연도	사 과		복숭아		감		배		기 타		합 계	
	면적	10a당 수량	면적	10a당 수량	면적	10a당 수량	면적	10a당 수량	면적	10a당 수량	면적	10a당 수량
1955	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1956	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1957	756	881	46	566	2	233	8	713	83	360	895	814
1958	736	589	43	469	2	233	9	521	67	420	857	570
1959	979	716	43	480	—	—	9	491	71	413	1,102	705
1960	979	765	31	480	2	619	9	566	67	379	1,088	746
1961	421	990	55	525	16	180	7	536	—	—	499	829

資料: 한국은행 대구지점, 《경상북도 산업변천사》, 1957.

경상북도, 《도세일람》, 1958~1960.

대구시, 《대구통계연보》, 1962.

IV. 經濟開發初期의 農政基調와 地域農業(1962~1971)

1950년대 援助經濟가 낳은 제모순인 富의 극단적인 不平等, 不正腐敗의 蔓延 및 민생의 도탄
등은 1960년대 초 한국경제의 고질적인 문제점으로 크게 부각되어 4.19革命의 경제적 계기가
되었다. 뒤이어 탄생한 5.16군사정부는 이러한 원조경제의 제모순을 극복하고 경제적 자립과
평등의 실현을 바라는 국민들의 요구를 수용하여, 1961년에 수립된 第1次 經濟開發5個年計劃
(1962~1966)은 “모든 사회·경제적인 악순환을 과감히 시정하고 자립경제의 달성을 위한 기
반구축”을 기본목표로 하였다.

主要 目標로는 ① 농업생산성 증대에 의한 농업소득의 향상과 국민경제의 구조적 불균형의
시정, ② 전력·석탄 등의 에너지 공급원의 확보, ③ 기간산업의 확충과 사회간접자본의 충족,

④ 수출증대를 주축으로 하는 국제수지의 개선, ⑤ 기술의 진흥, ⑥ 유희자원의 활용, 특히 고용의 증대와 국토의 보존개발 등을 주요목표로 설정하여 여러가지 시책을 추진하였다.

제1차 경제개발5개년계획은 초기의 애로에도 불구하고 후기에 이루어진 급속한 外資導入 및 對外開放政策에 힘입어 연평균 8.3%의 고도성장이라는 기대 밖의 성과를 거두게 되자, 정부는 “1980년대 초까지는 완전한 自立經濟體制를 갖춘다는 장기목표 아래 장기개발을 위한 하나의 과정으로서 산업구조를 근대화하고 자립경제의 확립을 더욱 촉진시킬 것”을 기본목표로 설정한 제2차 경제개발5개년계획(1967~1971)을 수립하였다. 제2차 5개년계획은 이러한 기본목표를 달성하기 위해, ① 식량의 자급자족, ② 화학·철강 및 기계공업에 중점을 둔 공업의 고도화, ③ 수출증진 및 수입대체축진을 통한 국제수지개선 기반의 구축, ④ 고용증대 및 인구팽창의 억제, ⑤ 국민소득의 증가 특히 농업소득의 향상, ⑥ 기술수준 및 생산성의 제고 등을 기본 정책지침으로 삼았다.

1, 2차에 걸친 경제개발계획기간인 1960년대는 농업부문에서도 다양한 정책이 수립·시행되었다. 먼저 자립경제의 기반구축을 기본목표로 설정한 제1차 계획기간 중 농업부문에서도 동 계획기간의 주요 목표중의 하나인 “농업생산력 증대에 의한 농업소득의 향상과 국민경제의 구조적 불균형의 시정”을 달성하기 위한 수단으로 농정목표를 농업증산 및 생산과정의 근대화에 두고 다음과 같은 주요시책을 추진하였다.

식량증산 장기계획으로서 第3次 農業増産5個年計劃(1962~1966)을 추진하였다. 동 계획에서는 양곡의 증산을 주요목표로 설정하고 이를 위해 농지의 확장과 단위면적당 생산력의 제고를 계획하였다. 농가경제의 자립기반 구축을 위하여 農漁村高利債整理事業(1961. 5)을 시행하여 농가경제의 자립을 도모하였다. 또한 정부는 제1차 계획기간 중 농업구조개선에도 노력을 기울여 자립안정농가조성사업(1965)을 시행하였는데 동 사업은 농정을 대농민적 차원으로 승화시키고 축산과 耕種農業의 결합을 유도하였을 뿐만 아니라 소농을 대상으로 耕地擴大를 誘引하였다. 1966년에는 주산단지조성사업을 시행하여 농가소득향상과 수출증대를 유도하고 농산물가공처리 및 저장시설의 확충·유도를 도모하였다.

정부는 이외에도 農業協同組合法(1961. 7)의 제정을 통하여 농협에 대한 정부의 지원을 강화하고, 1962년 농촌진흥청을 설립하여 농촌지도사업의 일원화를 추진하였다. 특히 제1차 경제계획기간 동안 농업부문에도 각종 제도개선이 잇달아 농산물가격유지법(1961. 6), 농산물 계약재배제도(1963. 8), 양비교환의 제도화(1965. 7), 정부양곡매입가격제도(1964), 농지세물납제도(1964. 10) 등이 시행되었다.

산업구조를 근대화하고 자립경제의 확립을 더욱 촉진시키는 데 그 기본목표를 두고 있는 제2차 경제개발5개년계획(1967~1971)기간 동안 정부는 농정목표를 생산지원 및 농가소득 증대와 가격·유통의 근대화에 두어 다음과 같은 주요 시책을 수행하였다.

먼저 식량증산을 위하여 제1차 경제개발5개년계획의 수정계획인 식량증산 7개년계획(1965~71)과 함께 경지시설의 확장 및 정리, 수리시설의 확충, 종자갱신, 농업용수의 개발로 식량의 자급자족을 추구하였다. 그러나 이러한 증산계획은 기상재해 및 식부면적의 감소 등으로 그 목표를 달성하지 못하게 되었다.

한편 제1차 경제개발5개년계획의 기본목표와는 달리 공업화우선으로 인하여 농업의 성장이 부진하고 증산정책과 농가소득 증대로의 연결이 미진하게 되자 정부는 2차 계획기간 중 농공 병진정책을 추진하여 농·공간의 균형성장을 추진하고 선진농업으로의 기반구축을 위하여 농업기본법(1967.1)을 제정하였다. 정부는 또한 전통적인 주곡위주의 생계농업에서 탈피하여 공업원료작물이나 수출작물 혹은 경제작물의 생산을 통하여 상업적 농업으로의 전환을 목표로 하는 農漁民所得増大特別事業(1968~1971)을 1968년 시행하였다. 과거의 저미가정책으로 인해서 식량자급이 어렵고 농가소득향상이 부진하자 고미가시대로의 양정방향의 전환을 시도하게 된 것도 2차계획기간 중의 일이며, 특히 보리에 대해서는 1969년부터 이중가격제를 실시하였다.

결국 1960년대 경제개발초기의 農政基調는 食糧増産計劃(제3차 농업증산5개년계획·식량증산7개년계획)이 농정의 중심이었다. 이외에도 1, 2차 경제개발계획기간 중 공업화 편중 전략으로 인한 농업쇠퇴를 예방하고자 농업기본법, 가격지지정책(고미가정책, 이중가격제) 등 농업부흥을 위한 여러가지 시책이 추진 되었으나 한국농업은 1968~1969년을 전후하여 농가인구, 농가호수 및 경지면적이 모두 감소하는 농업의 쇠퇴기였다.

1960년대 大邱農業은 아래 <表 2-12>에서 볼 수 있듯이, 耕地面積 減少와 함께 대표적인 食糧作物인 미곡, 맥류, 잡곡 등의 재배면적이 크게 감소하는 반면, 대구라는 큰 소비도시를 배경으로 도시형 近郊農業인 채소와 과실류의 재배면적이 증가한 것으로 나타나고 있으나 경제발전과 더불어 농업의 쇠퇴가 두드러진 시기였다.

전통적인 식량작물인 미곡과 맥류는 제1차 경제개발5개년계획의 시작년도인 1962년 재배면적 2,545ha, 3,210ha에 비해 제2차계획의 마지막년도인 1971년 재배면적은 각각 40.6%와 53.0%가 감소한 1,510ha(미곡), 1,510ha(맥류)로 나타나고 있다.

한편 도시형 근교농업에서 발달하는 채소와 과실류는 재배면적이 경제성장과 함께 증가하는 것으로 <表 2-12>는 설명하고 있다. 특히 1968년을 기점으로 재배면적이 감소하는 과실류에

비해 채소류는 꾸준히 재배면적이 증가하는 것으로 나타나고 있는 것으로 보아, 농민들은 변화된 생산환경을 맞이하여 작목전환 등을 통하여 농업부문에 나름대로 애착과 지속적인 관심을 가지고 있는 것으로 여겨진다.

전체적으로 경제개발초기 工業化偏重의 경제성장정책은 대구뿐만 아니라 우리나라 전체적으로 農業의 相對的 衰退를 앞당겼다. 특히 식량부문은 국내생산에 의존하기보다는 값싼 외국산에 의존함으로써 식량자급률이 1960년대 후반부를 기점으로 급락하는 데 중요한 원인이 되었다.

〈表 2-12〉 經濟開發初期 大邱市 主要 作物의 栽培面積 變化推移 (단위 : ha)

연 도	경지면적	미 곡	맥 류	잡 곡	서 류	두 류	채소류	과실류	특용작물
1962	4,805	2,545	3,210	112	99	767	722	274	21
1964	4,769	2,408	3,347	182	101	720	950	831	39
1966	4,879	2,223	2,746	122	188	457	1,073	893	25
1968	4,347	1,805	2,433	25	94	351	1,095	897	19
1970	3,254	1,603	1,761	2	57	95	1,245	682	23
1971	3,433	1,510	1,510	6	67	41	1,479	526	13

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1963~1972.

그러나 다행히 10a당 생산량은 아래 〈表 2-13〉에 나타난 바와 같이 미곡, 보리, 과실류, 채소류 등 모든 품목에 있어 1960년대 두차례에 걸친 경제개발계획기간 중 農業部門에 대한 지속적인 투자에 힘입어 기준년도인 1962년도에 비해 비교년도인 1971년에 크게 증가한 것으로 나타나고 있다.

〈表 2-13〉 經濟開發初期 大邱市 쌀, 보리, 채소류, 과실류 10a當 收穫高 (단위 : ha, kg)

연 도	미 곡 식부면적	10a당 수량	보 리 식부면적	10a당 수량	채소류 식부면적	10a당 수량	과실류 식부면적	10a당 수량
1962	2,545	150	2,704	111	722	1,954	274	975
1964	2,408	211	2,921	121	950	2,543	831	1,245
1966	2,215	332	2,428	272	1,073	2,258	893	981
1968	1,805	223	2,239	182	1,095	2,403	897	977
1970	1,603	388	1,608	206	1,245	2,533	682	1,079
1971	1,510	363	1,396	181	1,479	2,721	526	1,672

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1963~1972.

V. 輸出主導成長期の 農政基調와 地域農業(1972~1980)

2차에 걸친 경제개발계획을 통해 한국 경제는 놀라운 성장을 이룩했으나 都農間, 産業間, 地域間의 不均衡은 심화되었다. 따라서 정부는 1971년 계획된 제3차 경제개발5개년계획(1972~1976)의 기본정신을 “成長·安定·均衡의 調和”, “自立的 經濟構造의 이룩”, “地域間 均衡의 發展” 등 세가지로 설정하였다.

제3차 계획은 위의 기본정신에 따라 「농어촌 경제의 혁신적 개발」, 「수출의 획기적인 증대 및 중화학공업의 건설」을 基本目標로 설정하고 다음과 같은 여덟가지의 제목표를 중점적으로 達成하고자 노력하였으며 그 구체적인 내용은 다음과 같다. ① 식량을 증산하여 주곡을 자급하고 농어민소득을 적극적으로 증대시키는 동시에 경지정리 및 기계화를 촉진한다. ② 농어촌의 복지 및 문화시설을 충실화하고 농어촌 전화 및 도로망을 확충한다. ③ 목표년도에 무역수출 35억불을 달성하는 등 국제수지를 개선한다. ④ 중화학공업을 건설하여 공업구조의 고도화를 꾀한다. ⑤ 과학기술의 급속한 향상과 교육시설 확충으로 인력을 개발하며 고용을 최대한으로 증대한다. ⑥ 전력, 교통, 보관, 통신 등 사회기초시설의 균형된 발전을 꾀한다. ⑦ 4대강 유역개발을 비롯한 국토자원의 효율적 개발과 수출공업단지 등 개발단지의 조성을 통해 지역개발을 촉진하고 공업과 인구를 적절히 분산한다. ⑧ 주택과 위생시설 및 사회보장을 확충하고 근로환경을 개선함으로써 국민의 복지와 생활향상을 기한다.

내포적 산업구조를 결여한 채 輸出主導型의 대외지향적인 高度成長政策을 계속 추구해온 한국은 1970년대 초반의 에너지위기와 식량파동을 무난히 극복하면서 1976년 제4차 경제개발5개년계획(1977~1981)을 발표하였는 바, 제4차 계획은 세차례에 걸친 경제개발을 통하여 공업화와 고도성장을 이룩한 바탕 위에 도약의 계기를 질적인 구조개선에서 찾겠다는 정책기조의 전환하에 만들어진 계획이었다.

동 계획은 成長·衡平·能率의 3대 理念下에 “자력성장구조를 확립하고”, “사회개발을 통하여 형평을 증진시키며”, “기술을 향상시키고 능률을 향상시키는 것”을 기본목표로 하여 다음과 같은 일곱가지의 제목표를 중점적으로 달성하고자 하였다. ① 투자재원의 자력조달, ② 국제수지의 균형달성, ③ 자본재와 중간재의 생산기반 확충을 통해서 산업구조의 개편과 고도화, ④ 적정인구의 유지 및 교육·보건·직업훈련 등 노동생산성 향상을 통한 간접적인 소득분배의 개선, ⑤ 새마을 사업의 확대, ⑥ 과학기술투자의 확대, ⑦ 경제운영과 제도개선을 이룩한다.

정부는 3, 4차 경제개발5개년 계획기간 중 공업화지향적·대외지향적 고도성장과정에서 낙후된

농업부문의 발전에도 관심을 기울여 다양한 농정을 시행하였다. 먼저 3차 계획기간 중 정부는 농정의 기본목표를 미곡을 중심으로한 식량증산의 최우선 추진, 농어민 소득증대사업, 새마을 운동에 의한 환경개선에 두고, 이를 달성하기 위하여 다음과 같은 주요 시책을 추진하였다.

우선 식량의 증산이 농정의 최우선 과제로 설정되자 정부는 이를 달성하기 위하여 농업용수의 개발, 대단위 농업종합개발사업, 경지정리와 관개배수 등의 농업생산기반의 조성을 위한 투자를 하는 한편, 종자개량(통일계 다수확품종의 벼를 본격 보급), 농업기계화사업의 추진 등의 제 시책이 실시되었다. 특히 3차 계획기간에는 농업 기계화가 강력히 추진되었는데 그 이유는 노동생산성 증대와 농업노동력 감소에 대처하기 위함이었다.

정부는 또한 糧穀의 적정가격 유지와 食糧消費節約運動을 지속적으로 추진하였다. 즉, 양곡 증산의욕을 고취하기 위하여 고미가정책과 이증가격제를 실시하는 한편, 부족한 미곡 문제해결 방안의 하나로 미곡의 소비절약운동을 지속적으로 실시하였다.

1970년부터 自助, 勤勉, 協同을 기본정신으로 하여 시작된 새마을운동이 3차 계획기간 중에 강력히 추진되었다. 정부는 새마을운동이 소득증대와 직결될 때 영속성을 가질 수 있다고 보고 환경개선, 정신개발과 동시에 소득증대사업으로 발전시키기 위하여 제2차 농어민소득증대 특별사업(1972~1976)을 통하여 비식량부문의 성장을 도모하였다.

農地 保存과 擴大開發 政策으로 정부는 1972년 12월 농지의 보존 및 이용에 관한 법률제정을 통하여 농지가 타목적으로 전용되는 것을 억제하는 한편, 농지확대개발 추진법(1975. 4)을 통하여 농지개발의 촉진을 유도하고 농업진흥공사에 農地擴大開發技術團을 발족시켜 농지의 외연적 확대를 촉진하였다.

제4차 경제사회개발5개년계획기간 중 高度成長과 過熱景氣의 휴유증이 1979년부터 본격적으로 나타나자 정부는 이를 극복하고 경제를 안정화시켜 장기적으로 경제체질을 강화하기 위하여 고도경제성장 추진보다는 안정성장을 내세우는 정책전환을 시도하였다. 이러한 政策轉換은 정부주도형, 시장보호형 경제개발에서 민간주도형과 비교우위산업을 육성해 나간다는 시장개방형으로 탈바꿈하는 계기가 되었을 뿐만 아니라 농업부문에서도 상위목표의 변화에 따라 정책목표의 주안점을 농림수산업의 지속적인 성장, 농어촌생활 수준의 향상, 농어민소득증대사업과 농산물가격의 안정과 유통근대화, 농어촌생활환경개선, 국민식량공급의 안정에 두고 제4차 계획기간 중 여러가지 농업 정책을 실시하였으며 그 주요 내용은 다음과 같다.

먼저 정부는 식량수급시책을 지속적으로 추진하여 農業生産基盤造成과 農業機械化 事業을 지속적으로 추진하고 미곡 수매가격 인상율을 점진적으로 상향조정하는 한편 맥류증산을

본격적으로 실시하였으나, 1970년대 후반 저곡가정책으로 전환되었다.

農產物流通構造改善을 위하여 농산물유통에 관련된 모든 법령의 정비를 실시하였다. 정부는 1977년 농수산물유통 및 가격안정에 관한 법률을 제정하여 생산자에게는 소득증대에 기여할 수 있는 적정가격을 보장해 주고, 소비자에게는 안정된 가격으로 농산물을 공급하는 것을 주된 목표로 삼았다. 또한 농산물의 풍흉, 계절에 따른 심한 가격 등락을 예방하기 위하여 가격안정대제도(1977)을 도입하여 수매 비축 및 비축분의 방출을 통한 생산자와 소비자의 보호에도 노력하였다. 아울러 산지 유통체제를 강화하여 농협의 산지출하체제를 확립하고 생산의 집단화, 단지화를 통한 대량생산 및 출하 기반을 조성하였다.

농정지원체제의 강화조치로서 韓國農村經濟研究院(1978. 4)을 설립하는 한편 농산물의 계약생산·수매·수입·비축 및 방출의 업무를 담당하는 농수산물 價格安定事業團(1978)을 설립하였다. 1981년도에는 축산진흥회를 확대개편한 축산업협동조합중앙회를 설립하여 축산물의 수급조정, 사료수급조정 및 가축개량 기능을 수행하도록 하였다. 새마을소득증대사업의 반성으로 새마을소득증합개발사업(1977)을 시행하여 특정품종의 主産團地를 조성하고 여기에 필요한 가공유통시설까지 유기적으로 연결시켜 나갔으며, 農村人口의 老齡化와 婦女化에 대비하여 營農後繼者를 育成하였다.

1978년부터 국내식료품 가격이 앙등하고, 국민소득이 증가함에 따라 경제작목의 증산에도 많은 노력을 기울인 시기가 제4차 계획기간이었으나, 자연재해 및 작목간의 수급불균형으로 심한 가격 파동을 겪게 되어 1978년부터 농산물 수입자유화 정책의 빌미를 제공하는 원인이 되기도 한 시기였다.

결과적으로 1970년대 輸出主導成長期 農政基調는 역시 식량의 증산(주곡의 자급)이 농정의 핵심이었다. 그러나 1978년 이후 국민경제성장에 따른 소비구조의 변화와 자연재해 등에 의한 國內農產物 需給不均衡으로 인하여 開放農政이 전개되었으며, 이러한 농정의 轉換은 韓國農業에 큰 危機를 야기시켜 농민의 脫農·離農 현상을 급증하게 만들었다.

〈表 2-14〉 輸出主導成長期 大邱市 主要 作物의 栽培面積 變化推移 (단위 : ha)

연 도	경지면적	미 곡	맥 류	잡 곡	서 류	두 류	채소류	과실류	특용작물
1972	3,098	1,420	1,494	4	74	16	2,118	529	17
1974	2,963	1,155	1,356	5	59	318	1,138	538	35
1976	2,218	1,062	956	3	86	162	612	542	25
1978	1,934	779	600	2	9	44	1,095	460	70
1980	1,491	521	187	4	11	53	747	320	36

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

輸出主導成長期 大邱農業은 1960년대 침체기와는 다른 양상으로 농업의 쇠퇴가 심화되었다. 즉 <表 2-14>와 <表 2-15>에서 알 수 있는 바와 같이 農業衰退의 일반적 지표인 栽培面積 뿐만 아니라 기술적인 측면인 10a당 生産量에서도 감소가 두드러지게 나타났다. 특히 미·맥작 뿐만 아니라 1960년대 경지면적의 지속적인 감소에도 불구하고 재배면적이 증가되었던 채소류까지도 1970년대는 경지면적 감소가 크게 증가되었다. 결국 수출주도성장기 대구농업은 전례에도 없었던 危機를 맞으면서 1980년대를 준비하게 되었다.

<表 2-15> 輸出主導成長期 大邱市 쌀, 보리, 菜蔬類 및 果實類 10a當 收穫高 (단위 : ha, kg)

연 도	미 곡 식부면적	10a당 수량	보 리 식부면적	10a당 수량	채소류 식부면적	10a당 수량	과실류 식부면적	10a당 수량
1972	1,420	338	1,424	246	2,118	2,032	529	1,773
1974	1,155	370	1,288	190	1,138	1,586	538	1,485
1976	1,062	373	943	201	612	1,621	542	1,199
1978	779	491	577	225	1,095	1,662	460	1,246
1980	521	302	186	220	747	4,109	320	1,355

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

VI. 直轄市昇格以後의 農政基調와 地域農業(1981~1991)

1982년 시작된 第5次 經濟社會發展5個年計劃(1982~1986)은 주변여건 변화에 따라 한차례의 계획수정을 통하여 성장·형평·능률의 기본 이념하에 ① 경제안정기조의 정착, ② 국제수지의 균형과 자력성장의 실현, ③ 기술혁신과 산업능률의 향상, ④ 국토의 균형발전과 생활환경 개선, ⑤ 사회개발의 확충, ⑥ 정부기능의 정립과 행정의 효율화 등 여섯가지의 중점목표를 설정하고 동계획의 달성을 위하여 노력하였다.

1986년 수립된 제6차 경제사회발전5개년계획(1987~1991)은 “능률과 형평을 토대로 한 경제선진화와 국민복지의 증진”을 基本目標로 설정하고 이를 추진하기 위한 기본전략으로 ① 경제사회의 제도발전과 선진화, ② 산업구조의 개편과 기술입국의 실현, ③ 지역사회의 균형발전과 국민복지의 증진을 제시하였다. 제5, 6차 계획기간 중 농정 역시 변화된 시대적 상황에 副應하여 다양한 정책이 수립되어 農業의 成長과 發展을 도모하였다.

먼저 5차 계획기간 중에는 농산물 수입확대를 통한 농산물 공급안정과 농공지구사업을 통한 농가소득 증대로 도·농간의 소득격차를 줄이는 것을 정책 목표로 삼는 한편, 농정의

당면 과제를 농어가소득의 증대시책으로 복합영농시범사업, 농어촌경제활력화를 위한 농어 민후계자육성사업, 농수산물 가격안정과 유통의 근대화 등에 두어 이를 달성하기 위한 제반 시책이 수립·진행되었다. 1980년대 전반기에 실시된 주요 농정의 면면은 다음과 같다.

農地改革後 차지농지 및 농가비율증가 등 문란해진 농지관리체계를 바로잡기 위해 1986년 12월 농지임차관리법을 제정하였으며, 동 법은 6차례에 걸친 農地法制定 試圖가 무위로 끝나게 되어 농지법 부재의 상황에서 제정된 법이었다.

生産基盤擴充政策을 지속적으로 추진하였다. 1970년대의 대단위종합개발사업을 주축으로 1980년대 새로운 시대 환경을 맞아 농업용수 10개년계획(1982~1992)을 세우는 한편, 농공 지구조성계획의 원활화를 위해 지하수 조사와 개발을 실시하였으며 농지보존 및 경지이용률 향상을 위한 시책을 꾸준히 전개해 나갔다.

農漁村所得源開發政策을 추진하여 複合營農示範事業과 농외 소득원 개발에 역점을 두었다. 복합영농시범사업은 1983년 시행된 법으로 농업소득의 지속적·안정적 증대를 도모하고 농산물의 수급과 가격안정을 기하기 위하여 한정된 자원을 가장 효율적으로 사용할 수 있도록 米麥中心 作付體系에서 축산이나 경제작물 등 복합영농으로 경영개선을 이루고 計劃生産 및 出荷調整 體系를 갖추는 것이다. 농외소득원 개발사업은 농어촌 지역에 공업 및 서비스산업을 유치하여 농어촌 소득증대 및 소득구조 고도화를 통한 농어촌 경제의 균형있는 발전을 달성하기 위하여 1983년부터 추진되었다.

주곡자급달성 정책을 지속적으로 추구하기 위해 단위당 생산성이 높은 질과 양을 고려한 耐寒性·다수성 우량 품종을 개발 보급하였다. 또한 우량종자 보급을 통해 田作目的 획기적 증산을 도모하였으며, 종합농토배양, 적기영농과 적기적량의 시비 등 증산을 위한 운동을 지속적으로 추진해 나갔다.

농어촌지역개발을 위한 綜合對策(1986)을 수립하였다. 동사업은 농어촌의 소득증대와 함께 생활여건을 개선하여 도농간의 소득격차를 해소시켜 산업간 균형 성장을 정책 목표로 하는 사업으로서 농외소득원의 개발촉진, 농어촌생활여건의 개선, 농어민부채경감조치 등 세가지 사업을 추진하였다.

2000년대 福祉農漁村建設의 기틀을 다지기 위하여 농수산업의 취약성을 주목하고 당면한 농어촌 문제인 農水産物の 需給 및 價格不安定, 농촌인구의 급격한 감소와 노령화에 대비하고 도농간 소득격차를 해소하기 위해 정부는 제6차 계획기간 중 농정의 基本目標와 政策方向을 다음과 같이 설정하였다. 즉 “1986년 시작된 농어촌종합대책을 본격화하여 농어촌경제 체질을

강화하고 농어촌의 생활기반을 정비함으로써 다가오는 21세기 선진화된 농어촌건설”을 이룩한다는 것이다.

정부는 이러한 기본목표를 달성하기 위하여 농업정책의 기본방향을 여섯가지로 나누고 이를 달성하기 위하여 노력하였는데 그 기본 방향은 다음과 같다. 첫째, 식품소비구조의 변화에 부응한 생산체제조정, 둘째, 농수산업의 구조개선과 생산성 향상, 셋째, 농수산물의 수급안정과 유통능률 제고, 넷째, 농어가 소득증대와 농어촌 생활환경개선, 다섯째, 농업인력의 정예화와 첨단기술개발, 여섯째, 농어촌경제활성화를 위한 지원체제의 강화 등이다.

農政의 基本方向에 따라 6차 계획기간 중 시행된 농정의 면면을 보면 다음과 같다.

먼저 1987년도에 실시된 農漁家負債輕減對策은 농어촌종합대책의 일환으로 추진되었다. 동 대책의 목적은, 농촌공업화 및 농외소득정책을 통하여 농가소득을 증가시킨다는 目的下에 1986년에 추진된 농어촌종합대책이 1980년대 전반기 이후 가속적으로 누증되고 있는 농가부채를 해결하기 어렵다는 판단하에, 농어촌주민들의 負債를 과감히 경감시켜 주기 위함이다.

농외소득원의 개발을 촉진해서 農外所得의 향상을 持續적으로 추구하였다. 정부는 이를 달성하기 위하여 農工地區造成과 함께 農漁村工場導入을 적극 추진하고 농어촌부업단지의 운영을 활성화하는 한편 관광농업개발과 소득원유발센터를 설치하였으며, 동 사업들은 1987년 12월 농어촌경제활성화종합대책을 통하여 추진되었다.

정부관리양곡의 수급계획 및 수매가격과 수매량을 결정하는 데 있어서 국회의 동의를 얻도록 한 糧穀管理法이 1988년 개정되었다. 또한 쌀은 농가소득에서 차지하는 비중이 너무 커서 농가의 주요한 소득원이기 때문에 적절한 수매가격이 결정되어야 하므로 1988년부터 추곡가의 수매가격 결정에 있어 각계 의견을 최대한 반영시키기 위하여 양곡관리법 시행령도 개정하였다. 이 때부터 농민들의 주소득원인 쌀의 수매가격결정에 있어 糧穀流通委員會를 통하여 각계의견을 수렴할 수 있는 제도적 장치가 마련되었다. 이외에도 정부는 농수산부문 전문인력양성과 첨단기술 개발을 이룩하기 위해 농어민 후계자를 대폭 늘이고 경제작물 생략화 재배기술, 다수확품종개발을 추구하였다. 또한 농어촌 생활환경의 개선을 꾸준히 추진하여 사회간접시설을 확충하고 의료서비스의 질적향상을 도모하였다.

1980년대 韓國農業은 국내적으로 농업의 相對的衰退가 심화된 가운데 외국으로부터 農產物輸入開放壓力이 한층 강화되어 큰 어려움과 위기를 맞고 있다. 특히 1986년 시작된 UR협상의 타결이 임박해옴에 따라 농업·농촌문제는 그 해결의 실마리가 좀처럼 보이지 않고 있다. 한편 대구는 1981년 7월 行政區域 改編으로 農耕地面積이 크게 增加하였다. 전란

후 경제개발초기인 1960년대 미·맥을 중심으로 한 농업의 전체적인 쇠퇴에도 불구하고 과실류와 채소류의 재배면적이 증가한 이후, 수출주도성장기인 1970년대 후반부까지 모든 농산물에 있어서 植付面積 減少를 경험해온 大邱農業은 1980년대에 접어들면서 경제개발초기와 똑같은 양상이 전개되고 있다. 즉, 우리나라의 전통적인 미·맥중심 作付體系에서 채소류, 과실류를 중심으로 한 商業農이 급격히 발달하고 있다는 점이다. 아래 <表 2-16>은 직할시 승격 이후 1991년까지 주요 작물의 재배면적 변화를 나타내고 있으며, <表 2-17> 및 <表 2-18>은 1980년대 급격한 都市膨脹과 함께 재배면적이 확대되고 있는 채소와 과실류의 品目別 植付面積을 나타내고 있다.

<表 2-17>에서 알 수 있는 바와 같이, 채소류 중 식부면적이 크게 확대되고 있는 품목은 양배추, 호박, 도마도, 파, 상추 및 시금치 등이다. 또한 과실류 중에서는 <表 2-18>과 같이 복숭아, 포도 및 자두가 直轄市昇格以後 栽培面積이 크게 증가하는 품목이다.

결론적으로 1980년대 직할시승격 이후의 대구농업은 경지면적의 절대적인 감소에도 불구하고 급격한 상업농 전개와 함께 일부품목의 재배면적 증가가 나타나게 되었다. 즉 전통적 米·麥中心 作付體系에서 채소류, 과실류를 중심으로한 商業農이 발달하게 된 것이다.

<表 2-16> 直轄市昇格以後 大邱市 主要 作物의 栽培面積 變化推移 (단위: ha)

연 도	경지면적	미 곡	맥 류	잡 곡	서 류	두 류	채소류	과실류	특용작물
1981	8,180	4,079	1,634	19	50	326	1,782	1,261	119
1983	7,908	4,039	1,145	6	35	327	1,466	1,291	40
1985	7,623	3,870	733	14	31	195	2,589	1,275	109
1987	8,054	3,662	566	12	17	266	2,537	1,997	290
1989	7,493	3,494	365	11	17	318	2,880	1,535	145
1991	6,426	2,519	89	11	8	191	2,714	1,575	143

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

<表 2-17-①> 直轄市昇格以後 大邱市 主要 菜蔬類의 栽培面積 變化推移 (단위: ha)

연도	무우	배추	양배추	오이	호박	참외	수박	고추	마늘	가지	도마도	파	양파
1981	304	622	12	45	12	6	24	176	124	35	59	274	17
1983	113	362	13	30	92	19	31	146	83	5	42	322	75
1985	188	438	32	40	22	—	—	132	284	8	41	732	16
1987	154	599	4	15	53	8	19	128	157	7	46	757	45
1989	314	539	15	78	44	22	—	80	86	1	131	983	18
1991	183	657	30	49	193	1	21	66	82	4	214	724%	3

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

〈表 2-17-②〉 直轄市昇格以後 大邱市 主要 菜蔬類의 栽培面積 變化推移 (단위 : ha)

연 도	당근	상추	딸기	시금치	미나리	우엉	토란	기타	총경지면적
1981	5	28	—	40	—	—	—	—	1,782
1983	2	58	—	70	3	0.3	0.2	—	1,466
1985	7	469	13	151	11	3	2	—	2,589
1987	3	363	30	137	5	5	2	—	2,537
1989	1	334	57	145	27	3	2	—	2,880
1991	1	272	15	170	25	3	1	—	23

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

〈表 2-18〉 直轄市昇格以後 大邱市 主要 果實類의 栽培面積 變化推移 (단위 : ha)

연도	사과	배	복숭아	감	포도	자두	기타	합 계
1981	520	25	209	2	408	—	97	1,261
1983	472	10	280	35	457	—	36	1,291
1985	438	17	250	6	521	—	43	1,275
1987	425	2	510	3	856	—	201	1,997
1989	366	—	354	6	619	63	127	1,535
1991	426	2	283	7	533	56	268	1,575

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

第3節 林 業

I. 解放以前의 大邱林業

우리 국민에게 목재와 연료 및 부산물을 풍부하게 제공해 주는 천연자원으로서 산림의 가치는 고래로부터 막중하였다. 그러므로 고려시대 이래로 조선시대까지 우리나라 산림정책의 근간은 산림의 개인독점을 금지하는 私占禁止制度였다.

그러나 이러한 林野共有制는 이조중엽 이후 국정의 문란과 함께 공신·귀족을 중심으로 墳墓·柴草地 등 임야의 사점이 성행하고 이를 매매하는 지경에 이르자 성종은 1494년 『금화령』을 내려서 산림을 보호하였다. 정조는 1788년 『松禁節目』이란 산림보호령을 내리고 소나무 등 산업용재와 밤나무와 같은 穀樹資源을 장려하였다. 조선말기에 이르러 삼정의 문란과

함께 보호를 받지 못하게 된 무주공산인 산림은 인민의 자유남벌과 화경 등으로 산림의 荒廢化가 극심하게 되었다.

1910년 한일합방과 함께 일제는 大韓帝國時 봉건적 임야공유제를 타파하고 근대적 임야제도로 전환시키기 위해 제정된 『山林法』을 1911년에 폐지하고, 동년 6월 26일 법령 제10호로 『山林領』과 『同施行規則』을 공포함으로써 朝鮮林政의 기반을 마련하였다. 산림령의 주요 내용은 보안림의 편입과 그 이용의 제한사항, 營林감독의 규정, 부분림제도의 폐지와 대부조림의 장려 등이었으나, 이는 일본 제국주의의 흥계에 지나지 않았다. 왜냐하면 법의 주요 내용들이 일인들을 중심으로 대산림주의를 창출하고자 하였던 이른바 처분정책의 일환이었고, 산림자원의 식민지적 수탈을 강화하기 위한 조치였기 때문이었다. 일제는 1926년 『朝鮮林政計劃』을 수립하여 임정기간의 통일, 국유임야 영림사업의 개선 및 민유임야의 개선을 시도하는 동시에 압록강유역의 자본수탈을 한층 강화하였다. 또한 1937년 民有林利用調査10個年을 수립하여 민유림에 관심을 보이기도 하였다.

한편 조선 말 이래 대구는 산림의 濫伐로 인한 황폐화가 극심하였다. 특히 낙동강변 산맥의 황폐화가 심하여 大邱地域 産業發達에 크게 방해를 주었을 뿐만 아니라 國土의 保全 및 수원의 유지에도 큰 어려움이 있었다. 이에 총독부는 1922년 대규모 砂防工事를 착수하여 20년간의 노력 끝에 녹화가 완성되어 산림이 우거진 대구를 구경할 수 있는 기회를 맞이하게 되었다. 그러나 일제의 대동아전쟁 수행과 함께 산림자원의 남벌이 극심하게 되어 대구는 산림의 황폐화가 심화된 가운데 해방을 맞이하게 되었다.

II. 解放直後 및 韓國戰爭期の 林政基調와 地域林業 (1945~1953)

1945년 해방과 더불어 군정시기의 정치적·경제적·사회적 불안정은 도·남벌의 확대 및 농촌 연료채취 등을 통한 산림의 황폐화가 더욱 심화되는 계기가 되었다. 이에 군정당국은 일제산림정책을 모방하여 민유림 조림사업10개년계획을 수립하였으나 그 실적은 미비하여 1946~1948년까지 3년간 106천ha를 조림하는데 그쳤다. 조림성과도 농약, 비료 등의 자재 부족으로 불량묘가 생산되었을 뿐만 아니라 수송능력 부족 및 묘목취급 불량으로 인하여 큰 성공을 거두지 못하였다. 특히 우리나라 실정에 어두웠던 군정기간이라 올바른 산림정책이 수립되지 못하여 산림의 황폐는 일제시대보다 더 심하였다.

1948년 정부수립과 함께 정부는 임정의 기본 방향으로 ‘임목의 도·남벌방지와 벌채단속’, ‘식수조림 및 임산연료를 최대한 土炭으로 대체할 것’ 등을 결정하는 한편, 식수조림 권장으로 5식1벌주의에 의한 민유림조림10년계획(1949~1958)을 수립하였다. 그러나 이러한 계획도 불의의 6.25전란으로 중단되고 말았다.

1952년 戰局이 호전됨에 따라 정부는 시급한 황폐지 복구사업을 위하여 단기속성녹화3개년계획(1952~1954)을 수립하였다. 동 계획은 싸리나무, 오리나무, 상수리나무 등 척박한 토양에 생육이 가능한 속성나무를 식재 또는 파종하였다. 아울러 산림계의 육성 및 운영을 지원하기 위하여 국유임야를 대부하기도 하였다. 민유림조성5개년계획(1952~1957)을 수립한 것도 6.25전란기였다.

정치·사회적 혼란으로 인하여 일제시대 건설한 사방시설이 거의 파괴되자 정부는 조림사업 뿐만 아니라 사방사업에도 힘을 기울여 1952년까지 모두 세차례의 사방사업을 계획·발표 하였으나 그 실적은 미미하였다. 한편 대구 역시 해방전 대동아전쟁에 의한 일제의 산림수탈과 해방후 무질서 및 혼란의 가중으로 인한 농민의 산림남벌이 극심하여 해방 당시 대구 부근의 산은 완전히 황폐화 되었다. 이러한 상황에서 대구는 1946년 4월 10일부터 17일까지 8일간 해방기념식수를 통하여 32만 3,000本을 식수하여 모든 시민들이 산림녹화에 큰 관심을 보였다. 그리고 1948년 정부수립과 함께 산림경찰을 강화하고 산림보호를 실시하여 산림녹화에 힘쓰게 되었다.

III. 戰後再建期の 林政基調와 地域林業(1954~1961)

전후복구를 위한 목재 수요량이 증가하여 산림의 盜伐·濫伐이 극심해지자 정부는 1951년 9월 山林保護臨時措置法을 제정하여 산림보호 및 미임목지에 대한 조림에 노력을 기울였으나 별다른 성과 없이 휴전을 맞게 되었다. 1954년 2월 농림부가 서울로 환도한 이후 비교적 활발한 임정이 실시되었다. 정부는 UNKRA 및 ICA원조자금에 의한 造林事業을 활발히 추진하는 한편, 산지·해안 등의 砂防事業을 지속적으로 추진하였다.

정부는 전후재건기 林業部門의 중요 시책인 조림사업의 경우 造林施策의 기본 목표를 단벌기 속성수 조림에 두고 더 집약적인 조림을 하였을 뿐만 아니라 조림도 경영 목적에 알맞게 농산촌임산연료 공급을 위한 농용림, 토사유출방지 및 토지생산력 증대를 위한 지역개량림, 목재공급을 위한 용재림으로 구분하여 실시하였다. 특히 1957년 특수림조성5개

년계획을 수립하여 농가부수입증대에도 관심을 기울였다. 이밖에도 민동산에 地被物을 파종하여 초지화함으로써 사태를 방지하고자 하는 상류수원함양사업이 1956년 실시되었으며, 松蟲五倍子繩의 피해를 방지할 목적으로 1956년 수원임업시험장육종지장을 개설하여 충해에 강한 교잡육종사업을 개시하였다.

1961년 12월 27일 법률 제881호로 공포된 山林法은 대한민국이 제정한 근대적 산림법이며 동법의 성립과 더불어 우리나라도 독립된 林政體系를 갖추게 되었다. 광복이후 오늘날까지 우리나라의 산림행정의 주력사업은 국토의 速成綠化를 위한 조림사업, 황폐지복구를 위한 사방사업 등이었으며 대구도 종전과 더불어 지속적인 조림사업과 사방사업을 시행하였다. <表 2-19>는 1957년부터 1961년까지의 대구시 사방사업실적을 보여주고 있으며 1959년을 頂点으로 施行面積과 조림본수가 감소하는 것으로 나타나고 있다.

<表 2-19> 大邱市 砂防事業 實績 (單位：陌, 本)

연 도	총 수		산 지 사 방		기 타	
	시행면적	조림본수	시행면적	조림본수	시행면적	조림본수
1957	73	325,000	73	325,000	—	—
1958	95	421,000	95	421,000	—	—
1959	406	991,000	406	991,000	—	—
1960	815	959,000	815	959,000	—	—
1961	200	976,000	200	400,000	—	576,000

資料：대구시, 《대구통계연보》, 1973~1981.

IV. 經濟開發初期의 林政基調와 地域林業(1962~1971)

5.16혁명 후 제1, 2차 경제개발5개년계획기간(1962~1971)은 林業部門에서 임정의 질서가 확립되었을 뿐만 아니라, 확고한 기술로서 성공적 조림을 이룰 수 있는 여러가지 제도적 보완이 뒤따랐던 중요한 기간이었다. 즉, 종묘가격 고시제와 종묘심사제가 실시되는 한편, 국가 주도하의 治山綠化事業이 강력하게 추진되고 산림계직영양묘사업 및 농촌연료림 조성사업이 더욱 촉진되었던 시기였다.

경제개발 초기의 주요 임정을 살펴보면 우선 녹화사업을 경제행위로 보아 근대적 산업으로서의 임업을 육성함으로써, 200만 산주농민의 자발적 참여 속에 경제임업과 국토녹화를 동시에 달

성하자는 발상으로 1965년 林業發展長期計劃(1970~2004)을 수립하였다. 또한 조림목표로는 치산7개년계획(1965~1971)을 수립하여 용재림, 특수림, 개량포플러 등 22만 2,035ha를 조림할 것을 계획하였으나 1967년 山林廳의 발족과 함께 동계획은 중단되게 되었다.

정부는 조림과 더불어 사방사업에도 관심을 기울여 일제때 제정된 조선사방사업령을 砂防事業法(1962.1)으로 새롭게 정비·공포하였을 뿐만 아니라 國土綠化促進에 관한 임시조치법(1963), 치산7개년계획(1965~1971) 등을 수립하여 사방사업에도 지속적인 관심을 기울였다.

1960년대 임업부문에 있어서 가장 중요한 발전은 산림청의 발족이라 할 수 있다. 1967년 발족된 산림청은 국토녹화와 임업발전을 통한 국민복을 지상과제로 하여 장기임업발전계획을 지속적으로 추진하기 위한 기관으로 1968~1989 양년에 걸쳐 장기임지이용계획과 大團地造林計劃(1970~2004)을 작성·수립하였다.

한편 대구도 제1, 2차경제개발계획기간(1962~1971)동안 국토녹화를 위한 조림사업을 지속적으로 추진하고 사방사업에도 전력을 기울였다. 특히 국토녹화사업인 조림사업은 <表 2-20>에서 알 수 있는 바와 같이 1950년대 이래로 지속적인 사업 추진 결과, 1960년대 중반 이후에는 조림면적이 크게 감소하는 것으로 나타나고 있다.

<表 2-20> 經濟開發初期 大邱市 造林實績 (단위 : ha, (천본))

연 도	총 면 적	시유모범 조림면적	국토미화 조림면적	연료림 면 적	용재림 면 적	특수림 조림면적	포푸라 조림면적	자력조림 면 적
1962	751(2598)	83(250)	30(135)	350(1400)	30(90)	27(14)	-(-)	231(709)
1964	931(2179)	-(-)	120(41)	400(1601)	100(300)	300(216)	11(20)	-(-)
1966	573(1507)	30(20)	20(4)	412(1337)	-(-)	90(41)	21(105)	-(-)
1968	184(620)	-(-)	-(-)	130(520)	30(90)	-(-)	24(10)	-(-)
1970	228(663)	-(-)	8(3)	-(-)	-(-)	220(660)	-(-)	-(-)
1971	171(487)	-(-)	-(-)	-(-)	-(-)	161(483)	-(-)	-(-)

註 : 본 도표에서 ()안의 숫자는 조림본수를 나타냄

資料 : 대구시, 《대구통계연보》, 1963~1972.

1960년대 경제성장과 더불어 목재소비량이 증가함에 따라 목재공업도 발달하게 되었으며, <表 2-21>은 경제개발 초기 대구시 제재공업의 현황을 나타내고 있다. 정부는 조림과 더불어 사방사업에도 관심을 기울여 일제시 제정된 조선사방사업령을 砂防事業法(1962. 1)으로 새롭게 정비·공포하였을 뿐만 아니라 國土綠化促進에 관한 임시조치법(1963), 치산7개년계획(1965~1971) 등을 수립하여 사방사업에도 지속적인 관심을 기울였다.

1960년대 임업부문에 있어서 가장 중요한 발전은 산림청의 발족이라 할 수 있다. 1967년 발족된 산림청은 국토녹화와 임업발전을 통한 국민민복을 지상과제로 하여 장기임업발전계획을 지속적으로 추진하기 위한 기관으로 1968~89 양년에 걸쳐 장기임지이용계획과 大團地造林計劃(1970~2004)을 작성·수립하였다.

〈表 2-21〉 經濟開發初期 大邱市 製材實績 (單位: m³)

구분별	공장수 (개)	총동력 (HP)	제재기	공장노무자 총수(명)	소 비 량 (침엽수+활엽수)	생 산 량 (각재+판재+상자재)
1962	50	1,506	66	393	69,930	36,168
1964	45	1,223	99	365	125,000	52,500
1966	46	1,278	69	353	29,289	24,400
1968	45	1,223	59	359	32,771	23,340
1970	51	1,881	77	375	40,219	25,575
1971	53	1,516	80	419	37,938	24,063

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 1963~1972.

V. 輸出主導成長期の 林政基調와 地域林業(1972~1980)

정부의 1960년대 후반기 조림방향에 따라 시행된 대단위산지개발계획은 1973년 산림청이 농림부에서 내무부로 이관되면서 중단되고 국토조기녹화를 위한 새로운 장기계획인 治山綠化10個年計劃(1973~1982)이 수립·시행되었다. 동계획의 구체적 추진내용은 국민식수, 86개 경제림단지조성, 의무조림의 강화, 적지적수 조림, 주민소득과 직결된 마을조림 등을 통하여 치산녹화를 달성하는 데 있었으며, 목표년도보다 4년 앞당겨진 1978년 108만ha의 조림을 완수하여 대단위산지개발계획은 국토녹화의 조기달성과 국민식수기반을 조성하였다.

또한, 火田整理5個年計劃(1974~1978)을 추진하여 화전정리 및 화전민의 이주·현지 정착사업을 시행하여 1979년 화전정리사업이 완성되었다. 정부는 치산녹화사업 시행과 더불어 야생조수보호사업을 더욱 강화하여 철새서식지 및 국립공원 등에 특별보호구역을 설치하는 한편 유치림조성, 불법수렵행위의 단속을 강화하여 조수보호에도 노력을 기울였다. 경제개발 계획의 성공과 함께 내수확대 및 수출을 위한 목재수요가 크게 늘어나게 되자 長期木材需給計劃(1974~1981)을 수립하여 목재의 안정적 수급에도 온 힘을 기울였다.

1970년대 대구시 임업은 정부의 임정기조에 맞추어 조림·사방사업을 지속적으로 실시한

결과 조림면적과 사방사업실시 면적이 모두 지속적으로 감소되었다. 특히 사방사업의 경우는 <表 2-22>에서 알 수 있는 바와 같이 1975년을 기점으로 그 이후는 사방실적이 전무한 것으로 나타나고 있다.

<表 2-22> 輸出主導成長期 大邱市 砂防事業實績 (단위: ha, 천본)

연 도	총 수		산 지 사 방		해 안 사 방		기 타	
	시행면적	조림본수	시행면적	조림본수	시행면적	조림본수	시행면적	조림본수
1972	70	250	70	250	—	—	—	—
1973	14	27,000	10	25,000	—	—	—	—
1974	135	7,963	135	7,963	—	—	—	—
1975	70	405	70	405	—	—	—	—
1976	—	—	—	—	—	—	—	—
1977	—	—	—	—	—	—	—	—

資料: 대구시 <대구통계연보>, 각 연도

VI. 直轄市昇格以後의 林政基調와 地域林業(1981~1991)

1973년 시작된 제1차 치산녹화10개년계획이 성공적으로 끝나자 1980년대 우리나라 산림은 푸른 산으로 뒤덮이게 되었다. 그러나 정부는 이에 만족하지 않고 1980년대 제2차 치산녹화10개년계획(1979~87)을 비롯하여 다양한 정책을 수립하여 시행하였다.

먼저 정부는 第2次 治山綠化10個年計劃(1979~87)을 수립하여 국토녹화 뿐만 아니라 產地資源化를 위한 여러 시책을 추진하였다. 즉, 다양한 造林目標를 설정해서 그 물량, 목표달성을 위하여 범국민식수운동 전개, 포플러 6억그루 심기 운동 등을 추진하는 한편, 조림수종의 자원화를 위해 속성수대 장기수의 조림비율을 5대5로 균형 있게 식재하고 대단위 경제림단지를 조성할 것 등을 조림의 기본 방향으로 설정하고, 이를 달성하기 위한 제반시책을 꾸준히 추진하였다. 그 결과 제2차계획은 국민조림체제의 정착화·경제림조림확대 및 경제림 단지조림 등으로 산지자원화 기반을 조성하였다.

한편 山林廳이 내무부에서 다시 농수산부로 이관된 1988년에는 산지자원화10개년계획(1988~1997)을 수립하여 현재 시행중에 있다. 또한 해방 후 林政의 지속사업인 치산녹화 계획과 함께 野獸의 보호에도 힘을 기울여 종합적인 野生鳥獸保護基本計劃(1987~1991)을 수립하고 야생조수보호사업에도 많은 관심을 쏟았다. 그리고 고도의 산업화·도시화 현상과

국민생활수준 향상에 따른 국민레저 수요증가에 대응하여 경관이 수려한 도시근교 산림에 휴양림을 조성하여 국민에게 휴식공간을 제공해 주고, 산주소득의 증대를 도모할 목적으로 第3次 產地資源化計劃(1988~1997)에 의거 自然休養林造成事業이 착실히 진행되고 있다.

직할시 승격에 따라 대구시 임야면적은 1979년 총임야면적 7,248ha에 비해 1980년도는 3.3배나 증가한 2만 4,025ha로 확대됨에 따라 <表 2-23>과 같이 편입된 산지에 대한 조림 면적이 1980년대 초반 크게 확대되었다.

<表 2-23> 直轄市昇格以後 大邱市 造林實績 (단위 : ha, 천본)

연 도	총 계	장기수 조림면적	특용수 조림면적	속성수 조림면적	유실수 조림면적	기타 조림면적
1981	837(1704)	515(1535)	-(-)	285(129)	-(-)	37(40)
1983	366(817)	110(268)	-(-)	2(6)	-(-)	254(543)
1985	27(329)	27(47)	-(-)	2(4)	-(-)	-(281)
1987	46(639)	41(95)	-(-)	-(-)	-(-)	-(540)
1989	29(474)	29(52)	-(-)	-(-)	-(-)	-(422)
1991	120(268)	46(71)	-(-)	-(-)	-(-)	73(198)

資料 : 대구시 <대구통계연보>, 각 연도

또한 1980년대 대구시 임업에 있어서 중요한 변화는 1970년대 시작한 치산녹화사업 중 經濟林造成事業에 힘입어 <表 2-24>와 같이 임산물 생산량이 다양화 되었다는 점이다.

<表 2-24> 直轄市昇格以後의 大邱市 林產物 生産量(1981~1991)

연 도	야생종실 (Kg)	버섯 (Kg)	연료 (M/T)	약용 (Kg)	용재 (m³)	녹비 (M/T)	퇴비원료 (M/T)	사료 (M/T)	산나물 (Kg)
1981	82,000	-	10,560	-	1,253	-	28,500	13,180	-
1983	98,852	3,300	15,533	-	390	-	66,598	11,380	700
1985	138,269	2,340	4,213	272	1,247	-	75,368	5,180	5,247
1987	102,946	1,000	1,514	370	160	-	21,746	3,205	7,173
1989	63,888	1,120	1,217	255	59	60	35,864	4,042	5,387
1991	38,989	-	-	-	-	-	-	-	7,502

資料 : 대구시 <대구통계연보>, 각 연도

第4節 畜産業

I. 解放以前の 大邱畜産業

우리나라 농업생산액 중 축산물 비중이 큰 것은 아니지만, 牧畜은 고대시대로부터 삼국시대와 고려 및 이조시대를 통해 우리 조상들과 밀접한 관계를 맺어왔다. 고래로 농경에 있어 농업생산 수단으로서 소와 말을 中心으로 役畜으로 이용하기 위해 영위되어온 축산은, 일제의 한국침탈과 함께 근대적인 의미의 축산업이 시작되었다.

일제시대 畜政은 식료인 육류와 공업연료인 모피류를 조달하기 위한 가축의 개량과 증식에 주안점을 두고 計劃·推進되었다. 한일합방 이전까지 가축위생사업에 몰두하던 일제는 1911년 권업모범장 대구지장을 비롯하여 각도 종묘장에 種牛所를 설치하여 우량한 재래종모우를 사양하고 이것을 巡廻交尾方法에 의해 민간소유의 암소에 중부하여 품질이 열등한 지방의 축우를 신속히 개량코자 하였다. 아울러 1911년부터 畜産組合을 조직하기 시작하였는데 同組合의 근본 목적은 싸고 맛있는 고기를 일본으로 공급하기 위한 착취기관이라 할 수 있다. 또한 1912년 도유 빈우 무상대부제도를 두어 종모우 설치제도를 효과적으로 밀고 나가고 소농에 이르기까지 축우를 소유할 수 있는 기회를 조성하였다. 일제는 1913년 牛契組織을 착수하였는데 이는 축우의 폐사에 대한 共濟를 목적으로 하였다. 한편 1915년 수역예방청과 동형의 시행규칙을 마련하고 수역예방심득을 고시하였는데 이는 病獸의 조기발견과 병독전파의 방지, 예방액 또는 면역혈청의 주사여행 등에 주력하기 위함이었다. 1918년 수역혈청제조소 관제를 만들어 우역혈청의 제조·시험 및 공급사업을 맡도록 함으로써 家畜防疫機關의 完成을 보았다.

1920년대에 접어들면서 일제는 축정의 목표를 비육사업과 증산에 중점을 두고 여러가지 시책을 전개하였다. 먼저 1924년 原種牛생산지구를 설정하였는데 이것은 설정된 생산지구를 중심으로 각 도에 있어서의 우량종우를 집단적으로 개량·증식시키기 위함이었다. 또한 1929년 축우증산계획이 정식으로 수립되어 축우의 증산에 온 힘을 기울였으며, 1930년에는 家畜傳染病豫防령을 제정하여 가축의 보호에도 힘쓰게 되었다.

1930년대 중반부터는 돼지와 말 증식을 위한 시책이 실시되었으며 수요가 날로 증가하는 모직원료를 확보하기 위해 綿羊獎勵計劃을 수립하여 1934년 실시하였다. 이른바 남면북양정책이 이 때에 완성된 것이었다. 남쪽지역에는 농가1호당 농우1두, 서북5도는 면양5두씩을 보유시키도록 한 증산계획은 오랫동안의 전화와 식민지예속관계 및 사료난 등으로 증산목표를

달성하지 못한 채, 전쟁말기 축우의 일본수출만 심해져 축우의 수가 급격히 감소한 가운데 우리나라는 해방을 맞이하게 되었다.

대구는 일찌기 경상북도의 정치적 경제적 중심지로서 1911년 권업모범장 대구지장을 통하여 우량한 재래종모우의 사육·보급에 힘썼다. 그러나 일제시대 대부분의 농민이 소작농의 지위를 벗어나지 못하였기 때문에 단지 생계유지를 위한 영농에 급급한 상황에서 대구의 축산업 발달은 기대할 수 없었다.

II. 解放直後 및 韓國戰爭期の 畜政基調와 地域畜産業 (1945~1953)

1945년 해방의 기쁨과 축제 속에서 무질서한 소의 도축으로 인하여 미군정은 유우도살 금지령을 발표하여 소 資源의 보호에 힘썼다. 그러나 한국농업에 있어서 한우의 중요성과 농경부 부족사태를 인식함에 따라 미군정은 1947년 6월 韓牛屠殺禁止령을 공포하여 한우의 보호에 힘썼으나 해방 이후 정부수립까지 무분별한 가축도살로 축산업발전은 큰 장애를 겪게 되었다. 1948년 정부수립과 함께 정부는 축산물 수요의 증가와 농업경영에 소요되는 역축의 확보 및 퇴비의 증산을 도모하고 축산의 진흥을 위하여 산업5개년계획의 일환으로 畜産9個年計劃을 수립하였다.

1949년부터 실시된 축산9개년계획은 축산사업의 육종상 또는 번식상 특성으로 인하여 일정한 목표의 효과를 얻자면 장시일을 요함으로 3개년씩 3차로 나누어 추진하도록 계획되었다. 먼저 제1차 3개년간에는 통계조사시설정비와 擴充種畜의 설정, 그 밖에 牧野건설 등의 정비를 완수하고, 제2차 3개년계획에는 국내에서 생산되는 사료와 牧野를 최고도로 활용할 만한 영역까지 축산을 확충하고, 제3차년간에는 국내생산뿐만 아니라 외국에서 공급받는 수량까지 포함한 한도로 축산물 증산을 강행코자 한다는 것과 有畜農業의 철저화를 강조하였다.

그러나 9개년축산계획이 본격적으로 추진될 무렵에 6.25동란이 발발하여 실시후 2년을 경과하지도 못한 채 좌절되었을 뿐만 아니라 가축의 피해 또한 막심하였다. 전란 중 정부는 가축시장법 입법(1950. 2)을 통하여 가축시장운영의 합리화를 꾀하고 1951년 3월에는 牛馬屠殺禁止령을 공포하여 축산은 새로운 전환을 맞게 되었다.

한국전쟁 이후 정국이 안정국면으로 접어들자, 1951년 축산부문에 관한 많은 행정조치가 있었다. 먼저 家畜檢疫規則을 공포하여 외국으로부터 수입되는 축산물에 대한 전염병 및 기타

위해사항을 검색하였다. 아울러 동년 각 도간의 한우두수 불균형을 조절하고 원활한 농경을 위해 정부는 30억원을 투입하여 각 도간의 한우사육두수를 조절하는 각 도간 韓牛調整配置事業을 시행하였다. 또한 韓牛種牧牛설치사업을 1951년 착수하여 한우번식을 촉진하고 자질개량을 도모하였다. 1952년도에는 畜産同業組合을 탄생시켰는데, 이는 우마를 비롯한 가축의 근본적인 보호증식을 위해 시도된 현재의 축산업협동조합의 전신이었다. 휴전이 성립된 해인 1953년에는 축산부흥5개년계획이 수립·시행되어 畜産増殖을 위한 基礎를 닦았다.

대구 역시 8.15해방과 더불어 소위 대동아 전쟁 수행을 위하여 굶주리며 짓눌렸던 압제로부터 풀려난 시민들은 기쁨과 함께 굶주렸던 공복을 飽食하는 희열에 넘쳐 무분별한 가축의 도살이 자행되어 다른 지역과 마찬가지로 가축이 크게 부족하게 되었다. 이러한 어려움 가운데 한국전쟁이 발발하여 大邱의 畜産業은 또 한번 큰 타격을 입게 되었다. 그러나 대구는 다행히도 적의 수중에 들지 않았을 뿐만 아니라 1951년 이후 전쟁이 소강상태로 접어들게 됨에 따라 축산업도 점점 회복기에 접어들게 되었다.

III. 戰後再建期の 畜政基調와 地域畜産業(1954~1961)

1950년대 중·후반부는 한국 축산의 増殖期로서 축정의 중심이 양적 증식에서 질적 개량, 사육기술 향상을 통한 飼養經濟의 改善 및 소비시장개척에 의한 생산의욕을 증진케 하는 방향으로 畜政 轉換을 도모하였다.

먼저 가축의 증산면에서 1953년 시작된 第1次 畜産復興5個年計劃을 추진하여 한우의 기본 두수 확보와 중소가축(돼지, 닭)의 기반을 마련하는 성가를 마련하였으며, 동 계획의 성공적인 추진에 힘입어 제2차 축산진흥5개년계획(1958~1962)을 수립하여 家畜·家禽의 改良増殖과 飼料増産에 온 힘을 기울였다. 또한 축산부흥5개년계획의 3차년도인 1960年 畜産獎勵5個年計劃을 수립하여 항구적인 축산발전을 위한 제반시책을 수립·시행하려 하였으나, 두번의 정권 교체에 따라 계획의 연속성이 결여된 채 축정은 수난을 거듭하였다.

1950년대 중반 농경우(한우)의 보호 증식, 도축의 제한, 가축시장의 운영관리 등을 비롯한 축산전반을 보호 육성할 수 있는 家畜保護法이 1954년 1월 제정 공포되어 가축에 대한 정부시책이 일층 강화되었다. 또한 가축보호법에 의거하여 가축의 폐사 등 불의의 농가피해를 보진키 위하여 가축 공제규정을 마련하여 그 수행을 축산동업조합이 맡도록 하고 재원은 가축시장 운영수입으로 충당토록 하는 가축공제제도가 1956년 11월 시행되었다. 동년 12월에는 獸醫師法이 제정되어

수의업무 수행에 관한 제반사항을 법제화하였다.

이외에도 축산업의 성장에 따라 畜産物加工處理法이 1961년 1월 공포되었고, 축산발전과 더불어 많은 가축의 유통으로 인한 점염병의 확산을 방지하기 위한 家畜傳染病豫防法이 1961년 12월 제정되었다.

〈表 2-25〉 戰後 再建期 大邱市 家畜 및 家禽 飼養 現況 (단위: 마리, 통수(꿀벌))

연도 \ 가축명	축 우	유 우	말	돼 지	산 양	닭	토 끼	꿀 벌	개
1954	1,453	8	582	2,085	253	41,271	820	253	3,163
1957	5,023	23	596	5,599	639	86,689	1,145	717	2,912
1958	5,240	29	573	5,955	1,061	121,039	1,508	726	5,409
1959	5,364	20	554	5,862	910	147,555	4,233	557	8,559
1960	5,100	35	522	4,943	1,101	128,256	—	572	7,396
1961	4,883	48	558	6,042	2,306	—	7,544	—	—

資料: 경북대관편찬위원회, 《경북대관》, 1958.

경상북도, 《도세일람》, 1958~1960.

대구시, 《대구통계연보》, 1962.

위의 〈表 2-25〉와 같이 戰後再建期 대구에서 사육되고 있는 축산은 축우, 유우, 말, 돼지, 닭, 개, 산양 등으로 나타나고 있다. 1950년대 地域畜産業은 당시의 畜政基調인 가축의 증식을 지속적으로 추구한 政策基調와 맞물려 지역축산업도 양적인 팽창이 크게 이루어진 기간이었다. 왜냐하면 비록 1957년 행정구역 개편으로 축산규모가 크게 확대된 측면도 없지 않으나 상업적 축산을 영위하는 전업 내지는 기업적 축산이 활발하지 않았던 당시 상황을 고려해 볼 때, 축우를 비롯하여 돼지, 말 등 모든 축산물의 증식이 이루어져 축산부문의 성장이 활발했던 시기라 할 수 있다.

IV. 經濟開發初期의 畜政基調와 地域畜産業(1962~1971)

1950년대 중반기 이후의 착실한 양적 발전을 기반으로 질적 변화를 가져올 수 있는 기반을 마련한 축산은 제1, 2차 경제개발5개년계획(1962~1971)의 성공과 더불어 축산분야에서도 축산법, 낙농진흥법, 사료관리법, 초지법 등 축산진흥을 위한 여러 법들이 제정되어 1960년대 축산업은 도약기를 맞이하게 되었다.

경제개발초기단계인 1960년대 대표적인 축산지원책을 자세히 살펴보면 다음과 같다. 먼저

1961~1962년 행정기구 개편을 통한 축산행정지원과 함께 1963년 有畜農業獎勵事業으로 낙농장려, 자질개량사업, 유축농가확대사업, 목장조성사업, 가축공제사업 등을 추진할 것을 결정하였다. 또한 우리나라 낙농기반을 구축하기 위한 방대한 계획의 하나인 酪農獎勵10個年計劃(1962~1971)이 수립·추진되었고, 1963년 6월에는 가축보호법의 내용을 보완하여 현실에 부합하도록 함으로써 축산발전을 촉진시키고자 가축보호법을 대신하여 畜産法을 제정·공포하였다.

경제개발 초기 과학적이고 영양학적인 측면에서 고려된 配合飼料工業이 태동되기 시작하자 사료의 수급조절과 가격안정을 도모하고자 사료관리법이 1963년 제정·공포되었다. 또한 국내 낙농업의 발전을 유도하고자 하는 酪農振興法과 우리나라 축산업의 발전과 기틀을 마련한 草地法이 1967년 1월 및 1969년 1월에 각각 제정되었다.

1960년대 축산업의 특기할 사실은 정부의 축산진흥정책에 힘입어 축산이 일반 경종농업의 부업적 위치로부터 점차적으로 탈피하여 기업화내지는 상업화의 방향으로 대형화하기 시작했다는 점과 낙농의 개발에 활발한 활력소를 불어 넣게된 시기였다는 점이다.

〈表 2-26〉 經濟開發初期 大邱市 主要 家畜 家禽의 飼養家口 및 마리수 (단위: 호, 마리)

연 도	축 우		말		돼 지		유 우 사육두수
	사육호수	마리수	사육호수	마리수	사육호수	마리수	
1963	1,703	1,774	535	554	3,030	7,541	167
1965	1,906	1,981	481	506	2,543	7,017	265
1967	1,933	1,981	485	523	1,906	4,793	358
1969	1,577	1,577	138	152	871	3,510	314
1971	1,291	1,515	148	191	684	4,172	408

資料: 대구시 《대구통계연보》, 각 연도.

축산의 跳躍期인 1960년대 地域畜産業은 〈表 2-26〉과 같이 양적인 팽창은 단지 유우만이 1963년 사육두수 167마리에서 1971년 408마리로 2.44배 증가 하였을 뿐 경종농업에 있어서 중요한 가축이었던 축우와 말은 사육호수 및 사육두수가 모두 감소하였다. 특히 축우와 말의 사육두수는 1963년 사육두수인 1,774마리와 554마리에 비해 각각 14.5%, 65.5%가 감소한 1,515마리와 191마리를 사육하는 것으로 나타나고 있다. 가구당 사육두수는 경제 성장 초기인 1960년대는 변화의 폭이 미미했으며, 단지 돼지만이 1963년 호당 사육두수인 2.48마리에서 1971년 6.10마리로 크게 증가한 것으로 나타나고 있다. 경제개발초기 한국

축산업은 성장기였음에 반하여, 대구 축산업은 사육호수나 절대적인 사육규모에서 모두 감소하는 침체기였다.

V. 輸出主導成長期の 畜政基調와 地域畜産業(1972~1980)

1960년대 중반기 이후 축산물의 국내 수요증가와 더불어 특히 해외에서 한국 축산물에 대한 가치가 높이 평가되어 輸出量이 증가되는 추세에 있어 그 전망과 성장가능성이 밝았던 축산업은 1970년대 후반기에 들어서면서 큰 危機를 맞게 되었다. 즉, 1970년대는 3차에 걸친 경제개발계획의 성공으로 국민경제가 향상되면서 축산물의 수요가 급격히 늘어나 需要와 供給間의 不均衡이 초래되어 외국(일본, 홍콩)으로의 수출이 중단되었을 뿐만 아니라 수급 불안정에 의한 가격 파동이 빈번히 일어나 축산의 문제점이 크게 대두되었던 시기였다. 또한 1976년 처음으로 牛肉이 수입되어 1980년대 소값 파동의 커다란 原因提供이 되기도 하였다.

1970년대 축정의 가장 큰 변화는 畜産振興會의 설립이라 할 수 있다. 1978년 설립된 동회는 늘어나는 축산물수급조절기능 강화의 필요성과 가축개량사업의 조직적 강화, 배합사료 수급상 원료 및 가격조절 등의 업무수행기능을 가진 조직이었다. 또한 축산업의 진흥에 필요한 재원을 확보하기 위한 제도기금으로서 1974년 한국마사법 제25조 및 행정지시로 경마사업수익금 중에서 특별적립금으로 처음 畜産振興基金이 정식으로 설치되었다.

결국 수출주도성장기 한국 축산업은 1950년대 회복기를 지나 1960년대 중농정책과 축산 진흥을 통하여 성장을 구가하였지만, 1970년대 후반에 이르러 큰 어려움과 위기에 봉착하게 되었다.

〈表 2-27〉에서 알 수 있는 바와 같이 1970년대 대구 축산업은 1960년대와는 달리 지속적인 경제성장과 함께 축산업도 양적 성장이 이루어져 말, 산양, 토끼를 제외한 대부분의 家畜 飼育頭數가 크게 증가하였다. 그러나 농업의 상대적 쇠퇴와 더불어 경종농업의 부업적위치에 있었던 소나 말은 1950년대와 비교해 볼 때 사육규모나 두수면에서 크게 감소하였다.

반면에 유우와 돼지는 경제성장에 따른 육류소비 증가에 힘입어 양적인 팽창이 가장 활발하였던 50년대에 비해 사육두수가 크게 증가하였다. 또한 농가 소득작목으로 사슴, 오리, 칠면조, 꿩 등이 사육되기 시작한 것도 1970년대 후반기의 일이다.

〈表 2-27〉 輸出主導成長期 大邱市 家畜 및 家禽 飼養 現況 (단위: 마리)

연도 \ 가축명	축 우	유 우	말	돼 지	산 양	토 끼	꿀 벌(통)	개
1972	1,515	401	135	4,395	198	2,148	—	—
1974	2,005	729	243	11,437	762	5,486	—	—
1976	2,662	877	130	11,031	304	4,181	—	—
1978	2,768	925	73	5,536	121	1,445	—	—
1980	2,869	830	29	7,304	54	1,042	347	14,288

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

경제성장에 따른 축산물의 소비량 증가를 알아보기 위하여 대구시 도축현황을 살펴보면 〈表 2-28〉과 같이 屠畜頭數가 경제성장과 더불어 지속적으로 증가하였음을 알 수 있다.

〈表 2-28〉 直轄市昇格 以前の 大邱市 屠畜 現況 (단위: 마리, kg)

연도 \ 품 목	소			돼 지		
	두 수	생 체 량	지 육 량	두 수	생 체 량	지 육 량
1960	7,604	—	722,380	14,324	1,237,750	928,311
1964	14,774	3,427,210	2,399,050	3,363	266,933	200,200
1968	12,194	4,510,742	2,000,090	11,787	926,670	788,400
1972	12,573	4,400,550	2,640,300	39,217	4,706,040	3,294,228
1976	26,481	9,858,525	4,925,262	44,621	4,015,890	3,811,123
1980	39,006	14,627,250	7,713,625	54,450	5,350,500	3,374,535

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

VI. 直轄市昇格以後의 畜政基調와 地域畜産業(1981~1991)

1970년대 후반부를 지나 1980년대는 한국 축산의 轉換期로서 축산규모 확대 및 국내의 여건변화에 따라 飼料管理法, 畜産物加工處理法, 家畜傳染病豫防法 등이 개정되어 변화된 생산 환경에 대응코자 노력하였다. 그러나 축산물 수급 불안정, 가격등락으로 인한 잦은 파동 등으로 1980년대 우리나라 축산업은 큰 위기와 시련을 겪었던 기간이었다. 특히 복합영농사업과 관련된 소값 하락 파동, 1984년 수입과정 중 발생한 병든 소 파동 등은 韓國畜産史에 있어서 가장 어렵고 힘든 시기를 나타내는 단어이다. 축산물 수입개방압력에 봉착한 1980년대 대표적인 축산정책을 알아보면 다음과 같다.

먼저 1981년 1월 畜産業協同組合中央會를 설립하여 농협 속의 업종전문조합으로부터 분리 독립하게 되어 축산인의 오랜 소원이 풀리게 되었다. 또한 농촌에 정착할 후계자를 지원 육성하여 축산을 장기적으로 농촌에 안정·정착시켜 나가고자 할 목적으로 축산후계자 육성 사업을 전개하였다.

1982년 9월 농가소득의 획기적 증대를 위해 일반 耕種 농업만으로는 농가 소득증대에 한계가 있었으므로 당시의 농가소득을 높여 주는 새로운 시책사업으로서 일반경종농업에 축산, 과수, 잡업, 特用作物 등을 복합적으로 경영하게 하는 복합영농사업을 수립하여 추진하게 되었다. 이 계획 속에 포함된 複合的 品目으로 육우, 한우 등의 소 入殖과 돼지 등의 축산이 복합품목으로 차지하는 비중이 커졌다. 정부는 동사업과 관련하여 생산된 농축산물의 원활한 판매를 보장하기 위하여 농축산물유통개선정책(1982)을 마련하였다.

1988년 7월 쇠고기 수입에 따른 보완대책을 발표하여, 1989년 9월 소비자가 용도에 따라 쇠고기를 부위별로 쉽게 구매하고, 육질에 상응하는 적정가격 형성으로 질이 좋은 쇠고기 생산을 유도하기 위한 部位別差等價格制를 실시하였다. 결국 1980년대 초반 국내 축산물의 수급불균형으로 인한 가격 파동으로 큰 어려움을 겪었던 우리나라 축산업은 1986년 시작된 UR협상의 타결이 임박해 옴에 따라 축산물 또한 수입개방압력이 한층 고조될 것으로 예상되는 오늘날 심각한 위기상황에 빠져 있음을 부인할 수 없다.

한편 직할시승격과 더불어 대구축산업은 양적인 팽창 뿐만 아니라 질적인 성장을 이루었다. 축산 사육두수가 가장 많았던 1950년대 후반부에 비해 <表 2-29>에 나타난 바와 같이 주요 가축의 飼育規模가 크게 증가하였다. 또한 1980년대 대구 축산업은 企業化·專業化 경향이 두드러지게 나타나고 있다. 그 예로 戶當 飼育頭數의 경우 직할시승격년도인 1981년 축우의 호당 사육두수가 1.70마리인데 반하여 1991년도는 9.31마리로 크게 증가하였다. 돼지 역시 기준년도인 1981년 가구당 사육두수인 12.61마리에 비해 비교년도인 1991년에는 70.30마리로 가구당 사육규모의 증가가 두드러지게 나타나고 있다.

第5節 課題와 展望

급속한 경제성장과 함께 대구의 농·림·축산업은 큰 변화를 겪고 있다. 먼저 농업부문은 경지면적 및 농가인구가 지속적인 감소 추세에 있어 농업의 상대적 쇠퇴를 부인할 수 없으며

〈表 2-29〉 直轄市昇格以後 大邱市 主要 家畜의 家禽 飼養家口 및 마리수 (단위: 호, 마리)

연도	가축		유 우		돼 지		닭	
	사육호수	마리수	사육호수	마리수	사육호수	마리수	사육호수	마리수
1981	3,090	5,272	232	2,098	1,659	22,590	1,695	1,042,266
1983	2,753	6,228	248	2,012	2,676	48,015	911	847,000
1985	2,300	7,000	200	2,000	700	23,000	672	658,800
1987	1,447	8,214	177	2,499	1,041	33,452	422	422,388
1989	1,055	7,574	161	2,667	583	30,006	302	258,496
1991	893	8,313	145	2,562	330	23,197	284	303,137

資料: 대구시, 《대구통계연보》, 각 연도.

경영규모의 영세성, 호당경지면적의 영세성 및 농가인구의 고령화는 대구 뿐만 아니라 우리나라 농업의 전반적인 문제점이라 할 수 있다.

그러나 농업이 가지는 고유한 기능인 식량 및 노동력공급에 있어서나 최근에 이르러 인간 생활을 위한 필수요인인 環境問題를 고려할 때, 농업은 앞으로도 그 발전가능성이 많은 산업이라 할 수 있다. 해방 후 지금까지 도시화·산업화에 대응하여 대구농업도 전통적인 미·맥중심의 식량작물 생산에서 채소와 과실 및 축산을 중심으로 한 근교농업으로 지속적인 발전을 거듭하고 있으나, 지가상승과 노동력부족으로 인하여 그 어려움이 가중되고 있다. 또한 도시 성장과 함께 농지의 전용이 급격히 진행되고 있다.

自由式經營에 입각한 근교농업으로의 변모를 거듭하고 있는 대구농업은 금후에도 변화된 주변 환경에 대응하여 지속적인 발전을 거듭하리라고 생각된다. 우선 농업경영면에서는 규모의 확대를 통한 專業農내지는 기업농보다는 복합경영과 부업을 증대시키는 방향으로 방향전환을 시도할 것으로 예상되며, 부족한 노동력에 대해서는 기계화가 보다 급속도로 진행될 것으로 여겨진다. 또한 채소나 화훼 및 과수 중심의 作付體系가 보다 발전할 것으로 예상되며, 자본집약적인 농업으로의 급속한 전환이 예상된다.

임업부문 역시 해방 이후 40년 넘게 지속되어온 治山綠化 사업으로 대구 주변의 산은 푸른 산림으로 뒤덮이게 되었다. 그러나 행정력 중심의 조림사업은 국토녹화에는 지대한 공헌을 하였으나 산주의 상대적 빈곤감과 소외감을 증가시키는 요인이 되었다.

산업화·도시화와 함께 녹색레저에 대한 수요가 급증하고 그동안 도외시되어 왔던 임업경영을 통한 소득증가에 대한 산주의 요구를 감안할 때, 대구 임업은 앞으로 발전 가능성이 있는 산업이라 여겨진다. 또한 과거의 治山綠化事業 2단계 과정에 실시된 經濟林 造成事業이 1990년대 중반기

이후 그 결실을 맺을 것이며, 국민생활수준 향상에 따른 국민레저수요 증가에 따라 산림은 국민의 휴식 공간으로 지속적인 발전이 이루어질 것으로 예상된다.

경제성장과 함께 양적 질적인 발전을 거듭해 온 축산은 금후에도 발전을 거듭할 것으로 예상되나 한편으로는 지금까지 겪어보지 못한 시련도 경험할 것으로 사료된다. 왜냐하면 소득수준의 향상과 함께 축산물의 소비는 앞으로도 크게 증가하므로 농가의 축산사육두수는 크게 증가할 것으로 예측되는 반면, 농가의 畜産經營으로 인해 발생하는 環境公害는 주변의 생활환경에 막대한 피해를 입히기 때문이다.

그러므로 축산은 과거의 양적인 성장 뿐만 아니라 질적인 성장과 아울러 공해문제에 대한 적극적인 대책이 요구된다. 농가의 경우 축산물 소비증가에 대응하여 가축의 사육규모를 크게 확대하는 것이 바람직하며 그 방법으로는 축산부문으로 專業化내지는 企業化하는 것이며, 다른 하나는 농가의 소득증대, 자원재활용 및 위험분산의 견지에서 복합영농의 활성화를 이루는 것이다. 그러나 오늘날 경제성장 만큼이나 우리의 중요한 관심사인 환경문제와 관련해 볼 때, 가축사육의 증가가 환경문제를 일으키지 않는 근대적인 사육시설의 도입이 절실히 요구되고 있다.

결론적으로, 농업이 산업의 중심이었던 과거와는 달리 그 중요성이 반감되는 면이 없지 않으나 경제성장의 고도화로 산업화·도시화가 가속화될수록 그 중요성이 차츰 증가하리라 예상된다. 특히 농·임업이 산업으로서 가지는 특징에 더하여 경제적 가치로 환산할 수 없는 무형의 혜택을 우리에게 제공한다는 사실을 감안할 때, 앞으로도 지속적인 발전과 성장이 이루어지리라 생각된다.